OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	弥生時代における武器の形成と展開
Author(s)	寺前, 直人
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/769
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

弥生時代における武器の形成と展開

寺 前 直 人

２００１年6月

本文目次

序章　本稿の課題と方法……1

第１章　弥生時代開始期における武器形石器の受容過程……5

1　弥生時代開始期における磨製石斧の変遷　5

2　弥生時代開始期における武器形石器の普及過程　39

第２章　弥生時代における石鏃の特質……57

1　弥生時代における石鏃大型化の２つの画期　57

2　磨製石鏃にみる地域間交流とその背景　89

第３章　携帯武器の普及と展開……108

1　武器形金属器の出現過程と地域性の展開　108

2　石製武器の展開と社会的機能　129

3　弥生時代後期における武器の変質　165

第４章　弥生時代における武器形木器の再検討……182

終章　弥生時代における武器の特質と歴史的意義……203

著者別参考文献……214

地域別参考文献……240

図版出典……251

論文初出……259

図表目次

第１章　弥生時代開始期における武器形石器の受容過程

図１　本稿で扱う地域　10

図２　縄文時代晩期と弥生時代前期における各地の磨製石斧法量　10

図３　中部瀬戸内地域における磨製石斧法量　12

図４　中部瀬戸内地域の縄文時代晩期両刃石斧（Ｓ＝ 1/4）　12

図５　中部瀬戸内地域の弥生時代前期両刃石斧（Ｓ＝ 1/4）　14

図６　中部瀬戸内地域の柱状片刃石斧（Ｓ＝ 1/4）　16

図７　中部瀬戸内地域の鑿状石斧と扁平片刃石斧（Ｓ＝ 1/4）　18

図８　大阪湾沿岸地域における磨製石斧法量　20

図９　大阪湾沿岸地域の縄文時代晩期両刃石斧（Ｓ＝ 1/4）　20

図10　大阪湾沿岸地域の弥生時代前期両刃石斧（Ｓ＝ 1/4）　22

図11　大阪湾沿岸地域の柱状片刃石斧（Ｓ＝ 1/4）　24

図12　弥生時代前期における柱状片刃石斧の最大厚　26

図13　大阪湾沿岸地域の扁平片刃石斧類（Ｓ＝ 1/4）　26

表１―１　図２―①および図３のデータ出典１　34

表１―２　図２―①および図３のデータ出典２　35

表１―３　図２―②および図８のデータ出典　36

図14　韓国慶尚南道大坪里遺跡 10 号石棺と出土遺物(Ｓ＝ 1/30・Ｓ＝ 1/3)　41

図15　韓国全羅南道牛山里内牛支石墓における墓域構成と副葬品(スケール不同)　41

図16　弥生時代早期・前期における各地の石鏃組成　43

図17　弥生時代早期・前期における石鏃の分布　44

図18　磨製石剣の諸型式(Ｓ＝ 1/3)　46

表２　弥生時代早期・前期の磨製石剣出土埋葬施設　46

図19　弥生時代前期の石製武器出土埋葬施設(Ｓ＝ 1/40)　48

図20　田久松ヶ浦遺跡(福岡県宗像市)における墓域構成(Ｓ＝ 1/400)　50

図21　持田町３丁目遺跡(愛媛県松山市)における墓域構成(Ｓ＝ 1/250)　52

図22　中・四国および近畿地方における埋葬施設あたりの出土石鏃数　53

第２章　弥生時代における石鏃の特質

図１　打製石鏃の分類名称(Ｓ＝約3/4)　62

図２　河内平野における石鏃の重量と形態の変遷　63

図３　河内平野における縄文時代晩期の打製石鏃(Ｓ＝ 1/2)　64

図４　河内平野における弥生時代前期の打製石鏃(Ｓ＝ 1/2)　67

図５　大阪府八尾市田井中遺跡における弥生時代前期の
金山サヌカイト集積(Ｓ＝ 1/8)　68

図６　河内平野における弥生時代中期の打製石鏃(Ｓ＝ 1/2)　69

図７　亀岡盆地における弥生時代前期の打製石鏃(Ｓ＝ 1/2)　72

図８　亀岡市太田遺跡の石鏃重量比較　72

図９　岡山平野における石鏃の重量と形態の変遷　74

図10　岡山平野における弥生時代前期の打製石鏃　75

図11　岡山県総社市南溝手遺跡出土の埋葬施設(Ｓ＝1/30)と
出土土器(Ｓ＝ 1/4)および打製石鏃(Ｓ＝ 1/2)　75

図12　讃岐平野における石鏃の重量と形態の変遷　78

図13　讃岐平野における縄文時代晩期の打製石鏃(Ｓ＝ 1/2)　80

図14　讃岐平野における弥生時代前期の打製石鏃(Ｓ＝1/2)　80

表１　近畿地方と中部瀬戸内地域における石鏃の変遷　81

図15　岡山平野における弥生時代後期の打製石鏃(Ｓ＝ 1/2)　84

図16　岡山平野における弥生時代後期の鉄鏃(Ｓ＝ 1/2)　85

図17　近畿地方における初現期の磨製石鏃(Ｓ＝ 1/2)　92

図18　初現期における磨製石鏃の分布　94

図19　金属製鏃と類似した有茎式磨製石鏃(Ｓ＝1/2)　95

図20　近畿地方の有茎式鉄鏃(Ｓ＝1/2)　95

図21　近畿地方の有孔磨製石鏃(Ｓ＝1/2)　97

表２　近畿地方の有孔磨製石鏃(Ｓ＝ 1/2)　97

図22　有孔磨製石鏃の分布　99

表３　磨製石鏃全体に占める有孔磨製石鏃の比率　99

図23　中・四国地方の初現期磨製石鏃(Ｓ＝1/2)　101

図24　東日本地域の有孔磨製石鏃(S＝1/2)　104
図25　分銅形土製品の分布　106

3章　携帯武器の普及と展開

図1　スダレ遺跡(福岡県嘉穂郡穂波町)甕棺墓出土の殺傷人骨　109
図2　細形銅剣の分布　111
図3　吉武高木遺跡(福岡県福岡市早良区)における墳墓と副葬品の分布　113
表1　北部九州地域弥生時代中期後半の「王墓」比較　113
表2　北部九州地域弥生時代中期後半の副葬品セット関係　113
表3　北部九州地域弥生時代中期後半の墓制の階層性　113
図4　北部九州地域弥生時代中期における完形磨製石剣・磨製石戈副葬墓の分布　114
図5　完形磨製石剣・磨製石戈の出土埋葬施設　114
図6　志波屋六本松乙遺跡(佐賀県神埼郡神埼町)における墓域構成　116
図7　北部九州地域弥生時代中期の鉄剣・鉄刀(S＝1/4)　116
図8　青銅製方柱付十字形把頭飾の分布　118
図9　中・四国地方以東の細形銅剣(S＝1/4・6のみS＝1/1)　120
図10　近畿地方における弥生時代中期の金属製武器とその関連品(5を除きS＝1/4)　120
表4　細形銅剣の分布域における地域性　123
図11　磨製尖頭器の製作技法(S＝1/3)　133
図12　磨製尖頭器各製作技法と全長、握り研磨面の関係　135
図13　磨製尖頭器各製作技法と幅・厚さの関係　135
図14　大阪府八尾市亀井遺跡出土の中形磨製尖頭器模倣の武器形木器(S＝1/4)　138
図15　打製尖頭器の平面形分類(S＝1/2)　140
図16　打製尖頭器の平面形態と全長の関係　140
図17　磨製尖頭器と打製尖頭器の各形式　141
図18　中・大形打製尖頭器の未製品(S＝1/2)　143
図19　打製尖頭器剥離技法の分類とその類例(S＝1/2)　145
図20　近畿地方における中・大形打製尖頭器の全長と厚さ(S＝1/4)　146
図21　中・大形打製尖頭器の分布　146
図22　中部瀬戸内地域における中・大形打製尖頭器の全長と厚さ　147

図23　中形磨製尖頭器(上)と大形磨製尖頭器(下)各技法の分布　149
表５　大和盆地周辺地域における磨製尖頭器　150
図24　中・大形磨製尖頭器と磨製石庖丁の粘板岩系石材選択率の各遺跡における変化　153
図25　近畿地方各地における初現期の磨製尖頭器(Ｓ＝ 1/3)　153
表６　大阪湾沿岸地域における大形尖頭器(石製短剣)と磨製石庖丁の数量比率　156
表７　畿内地域における埋葬施設出土の完形石製短剣一覧　159
表８　畿内地域における石製短剣副葬墓と赤色顔料使用墓の比較　159
図26　宮田遺跡(大阪府高槻市)における石製短剣出土土壙墓
(遺構Ｓ＝ 1/600・遺物Ｓ＝ 1/4)　160
図27　近畿地方方形周溝墓制の階層構造と石製短剣副葬墓　160
図28　弥生時代後期における各地の鉄製武器(鏃を除く)埋葬施設出土量と
集落出土量の比較　167
図29　弥生時代後期(併行期)における武器の広域化を示す各地の武器形金属器
(Ｓ＝ 1/8)　170
図30　日韓における武器形金属器の副葬品配置(Ｓ＝ 1/40)　171
図31　弥生時代後期(併行期)以降における細身薄型銅剣(Ｓ＝ 1/4)　175
図32　大阪湾沿岸地域における弥生時代後期以降の武器形金属器
(遺物Ｓ＝ 1/4・遺構は縮尺不同)　175
図33　地形から推定される農耕適地の分布　179
図34　みる銅鐸の分布　179

第４章　弥生時代における武器形木器の再検討

図１　武器形木器Ⅰ類と祖型(Ｓ＝ 1/4)　186
図２　極大形石製尖頭器模倣の武器形木器Ⅱ類(Ｓ＝ 1/4)　188
図３　極大形石製尖頭器(Ｓ＝ 1/4)　190
図４　中・大形石製尖頭器模倣の武器形木器Ⅱ類と祖型(Ｓ＝ 1/4)　190
図５　中部瀬戸内地域の武器形木器Ⅲ類(Ｓ＝ 1/4)　193
図６　徳島県および大阪湾沿岸地域の武器形木器Ⅲ類(Ｓ＝ 1/4)　193
図７　武器形木器Ⅲ類各型式の分布　195
図８　銅剣形磨製石剣各型式の分布　195

図９　種定による銅剣形磨製石剣の分類案　195
図10　武器形青銅器と木製・石製模倣品の関係模式図　197
図11　その他の武器形木器と関連品(Ｓ＝1/6)　197

終章　弥生時代における武器の特質と歴史的意義
図１　弥生時代後期における武器消費形態の地域性　205
表１　弥生時代後期における大阪湾沿岸地域と丹後半島地域の
　　生業環境と武器消費形態の比較　212

序章　本稿の課題と方法

1

武器という言葉は人を魅了する。アジア・太平洋戦争後の我が国において、武力のありかたは、常に政治の中心課題の１つであった。武器、武力の是非を問わず、武力はこれまで国家を構成するのに不可欠な要素であり続けてきたのであり、社会の構造を考える上でも、その所在は無視できない重要な要素であった。それは歴史研究においても同様である。武力の所在は、権力が生成される過程を対象とする歴史的考察において常に注意されてきたのである。

ただし、戦後の考古学において武器、武力に関する研究は、必ずしも体系的に進んでいるわけではない。とくに弥生時代における武器研究は、多種多様な武器形品の存在に起因して、主に武器形石器を中心として進んだ抗争論と、武器形青銅器や武器形木器を用いた儀礼、祭祀論に分化しているのが現状である。しかしながら、列島における生産様式の変革期、すなわち体系的な水稲農耕の導入期であるとともに、階級社会の形成期でもある弥生時代の武器研究は、武力と権力の今日的関係が形成される過程を明らかにするためには、不可欠な歴史研究なのである。

むろん、弥生時代におけるさまざまな武器個々に関する研究は、資料の爆発的増加とともに深化し、時期差や地域差が細かく抽出されるに至っている。また、魏志倭人伝中の倭国乱の記述、環濠集落や高地性集落の存在、そして石製武器の発展などに基づく弥生時代の抗争と武器の様相は、専門書のみならず一般書や教科書においても広く流布している。しかしながら、これらの歴史像は、必ずしも現状の多様な資料的状況に基づいたものではなく、一部の資料に基づいたうえでの、既存の歴史理論の枠組みに依拠もしくは影響された初期農耕社会像なのである。

そこで、本稿では次の３つの課題をもって、弥生時代における武器の特質を考古学的に明らかにしていくことにより、武力と権力の今日的関係が形成される過程を解明することをめざす。対象とする時期は、弥生時代全般、紀元前５世紀から紀元後３世紀の約 800 年間となる。また、対象地域は近畿地方を中心とした西日本とするが、必要に応じて、朝鮮半島や東日本の状況についても言及する。

2

弥生時代における水稲農耕の開始は、西日本地域における生産様式の大きな変革であった。また、明らかに外来文化として開始された水稲農耕は、それに付随して多くの習俗、技術的変革を列島諸地域にもたらした。その１つに武器とそれに関連する所作があげられる。朝鮮半島に由来する武器の機能的、習俗的影響を探ることが、本博士論文の第１の課題である。また、朝鮮半島との関係が顕在化するのは弥生時代開始期のみではない。むしろ、その後の継続的な影響関係や朝鮮半島と連動した列島の武器の変遷にこそ、注意を払わなければならない。本稿では、朝鮮半島をはじめとする列島以外の地域に関して個別の考察を行うわけではないが、常に列島外の状況に対しても関心を持って、論を進めていくこととする。

さらに列島内外の関係とともに重視したいのが、列島内の地域的関係である。近年、近代的社会結合原理である「国民」あるいは「民族」という価値観の再生が一部の論者によって声高に提唱されている。また、欧州世界の拡大の結果生じた文化人類学が「発見」した民族という概念は、「誰の？何のための？」概念なのかという点で内省的検討を余儀なくされている(小田 1996・清水 1992)。山尾幸久の批判にみられるように(山尾 1998)、日本考古学におけるその今日的実践は不十分なのかもしれない。

日本考古学研究における弥生時代像の探求は、一方で「大八洲豊葦原の瑞穂国」のイメージを視覚的にもたらし、稲作農耕民としての単一民族性の開始を想起させるに足る多大な成果をあげてきた。しかし、考古学が地域として区分してきた単位の構造は、必ずしも明瞭ではない。そこで、均質な農耕社会がイメージされてきた西日本地域に対して、本稿では武器の様相から、地域区分の再検討とその構造の検討を試みる。同時にこの作業は武器と不可分にある社会的強制力、権力生成の議論においても不可欠なのである。

3

第２の課題は、弥生時代における武器の機能面での変遷を探ることである。これまで弥生時代の武器は、まず在来の石器が強化され、さらに強力な鉄製武器へと次第に変化していくという単系的な発展論で語られれてきた。しかしながら、弥生時代の武器には、石材や鉄だけではなく、青銅、木材、そして骨角材と多種多様な素材を用いて製作される。これまでの議論では、弥生時代において盛行し、そして消滅していく武器形石器が注目され

てきた。そして武器形石器の消滅の背景には、機能的により優れた鉄製武器への置換が想定されてきたのである。このような素材の異なる２者の盛衰の要因には、社会発展と連動した武器の機能的強化の必然性が暗黙の前提として認識されてきた。

つまり、水稲農耕開始に伴う余剰の形成、あるいは人口の増加に伴う資源の欠乏が、従来とは質的に異なる集団間の闘争をもたらし、その結果、武器の実用機能面での強化が必然的に希求されていくというテーゼが、今日の日本考古学において共有されているのである。そして、こういった認識を支える有力な証拠が、弥生時代特有の石製武器の研究から提示されているのである。しかしながら、一方の主役である鉄製武器の問題は、その遺存率の低さもあって、これまで必ずしも帰納的な議論がなされてきたわけではない(村上2000)。むしろ、近年の弥生時代鉄器研究からは、単純な機能発展史観の克服が提起されている。また、弥生時代において飛躍的な技術的発達を遂げる青銅器の位置づけについても、祭祀論から脱却し、鉄製武器と同様の新来金属製武器としての観点からの議論が必要である。

そこで本稿では、弥生時代の多様な武器形品のそれぞれの関係と発展過程を明らかにすることにより、従来の単系的な機能強化論を批判的に検討していく。そして、武器に付加されていた実用機能以外の価値の抽出をめざす。

4

第３の課題は、武器の所有形態の変遷を明らかにすることである。いうまでもなく、武器の所有形態を解明することは、社会的強制力の独占、限定化の過程を分析するためには避けて通ることのできない検討課題である。

原始・古代社会における所有のありかたは、歴史理論研究において多くの蓄積があり、その影響を受け戦後日本考古学においても青銅器や墓制を用いた所有に関する研究が、活発に繰り広げられていた。しかし、これらの議論を支えてきた理論的基盤であったマルクス主義的な歴史観の求心力が低下するに伴い、ともすれば考古資料の型式学的議論と遊離するこれらの論議は、今日では低調となっている。さらに、考古資料から社会を復元する手続きは慎重であるべきであるとの認識が、今日の考古学界にも浸透していることとも関係しよう(松本2000)。

しかし、本稿ではあえて武器の所有形態に注目して議論を進めたいと思う。なぜならば、

武器所有層の限定化と社会的権力の生成が不可分な関係にあることは、魏志倭人伝等から垣間みられる紀元後数世紀の列島の状況(吉田 1995)、あるいは後の古墳時代、さらには律令社会の様相から(下向井 1991・吉田 1993)、明白であるからである。

古墳時代研究では主に副葬品を用いて武器の所有や贈与、交換、そして軍事組織論が国家形成論とも連動して活発に議論されている。しかしながら、それ以前の武器の様相、すなわち弥生時代における武器の所有形態については、ほとんど研究が進展していないのが、現状である。古墳時代における墳丘墓の被葬者は、当時の社会において一部の社会階層の表象であることは、ほぼ間違いない。したがって、このような階級的様相が生み出される過程を解明するためにも、弥生時代において武器の果たした社会的機能や所有形態の変遷を解明することは不可欠なのである。

そこで、本稿では弥生時代における武器の所有形態および所有層の変遷、そしてその地域差について、出土状況をはじめとする考古学的知見に基づき議論することとする。そして、武器の所有形態の変遷を通して、列島における階層分化過程の特質の解明をめざす。

第１章　弥生時代開始期における武器形石器の受容過程

列島における農耕開始期の研究、すなわち縄文時代から弥生時代の移行期の研究は考古学的研究において古くから関心のもたれた研究分野の１つである。本章では、当該期の列島における武器出現の特質を明らかにしたいと思う。そこで、本章ではまず、１節で弥生時代開始期における石製工具類の出現過程を明らかにする。そして、２節において外来の石製武器の普及のありかたを検討する。さらに石製工具類と石製武器の普及状況の比較を通して、弥生時代開始期における外来の武器形石器の波及について解明することをめざす。

１　弥生時代開始期における磨製石斧の変遷

(１)はじめに

本節の目的は、弥生時代開始期前後における磨製石斧の分析を通して、各地域における弥生文化形成過程の特質を明らかにすることである。後に紹介するように北部九州地域では下條信行らの精力的な研究により、縄文時代から弥生時代にかけての石器総体の変化が具体的に論じられている。これに対し、瀬戸内から東の地域では、磨製石庖丁など稲作に直接関連する石器の有無が取り上げられることがあっても、縄文時代晩期から石器がいかに変化したかについては、今だ不明瞭な点が多い。つまり、北部九州地域と並ぶ「典型的」な弥生文化として位置づけられてきた中部瀬戸内地域や大阪湾沿岸地域における弥生時代の石器文化の形成過程についての議論は、遠賀川式土器の出現や定着に関する議論に比べ、少ないといわざるを得ないのが現状である。そこで本節では中部瀬戸内地域から大阪湾沿岸地域における縄文時代晩期から弥生時代前期の磨製石斧をとりあげ、形態だけでなく法量や石材利用の点にも注目した分析を行う。そして、在来の磨製石斧と新来のそれとの関係を明らかにすることによって、当地域の弥生文化がどのような過程をへて出現したのかという問題について追究する。

(２)弥生時代開始期の石器研究史―磨製石斧を中心として―

従来、弥生時代開始期における石器研究は、弥生文化の系譜論や生業研究の手段として

活用されてきた。どのような問題意識に基づき、これまでの石器研究が行われてきたのかを確認し、先行研究を批判的に検討することにより、まずは本節の意図する研究の方向を明確にしたい。

第２次世界大戦以前、弥生時代の歴史像が定義づけられるその過程において石器研究は、中国大陸や朝鮮半島の農耕文化と日本列島の弥生文化との関係を直接的に考察する材料として主導的な役割を果たした。中国大陸や朝鮮半島の農耕文化における石器と日本列島の弥生文化のそれとの類似性は、まず鳥居龍蔵により指摘された(鳥居 1908・1917)。続いて梅原末治は山陰地方の抉入石鑿形石斧すなわち柱状片刃石斧を検討し、この石器が「畿内、山陰、九州を主とし、朝鮮にも豊富に発見せらるることと、出土遺跡の性質の弥生式系統に属すること」を明らかにしたのである(梅原 1922:p.69)。

しかしながら、戦前の石器研究は「大陸」石器文化との類似性のみを強調していたわけではない。例えば、八幡一郎は乳棒状石斧に外的な刺激が加わり、第Ⅲ類石斧(今日の太型蛤刃石斧)が形成されたと指摘している(八幡 1928:p.44)。また中谷治宇二郎は定角式石斧と乳棒状石斧の中間形態として、太型蛤刃石斧を認識している(中谷 1929:p.289)。

このような研究視点は、戦後の発掘資料の蓄積をへて、九州地域における下條信行の研究、すなわち縄文系石斧が漸移的に変化することにより太型蛤刃石斧が形成されるという系譜論において、復活するのである(下條 1977・1985・1991a・1991b・1994b)。下條は、朝鮮半島の円筒斧の影響を受けて、在来の石斧が重量の増加をはかるために幅を増し、その後徐々に厚みを増した重厚な石斧に変化していくという図式を提示し、柱状片刃石斧などそれ以前に存在しなかった新来の石斧との定着度の相違を明らかにした。また、その分布についても、北部九州地域において夜臼単純期に成立する両刃石斧(Ａ１型式)は北部九州地域を越えては広がらず、瀬戸内地域では縄文系の石斧を継続して使用し、次の板付Ⅱａ段階においてＡ１型式が瀬戸内地域に拡大するとした。さらに時期をへて、北部九州地域で厚みを増したＡ２型式が形成され、それが東方に拡大するとの指摘を行っている。その後各地において、横断面形が楕円形となったＡ３型式が出現していると述べているが、各地におけるＡ３型式の成立が北部九州地域から一元的に波及したものか、各地で生じた多元的なものかについては不明であるとした(下條 1994b:p.21)。このような指摘に基づき、瀬戸内地域については森下英治が、近畿地方に関しても禰宜田佳男によって、弥生時代前期の伐採斧に太型蛤刃石斧とは異なる扁平な石斧が存在することが、それぞれ指摘されている(森下 1995・禰宜田 1995)。

これに対して、平井勝は岡山平野において縄文時代晩期末の沢田式に伴い全長約 20 cmで横断面円形の厚みのある両刃石斧が出土しており(平井 1990)、さらに弥生時代前期においても太型の両刃石斧が初期より存在していることから、北部九州地域のありかたとは異なる太型蛤刃石斧の出現過程を当地域に推定している(平井 1992:pp.42 ～ 43)。また、出原恵三は南四国の弥生石器について整理するなかで、高知県南国市田村遺跡において、もっとも古い遠賀川式土器に伴い太型蛤刃石斧が存在することから、この形態の石斧が北部九州地域からの伝播によって成立したのではなく、「中部瀬戸内から東西に波及していった」との見解を示している(出原 1999:p.30)。

以上のように両刃石斧に関しては、北部九州地域の資料を用いて漸移的変化を想定する下條のような考えと、平井や出原のように中・四国地域の資料を用い、遠賀川式土器出現と同時に太型蛤刃石斧が成立するという異なった２つの見解が提示されている。ここで問題になるのは、中部瀬戸内地域を中心とする縄文時代晩期の磨製石斧と弥生時代前期の磨製石斧との関係であるが、両者とも具体的言及は少ないといわざるを得ない。

次に柱状片刃石斧や扁平片刃石斧などの加工石斧類に関する研究史について概略したい。両者とも先に述べたように弥生文化の系譜論において、中国大陸や朝鮮半島と日本列島の資料との対比が議論になり、その用途についての議論も盛んであった(山内 1932・原田 1963・松原 1971)。しかし、片刃石斧の用途が佐原真の総括的な研究(佐原 1977・1982)によって一定の結論を得た後は、遺物自体に基づいた議論は低調となった。ただし、用途論に関する新しい視点として、金属顕微鏡を使用した微細な使用痕の分析があげられる。例えば斎野裕彦は、扁平片刃石斧に関して使用実験と使用痕分析の結果から刃部角と用途との関連性を指摘している(斎野 1998)。

このような状況のなかで、以下に紹介する下條信行の研究は特筆すべきものであろう。下條は、柱状片刃石斧を横断面形と基部形態などの属性から６型式に区分することにより、時間的な変化を明らかにした(下條 1991b・1994b・1997)。そして、朝鮮半島南部の柱状片刃石斧にもっとも類似するＡ型式が、北部九州地域にいち早く出現し、その後瀬戸内地域から近畿地方へとその分布を拡大していくにつれて、形態の変容が進行していくという分布論を展開したのである(下條 1997)。さらに、下條は扁平片刃石斧についても次のような分析を行っている(下條 1996)。氏は扁平片刃石斧を側面観と後主面の形態変化から６型式に分類し、北部九州地域に最も古い型式がみられ、時期が下るにつれ形態を「弛緩」させながら、その分布を東へ拡大させていくとする単系的な系譜論を展開した。

また、近年、西口陽一は近畿地方の片岩製柱状片刃石斧に注目し、その石材産地として四国島の吉野川流域に注目した(西口 2000)。そして、弥生時代前期の大阪湾沿岸地域にみられる片岩製柱状片刃石斧が四国産である可能性があり、それが弥生時代前期末から中期前半には減少し、再び中期後半に盛行することを指摘している。西口の研究は、四国島と大阪湾沿岸地域との関係を論じたという点で重要であり、本節でもその指摘の検証を進めたい。

以上の研究史をふりかえるなかで明らかなのは、下條信行の業績の大きさであろう。下條はいわゆる大陸系磨製石器の全形式にわたり、詳細な型式学的議論を展開した上で、在来社会側の「選択的受容」と西から東への地理的傾斜に基づく「リレー式の伝播」という石器にとどまらない弥生時代開始期の枠組を提示するに至ったのである(下條 1994b・1995)。その研究の緻密さと影響力の大きさには、ただ圧倒されるばかりであるが、両刃石斧に関しては平井や出原によって異論が唱えられていることには注意が必要である。また、下條の議論において中部瀬戸内地域や大阪湾沿岸地域の状況は、リレー式の伝播に関する議論には登場するものの、両地域における石器各器種の型式変化や石器器種の選択性といった個別の問題についての言及は、北部九州地域に対するそれと比べて少ないといわざるを得ない。

そもそも下條の型式学的枠組みは朝鮮半島から北部九州地域の資料を中心に組み立てられたものであるため、本節でとりあつかう中部瀬戸内地域から大阪湾沿岸地域にかけての状況を考える場合、まずは地域ごとの縄文から弥生にかけての変化を明らかにする必要があるのではないだろうか。

そこで、本節ではこれまでも型式分類の基準となってきた要素に関しての数量的な分析を試みることにより、上述の地域における縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての磨製石斧の変化を明らかにし、下條が提示したリレー式伝播や選択的受容というありかたが、当地域においても適用しうるのかどうかについて検証していきたい。

(3)縄文時代晩期と弥生時代前期における磨製石斧の比較

先の研究史において紹介したように、近年の微細使用痕に関する研究は、従来の用途論の限界を克服していく上で今後不可欠な研究視点であるといえる。ただし、すべての個体に使用痕が観察できるわけではなく、また金属顕微鏡による特殊な観察方法が必要なため、

その方法の適応範囲には様々な制約のあるのもまた事実である。そこで、本節では容易に測定し、かつ客観的に提示しうる属性に基づき、分析を進めていくこととする。斧とは、自重を利用し対象物を楔の作用によって切り割る道具である。したがって、斧身自身の重量が斧の機能において、文字通り大きなウエイトを占めることは明らかである[1)]。つまり重量とその作用部である刃部幅という属性は、道具としての機能を考えるうえで、縦斧や横斧といった着柄方法の区分を越えた一定の基準として有効であると考えられる。この属性に基づく研究はすでに宮内克己によって九州地方の縄文時代の石斧を対象にして試みられている(宮内 1987)。こういった先行研究の成果も参考として、本節ではこの２属性に基づき縄文時代晩期[2)]と弥生時代前期の磨製石斧を比較する。

対象地域としては図１のように岡山平野と讃岐平野を中心とする地域を中部瀬戸内地域、六甲山南麓から大阪平野にかけての地域を大阪湾沿岸地域と命名して以下の議論を進めたい。この２つの地域をとくにとりあげる理由は、北部九州以東の地域において今回対象とする時期に属する遺跡調査例にもっとも恵まれている地域であるからである。

図２は両地域における縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての完形もしくはそれに準ずる磨製石斧の刃部幅と重量を示したグラフである。破片のため図示した座標より刃部幅や重量が大幅に移動する資料については、矢印(▲)を書き加えて示している。ただし、図中には、研ぎ直しなどによって製作当初より法量の減少した個体が含まれていると考えられる。しかしながら、度重なる研ぎ直しがあったとしても出土段階の法量が、使用の最終法量を示しているという点で、当図は「使用」の場における法量を示すグラフとして有効であると考えられる。

①中部瀬戸内地域

まず、中部瀬戸内地域の状況について検討していきたい。具体的な検証を進める前に図２—１の完形品を主体とする法量の分布が、再研磨の繰り返しによる法量の変化をどの程度受けているのかを検討したい。図３—１は、刃部の再研磨による影響の少ない属性である幅と厚さの相関関係を示したものであり、完形品を 100 ｇ未満、100 ｇ以上 400 ｇ未満、400 ｇ以上 700 ｇ未満、700 ｇ以上の４つに区分し、その散布状況を図示している。図からは弥生時代前期の両刃石斧については重量と横断面法量が比例関係にあり、各重量ごとにその分布域を大きく交えることはないという様相がみてとれる。つまり、再研磨による法量の減少があったとしても、その変異の幅は先の４つに区分した範囲内に収まることが

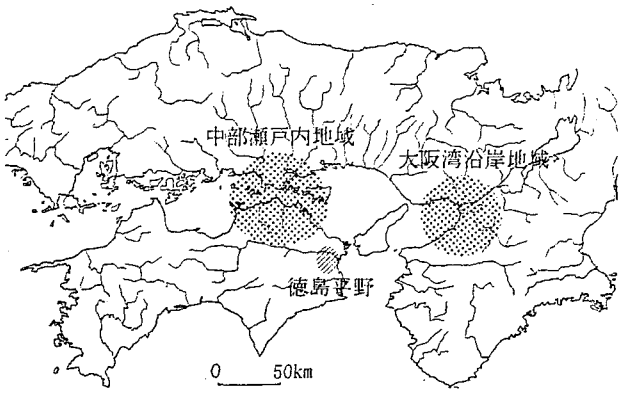


図1　本稿で扱う地域

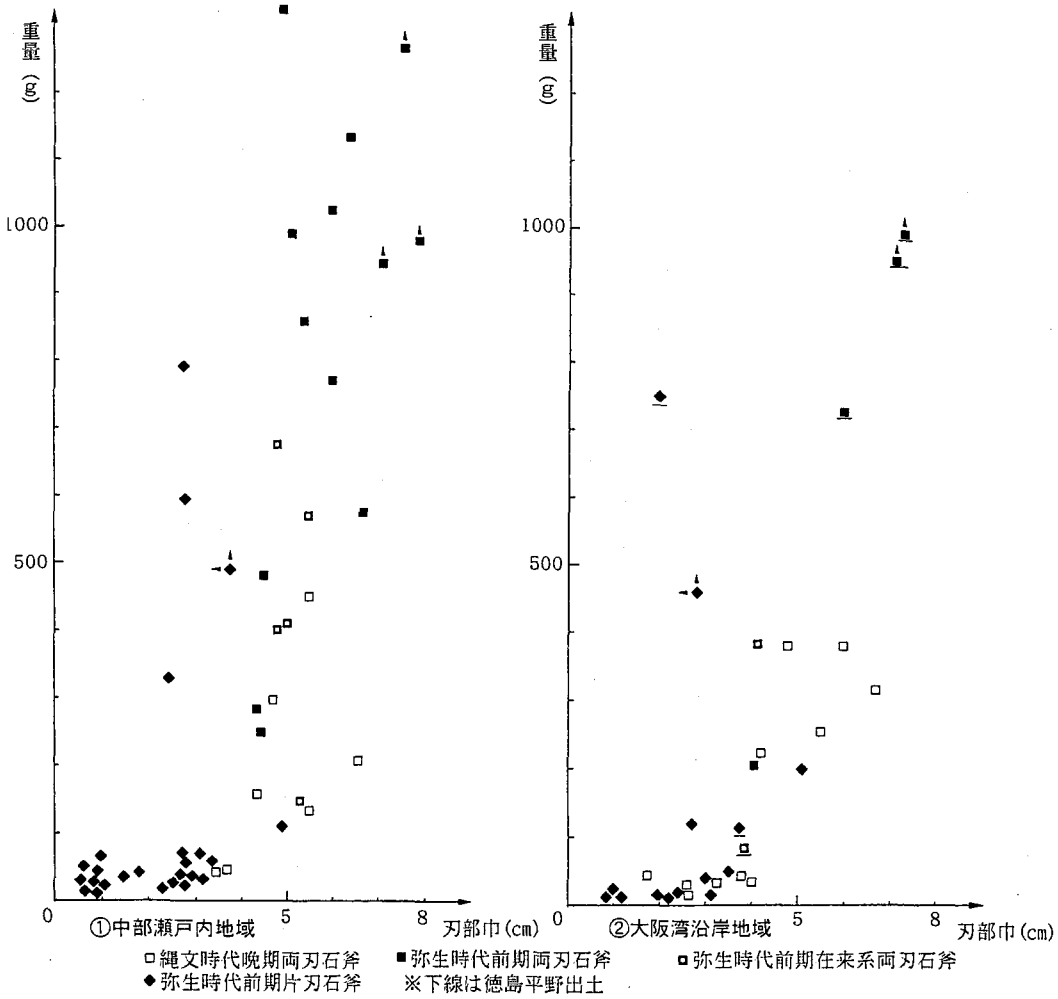


図2　縄文時代晩期と弥生時代前期における各地の磨製石斧法量

想定できるのである。したがって、前期の両刃石斧については、完形品でない破片資料に関しても、図３—１に照らし合わせて、その最大幅と最大厚から重量を一定の幅で類推することが可能であるといえよう。そこで、図３—２では先の４区分の範囲と、両刃石斧破片資料の最大幅と最大厚の分布状況を重ねて示した。弥生時代前期については、当図から導かれる破片資料の推定重量も含め、以下の検討を進めたい。

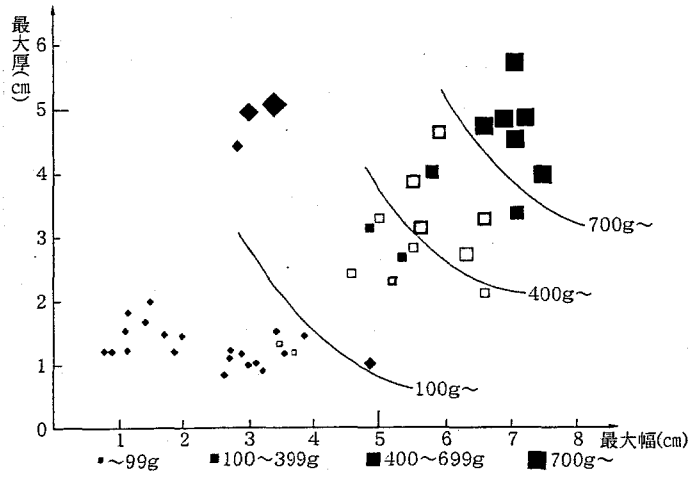
一方、縄文時代晩期の両刃石斧については、両側辺が基部に向かってすぼまるものが一般的であるため、最大幅は再研磨時に減少する。したがって、この観点からの検討は困難であった。この時期の両刃石斧については、大阪湾沿岸地域の資料を検討した後に論じる。

<縄文時代晩期>

図２—１からまず指摘できるのは、縄文時代晩期の両刃石斧は弥生時代のものに比べて軽量であるということである。そして、こうしたありかたの中にも次のようなまとまりが認められるのではないだろうか。まず、刃部幅が３～４cmで重量が 50 g前後となる一群が認められる。図４—１・２にあげた岡山県総社市南溝手遺跡出土の２点がその実例である。形態的には扁平な定角式がほとんどで、主面、側面を問わず密な研磨が全体に施されているものが多い。また、刃部のつぶれが顕著なものは少なく、光沢をもった鋭い刃部を残して出土しているものが目立つ。石材は蛇紋岩や流紋岩が、ほぼ全ての例において選択されている[3)]。

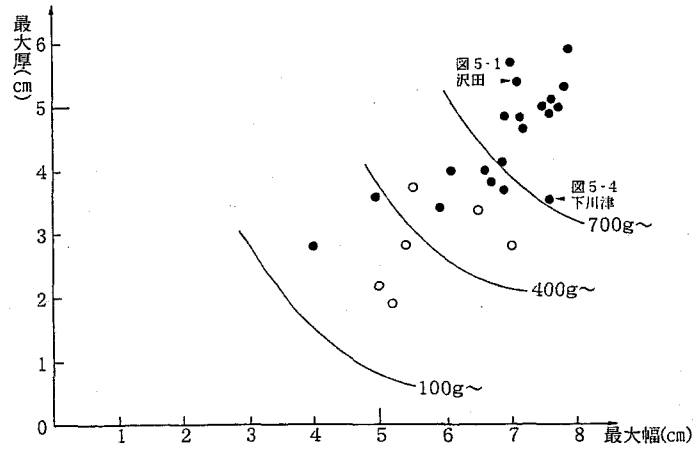
次に刃部幅が４～７cmで重量が 100 ～ 500 g程度の範囲にややまばらに分布する一群があげられる。この一群になると図４—７の総社市窪木遺跡出土例のような定角式石斧に加えて、横断面円形で刃部付近に最大幅をもち基部が尖基となる平面円錐形のいわゆる乳棒状石斧が加わる。図４—３の香川県高松市林・坊城遺跡出土例や図４—４の香川県善通寺市永井遺跡出土例のように乳棒状石斧は全体の研磨が省略されているものが多く、刃部以外の部分には粗い敲打痕が認められる。また、形態だけでなく石材の点でも、先の 50 g前後の群とは異なり、安山岩などを選択している例が認められる。さらに図４—５の永井遺跡出土例や図４—６の南溝手遺跡出土例のように両側に面をもたず、結果として横断面杏仁形となる磨製石斧も存在する。これらは総じて研磨が密であるが、打裂工程から敲打工程をへずに研磨工程のみによって完成されているため、打裂時の凹凸が顕著に残存しているものが多い。石材選択のうえでは、先の定角式石斧と同様、蛇紋岩を用いるものが多い。

以上の分析の結果、縄文時代晩期には 500 g以下の両刃石斧が主流であるということが



グラフ中の凡例は図2と共通

①磨製石斧完形品の最大幅と最大厚



②磨製両刃石斧片の最大幅と最大厚

図3　中部瀬戸内地域における磨製石斧法量

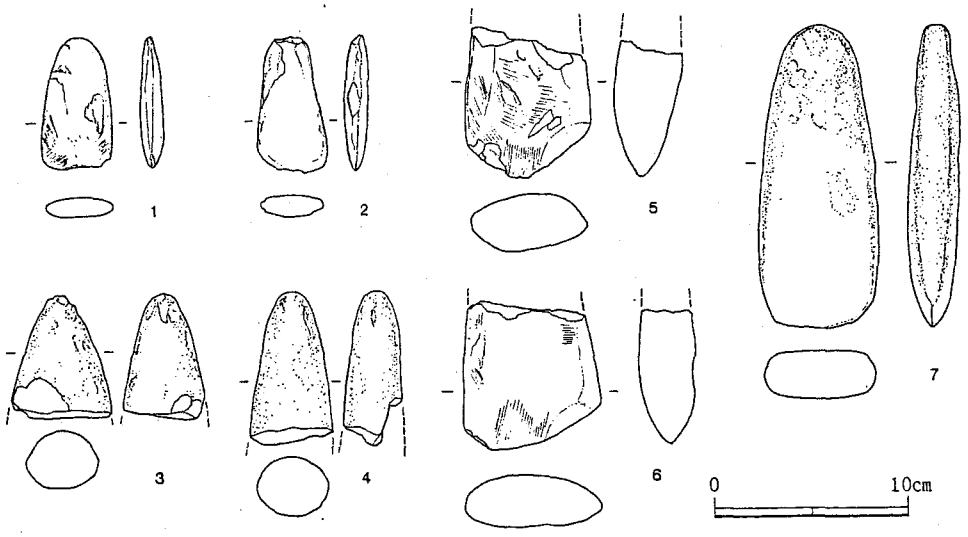


図4　中部瀬戸内地域の縄文時代晩期両刃石斧

1・2・6 南溝手　3 林・坊城　4・5 永井　7 窪木

判明した。ただし、こうしたありかたとは異なる状況が徳島県三加茂町稲持遺跡においては認められる。稲持遺跡は、吉野川上流に位置し讃岐平野とは讃岐山脈を隔てて、約 25 km離れている。当遺跡からは、縄文時代晩期の滋賀里Ⅲa式に属する土器とともに蛇紋岩や輝緑岩などを用いた磨製石斧 42 点と同未製品 48 点が出土している(湯浅 1993・菅原 1996:p.347)。このなかには敲打がほぼ終了している段階で重さ 1000 gをこえるような極めて大型の石斧未製品があり、これまで検討してきた完形品の法量とは大きく異なる。つまり、稲持遺跡のような磨製石斧生産地では、きわめて大型の磨製石斧が生産されており、これまで検討してきた中部瀬戸内地域の遺跡における状況とは、一見矛盾するかのようである。この問題については、次節で分析する大阪湾沿岸地域の状況をふまえたうえで論じたい。

<弥生時代前期>

両刃石斧　縄文時代晩期と比較して図２や図３から読みとれることは、重さ 700 gをこえる両刃石斧の増加である。とくに図３からは最大厚 4.5 cm以上、最大幅 7.0 cm以上の両刃石斧が多数出現している様相がみてとれる。なかでも図５―１の岡山市百間川沢田遺跡出土例は一条沈線と無紋の甕形土器と共伴して出土していることから、弥生時代前期でも古い段階に遡る個体である。他にも香川県坂出市大浦浜遺跡出土例(真鍋 1988)や、平井勝によって紹介されている縄文時代晩期末の沢田式に伴う大型の両刃石斧も含めれば(平井 1990:p.46)、弥生時代開始当初から当地域においては、下條信行がＡ３類とした狭義の太型蛤刃石斧が出現しているといえよう。また、これらはいずれも主面、側面を問わず密な研磨が施されており、石材はヒン岩などの石材が選択されている。ただし、一部には、衝撃が強く加わる伐採斧には適材とはいえない葉理の発達した片岩を用いた[4]両刃石斧(図５―２)が認められる。

また、図５―３や４のように下條信行がＡ１類あるいはＡ２類と分類した幅８cm前後で厚さ４cm以下の扁平な両刃石斧も同時に存在する(下條 1994b)。これらの石材には図５―１などとは異なり、砂岩が用いられている。これらは図４―７のような縄文時代晩期のものと類似しているが、最大幅が７cmをこえる点などから、直接的な系譜関係にあるとはいえない。むしろ、下條が指摘したように北部九州地域の初期の両刃石斧であるＡ１類やＡ２類と関係する可能性が高い。

それでは縄文時代晩期において多くの類例が認められた重さ 100 ～ 500 gの一群は当期において、どのように展開したのであろうか。この法量に属する両刃石斧は、縄文時代晩

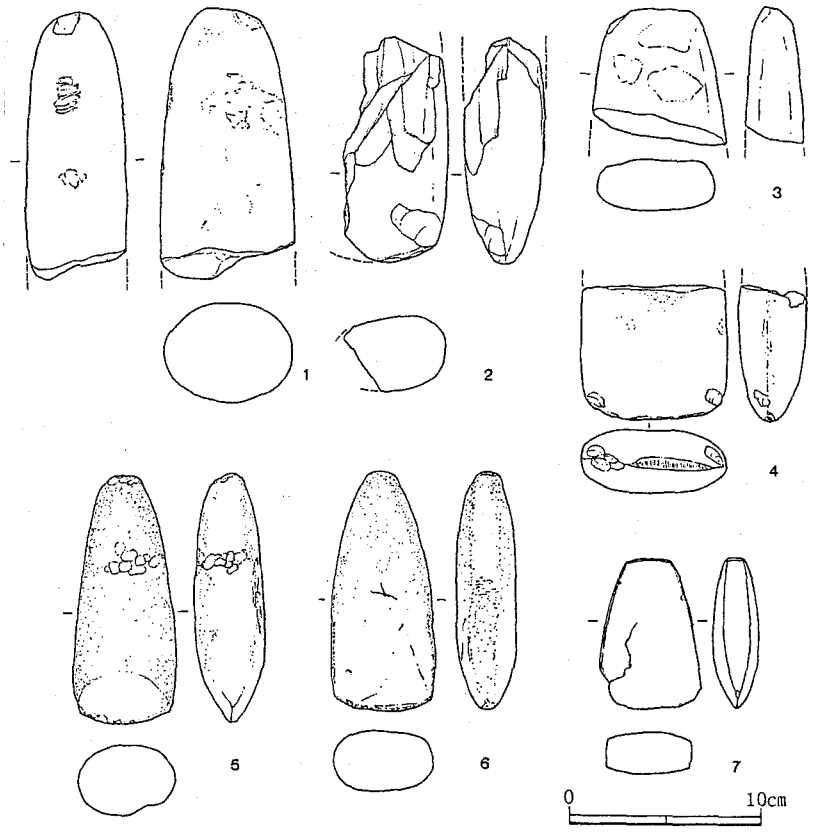


図５　中部瀬戸内地域の弥生時代前期両刃石斧
1 沢田　2 龍川五条　3 大浦浜　4 下川津
5 鴨部川田　6 佐古川・窪田　7 津島岡大

期に比べて相対的に少ない。なかでも図５―５の香川県大川郡支度町鴨部川田遺跡出土例や図５―６の同県綾歌郡綾歌町佐古川・窪田遺跡出土例のように尖基で、平面形も両側辺が基部に向かってすぼまりぎみとなる両刃石斧の存在が目立つ。両者とも主面、側面とも研磨はほとんど認められず、刃部付近にのみ研磨が認められる。こうした形態や研磨のありかたは、図４―３や４の縄文時代晩期の乳棒状石斧と共通している。他にも図５―７の岡山市津島岡大遺跡出土例のように、前段階の定角式石斧とほとんど同形態のものが存在する。そこで、弥生時代の両刃石斧類のなかでも定角式石斧や乳棒状石斧の特徴をもつものを、本節では「在来系両刃石斧」と呼称することとする。すでに森下英治により当地域において「縄文系」の磨製石斧の残存が指摘されているが(森下 1995:p.16)、図２や図３に示したように在来系両刃石斧はとくに700 g以下の領域に目立って分布している様子が認められ、700 g以上の両刃石斧とはその形態変化が大きく異なるのである。

また、弥生時代前期に属する両刃石斧に顕著な現象としては、図５―４や６の刃部にみられる磨滅面の存在があげられる。とくに４は刃部と直交する方向の摩耗により幅 0.8 cm前後の平坦面が刃部正面に形成されていることから判断して、磨石などに転用されたと考えられる。他にも鴨部川田遺跡などでは叩き石に転用された両刃石斧が出土しており、縄文時代晩期とは異なる転用方式が弥生時代前期の両刃石斧に認められるのである。

片刃石斧　弥生時代前期において片刃石斧は、図２―１と図３に示したように刃部幅と重量の関係が晩期の小型両刃石斧と類似したものが認められる一方で、刃部幅が２～３cm、重さが300～800 gと縄文時代晩期の両刃石斧の法量分布とは大きく異なるものも存在する。後者こそが柱状片刃石斧であり、片刃である以外にも、刃部幅と重量において前段階には存在しなかった新しい道具であるということを、ここでは強調しておきたい。中部瀬戸内地域における初現的な柱状片刃石斧としては、図６―１や２の香川県善通寺市龍川五条遺跡出土例があげられる。

また、鴨部川田遺跡からは部分的な敲打や研磨を施した段階の片岩製柱状片刃石斧未製品が出土している(香川県教育委員会ほか 1992)。当遺跡から約 30 km南の吉野川流域の三波帯を中心に産出する片岩を用いた未製品が讃岐平野東部において存在するという事実は興味深い。片岩類は、すでに縄文時代において簡単に薄くはがれる石質を利用し、打製石斧の素材として広く用いられていることが、永井遺跡などの調査により判明している(香川県教育委員会ほか 1990)。片岩の石質は、両側面が長く平行する柱状片刃石斧のような石器を作る場合、多くの打裂と敲打を必要としない点で、非常に適したものであったと考

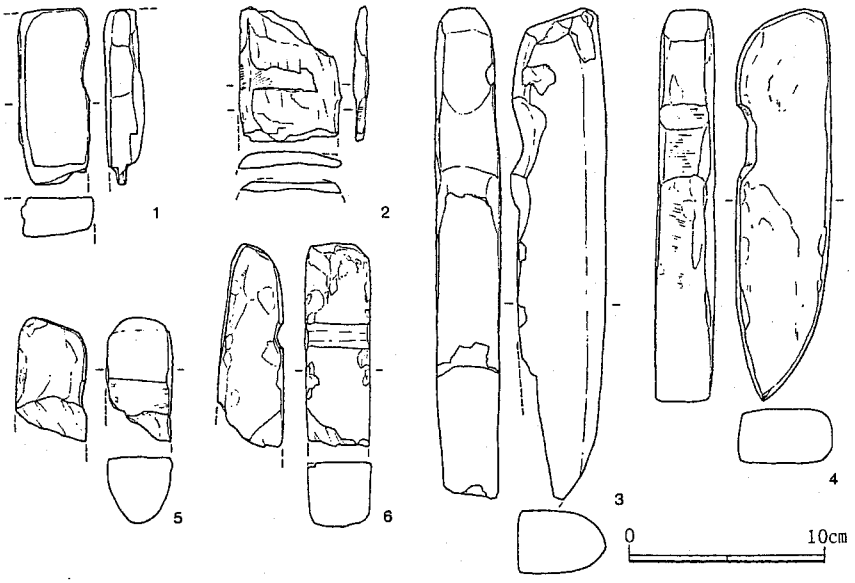


図６　中部瀬戸内地域の柱状片刃石斧
１・２ 龍川五条　３ 一ノ谷　４ 鴨部川田　５・６ 田益田中

えられる。ただし、葉理に沿って割れやすいという製作時の長所は、一方で使用時における破損の危険性の大きさを示している。事実、葉理に沿って破損している例が、柱状片刃石斧には数多く認められる。

また、少数ではあるが弥生時代前期でも時期が下る可能性のある資料のなかには、図6—5や6の岡山市田益田中遺跡出土例のように凝灰岩質で一定の方向にラミナ状の葉理がみられる石材を用いた柱状片刃石斧が認められる。それらは現状では風化のため灰白色を呈するものがほとんどであり、一見流紋岩とも分類できるが、新しい破損面は黒色であり、この地域通用の流紋岩系石材とはやや異なる印象を受ける。ただし、こういった例外的なものはあるものの、少なくとも讃岐平野では、弥生時代中期においても片岩が柱状片刃石斧の石材としては一般的である。

次に図2—1や図3—1において最大幅・最大厚ともに1.5㎝前後で、重量100ｇ以下に集中してみられる小型の片刃石斧について検討する。図7—1のように形態的には柱状片刃石斧と類似しているものの、その出現期から柱状片刃石斧のような抉りはほとんど認められない。こういった形態の片刃石斧は鑿状片刃石斧(近藤 1960・下條 1994)あるいは小型方柱状石斧と分類されているが(佐原 1964:p.92・平井 1991)、現状ではこのサイズに一致する木製柄がみられないことから、着柄しての使用に関しては不明である(上原 1993:p.23)。片岩が用いられているものが多く、柱状片刃石斧同様、刃部と直交する方向すなわち両側面と平行する方向に片岩の葉理が走る石目取りのものが多い。

最後に扁平片刃石斧について検討しよう。先に触れたように弥生時代において新たに出現する扁平片刃石斧は、刃部幅、重量ともに縄文時代晩期の小型の両刃石斧(図4—1・2)と類似している。前期前葉[5]に属する図7—2の香川県坂出市大浦浜遺跡出土例は、シャープな稜線を保つ規格的な形態をもち、下條信行の分類における最古型式であるH1—1類に分類可能である(下條 1996)。石材は先に紹介した図6—5や6などの柱状片刃石斧に類似した特徴をもつ。また、図7—3のように全体に丸みを帯び、主面と側面の区分そして刃部と主面の稜が不明瞭な緑色片岩製のものも存在する。このような形態のものは前期末になると増加する傾向がある。そして、図7—4のように大型化したものや、図7—5のように両側が基部に向かってすぼまる平面台形となる例がある。さらに、図7—6のように一方の側面に抉り部が観察できることから、破損した柱状片刃石斧に刃部加工を施した再利用品であることが明らかな個体も存在する。こういった視点で観察すると図7—3も柱状片刃石斧片の転用品である可能性がある。つまり、不定型な扁平片刃石斧の

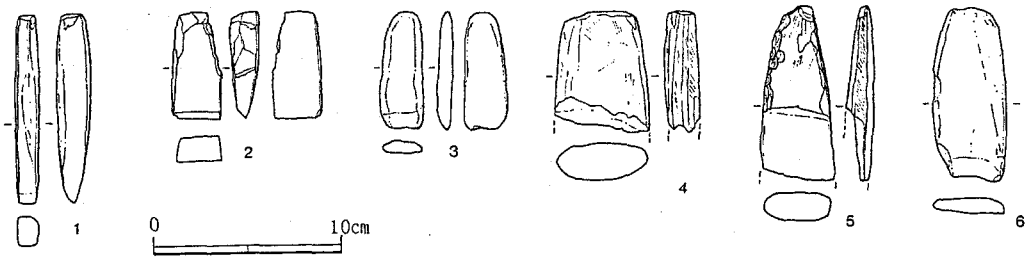


図７　中部瀬戸内地域の鑿状石斧と扁平片刃石斧
１・６ 田益田中　２ 大浦浜　３～５ 龍川五条

なかには、柱状片刃石斧の欠損品を再利用したものが、一定量含まれていると考えられるのである。

<小結>

中部瀬戸内地域の石斧について分析した結果を以下にまとめてみよう。

まず、縄文時代晩期において両刃石斧は主に500ｇ以下であり、石材や形態をふまえると重量50ｇ前後で主に蛇紋岩を用いた定角式石斧と、100～500ｇで定角式石斧に加えて乳棒状石斧で構成される一群との２つに区分できることが判明した。

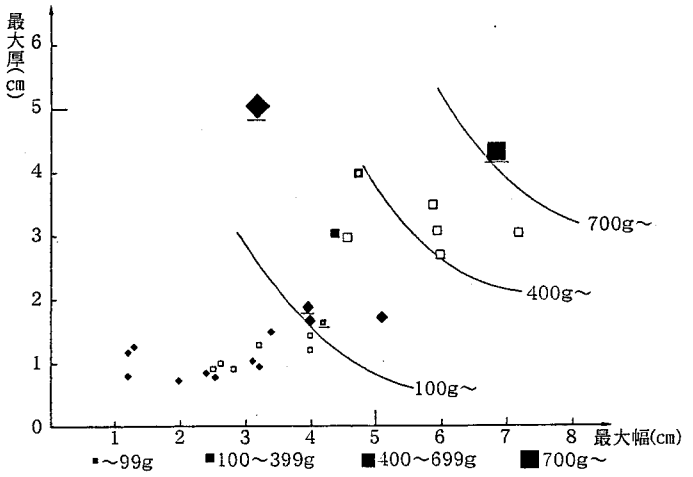
そして、弥生時代前期の古い段階で扁平な両刃石斧とともに狭義の太型蛤刃石斧が認められた。したがって、前者から後者への時期的変化を想定するよりも、両型式が同時に出現すると考える方がより妥当であると考えられる。そして、前者については北部九州地域における初期の両刃石斧との関連がうかがわれ、後者についてはより遠方、すなわち朝鮮半島などからの影響が想定できるのである。

一方、両刃石斧でも700ｇ以下のものには晩期の乳棒状石斧の系譜を引くものが、少なからず認められる。すなわち、両刃石斧の大型品と小型品との間には、形態変化における進度において差違が生じていることが判明したのである。

片刃石斧類に関しては、現状では扁平片刃石斧が柱状片刃石斧よりも先行して認められるものの、両者はほぼ同時期に出現していると考えられる。ただし、柱状片刃石斧に比べれば小型の石器である扁平片刃石斧は、柱状片刃石斧片からの転用などを含め、その石材の獲得は柱状片刃石斧用の石材に比べ容易であったと想定できる。したがって、素材として入手しておらずとも、柱状片刃石斧の破損品などを用いて製作可能な扁平片刃石斧は、より小単位でも生産が可能であったと考えられる。そして、このことが要因となり、弥生時代前期末以降、柱状片刃石斧と扁平片刃石斧の形態的「弛緩」の程度に差違が生じた可能性がある。

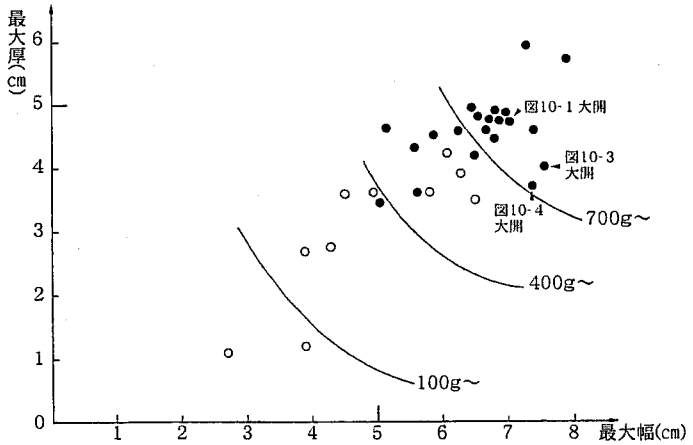
②大阪湾沿岸地域

大阪湾沿岸地域においては、現段階では弥生時代前期の磨製石斧の資料が少数であるため、淡路島を挟んで対岸に位置する吉野川下流域の徳島平野や、内陸部であるが古い段階から弥生文化の諸要素が出現する京都盆地、奈良盆地などの資料も参考に図２—２と図８を作成した。また、図８では図３において設定した中部瀬戸内地域の重量区分と同じ区分線を用いている。



グラフ中の凡例は図２と共通

①磨製石斧完形品の最大幅と最大厚



②磨製両刃石斧片の最大幅と最大厚

図８　大阪湾沿岸地域における磨製石斧法量

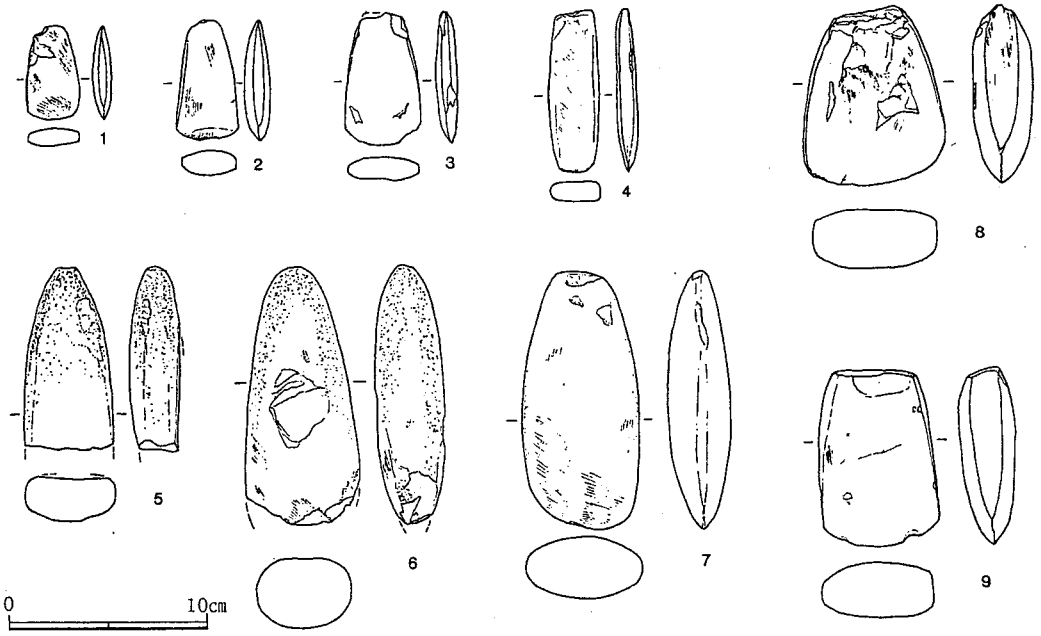


図９　大阪湾沿岸地域の縄文時代晩期両刃石斧

１・４・６ 馬場川　２ 雲井　３ 篠原　５ 鬼塚　７ 秋篠・山稜　８ 芝　９ 宇治川南

<縄文時代晩期>

縄文時代晩期に属する両刃石斧のほとんどは、重さ500ｇ以下であり、そのなかでも刃部幅が２～４cm前後で重さ50ｇ以下に集中する群と刃部幅４～７cmで200～500ｇまでの範囲にまばらに分布する群に区分できる。前者は、図９―１から図示した扁平な両刃の定角式石斧である。いずれも厚さ１cm前後で、側面に明瞭な研磨面がみられ、蛇紋岩を用いるものが多い。これらの特徴はいずれも先の中部瀬戸内地域のそれと共通する。また大阪府東大阪市馬場川遺跡からは図９―４のように幅2.6 cmで全長8.5 cmと、幅に比べて全長が長い両刃石斧が出土している。

次に後者の200～500ｇの両刃石斧としては、図９―８の奈良県桜井市芝遺跡出土例や図９―９の兵庫県神戸市宇治川南遺跡出土例などの定角式石斧と、図９―５の東大阪市鬼塚遺跡出土例の乳棒状石斧が認められる。乳棒状石斧は刃部付近にのみ研磨が施されており、それ以外の部分は敲打段階でとどまるものが多い。定角式石斧と同じく蛇紋岩が用いられる以外にも、砂岩やはんれい岩などが用いられているものがある。これらのいずれの磨製石斧においても磨り石や叩き石に転用した痕跡は認められない。

図８―１では、前節で設定した400ｇ以上の分布域に、400ｇ以下の両刃石斧が分布している。この区分線は中部瀬戸内地域の弥生時代前期の資料を用いたものであるため、縄文時代晩期の資料との比較にはやや問題があるものの、図９―８や９のような全長が極端につまった形態の石斧が存在しているため、このような現象は生じるのである。この現象は、当期の石斧消費サイクルを考える上で重要である。つまり、前述のように生産地である稲持遺跡において1000ｇをこえる未製品が存在することを勘案すれば、この２例は石斧の消費地において斧が限界まで使用された状態を示唆していると考えられるのである。もちろん、大阪湾沿岸地域における縄文時代晩期の石斧生産の状況が不明瞭な現状では、このことはあくまで推定にすぎない。しかし、以上の資料的状況からここでは、縄文時代晩期の石斧の消費形態として、刃部の摩滅と研ぎ直しの繰り返しにより大きく法量が減少し、一定の限界をこえるとそのまま廃棄されるというありかたを想定しておきたい。

<弥生時代前期>

両刃石斧　当期の両刃石斧は完形品が少ない。そのために図２―２や図８―１では不明確であるが、破片資料を重量区分とあわせて図示した図８―２からは、重さ700ｇをこえる領域に多数の両刃石斧が出現している様相が認められる。例えば、神戸市大開遺跡では図10―１のように最大厚4.7 cmで、その形態からも狭義の太型蛤刃石斧に分類できる基部片

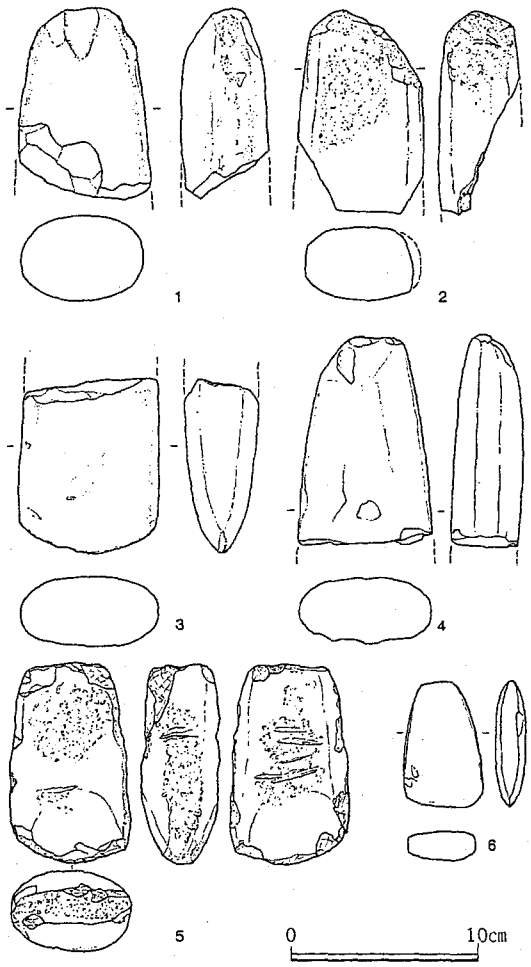


図10　大阪湾沿岸地域の弥生時代前期両刃石斧
1・3・4 大開　2 久宝寺　5 山賀　6 庄・蔵本

と、図 10 —3や4のように先の図5—3や4などと類似する扁平な両刃石斧が出土している。前者にははんれい岩、後者には砂岩が用いられており、共に先の中部瀬戸内地域における2型式の両刃石斧とそれぞれ共通する石材が用いられている。大開遺跡は、大阪湾沿岸において最も古い段階に形成された環濠集落の1つである。このような集落において先の中部瀬戸内地域と同様、2型式の両刃石斧が出土していることは重要である。一方、重量 700 gに満たない両刃石斧の完形品は現状では類例が乏しい。乳棒状石斧の系譜を引くと考えられる両刃石斧は、大阪府茨木市東奈良遺跡出土例(石田 1981:p.62)などがあげられるが、全体に出土例は少なく、先に検討した中部瀬戸内地域に比べ、大阪湾沿岸地域では在来系両刃石斧が少ない可能性がある。

また、図10—2の東大阪市久宝寺遺跡出土例や図10—5の同市山賀遺跡出土例のように、刃部や基部片が叩き石や磨石として転用されているものが認められる。大阪湾沿岸地域から出土する弥生時代前期の両刃石斧の大多数が実はこのような状況で出土するのである。両刃石斧の最終的な出土状況については、すでに佐原真によって弥生時代中期の「畿内の太型蛤刃石斧の大多数は本来の役割を終え、こわれたのちハンマーとして再利用したもの」であるとの指摘があり(佐原 1975a:p.28)、この現象は斧の鉄器化などと関連して取り上げられてきた(佐原 1975a:p.28・禰宜田 1992c)。しかし、今回の分析の結果、上述のような現象は、弥生時代の開始期における石斧の変化に対応して当地域に出現した新たな両刃石斧の消費形態の1つであると考えられる。

片刃石斧　当期の完形品としては図 11 —1の徳島市庄・蔵本遺跡より出土した緑色片岩製のものがあげられる。また、これまで大阪湾沿岸地域において弥生時代前期前半に遡る柱状片刃石斧は類例に乏しくその様相は不明瞭であったが、近年、神戸市本山遺跡より、未製品を含む柱状片刃石斧用の膝柄が、近畿地方で最も古く遡りうる遠賀川式土器群とともに出土したことにより(神戸市教育委員会 1997:pp.4～6)、遠賀川式土器出現当初からの柱状片刃石斧の存在は確実となった。

さらに大開遺跡(図11—3・4)や神戸市北青木遺跡(図11—2)、河内平野に位置する田井中遺跡(亀島 1999:p.22)などからは、弥生時代前期前半の土器に伴い柱状片刃石斧の破片が出土している。いずれも緑色片岩の葉理を刃部と直交方向にとるように石材を利用しており、石材のみならず製作時の石目取りも中部瀬戸内地域と共通している。また、その石目取りのため、刃部と直交する方向に剥離して破損しているものが多い。そこで、剥離により欠損しやすい幅や刃部の再研磨によって変化する全長ではなく、製作時の形状を

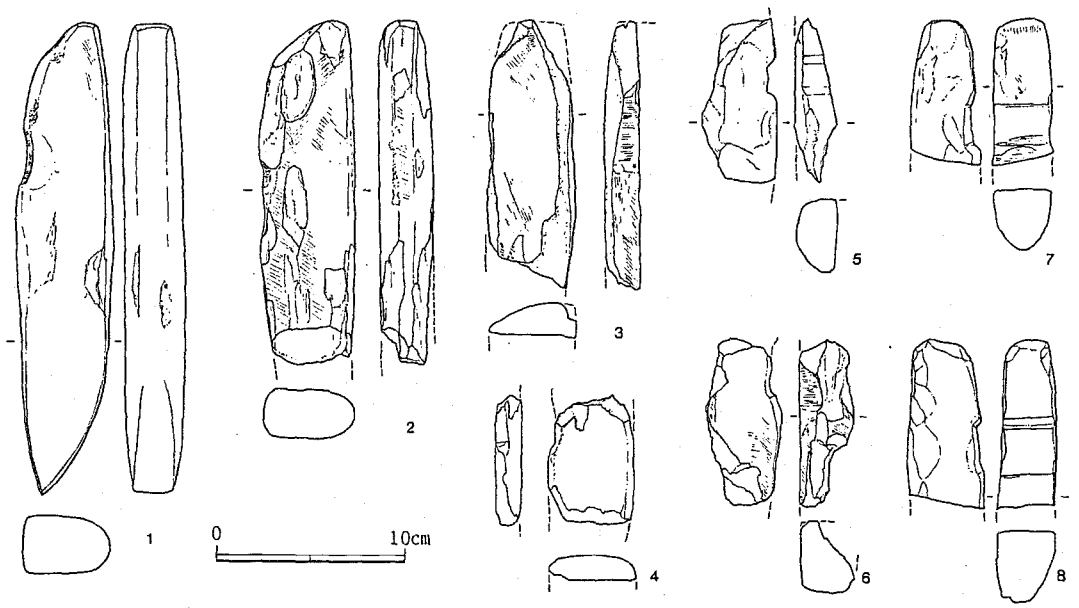


図11　大阪湾沿岸地域の柱状片刃石斧
1 庄・蔵本　2 北青木　3～5 大開　6 稲葉　7・8 田能

最も良く反映している厚さに注目して、両地域の弥生時代前期に属する資料を比較してみたのが図 12 である。この図からは両地域の片岩製柱状片刃石斧の大部分が、最大厚５cm前後と共通していることがみてとれる。つまり、石材だけではなく(中村 1998・西口 2000)、石目取り、そして法量の上でも中部瀬戸内地域と非常に類似した柱状片刃石斧が、大阪湾沿岸地域の前期に属する柱状片刃石斧の大半を占めていると理解できるのである。

また、図 11 —３・４が出土した大開遺跡第１次調査地点から北東に約 150 m離れた第７次調査地点からも、第１次調査の土器群よりやや新しい土器や斧柄を伴って、図 11 —５のような柱状片刃石斧の基部片が出土している(鎌田・友岡 1999)。本例は、風化した外面が乳褐色で風化の弱い芯部では黒灰色を呈する石材が用いられており、先の中部瀬戸内地域において認められた凝灰岩質の石材と類似している。同様の石材を用いた柱状片刃石斧としては、図 11 —６の東大阪市稲葉遺跡出土例がある。さらに前期末になると、図 11 —７・８の兵庫県尼崎市田能遺跡出土例などのような片岩以外の石材を用いた柱状片刃石斧が増加する(西口 2000)。そして、図 12 からはこれらの最大厚が３～ 4.5 cmに分布する傾向があり、この傾向が中部瀬戸内地域における片岩以外の柱状片刃石斧とも共通するのである。さらに、横断面形においても、図 11 —７と図６—５といったように共通するものが認められる点も重要である。

次に鑿状片刃石斧について述べたい。この型式の類例は、現状では大開遺跡や大阪府寝屋川市高宮八丁遺跡などで認められ、片岩を中心に多様な石材が用いられているようである。

最後に扁平片刃石斧について整理しよう。大阪湾沿岸地域において、弥生時代前期前半に遡る扁平片刃石斧は、今のところ図 13 —１の大開遺跡や図 13 —２の山賀遺跡、そして八尾市池島・福万寺遺跡(大阪文化財センター 1991:p.128)から出土しているものがあげられる。大開遺跡出土例は刃部と平行する石目取りで緑色片岩を用いている。また山賀遺跡出土例は粘板岩を用いて製作されており、刃部から基部の厚さが均等で主面と側面の区分が明瞭であるという特徴をもつ。

同様の形態は前期末においても図 13 —３のような美園遺跡出土例において認められるが、この段階になると次のような新たな展開がみられる。まず、図 13 —５のように重さ 100 ｇをこえる扁平片刃石斧が出現しており、そのサイズに多様性が生じるようである。また、田井中遺跡や高宮八丁遺跡では、図 13 —４のようなサヌカイトを部分的に研磨した扁平な片刃石斧が出土している。サヌカイトを用いた例は、いずれも刃部と両主面に研

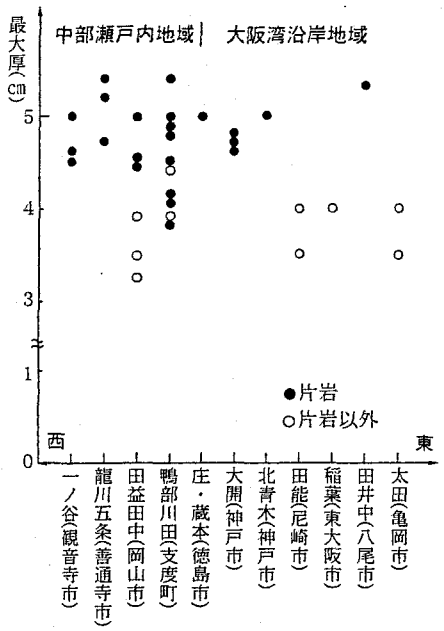


図12　弥生時代前期における
柱状片刃石斧の最大厚

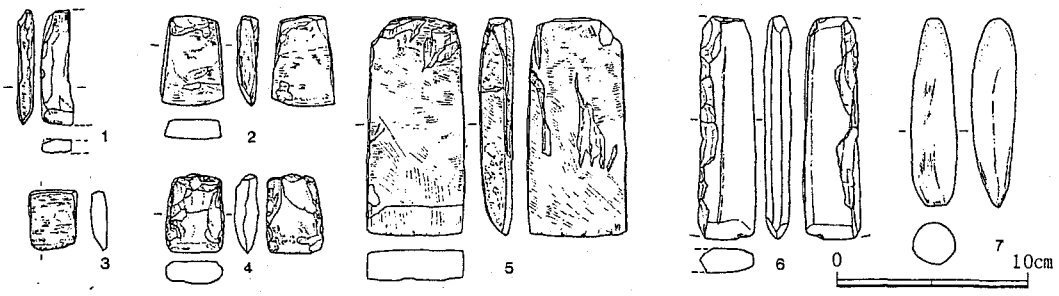


図13　大阪湾沿岸地域の扁平片刃石斧類
1 大開　2 山賀　3・5 美園　4 高宮八丁　6 上ノ島　7 庄・蔵本

磨が施されているものの、両側面は研磨されておらず、調整剥離がそのまま残存する。刃部形態も扁刃ぎみのものがみられ、先に紹介した前期前半の扁平片刃石斧との差は大きい。

また、図 13 —6の兵庫県尼崎市上ノ島遺跡出土例のように完全な両刃でかつ縦長の石斧が認められる。形態的には、図9—4の縄文時代晩期に属する馬場川遺跡出土例に類似しており、完全な両刃である点を重視すれば、扁平片刃石斧の変容というよりは、むしろ在来の系譜を引く可能性が考えられる。さらに先述の庄・蔵本遺跡からは図 10 —6のような 100 gに満たない定角式の両刃石斧が出土している。これらの諸例から、とくに 100 g以下の石斧には縄文時代晩期の系譜を引く磨製石斧の存在が、少数ではあるが認められそうである。

他にも同様の重量をもつ石斧として、庄・蔵本遺跡(図 13 —7)や京都府京田辺市三山木遺跡(田代 2000:p.110)にみられる砂岩等の円礫を用い刃部のみを研磨した部分磨製石斧があげられる。これらは下條信行によってN式と分類されており、「扁平片刃石斧波及の余波として生じた在地での簡易的対応形」であると想定されている(下條 1996:p.149)。機能的には扁平片刃石斧と重複するものであり、その系譜関係は不明であるが、100 g以下の磨製石斧の多様性を示す資料として重要である。

<小結>

本節において明らかとなったことをまとめると、以下の通りである。

まず指摘できるのは、縄文時代晩期の両刃石斧に中部瀬戸内地域と同様、大小2つの区分が認められる点である。

そして、弥生時代前期になると両刃石斧は大きく変容し、大開遺跡などでみられるように狭義の太型蛤刃石斧と扁平な両刃石斧とが同時に出現している。この変化も中部瀬戸内地域のそれと類似している。また、初期の柱状片刃石斧は緑色片岩が大多数を占め、石目取りや法量を含めて中部瀬戸内地域のものとの共通性が高い。このことは晩期から前期にかけて大阪湾沿岸地域で盛行する片岩製石棒の分布と対比してみると興味深い。中村豊は、縄文時代晩期後半から弥生時代前期にかけて吉野川下流域と大阪湾沿岸地域を中心に片岩製石棒が数多く分布していることを指摘し、前者から後者の地域への片岩製石棒流通を想定している(中村 2000)。そして、この片岩製石棒の分布と先に検討した片岩製柱状片刃石斧のそれとは非常に一致する傾向が強いのである。石棒のような縄文的な石器と、新出の石斧である柱状片刃石斧が、このような一致をみせることは大阪湾沿岸地域における大陸系磨製石器の出現過程を考えるうえで非常に示唆的な現象である。

このように特定石材に偏った様相をみせる柱状片刃石斧も、前期中葉以降になると異なった石材のものが出現する。しかし、形態や法量の点でみるとその変化は画一的であり、中部瀬戸内地域の柱状片刃石斧の形態変化と連動して、大阪湾沿岸地域のそれも変化している可能性がある。一方、扁平片刃石斧は前期末以降、サヌカイトや砂岩等の円磨礫を用いた部分研磨品が出現し、石材や製作技法に多様性が認められる。このような柱状片刃石斧と扁平片刃石斧の変化のありかたの違いは、中部瀬戸内地域と同様、素材となる石材の大きさに起因する両者の生産や流通構造の差違を物語る現象であるといえよう。

(4)結論—弥生時代開始期における磨製石斧の変化とその背景—

本節では中部瀬戸内地域と大阪湾沿岸地域における縄文時代から弥生時代の石斧について斧身法量の比較検討を行うことにより、両地域における石斧総体の変化過程を追究してきた。その成果を以下の2つの論点にまとめてみよう。

①中部瀬戸内地域と大阪湾沿岸地域における磨製石斧の出現過程

両地域における縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての磨製石斧の変遷過程に高い共通性がうかがえる点をまず注目したい。例えば、縄文時代晩期では 50 g前後に集中する定角式石斧と 100 ～ 500 gの範囲にまばらに分布する定角式石斧・乳棒状石斧という区分が、共通して認められた。そして、弥生時代前期になると 700 g以上の両刃石斧には次の2型式、砂岩を用いた幅広で扁平な両刃石斧(下條分類A1・A2類)と深成岩・半深成岩を用いた狭義の太形蛤刃石斧(下條分類A3類)が、両地域においてその初期から出現している。前者については在来の両刃石斧の発展形態であるの可能性も若干残るが、少なくとも後者については晩期の石斧にその類似品は認められず、朝鮮半島においてみられる厚型斧に類似していることから、外部の影響を受けて成立した両刃石斧であることは明らかである。

一方、700 g以下の両刃石斧については、縄文時代晩期の両刃石斧と類似する在来系両刃石斧が両地域で一定量認められる。つまり、700 g前後を境として弥生時代前期における両刃石斧の変化は異なるのである。

さらに、中部瀬戸内地域において、それまで打製土掘具などに使用されていた片岩を用いて柱状片刃石斧の生産が開始される。大阪湾沿岸地域でも中部瀬戸内地域のそれと同一

の石材、石目取りで法量も類似した柱状片刃石斧が、初期の柱状片刃石斧のほとんどを占めるのである。このことは、大阪湾沿岸地域で出土する弥生時代前期前半の柱状片刃石斧が、讃岐平野や吉野川流域(中村 1998:pp.95 ～ 96・西口 2000)で生産されたものである可能性を示唆している。ただし、神戸市本山遺跡などにおいて弥生時代前期に属する柱状片刃石斧用の膝柄未製品が出土していることは重要である。つまり、柄を含めた斧全体が四国島からもたらされたのではなく、斧身のみが流通したと考えられるのである。

一方、扁平片刃石斧も、両地域において柱状片刃石斧に先行もしくはほぼ同時に出現する。しかしながら、中部瀬戸内地域では柱状片刃石斧からの転用品が、大阪湾沿岸地域ではサヌカイトや円礫を用いた部分研磨品が、いずれも弥生時代前期末には認められ、柱状片刃石斧のありかたとは異なる変遷をみせる。さらに扁平片刃石斧の変容というよりは、図５―７や図 13 ―６のような縄文時代の系譜を直接ひくとみられる小型の石斧が、わずかではあるが両地域において認められる。

従来、下條信行が提唱した大陸系磨製石器の定着過程は、両刃石斧が漸移的に変化する一方で、片刃石斧は「縄文時代にこの種のものが存在しないために … 中略 … 素直に受容」され(下條 1991b:p.49)「朝鮮半島系のものがそのままの機能と形態をもってストレートに溶け込む」(下條 1985:p.45)というものであった。しかしながら、本節の分析の結果、中部瀬戸内地域と大阪湾沿岸地域では、両刃石斧でも 700 ｇ前後を境として、その定着過程が大きく異なることが判明した。すなわち、両地域において 700 ｇ以上の両刃石斧には新出型式のものが遠賀川式土器の出現とほぼ同時に普及するのである。また、片刃石斧は、下條の指摘通り柱状、扁平片刃石斧とも両地域において比較的スムーズに普及するが、その後の定着過程においてこの２種の片刃石斧は次のような違いをみせた。すなわち、柱状片刃石斧は片岩から砂岩などに素材を転換させつつも、中部瀬戸内地域と大阪湾沿岸地域において連動した形態変化をみせるのに対して、扁平片刃石斧は、打製石器石材であるサヌカイトや場合によっては近隣の河原で採集したと思われる円磨礫を用いて製作されるものが出現するなど、素材や製作技法において顕著な多様性が発現するのである。そして、２つの片刃石斧にみられる変化の方向がこのように異なる要因としては、原材となる石材の大きさに起因する生産単位や流通の規模の違いが想定できたのである。

残念ながら、今回の検討対象である弥生時代前期の磨製石斧は資料数が少なく、未製品の出土数もごくわずかであるため、本節では弥生時代前期における柱状片刃石斧と扁平片刃石斧の生産と流通のありかたの違いを具体的に論じることはできなかった。しかしなが

ら、弥生時代前期における片刃石斧の出現と定着過程において、すでに法量の異なる器種間で生産と流通に差違が生じつつあることには、注意が必要である。さらに、先述したように大阪湾沿岸地域で緑色片岩製の柱状片刃石斧が排他的に用いられている弥生時代前期前半の段階で、斧柄の未製品が神戸市本山遺跡などで出土していることは、次のような斧生産体制を想起させる。それは、斧身が四国島において生産され、それが瀬戸内海をこえ流通し、大阪湾沿岸地域において製作される斧柄と組み合わさってはじめて斧として完成するという過程である。斧のような異素材を組み合わせて製品化する利器において、このような広域「分業」がみられることは、弥生時代の生産、流通構造を考えるうえで非常に興味深い現象である。

②石器からみた大阪湾沿岸地域における弥生時代のはじまり

本節における石器の分析を通して、縄文から弥生への変化の具体像は、どのように描けるであろうか。中部瀬戸内地域から大阪湾沿岸地域への弥生文化の波及という点に焦点を絞って考えてみよう。まず、本節の分析の結果、大阪湾沿岸地域における弥生時代前期の磨製石斧の組合せは中部瀬戸内地域のそれと共通していることが判明した。すなわち、磨製石斧様式に関する限り、大阪湾沿岸地域の独自性や器種の選択性は、ほとんど認められないのである。

同様の現象は、打製石器の石材においても指摘されている。それは讃岐地域に産出する金山サヌカイトの使用率が、弥生時代前期になると大阪湾沿岸地域において一気に増加するという点である(山中 1992・秋山 1999)。弥生時代前期前半において大阪湾沿岸地域では石器文化の大幅な「瀬戸内化」が進行し、石器形式とともに金山サヌカイトや緑色片岩といった四国島産の石材を用いた石器が多用される。いうならば遠隔地の石材に依存度が高まった状況で、当地域の弥生石器文化は出現するのである。

ただし、中部瀬戸内地域の弥生時代前期にみられる石器すべてが大阪湾沿岸地域に出現しているわけではないという点には注意が必要である。例えば、大陸系磨製石器のなかでも磨製石鏃は、百間川原尾島遺跡や下川津遺跡において緑色片岩を用いたものが出土しているにも関わらず、弥生時代前期前半の大阪湾沿岸地域において出土例は皆無である。この点については、次節および次章について詳細に検討する。

また、中部瀬戸内地域において縄文時代晩期に通有の打製土掘具は、龍川五条遺跡や鴨部川田遺跡などの平野部の弥生時代前期集落においても、石器全体に対し 10 %前後認め

られる(信里 2000:p.103)が、大阪湾沿岸地域ではほとんど認められない[6]。一方で、すでに触れたように縄文時代晩期において大阪湾沿岸地域で盛行する結晶片岩製石棒は、弥生時代前期になっても引き続き、両地域で認められる(中村 1998・2000)。

つまり、直接生産活動に関わる石器に関しては、従来から存在した両刃石斧にまで、新しい型式のものが出現するのに対して、磨製石鏃のような生産活動に直接関わらない石器の普及は相対的に弱いのである。これに対して、在来の石器では、生産に関連する打製土掘具が大阪湾沿岸地域へは普及しない。このような状況から判断すると、先の実用石器にみられた中部瀬戸内地域から大阪湾沿岸地域への影響の大きさを、中部瀬戸内地域からの集団的移住といった人的要因のみで説明するのは困難である。

むしろ、大阪湾沿岸地域における新しい石器文化の出現過程は、次のように考えられよう。まず、中部瀬戸内地域において、大阪湾沿岸地域より先に新来石器を受容し、地元の石材を用いることにより、新しい道具様式が確立される。すでに前段階において中部瀬戸内地域と類似する型式の石斧を使用していた大阪湾沿岸地域の集団のなかに、結晶片岩製石棒の分布にみられるような縄文時代晩期以来の交流関係を通じて、それらの新しい石器に対する需要が引き起こる。その結果、新しい実用石器のみが外部から搬入される形で大阪湾沿岸地域に出現し、定着する。もちろん、この背景には単なる新しい道具に対する需要のみではなく、水稲耕作技術をはじめとする新しい生産体系に対する関心と需要が存在したことはいうまでもない。

これまで、大阪湾沿岸地域における弥生時代の開始は、土器の類似性や特定石材の分布から「瀬戸内系弥生人」の存在を高く評価し、移住者とのすみわけ(中西 1984)や共生(秋山 1999)といった状況が想定されてきた。たしかに、本節の分析の結果においても中部瀬戸内地域と大阪湾沿岸地域との密接な関係がうかがわれる。しかし、石器全体からみれば「瀬戸内系弥生石器」の大阪湾沿岸地域における普及度は、器種ごとに大きく異なっていたことも見逃してはならない。このことは新しい石器の普及が、移住者・集団の規模のみを反映したものではなく、直接的には新技術体系に対する在来社会側の需要の高さと選択性を反映したものであることを如実に示しているのである。

かつて、下條信行は九州島を中心とした弥生時代開始期の石器を検討するなかで、新しい石器様式が選択的に受容されるという理解を示した。そして、本節の分析の結果、器種ごとの推移に着目すれば、この選択的受容というとらえ方が、大阪湾沿岸地域においても適用可能な概念であることが判明した。さらに両刃石斧をはじめとする実用石斧類に北部

九州地域以上の明瞭な変革が認められるという点は、新来文化の波及が、きわめて生産に関わる実用品に執着した選択性のもと、中部瀬戸内や大阪湾沿岸といった地域では進行したことを如実に示しているのである。

【注】

1)もちろん、斧の重さや威力は斧身のみでなく、斧柄の重量や長さも関連する。しかしながら、弥生時代の近畿地方の斧柄を比較した上原真人によれば伐採斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧の順で斧の全長が小さくなっていく傾向が認められ(上原 1993:p.15)、後で分析するようにこの斧柄の比例関係は各形式ごとの斧身の重量と一致することから、斧身と斧柄には一定の比例関係があるとの想定のもとに以下の分析を進める。また、磨製石斧の用途は斧身以外にも樹木を箭割する場合(成田 1984:pp.49 ～ 52)に楔として使用された可能性が考えられ(楠本 1973:p.95)、本節でも楔としての使用についても、磨製石斧の用途として認めたい。しかし、楔としての使用を示す基部の欠損といった痕跡は乳棒状石斧以外のほとんどの法量、形態の磨製石斧に認められることから、斧身と楔との区分は現状では困難であった。したがって、磨製石斧の実際の運用時においても、この2つの使用方法は必要に応じて選択されていたと考えられる。以上のような認識から、磨製石斧の機能として本節では斧身と楔という用途を同様に扱い、以下の議論を進めることとする。

2) ただし、遠賀川式土器との併行関係について議論のある大阪湾沿岸地域の長原式土器と共伴した石斧については、本節の意図する縄文時代晩期と弥生時代前期の比較という観点からは不適切であるので、今回の分析対象として取り上げていない。

3)蛇紋岩は、かんらん岩・輝石岩類が変質ないし変成した広域変成岩の一種であり(益富 1987:p.153)、三郡変成帯や三波変成帯などに認められる暗緑色の石材である。流紋岩は縞模様(流理構造)が発達した火山岩であり、比較的広範囲に産出地が点在する。例えば中部瀬戸内地域では、岡山県高梁川流域(岡山県教育委員会 1996:p.322)や香川県高松市三木町付近あるいは大川郡寒川町と大川町の境に位置する金山(森 1997:p.205)などが産地として推定されている。

4)片岩は層状の葉理が顕著な石材であり、その目に沿って容易に剥離するという性質をもつ。三波帯において多数認められるで石材であり、四国島の吉野川流域(中村 1998)や紀伊半島の紀ノ川流域(村田 1992) が、弥生時代における石材獲得地として推定されてい

る。

５)弥生時代前期の細分に関しては、中部瀬戸内地域には森下英治、信里芳紀そして平井勝らの編年(森下 1998・森下・信里 1998・平井 1995)を、大阪湾沿岸地域では田畑直彦の編年(田畑 1997)をそれぞれ参考に段・削出・沈線などの組成の傾向によって、Ⅰ様式古・中段階(佐原 1967)を前葉、中葉として区分する。また、その両時期を合わせて呼称する場合は、弥生時代前期前半という名称を用いる。そして、４条以上の多条沈線を主体とする段階を前期末と区分する。さらに中部瀬戸内地域でも、下川津遺跡や津島南遺跡の遺構の一部には、大阪湾沿岸地域のそれより一段階古い土器が存在することが指摘されているが(平井 1992・小林 1999p.166・森下 2000)、本論でもそれを是認したうえで、以下の議論を進める。

６）この点については、香川県埋蔵文化財センターの森下英治氏にご指摘いただいた。記して感謝します。

表１—１　図２—①および図３のデータ出典１

中部瀬戸内地域縄文時代晩期

遺跡名	種類	残存	刃部幅	重量(g)	最大幅	最大厚	府県	市町村	引用文献
窪木	両刃	完形	5.5	449	6.3	2.7	岡山県	総社市	文献17p.26図16Ｓ１
南溝手	両刃	完形	3.5	43	3.5	1.3	岡山県	総社市	文献14p.60図119—Ｓ75
南溝手	両刃	完形	3.7	47	3.7	1.2	岡山県	総社市	文献16p.98図59Ｓ558
金黒池東	両刃	完形	4.5	157	4.6	2.4	岡山県	総社市	文献18p.42図７Ｓ10
永井	両刃	完形	5.5	135	5.5	2.8	香川県	善通寺市	文献3p.682図584—956
田益田中	両刃	完形	6.5	209	6.6	2.1	岡山県	岡山市	文献20p.23図29Ｓ２
大柿	両刃	完形	4.7	296	5.0	3.3	徳島県	三好町	文献22p.23図２—11

表１—２　図２—①および図３のデータ出典２

中部瀬戸内地域弥生時代前期

遺跡名	種類	残存	刃部幅	重量(g)	最大幅	最大厚	府県	市町村	引用文献
鴨部川田	両刃	完形	6.0	1022	7.0	5.7	香川県	支度町	文献10p.127図414—817
鴨部川田	両刃	完形	6.4	1132	6.8	4.7	香川県	支度町	文献10p.276図220—828
鴨部川田	両刃	完形	4.8	403	6.0	4.2	香川県	支度町	文献10p.302図241—997
鴨部川田	両刃	完形	4.5	470	5.8	4.0	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	両刃	完形	4.4	252	5.4	2.7	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	両刃	完形	4.3	280	4.9	3.1	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	両刃	完形	5.5	566	6.6	3.5	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	両刃	完形	4.8	672	5.9	4.6	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	両刃	完形	6.7	575	7.2	3.3	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	両刃	完形	4.9	1327	7.4	3.9	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	両刃	完形	5.1	987	7.0	4.7	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	両刃	基部	不明	1261	7.6	5.1	香川県	支度町	文献５未報告
佐古川・窪田	両刃	完形	5.0	410	5.6	3.1	香川県	綾南町	文献12p.25図16—３
尾崎西	両刃	完形	5.3	855	6.6	4.7	香川県	長尾町	文献7p.9写真4
尾崎西	両刃	完形	6.0	765	7.0	4.6	香川県	長尾町	文献7p.9写真4
津島岡大	両刃	完形	5.3	145	5.2	2.3	岡山県	岡山市	文献21p.134図118—S23
百間川原尾島	両刃	基部	不明	980	7.9	5.9	岡山県	岡山市	文献15p.187図275S169
百間川沢田	両刃	基部	不明	895	7.1	5.4	岡山県	岡山市	文献13p.131Ｓ53
鴨部川田	柱状片刃	完形	2.8	596	3.0	4.9	香川県	支度町	文献9p.278図222—839
一ノ谷	柱状片刃	基部	不明	489	3.7	4.5	香川県	観音寺市	文献２ｐ541図481—１
一ノ谷	柱状片刃	完形	2.8	789	3.4	5.0	香川県	観音寺市	文献2p.40図24—１
鴨部川田	柱状片刃	完形	2.4	330	2.8	4.4	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	柱状片刃	完形	1.0	63	1.7	1.5	香川県	支度町	文献９p.278図222—837
鴨部川田	柱状片刃	完形	1.5	34	1.5	2.0	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	柱状片刃	完形	0.8	23	0.9	1.2	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	柱状片刃	完形	0.6	49	1.1	1.5	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	柱状片刃	完形	0.8	15	1.1	1.2	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	柱状片刃	完形	0.9	38	1.9	1.2	香川県	支度町	文献５未報告
田益田中	柱状片刃	完形	0.9	15	0.9	1.2	岡山県	岡山市	文献19p.90図129Ｓ91
田益田中	柱状片刃	完形	0.9	41	1.4	1.6	岡山県	岡山市	文献19p.90図129Ｓ92
田益田中	柱状片刃	完形	0.9	42	1.2	1.8	岡山県	岡山市	文献20p.98図149—242
鴨部川田	扁平片刃	完形	2.8	64	3.1	1.0	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	扁平片刃	完形	2.9	64	3.4	1.5	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	扁平片刃	完形	4.9	115	4.9	1.0	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	扁平片刃	完形	3.2	34	3.2	0.9	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	扁平片刃	完形	2.7	33	2.7	1.1	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	扁平片刃	完形	2.6	29	2.7	1.1	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	扁平片刃	完形	3.1	69	3.5	1.2	香川県	支度町	文献５未報告
鴨部川田	扁平片刃	完形	2.9	35	2.9	1.2	香川県	支度町	文献５未報告
大浦浜	扁平片刃	完形	2.8	32	3.0	1.0	香川県	坂出市	文献１p.140図152
林・坊城	扁平片刃	完形	1.8	33	2.0	1.4	香川県	高松市	文献６p.174図100—931
龍川五条	扁平片刃	完形	3.4	64	3.9	1.4	香川県	善通寺市	文献８p.177図239—1501
龍川五条	扁平片刃	完形	2.3	17	2.4	0.8	香川県	善通寺市	文献８p.128図144—837

表１—３　図２—②および図８のデータ出典

大阪湾沿岸地域(徳島平野を含む)縄文時代晩期

遺跡名	種類	残存	刃部幅	重量(g)	最大幅	最大厚	府県	市町村	引用文献
馬場川	両刃	完形	6.0	383	5.9	3.5	大阪府	東大阪市	文献42写真
馬場川	両刃	完形	1.7	45	2.6	1.0	大阪府	東大阪市	文献42写真
馬場川	両刃	完形	2.5	18	2.8	0.9	大阪府	東大阪市	文献42写真
馬場川	両刃	完形	4.0	38	4.0	1.2	大阪府	東大阪市	文献42写真
仏並	両刃	完形	2.5	14	2.5	0.9	大阪府	和泉市	文献34p.45図35—172
恩智	両刃	完形	4.2	244	4.6	3.0	大阪府	八尾市	文献45p.113Ｓ123
雲井	両刃	完形	3.2	36	3.2	1.3	兵庫県	神戸市	文献25p.16図13—440
宇治川南	両刃	完形	5.5	255	6.0	2.7	兵庫県	神戸市	文献28未報告
秋篠・山稜	両刃	完形	4.8	382	5.9	3.1	奈良県	奈良市	文献48ＰＬ184—３
秋篠・山稜	両刃	完形	3.8	41	4.0	1.4	奈良県	奈良市	文献48ＰＬ184—１
芝	両刃	完形	6.7	322	7.2	3.0	奈良県	桜井市	文献47p.38図25Ｓ—１

大阪湾沿岸地域(徳島平野を含む)弥生時代前期

遺跡名	種類	残存	刃部幅	重量(g)	最大幅	最大厚	府県	市町村	引用文献
庄蔵本	両刃	完形	3.9	79	4.2	1.6	徳島県	徳島市	徳島大学95病棟未報告
庄蔵本	両刃	基部	不明	676	7.2	4.3	徳島県	徳島市	徳島大学96共同溝未報告
庄蔵本	両刃	完形	6.0	731	6.9	4.3	徳島県	徳島市	徳島大学96共同溝未報告
庄蔵本	両刃	基部	不明	953	7.1	5.0	徳島県	徳島市	徳島大学96共同溝未報告
庄蔵本	両刃	基部	不明	990	7.3	4.4	徳島県	徳島市	徳島大学96共同溝未報告
雲宮	両刃	完形	4.1	206	4.4	3.0	京都府	長岡京市	左京407次未報告
東奈良	両刃	完形	4.1	381	4.9	4.0	大阪府	茨木市	文献46p.63図31—２
庄蔵本	柱状片刃	完形	2.0	751	3.2	5.0	徳島県	徳島市	徳島大学96共同溝未報告
北青木	柱状片刃	基部	不明	461	2.8	5.0	兵庫県	神戸市	文献27p.55図14—４
雲宮	柱状片刃	完形	1.0	23	1.3	1.3	京都府	長岡京市	左京407次未報告
高宮八丁	柱状片刃	完形	1.2	5	1.2	0.8	大阪府	寝屋川市	文献40図版６—91
太田	柱状片刃	完形	0.9	13	1.2	1.2	京都府	亀岡市	文献49p.132図94—１
庄蔵本	扁平片刃	完形	3.8	117	4.0	1.8	徳島県	徳島市	徳島大学96共同溝未報告
美園	扁平片刃	完形	3.0	42	3.2	0.9	大阪府	八尾市	文献38図157Ｓ—284
美園	扁平片刃	完形	5.1	200	5.1	1.7	大阪府	八尾市	文献38図183Ｓ—325
美園	扁平片刃	完形	2.2	14	2.5	0.8	大阪府	八尾市	文献38図129Ｓ—265
高宮八丁	扁平片刃	完形	3.5	50	3.5	1.3	大阪府	寝屋川市	文献40図版５—60
高宮八丁	扁平片刃	完形	3.1	22	3.1	1.0	大阪府	寝屋川市	文献40図版５—61
高宮八丁	扁平片刃	完形	2.4	17	2.4	0.8	大阪府	寝屋川市	文献40図版５—62
雲宮	扁平片刃	完形	2.7	120	4.0	1.7	京都府	長岡京市	左京407次未報告
太田	扁平片刃	完形	2.0	12	2.0	0.7	京都府	亀岡市	文献49p.132図94—２

・香川県
(1) 香川県教育委員会・本州四国連絡橋公団1988『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ大浦浜遺跡』
(2) 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財発掘調査センター1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第七冊一ノ谷遺跡』
(3) 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財発掘調査センター1990『高松東道路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第九冊永井遺跡(本文編)』
(4) 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財発掘調査センター1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ下川津遺跡—第2分冊—』
(5) 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財発掘調査センター1992『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告概報平成3年度』
(6) 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財発掘調査センター1993『高松東道路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊林・坊城遺跡』
(7) 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター1993『県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報尾崎西遺跡平成4年度』
(8) 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財発掘調査センター1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第23冊龍川五条遺跡Ⅰ第1分冊』
(9) 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財発掘調査センター1997『高松東道路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊鴨部川田遺跡Ⅰ第1分冊』
(10) 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財発掘調査センター1997『高松東道路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊鴨部川田遺跡Ⅰ第2分冊』
(11) 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財発掘調査センター1998『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第29冊龍川五条遺跡Ⅱ』
(12) 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局1998『国道バイパス埋蔵文化財発掘調査概報平成9年度』
・岡山県
(13) 建設省岡山河川事務所・岡山県教育委員会1985『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2』
(14) 岡山県教育委員会1995『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100南溝手遺跡』
(15) 建設省岡山河川事務所・岡山県教育委員会1996『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106百間川原尾島遺跡5』
(16) 岡山県教育委員会1996『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107南溝手遺跡2』
(17) 岡山県教育委員会1997『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120窪木遺跡1』
(18) 岡山県教育委員会1997『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121薮田古墳群ほか』
(19) 岡山県教育委員会1999『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告141田益田中遺跡』
(20) 岡山県教育委員会1999『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告140田益田中遺跡』
(21) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1995『津島岡大遺跡6－第6・7次調査－』
・徳島県
(22) (財) 徳島県埋蔵文化財センター1997『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol.81996年度』
・兵庫県
(23) 兵庫県教育委員会1992『第105冊尼崎市上ノ島遺跡』
(24) 兵庫県教育委員会1995『第150冊尼崎市東武庫遺跡尼崎市武庫元町団地建設に伴う』
(25) 神戸市教育委員会1991『雲井遺跡第1次発掘調査報告書』
(26) 神戸市教育委員会1993『神戸市兵庫区大開遺跡発掘調査報告書』
(27) 神戸市教育委員会1999『北青木遺跡発掘調査報告書－第3次調査－』
(28) 神戸市教育委員会1986『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』
(29) 神戸市教育委員会1995『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』
(30) 神戸市教育委員会1999『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』

(31) 尼崎市教育委員会1982『尼崎市文化財調査報告第15集田能遺跡発掘調査報告書』
(32) (財) 古代學協會1984『神戸市灘区篠原A遺跡』
・大阪府
(33) (財) 大阪文化財センター1979『池上遺跡第3分冊の1石器編』
(34) (財) 大阪府埋蔵文化財協会1993『仏並遺跡Ⅲ主要地方道路枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う発掘調査報告書』
(35) (財) 大阪府文化財調査研究センター1997『田井中遺跡(1～3次)・志紀遺跡(防1次)陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書』
(36) 大阪府教育委員会1986『稲葉遺跡発掘調査概要・Ⅰ－府立玉川高等学校建設に伴う調査－』
(37) 大阪府教育委員会1999『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅷ』
(38) 大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター1991『河内平野遺跡群の動態Ⅱ近畿自動車天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－北遺跡群旧石器・縄文・弥生時代前期編－』
(39) 大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター1992『河内平野遺跡群の動態Ⅴ近畿自動車天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－南遺跡群旧石器・縄文・弥生時代前期編－』
(40) 寝屋川市教育委員会1988『高宮八丁遺跡(大阪府寝屋川市)石器編』
(41) 四条畷市教育委員会1984『四条畷市埋蔵文化財包蔵地調査概報16雁屋遺跡発掘調査概要・1－四条畷市雁屋所在－』
(42) 東大阪市遺跡保護調査会1976『図録・縄文時代の東大阪』
(43) (財) 東大阪市文化財協会 1997『鬼塚遺跡第8次調査報告書』
(44) (財) 東大阪市文化財協会1999『植附遺跡第5次発掘調査報告書』
(45) 八尾市教育委員会1987『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ－恩智遺跡の調査－』
(46) 東奈良遺跡調査会1981『東奈良(大阪府茨木市)発掘調査概要Ⅱ』
・奈良県
(47) 桜井市教育委員会1987『桜井市埋蔵文化財発掘調査報告桜井市芝　芝遺跡大三輪中学校改築に伴う発掘調査報告書』
(48) 秋篠・山稜遺跡調査会・奈良大学文学部考古学研究室1998『秋篠・山稜遺跡－奈良大学付属高等学校に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
・京都府
(49) (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター1986『京都府遺跡調査報告書第6冊太田遺跡』

2　弥生時代開始期における武器形石器の普及過程

(1)はじめに

前節の分析の結果、弥生時代開始期において木工具である磨製石斧は、在来、新来器種を問わず、円滑に受容されることが判明した。従来、両刃石斧などの在来器種が、いわゆる太型蛤刃石斧に変化するには、一定の期間を要することが、主に北部九州地域の資料を用いて指摘されていた。しかしながら、少なくとも中部瀬戸内地域から大阪湾沿岸地域にかけての地域では、在来の両刃石斧においても弥生時代前期前半に狭義の太型蛤刃石斧が出現することが確認できたのである。

以上のような成果をふまえて、本節では列島における新来武器の普及について、検討していく。弥生時代における新来の武器とは大陸系磨製石器である磨製石鏃、磨製石剣である。もちろん、弥生時代以前にも、打製石鏃、打製石槍が少なからず存在し、なかには人骨に嵌入した状態の「武器」も認められる。また、狩猟具とされる骨角器のなかにも、人間に対して用いれば十分に殺傷能力のあるものが存在する。しかし、これらは殺人、傷害行為における「凶器」とはなりえても、人を傷つけることを目的に特殊化したという考古学的証明は困難である。

これに対して、朝鮮半島において銅剣の影響を受けて成立したとされる石製の「剣」が、弥生時代には確実に列島に波及している。また、同時期に列島に出現する有茎式磨製石鏃も、外来武器の１つとして認められよう。本節ではこういった外来の武器が、弥生時代開始期においてどのような過程をへて普及していくかを、分布や出土状況などを加味しながら分析し、列島における最初の武器の普及形態を明らかにすることを目的とする。

(2)新来武器形石器の分布

①朝鮮半島南部における武器形石器の様相

列島における新来武器形石器を検討する前に、その故地である朝鮮半島南部の武器形石器について概略しておきたい。

まず、集落における武器形石器をみてみよう。慶尚南道蔚山市検丹里遺跡は朝鮮半島において最初に全面発掘がなされた環濠集落である(釜山大学校博物館 1995)。無文土器前期末から中期前半にかけて営まれ、日本列島の弥生時代開始期に先行あるいは一部併行す

る時期であると考えられている(家根 1997:p.52・片岡 1999:p.18)。当遺跡では環濠内外より約 80 基の住居址が検出されており、住居址からは計 46 点、全体では 60 点近い石鏃が出土しているが、いずれも磨製の有茎式石鏃であった。また、磨製石剣は6点出土している。さらに、環濠西側の斜面上には3基の支石墓および石槨墓が検出されており、うち1号支石墓からは先端がわずかに欠損している長身の有茎式磨製石鏃(残存長 14.8 cm)が出土している。慶尚南道晋州大坪里遺跡(文化財研究所 1994・慶尚南道・慶尚大学校博物館 1999)でも有茎式磨製石鏃を主体とする石鏃が多数出土しており、当該期の朝鮮半島南部では、集落から出土する有茎式磨製石鏃が普遍的に認められる。また、破片資料が大多数を占めるものの有柄式磨製石剣をはじめとする磨製石剣の出土も、当該期の住居址や溝において普遍的に認められる。

朝鮮半島南部地域の墓制における武器形石器のありかたについても検討しておこう。先述した大坪里遺跡では、居住域と生産域(耕作地)の間に数十基の石棺墓が列状に連なって検出されている(慶尚南道・慶尚大学校博物館 1999)。そのうち4号石棺墓からは有茎式磨製石鏃が、10 号石棺からは丹塗磨研土器と有柄式磨製石剣が、それぞれ検出されている(図 14)。

無文土器時代の朝鮮半島における墓制を概観した後藤直によれば、全羅南道において調査された支石墓 658 基のうち確実に副葬品が認められるのは 82 基であり、そのうち実に 61 基に磨製石剣の副葬が認められるという(後藤 2000a:p.53)。また、支石墓上石除去後の主体部上の埋土、積石内などの主体部外、さらには主体部流入土中より石鏃が出土することが多く、一個体にならない破片が多いという。

また、日韓の墓制を比較するなかで、甲元眞之は朝鮮半島における支石墓の墓域構成を①5～6基で一群をなすもの、②集団墓と単独の支石墓が近接してみられるもの、③集団墓の中央部に列石で区画された単独の支石墓が営まれるもの、の3種に区分している(甲元 1999)。ただし、副葬品目のうえでは、区画された支石墓と集団墓との差異は認められないとする。一方、後藤直は、遼寧式銅剣を副葬する埋葬施設とともに有柄式磨製石剣をはじめとする副葬品がほとんどの埋葬施設に認められる全羅南道牛山里内牛遺跡(図 15)などを例にあげ、遼寧式(琵琶形)銅剣の副葬開始とともに地域の上位階層の墓域が形成されることを指摘した。

朝鮮半島南部地域の状況は、次のようにまとめることができよう。①集落では磨製石鏃を主体とする石鏃組成が認められ、磨製石剣の出土も一般的である。②支石墓をはじめと

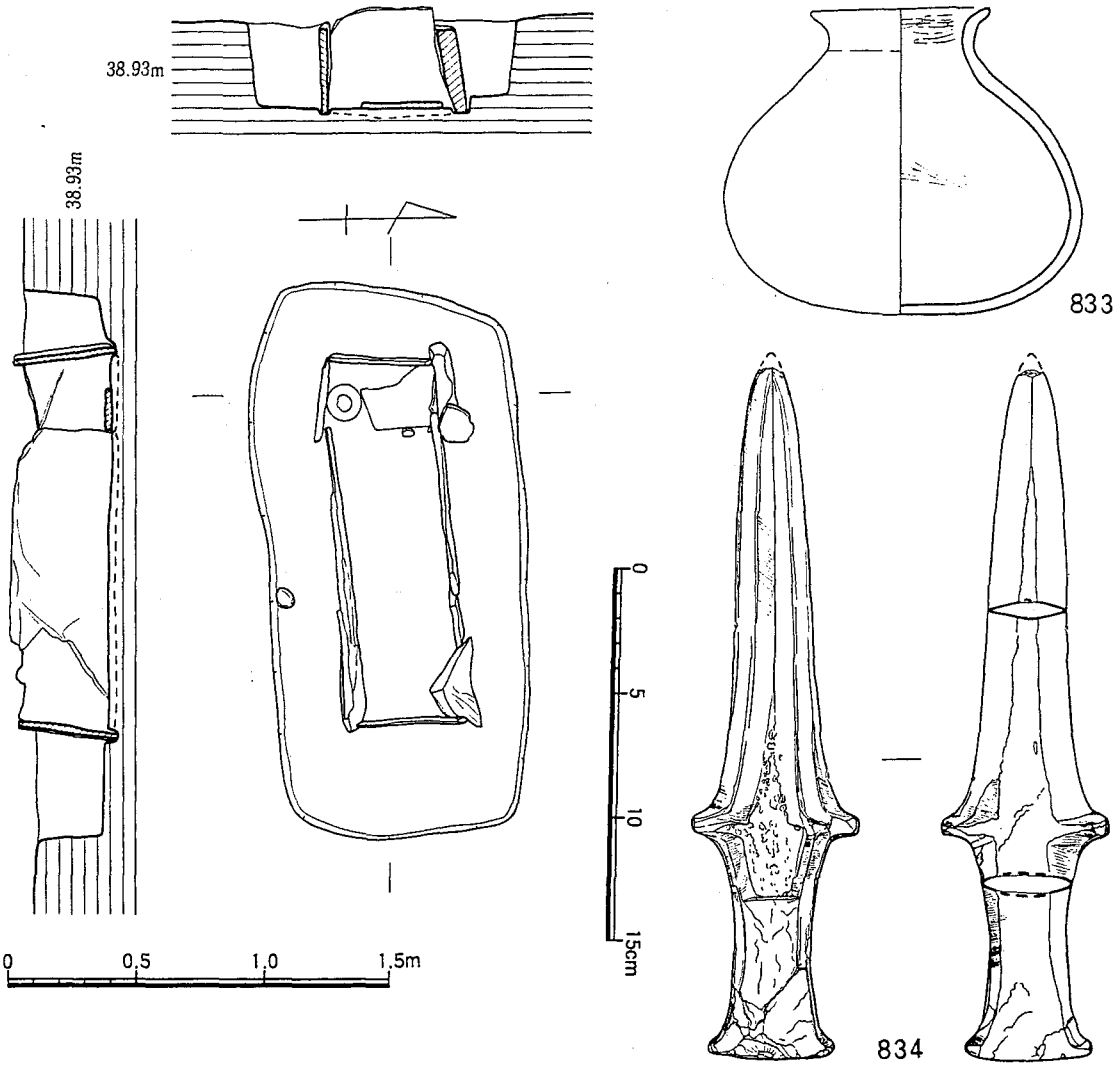


図14　韓国慶尚南道大坪里遺跡10号石棺と出土遺物(S＝1/30・S＝1/3)

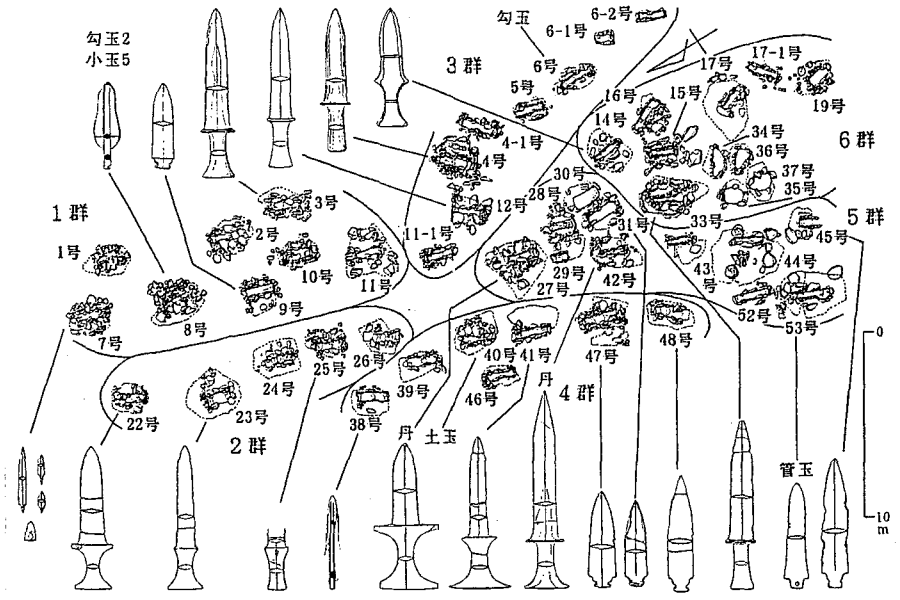


図15　韓国全羅南道牛山里内牛支石墓における墓域構成と副葬品(スケール不同)
※丹は丹塗磨研土器

する当該期の墓制における副葬品には、有柄式磨製石剣がもっとも普遍的であり、やや異なる出土状況で磨製石鏃も出土している。③副葬品が特定の埋葬施設に集中する様相は有柄式磨製石剣副葬に関しては認められず、遼寧式銅剣導入以降、副葬品目の組合せに階層的様相が顕在化しはじめる。

②列島における外来石製武器の普及

弥生時代早期・前期において、朝鮮半島に由来する磨製石鏃および磨製石剣は、北部九州地域を中心に数多く認められる。かつて、これらの石器は支石墓などの外来墓制より副葬品として出土することから、呪術的あるいは宝器的な道具であるとみなされ(森 1966:p.289)、非実用品であると考えられていた(佐原・金関 1975:p.51)。しかし、これらの石器のなかには、欠損や研ぎ直し例あるいは人骨への嵌入例がみられることから、殺傷用の利器として用いられたことは明らかである(橋口 1992・1995)。したがって、本稿でも、これらの外来石製武器には実用品としての機能が付加されていたということを前提に、列島における分布を分析していきたい。

<磨製石鏃>

それでは朝鮮半島の様相をふまえた上で、次に弥生時代開始期における武器形石器のありかたについて検討していくこととする。まず、新来の石器である磨製石鏃の普及度を列島各地の石鏃組成という観点から概観してみよう。図 16 は弥生時代早・前期の集落における石鏃の組成を併行期の朝鮮半島南部を含め、図示したものである。列島のなかで最も多くの磨製石鏃が集中する北部九州地域(図 17 上)においても図 16 をみるかぎり、主体となるのは在来の黒曜石を用いた打製石鏃であり、磨製石鏃の石鏃全体に占める比率は多くとも２割程度である。この傾向は、東にいくについてさらに強まり、瀬戸内地域では磨製石鏃が出土する遺跡であってもその比率は１割に満たず、多くの遺跡では磨製石鏃自体の出土例自体が認められないのである。ただし、例外的な地域として高知平野があげられる。図 17 をみてもわかるようには、九州島以東では例外的に磨製石鏃の出土が多く、石鏃全体に占める磨製石鏃の比率もきわめて高率である(出原 1999)。このことは四国島南岸の弥生文化開始を考えるうえで重要な事実である。

図 17 は弥生時代早期から前期前半に属する磨製石鏃の分布である。福岡平野をはじめとする北部九州地域に磨製石鏃の分布は集中し、北部九州地域以外の地域では高知平野にまとまった分布が認められる。しかし、埋葬施設から出土する磨製石鏃の分布は、図 17

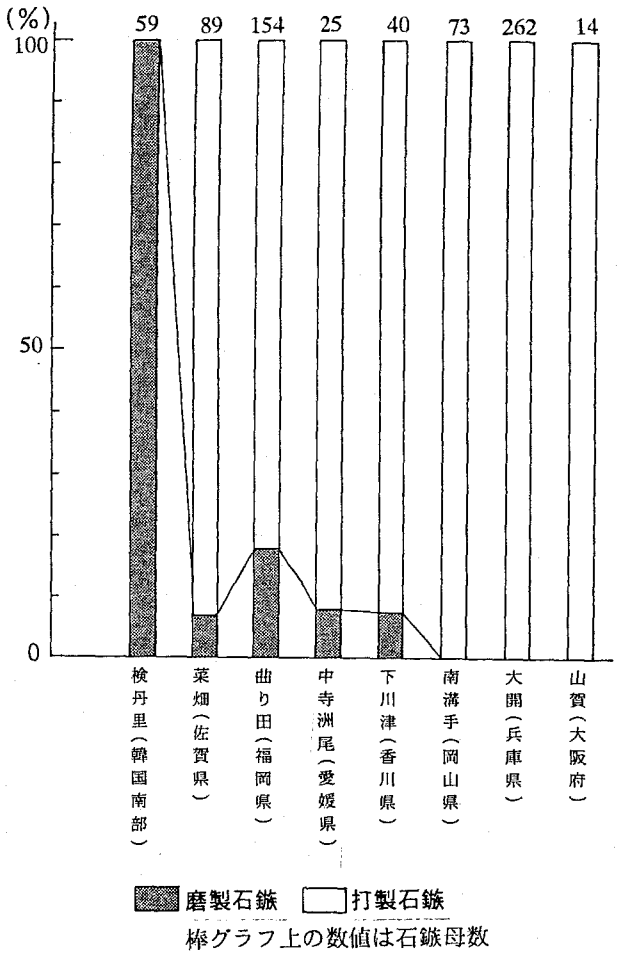
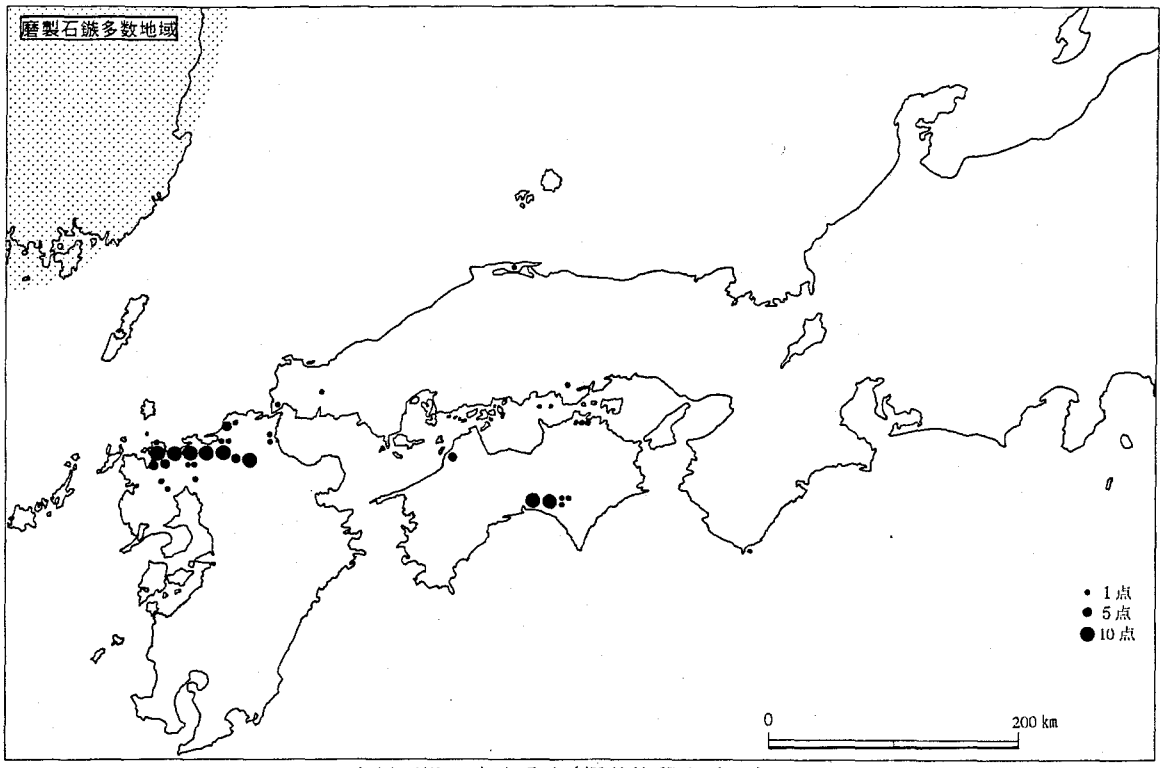
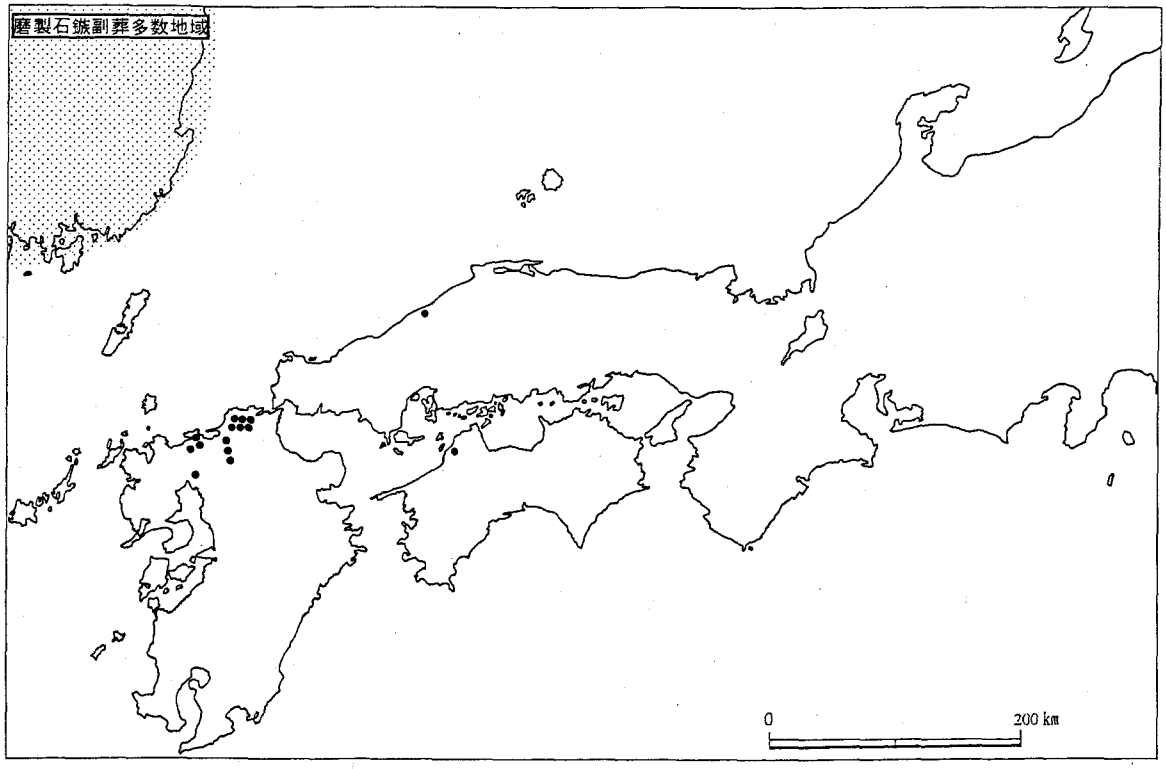


図16　弥生時代早期・前期における各地の石鏃組成



磨製石鏃の出土分布(埋葬施設を除く)



磨製石鏃出土埋葬施設の分布

図17　弥生時代早期・前期における石鏃の分布

をみるかぎり北部九州地域に集中しており、それ以外の地域では、わずかに周防灘に面した松山平野に散見される程度で、磨製石鏃全体の分布範囲に比べ、非常に限定されているのが現状である。

なお、大阪湾沿岸地域における磨製石鏃の出現については、瀬戸内海を経由しない経路での伝播が想定できる。詳細については第２章２節にて論じることにしたい。

<磨製石剣>

磨製石剣の分布を論じる前に弥生時代早期、前期に属する磨製石剣の分類を提示しておきたい。まず、朝鮮半島に数多く分布する有柄式磨製石剣があげられよう(図 18 —１)。有柄式磨製石剣は柄部と刃部を一体に表現した磨製石剣であり、内湾する柄部の形態が特徴である。ただし、刃部と柄部を一体につくりだした磨製石剣のなかには刃部と柄部の明確な区分をもたない磨製石剣(図 18 —４・５)も存在する。後者は、鉄剣形磨製石剣(高橋 1923)あるいは畿内式磨製尖頭器(中村 1980a)とも呼ばれ、弥生時代前期後半に出現する(長沼 1986)。また、その分布も前者とは大幅に異なり、北部九州地域でも遠賀川流域などに数多く認められる。北部九州地域以外では、近畿地方を中心に弥生時代中期以降、とくに盛行する。したがって、本節では朝鮮半島に一般的な形態である有柄式磨製石剣を有柄式磨製石剣Ａ類、後者を有柄式磨製石剣Ｂ類と区分し、ここでは前者のみを検討することとする。後者においては第３章において、詳しく論じることとする。

さらに図 18 —２や３のような有茎式磨製石剣が弥生時代早期、前期に存在する。ただし、島根県大社町原山遺跡出土例(図 18 —３)は、現状では完形の有茎式磨製石剣であるが、次のような点に注意が必要である。それは、刃部付近が密な研磨で仕上げられているのに対して、茎部は成形時の打裂面を残す粗い作りを残している点である。つまり、茎の造り出しが刃部に比べて非常に粗雑であることから、欠損した有柄式磨製石剣の下半部に打裂を加えて茎を作り出し、有茎式石剣として転用をはかった可能性が高い。図 18 —２についても転用品の可能性があり、弥生時代早期、前期に属する有茎式磨製石剣については、少なからず転用品が含まれているといえよう[1)]。

次に磨製石剣の分布状況について検討する。弥生時代早期・前期の磨製石剣についても先に検討した磨製石鏃と同様の分布傾向が認められる。それは、磨製石剣自体が分布する範囲に比べ、磨製石剣が埋葬施設より出土する地域は狭いという点である。弥生時代早期、前期に属する、もしくは帰属する可能性の強い磨製石剣は、兵庫県神戸市新方遺跡[2)]、愛知県豊橋市若松採集品(名古屋市博物館 1993:p.52)、長野県松本市石行遺跡(設楽 1995)な

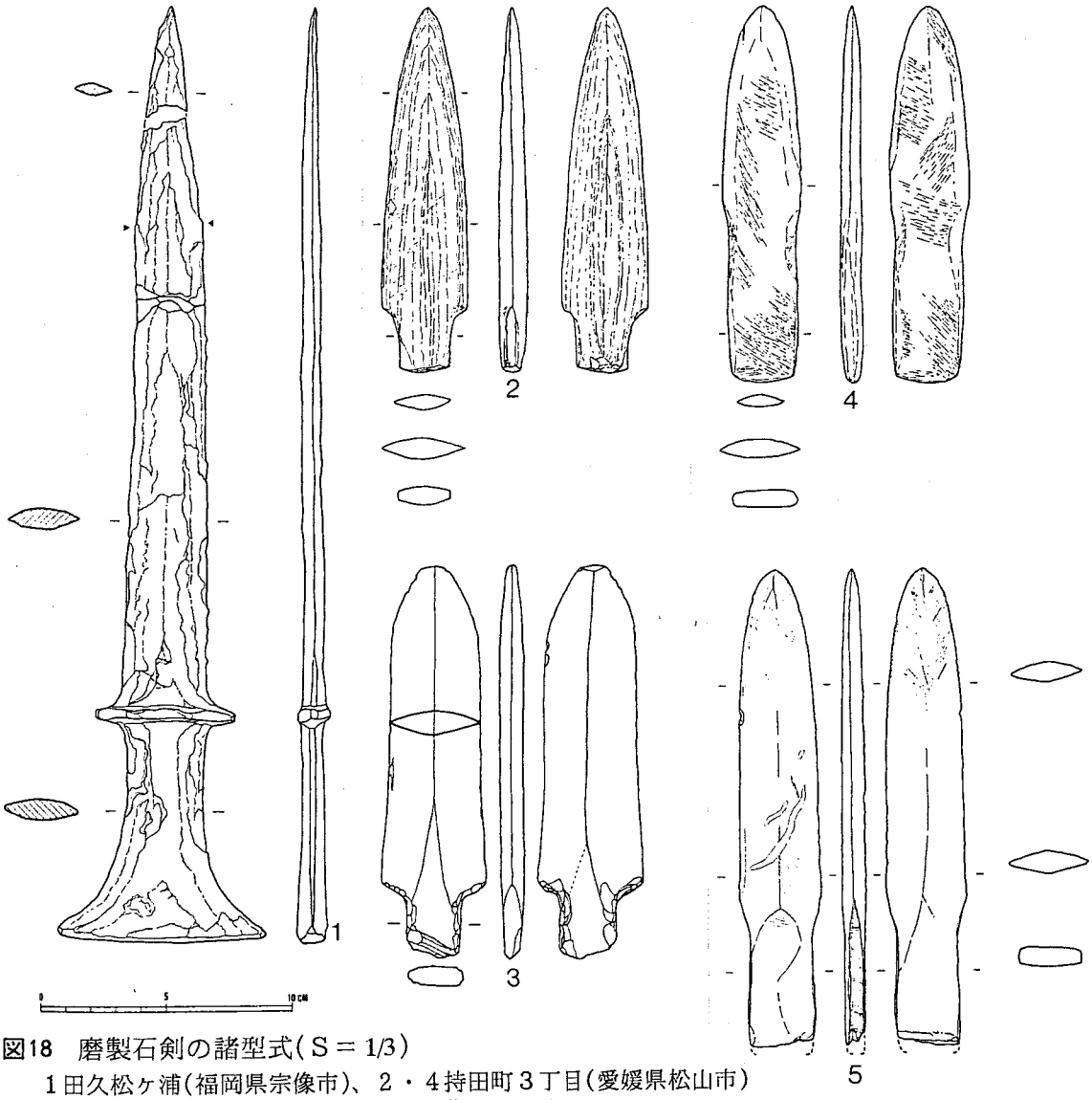


図18　磨製石剣の諸型式(S＝1/3)
1田久松ヶ浦(福岡県宗像市)、2・4持田町3丁目(愛媛県松山市)
3原山(島根県大社町)、5大友(福岡県呼子町)

表2　弥生時代早期・前期の磨製石剣出土埋葬施設

遺跡名	所在地	埋葬施設	共伴遺物	文献
稲留	福岡県志摩町	支石墓?	不明	埋蔵文化財研究会1992
宇田川原	福岡県福岡市	箱式石棺?	不明	柳田1983
田久松ヶ浦SK201	福岡県宗像市	土壙墓	小壺2・磨製石鏃3	宗像市教育委員会1999
田久松ヶ浦SK206	福岡県宗像市	礫石使用木棺墓	小壺1・磨製石鏃1	宗像市教育委員会1999
久原SK8	福岡県宗像市	木棺墓?	磨製石鏃4	宗像市教育委員会1999
永吉	佐賀県鳥栖市	土壙墓?	小壺1	小田1959
持田町3丁目SK32	愛媛県松山市	礫石使用木棺墓	管玉10	愛媛県埋蔵文化財調査センター1995
持田町3丁目SK34	愛媛県松山市	礫石使用木棺墓	なし	愛媛県埋蔵文化財調査センター1996
宝剣田	愛媛県松前町	支石墓?	不明	下條1994・十亀幸雄2001

ど遠く中部高地にまで、その分布が認められる。

一方、当該期の磨製石剣を副葬する埋葬施設は、日本列島において今のところ９例しか認められず(表２)、うち６例は北部九州地域に分布し、他は松山平野に３例認められるのみである。磨製石剣が最も普遍的な副葬品であった朝鮮半島南部の状況と比べると、非常に対照的な状況であるといえよう。この点について、甲元眞之は、韓国支石墓文化の要素で九州に根づくのは、唯一「小壺を副葬する」という習俗のみであると述べ、両地域の差異を強調している(甲元 1999:p.48)。

この問題を、本稿の課題である武器の普及という観点から述べるならば、次のように論じることができよう。北部九州地域では弥生時代早期、前期において少なからず磨製石剣が出土しており、磨製石剣という新来石器自体の受容は確かに認められる。しかし、その副葬例となるときわめて少数であり、同じく朝鮮半島を起源とする小壺副葬が200基近くの類例(原 1999:pp.35 ～ 42)があるのに比べて、非常に対照的である。さらに管玉副葬についても後に述べるように、徳島県にまでその分布は認められるのである。したがって、新来墓制に付随した要素のなかでも、武器の副葬はとくに受容されない習俗であると判断できるのである。磨製石剣の出土が一定量認められる北部九州地域においてさえ、磨製石剣の副葬習俗は受容しない。ここに道具としての受容がみられたとしても、その用法までは、受容しないという多層的な、受容者側の意図がうかがわれるのである。

(３)葬制における石製武器の展開

磨製石鏃と有柄式磨製石剣の分布を検討した結果、石製武器の分布に比べて、副葬品として採用される地域は狭いことが判明した。そこで次に弥生時代開始期の墓制における石製武器のありかたについて、在来の石器類もあわせて、検討していくこととする。

北部九州地域において弥生時代早・前期に属する埋葬施設は多数調査されているが、磨製石鏃や磨製石剣が確実に副葬されたとみられる例は先述したようにごくわずかであり、朝鮮半島における状況(後藤 2000a)と比べると、副葬品に採用される比率は大きく異なっている。

出土状況を問わなければ、磨製石鏃が検出された弥生時代早・前期の埋葬施設は、北部九州地域において十数基存在する。１つの埋葬施設から出土する鏃の数は６点を最多とし、２点の鏃が検出された埋葬施設が最も多い。また、小壺以外の副葬品、例えば管玉などと

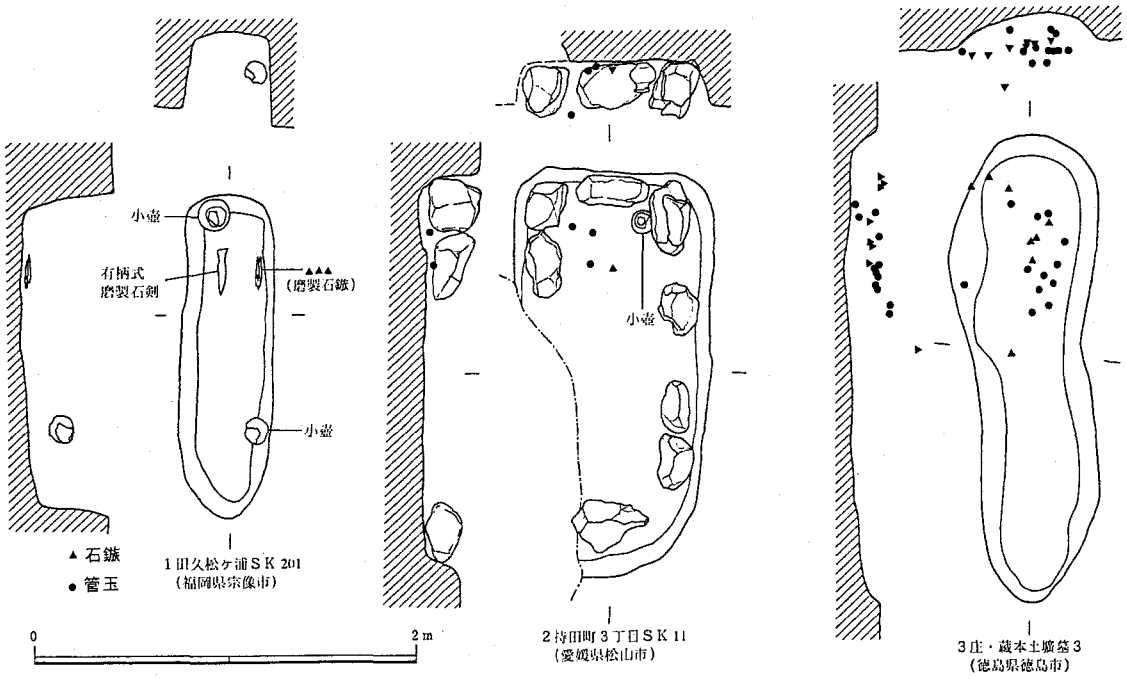


図19　弥生時代前期の石製武器出土埋葬施設(Ｓ＝1/40)

共伴する例は、ほとんど見当たらない。

埋葬施設に伴う例よりも集落出土のものの方がはるかに多いことから、これらの石製武器は実戦もしくは武器を所有・携帯することを目的に生産されていたと考えられる。もちろん、確実に副葬されたとみられる出土状況も認められることから(図 19 —1)、北部九州地域において初期の石製武器は実用され、時には朝鮮半島と同様、副葬品としても、選択されうる利器であったということができよう。ただし、ごく少数の石製武器が副葬された埋葬施設は、弥生時代前期末以降の青銅武器副葬墓とは異なり、墓群における位置や他の副葬品などにおいてきわだった卓越性は認められないことには注意が必要である。

例えば、近年弥生時代前期に属する良好な墓域が検出された福岡県宗像市田久松ヶ浦遺跡では次のような墓域構成がみられる。当遺跡は玄界灘に流れ込む釣川支流の西側丘陵斜面上に位置する(宗像市教育委員会 1999)。玄界灘より約 7 kmほど内陸に入り込んだ平野部に面する丘陵地に所在し、標高は 30 m前後である。当遺跡では弥生時代前期に属する埋葬施設が計 15 基検出されている。1 基の土器棺墓と 14 基の木棺墓および土壙墓で構成されており、土壙墓についても木棺墓である可能性が報告書では指摘されている。

埋葬施設は丘陵稜線上で直線距離 36 mの間に 13 基が切り合うことなくほぼ一列に並び、埋葬施設主軸は稜線方向と直交する(図 20)。有柄式磨製石剣と磨製石鏃が副葬された埋葬施設(SK201・SK206)が 2 基、磨製石鏃を副葬する埋葬施設が 3 基(SK210・SK203・SK218)存在するが、石製武器が副葬されたこれらの埋葬施設も、列状の埋葬施設のなかに位置する。また、墓壙規模等においても石製武器副葬墓のみが、とくに卓越している様相は認められない。

次に北部九州以東の地域について検討していたい。先述したように、磨製石剣や磨製石鏃が埋葬施設から出土する遺跡で最も東に位置するのは、四国島北西部松山平野に位置する愛媛県松山市持田町三丁目遺跡(図 21)である(愛媛県埋蔵文化財調査センター 1995)。当遺跡において注目されるのは、有茎式磨製石剣および磨製石鏃が副葬された埋葬施設が存在する一方で、5 基の埋葬施設において打製石鏃の出土が認められる点である。そのうち、欠損が認められるものが 2 点、完形で出土したものが 3 点あり、棺内から出土した石鏃はいずれも 1 点ずつであった。

当遺跡の墓域構成についても検討しておきたい。持田町 3 丁目遺跡では、弥生時代前期に属する木棺墓・土壙墓が 24 基、土器棺 11 基検出されている。木棺墓、土壙墓のほとん

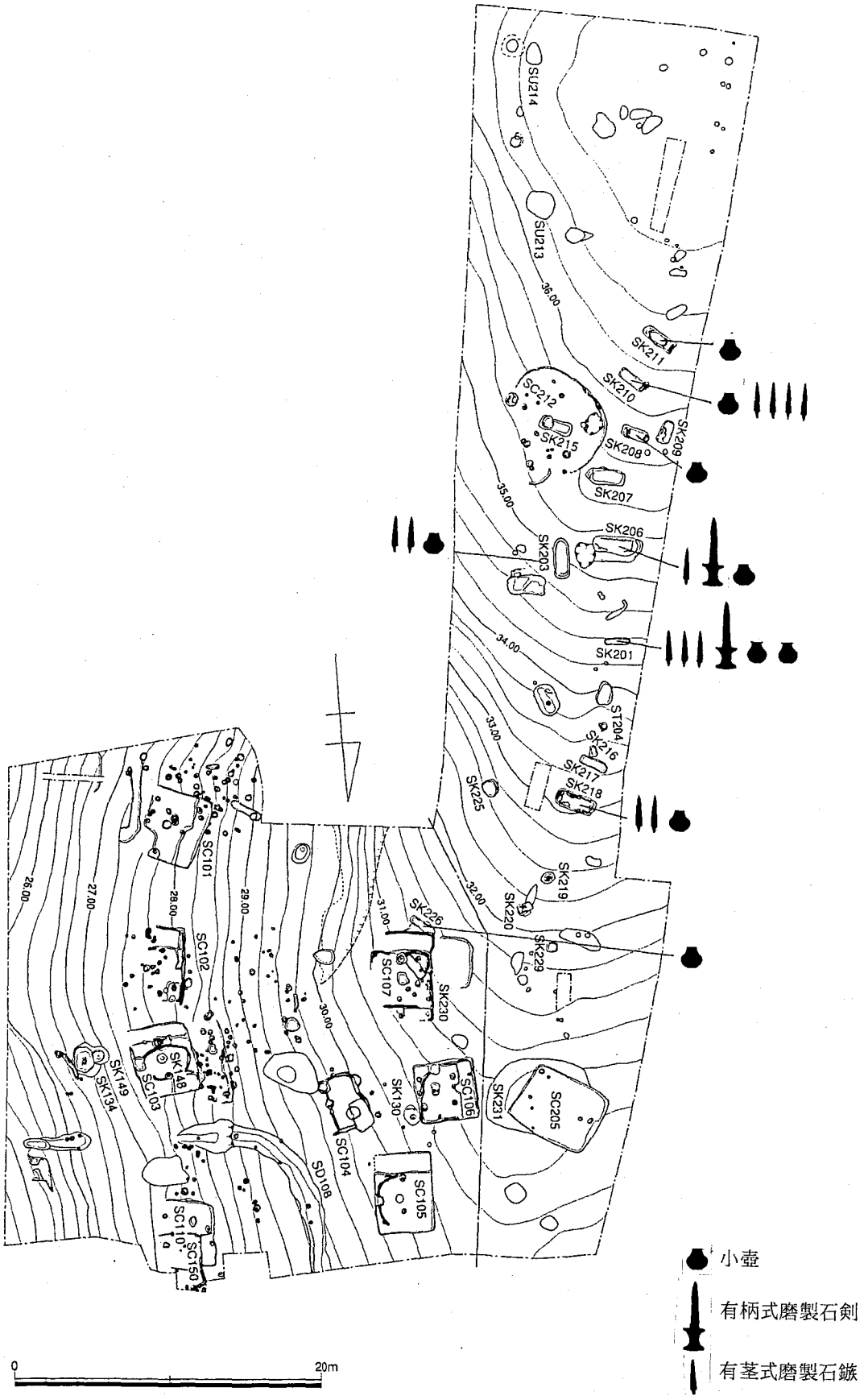


図20　田久松ヶ浦遺跡(福岡県宗像市)における墓域構成(S＝1/400)

どが自然堤防の主軸方向に沿って、埋葬施設主軸を北東—南西とし、およそ4列構成で列状配置を呈する。棺内からは、武器形石器の他に管玉、小壺が出土しており、その構成は図21に示したとおりである。図21からは武器形石器、管玉、小壺の副葬が分散傾向にあることがみてとれる。このような副葬品構成から、大久保徹也は四国地方の当該期の墓制に分散型副葬傾向を見いだしている(大久保 1999)。大久保の指摘は磨製石剣が副葬されたSK32やSK34にも該当し、先に検討した田久松ヶ浦遺跡同様、武器形石器副葬墓の卓越性は見いだすことは困難である。

中・四国地方において松山平野以外に、確実に埋葬施設に伴う弥生時代前期の磨製石剣、磨製石鏃は現状では認められない。ただし、島根県鹿島町堀部第1遺跡(鹿島町立歴史民俗資料館 1999)や徳島県徳島市庄・蔵本遺跡(徳島大学埋蔵文化財調査室 1998)、兵庫県神戸市新方遺跡(山口 2000)などでは、打製石鏃が埋葬施設より出土している。これらを含めて、中・四国地方から近畿地方では 20 基以上の埋葬施設より打製石鏃が出土しており(図22)、次のような特徴が指摘できよう。

まず、1埋葬施設あたりの石鏃検出数である。堀部第1遺跡 SX02 では 14 点、庄・蔵本遺跡土壙墓3では8点(図19—3)、そして新方遺跡3号埋葬施設では実に17点もの打製石鏃が1基の埋葬施設から出土している。図 22 から明らかなように当地域における他の石鏃出土埋葬施設は、基本的に1点しか石鏃は検出されないのに対して、以上の3埋葬施設における多数の打製石鏃出土は、北部九州地域のありかたと比べても非常に特異である。堀部第1遺跡は数十基の埋葬施設が、庄・蔵本遺跡では 20 基以上の埋葬施設が検出されているが、管玉と石鏃そして小壺以外の副葬品はほとんど認められない。また、両遺跡では礫石使用墓あるいは配石墓とも呼ばれる埋葬施設が数多くみられ(小林 1999)、各埋葬施設が列状に配置されている点でも共通している。ただし、新方遺跡では管玉および小壺ともに認められず、また配石等もみらない点で、堀部第1遺跡や庄・蔵本遺跡とは異なっている。

ただし、打製石鏃の出土状況は次のような点で共通している。まず、これら3埋葬施設における検出時の打製石鏃の向きは一定していないことから、鏃は箙(やがら)と分離した状況で棺内に納められていた可能性が高い。さらに、堀部第1遺跡 SX02 では 14 点中 11 点に、庄・蔵本遺跡土壙墓3では8点中6点に、新方遺跡3号埋葬施設では 17 点中9点に、それぞれ欠損が認められ、全体でも6割をこえる鏃に先端などの欠損がみられる。したがって、対象物は不明としても実際の使用をへてこれらの鏃は棺内に納められたことは

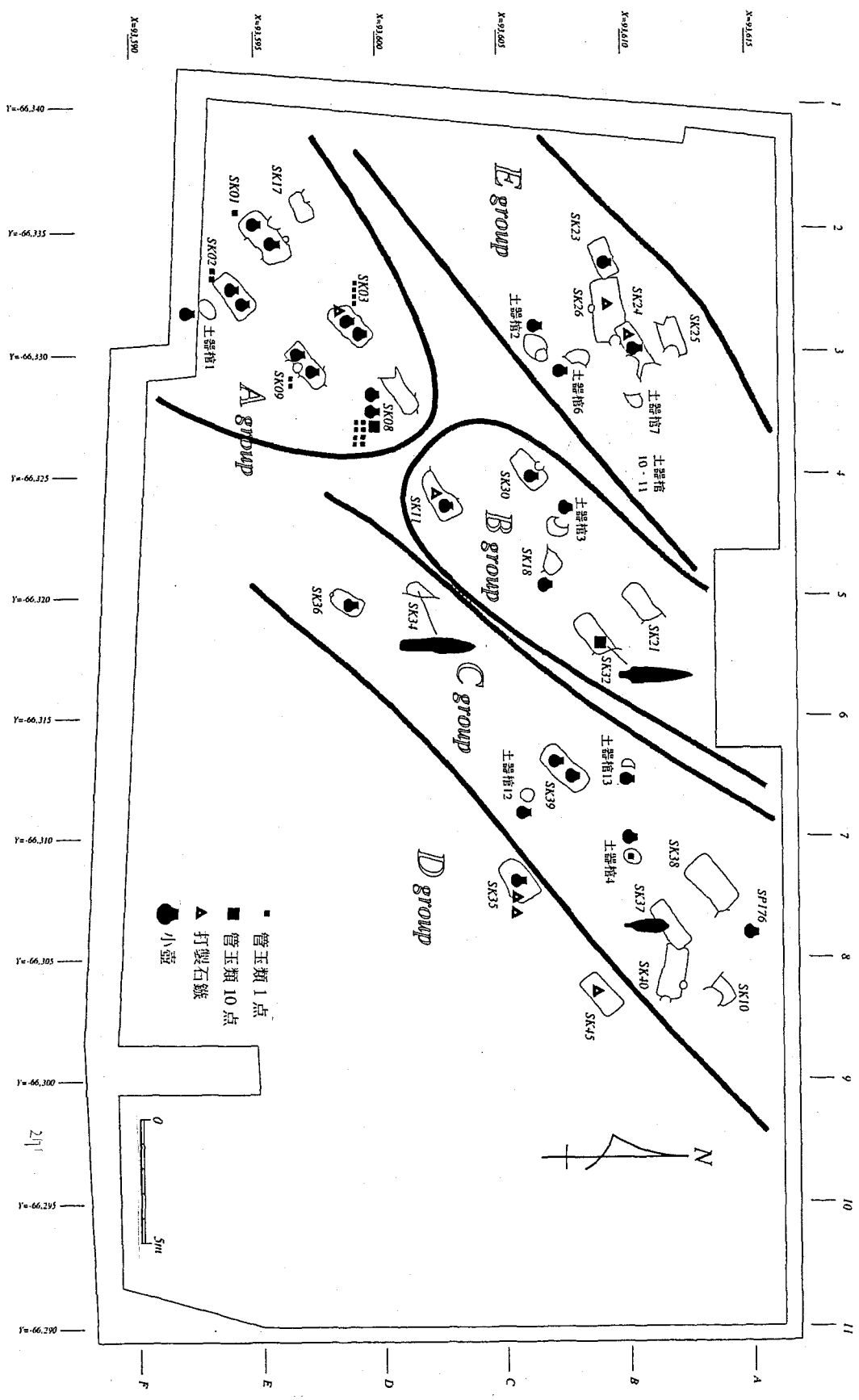


図21　持田町３丁目遺跡(愛媛県松山市)における墓域構成(S＝1/250)

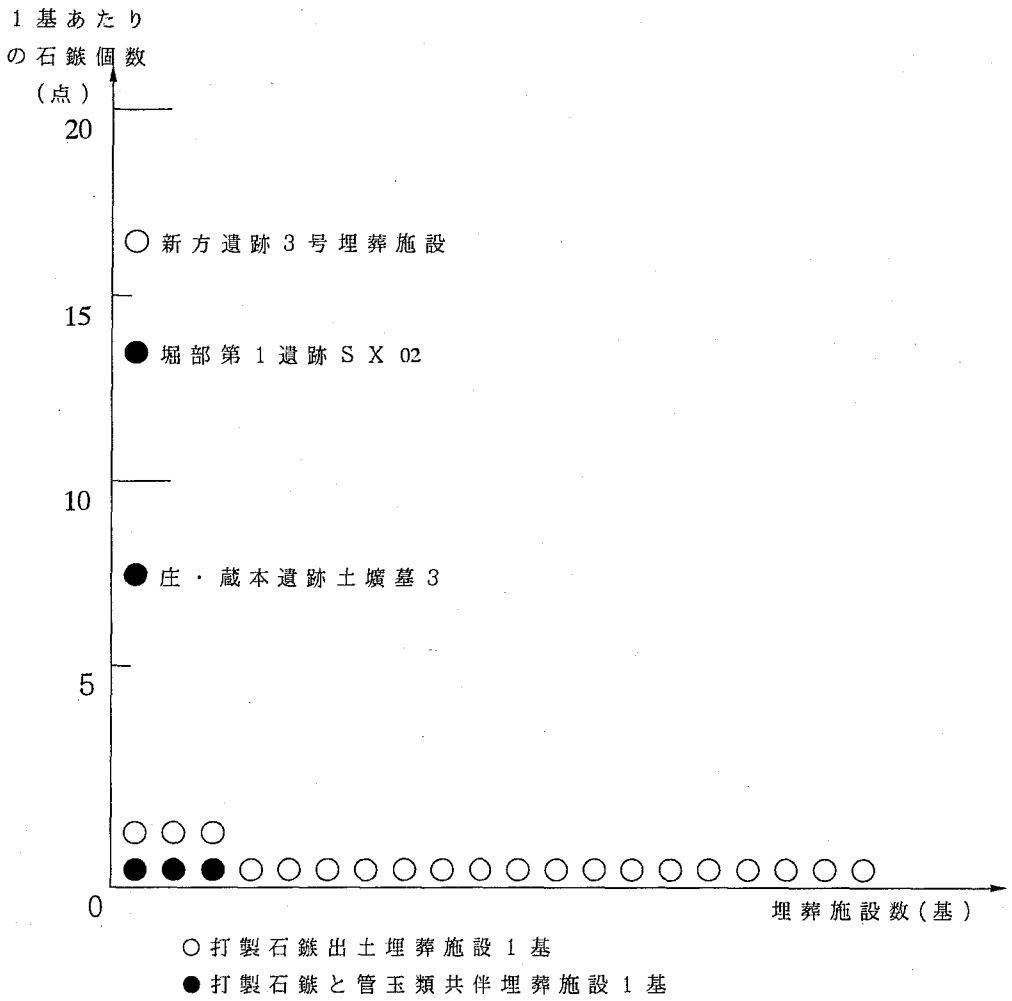


図22　中・四国および近畿地方における埋葬施設あたりの出土石鏃数

確実であろう。新方遺跡第３号埋葬施設のように１人の被葬者に 17 点もの打製石鏃が「射込まれている」状況に対して、松木武彦は通常の戦闘では生じえないとし、特殊な武器の使用形態を次のように想定している(松木 2000)。それは弓矢の使用が生前に行われたとすれば、刑罰や儀礼的殺人、死後ならば遺体加工儀礼の一種である可能性である。ただし、これらの石鏃は人体に打ち込まれたものではなく、欠損した石鏃を供献する儀礼を想定する見解もあり(行田 1985・瀬戸谷 1989)、葬制における弓矢使用過程の具体的な復元には困難が伴う。また、10 点以上の石鏃が１つの埋葬施設より出土するという現象は、弥生時代前期末以降もとくに日本海沿岸地域において、継続して認められる点にも注意が必要である。

ここで東西の状況を整理しておこう。在来の打製石鏃が埋葬施設から出土することは、北部九州地域でも認められることであるが、中・四国そして近畿地方では次の２点において異なっていた。まず、第１に１基の埋葬施設から 10 点をこえる複数の石鏃が出土する点である[3)]。

第２点は先にあげた堀部第１遺跡 SX02 や庄・蔵本遺跡土壙墓３のように複数打製石鏃出土の埋葬施設において、管玉などの装身具が共伴している点である。持田町３丁目遺跡の状況を変換点としてみるならば、それ以東でみられる打製石鏃が埋葬施設より出土する現象も、その淵源を朝鮮半島の磨製石鏃副葬習俗に求めることが可能であるかも知れない[4)]。しかし、そうであったとしても**①打製石鏃多量出土埋葬施設の顕在化、②管玉との共伴**という状況は、中・四国地方以東に顕著なありかたであり、とくに①の特徴は、前期末以降も継続して認められる地域的な現象である。したがって、出土状況などから北部九州地域とは異なる意味や目的がこういった石鏃には付加されていた可能性がうかがわれるのである。そもそも、磨製石鏃が墓制にもちこまれないということは、決定的な地域差といっても過言ではない。これらの情報のみで、この背後に存在したであろう葬制に関する思想や習俗にまで迫ることは困難である。しかし、打製石鏃大量出土埋葬施設に高い割合で管玉などの装身具が共伴している点は、「武器」あるいは狩猟具であった石鏃が墓制の上で、管玉などと同様に扱われていることを示しているのではないだろうか。また、磨製石鏃、磨製石剣の分布域より、それらの副葬習俗の広がりが狭く、また量的な面や共伴遺物の面で変化が認められることは、列島の農耕開始期において、在来社会が新来の武器に対して与えた社会的位置づけを考えるうえで重要である。

(4)結論

それでは、本節において論じた弥生時代開始期における武器習俗の広がりと前節において検討した実用利器類との比較しながら、当該期における外来武器の意味について、最後に考えてみたい。

まず、従来の研究史を今一度確認しておきたい。下條信行は北部九州地域における縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての両刃石斧の型式変化を追うことにより、柱状片刃石斧や扁平片刃石斧などの新しい機能を持った石斧が急速に普及するのに対し、縄文時代において、すでに存在した磨製両刃石斧は徐々に形態を変化させていったことを明らかにした(下條 1985・1991b・1994b)。このような資料状況をふまえたうえで、氏は「稲作の開始とともに縄紋時代に存在しなかったか存在性が希薄だった石器は大陸系(磨製石器)より新たな道具が導入されるが、縄紋時代に長年使用されてきた在来の道具は、いかに朝鮮半島に優れた同種機能の道具が発展していても、それを受容しなかったのである」(カッコ内筆者補)と述べており(下條 1995:p.62)、この見解は今日各地において広く支持されている。

しかしながら、本章における検討の結果、磨製石斧類の伝播は在来器種が存在した両刃石斧においても迅速で円滑な置換が、少なくとも中部瀬戸内地域および大阪湾沿岸地域では確認されたのである。それに対して、本節で明らかにしたように新来武器である磨製石鏃の採用比率は、高知平野などの例外を除けば北部九州地域を含め、きわめて低調であった。

つまり、在来器種の有無に関係なく新来の器種はその用途により、定着度が大きく異なり、弥生時代開始期において武器は、非定着的な利器であった。このことは、朝鮮半島において一般的にみられる磨製石鏃や磨製石剣の副葬習俗が(後藤 2000a)、北部九州地域においてもさえも例外的であり、以東の地域には松山平野を除くと、皆無に近い状況であるという点にも、如実にも示されているのである。

これまで弥生時代の開始すなわち農耕社会の形成は、土地や水利権をめぐり抗争を生じさせ、結果として武器を発展させたと考えられてきた。しかしながら、明らかに大陸系磨製石器に属する磨製石鏃および磨製石剣類の列島における定着は、磨製石斧などの新来工具に比べて、まったく円滑には普及しないのである。このような新来石器のありかたから、判断するならば、弥生時代開始期において新来の武器類は、必ずしも必要とされなかった

と考えられるのである。

ただし、以上の比較は、あくまで新来石器間のものである。そこで次章では、在来の武器形石器である打製石鏃の変遷について追究していくことにより、この問題をより明確に論じる手がかりを得ようと思う。

【注】

1)弥生時代前期に属する磨製石剣には、砂質部と泥質部が交互に重なって葉理をつくり縞状になっている堆積岩(西口 1986・梅崎 1999)を用いて製作されているものが多いという石材的な特徴もある。

2) 新方遺跡の詳細については、山口英正氏をはじめとする神戸市教育委員会の方々にご教示していただきました。記して感謝します。

3)ただし、北部九州地域でも、福岡県小郡市三国の鼻遺跡6号木棺墓では打製石鏃15点、磨製石鏃2点合計 17 点の石鏃が、床面にはりついたような状況出土しており、そのうち8点は、10 cm四方の範囲に集中して検出されている(小郡市教育委員会 1986)。打製石鏃を用いたこのような所作が、例外的ながら北部九州地域にも認められる。しかし、このような石鏃の多量出土は弥生時代前期後半以降当地域では継続しては認められず、今のところ例外的な様相としてしか、理解できない。

4) ただし、縄文時代晩期にも大阪府羽曳野市伊賀遺跡でみられるように打製石鏃が出土する埋葬施設は存在することから(高野 1990:p.16)、弥生時代前期の埋葬施設出土打製石鏃を、一律的に外的な習俗の影響でのみ考えることはできない。また「争いの犠牲者」として農耕社会開始期における抗争の存在を示す発見として評されることもあった新方遺跡などにおける多量の打製石鏃出土埋葬施設についても、弥生時代開始期における石鏃出土埋葬施設のありかたと比べると、特異な存在であることが判明した。少なくとも単純な犠牲者像をこれらの資料的状況から導き出すことは困難である。

第２章　弥生時代における石鏃の特質

前章では、主に弥生時代開始期において朝鮮半島からもたらされた武器の普及について論じた。ただし、従来の弥生時代における武器研究では、縄文時代以来の在来石器である打製石鏃が弥生時代になって大型化する過程を論じることにより、生産経済下における抗争の激化を論じられてきた。

したがって、本博士論文の課題である弥生時代の武器の歴史的意義を論じる上でも、弥生時代における打製石鏃の変遷を明らかにしたうえで、その社会的機能を解明することは欠くことのできない作業である。そこで本章では、まず、１節において従来指摘されきた石鏃の大型化現象を再検討し、次に２節において近畿地方の磨製石鏃を中心に各地の地域交流を論じることとする。

１　弥生時代における石鏃大型化の２つの画期

(１)はじめに

まず、本節では主に中部瀬戸内地域と大阪湾沿岸地域の石鏃を用いて、その機能的変遷を追究する。そして、石鏃重量を軸とした定量的分析をふまえたうえで、これまでの武器の発展過程に関する研究のなかで論じられてきた社会発展と武器の関係、そして地域間関係についても検討していく。

(２)研究史とその問題点

①研究史の概観

まずは弥生時代の石鏃に関する研究史をふりかえり、その問題点を指摘していこう。弥生時代が列島における農耕開始期であることが確定する以前、すでに鳥居龍蔵は関東地方と比べ畿内地域に石鏃が数多く認められることから、「石鏃が畿内の当時互の部落の間に闘争が盛んに行われた事」を推定している(鳥居 1917:p.256)。その後、藤森栄一は兵庫県川西市加茂遺跡表採の石器群に考察を加えるなかで、次のような指摘を行っている。藤森は、北部九州地域の青銅器および磨製石器のありかたを「儀具」的としたうえで、近畿地方の石鏃をはじめとする石製武器のありかたは「大和文化の質実な武力」を意味している

と述べたのである(藤森 1943:p.15)。

その後、佐原真は香川県詫間町紫雲出遺跡出土石器を分析するなかで、はじめて打製石鏃の定量的な分析を行った(佐原 1964)。その後も同様の分析を進め(佐原・田辺 1966、佐原 1975)、「畿内では前期新段階に石鏃の大型化がはじまっており、中期はじめ(II様式)に円基式、第III(古)様式に凸基無茎式が出現」すると述べるにいたったのである(佐原 1975:p.27)。そして、石鏃大型化の影響が中部瀬戸内地域へ遅れて波及し、これらの現象が高地性集落において顕著に認められることから、石製武器の発達と地域性の展開が畿内地域主導の政治的統合を示す考古学的事象であると結論づけたのである。また、石鏃が大型化しその機能が強化される要因として、佐原が防御用の革甲の発達、そして射る弓の大小の違いを想定している点には注意が必要である(佐原 1964:p.136)。

さらに、佐原はこれらの武器、武具が発展した原因を、稲作開始に伴い「土地・水争い・集団間の争い」が生じたためであるとの見解を示した(佐原 1975:p.27)。農業社会の開始と社会的抗争を結びつけるこの見解は、弥生時代を定義付ける重要な社会的要素として多くの概説書にも紹介され(佐原 1987:pp.291 ～ 298・田中 1991:p.43・寺沢 2000:p.132)、今日の弥生時代像を担う重要な考古学的事象として広く認知されている。

しかしながら、佐原の提起した畿内地域と中部瀬戸内地域との関係については、松木武彦により次のような異論が唱えられている(松木 1989)。松木は、①中部瀬戸内地域と畿内地域において打製石鏃の茎製作方法が異なること、②大型化が集中する範囲がそれぞれの地域にまとまる点、③中部瀬戸内地域では高地性集落が盛行する弥生時代中期後葉以前において、石鏃の大型化がみられること、の3点を指摘し、両地域の石鏃大型化は無関係にそれぞれ内的に発生したものであると結論づけたのである。また、松木によれば同様の現象は伊勢湾沿岸地域にも認められるという。ただし、伊勢湾沿岸地域を合わせた3地域の時期的関係については、畿内地域が最も早く大型化がすることを認めている。

さらに近年、神野恵は前章において分析した九州島北部の弥生時代早期以降に出現する長大な有茎式磨製石鏃に注目し、弥生時代開始期当初から北部九州地域では、外来の磨製石鏃を用いて石鏃の大型化がいち早く形成されると指摘した。そして、九州島以東では地理的傾斜に基づき、順次、石鏃が大型化するというモデルをうち立てたのである(神野 2000)。ただし、神野は「必ずしも全ての鏃が重くなる現象を指すものではなく、それ以前より重い鏃が出現する現象」を重量化(大型化)の基準として各地域の様相をまとめている点には注意が必要である(神野 2000：p.24)。この点は、佐原氏が重視した中期後半の総

体的な石鏃大型化とは、異なった事実関係を重視した大型化の設定であるといえよう[1)]。

②学史上の問題点

以上の研究史をふりかえる中で明らかなのは、研究の初期には中部瀬戸内地域と畿内地域に限定されていた石鏃の大型化という現象が、伊勢湾沿岸地域、さらに磨製石鏃を含めることにより北部九州地域にまで、その範囲を拡大して指摘されるに至っているという点であろう。また、石鏃大型化の開始時期についても九州地方から大阪湾沿岸地域にかけての地域については、弥生時代開始期に遡って認める見解が、神野により提示されているのである。しかし、このように状況の異なる地域に石鏃大型化の認定が拡大されるにつれて、次のような問題が生じている。それは、どのような資料的状況を石鏃の大型化として認定するかという点である。とくに大型化の開始を認定する場合には、厳密な資料の検討が必要なのではないだろうか。

例えば、松木武彦は 1989 年の論考で岡山県岡山市南方遺跡出土の石鏃をもちいて、岡山平野における石鏃大型化は佐原真が指摘した中期後葉ではなく、中期中葉まで遡るとの見解を示した(松木 1989:p.75)。しかしながら、報告書をみるかぎり当遺跡出土の石鏃資料はほとんどが包含層出土の資料であり(岡山市教育委員会 1971・岡山県教育委員会 1981)、時期的に不安定な資料であることは否めない。また、松木も述べているように当遺跡出土の石鏃のなかでも大型化した石鏃、すなわち全長3㎝をこえる石鏃は、ごくわずかにしかすぎないのである。

さらに松木は近年、弥生時代前期に遡る石鏃の大型化を、中部瀬戸内地域に認める見解を示しており(松木 1999:p.21)、神野恵も保留つきながらこの認識を支持している(神野 2000:p.22)。つまり、松木の石鏃大型化の認定基準も神野と同様、一部の資料にでも大型化が認められるならば、その地域の石鏃大型化を認める立場であるといえよう。先に紹介したように、神野も基本的に同様の立場から、各地の石鏃大型化を認定している。

したがって、先の松木による中部瀬戸内地域の分析と同様の疑問が、神野恵の北部九州地域に対する見解に対しても生じる。神野は北部九州地域における鏃の大型化(重量化)を認定するに際し、在来の打製石鏃が3ｇ内外なのに対し、朝鮮半島に由来する磨製石鏃の重量が5～ 10 ｇであることから、外来の磨製石鏃の出現をもって当地域における弥生時代開始期当初からの石鏃重量化を強調した(神野 2000:p.24)。しかしながら、前章に示したように当該期の石鏃全体にしめる磨製石鏃の比率は、北部九州地域において多くとも

20 %以下であり、ほとんどの遺跡では 10 %にも満たないのが実態である。さらに下條信行が指摘しているように、弥生時代前期末以降、肉厚で長大な磨製石鏃は急速に姿を消していく(下條 1977:p.196)。つまり、前期末以降の北部九州地域では、5～ 10 gに達するような石鏃は、磨製、打製を問わずほとんど見受けられないのが現状である。したがって、神野の強調する北部九州地域における石鏃の大型化という現象は、一貫して少数派であり、かつ非定着的であった外来系の有茎式磨製石鏃の存在でしか成立せず、それらの外来系磨製石鏃は当地域において弥生時代前期末以降、急速に消滅する型式なのである。

研究史をみるなかで明らかなのは、定量的な分析に基づく大型化の認定の必要性であろう。神野は重さと全長を基準とした分析を提示しているものの、鏃の組成としての大型品と小型品の構成については、ほとんど述べていない。そういった意味で摂津地域を対象とした東靖子の研究などは参考となろう(東 1996)。そこで、本節では佐原真が行った定量的な石鏃の重量分析を、各地の時期の明確な資料を対象に今一度進めていきたい。そして、石鏃の大型化の具体的動向を明らかにしたうえで、弥生時代における石鏃大型化とその背景について検討したいと思う。

(3)分析の手法

それでは、本節の分析手法をまず提示しておきたい。以下の分析では次の2点を重視した資料の選択を行っている。まず第1点は、対象資料の帰属時期の明確化である。佐原真が石鏃の定量的分析を行った 1960 年代では、発掘調査自体が今日と比べ、非常に少なかった。したがって、実際に佐原が分析した資料は、表採資料あるいは土器との共伴関係の不明瞭な資料がほとんどであった。しかし、佐原の分析から半世紀近くたった現在、列島の大規模開発の進展に伴い多くの遺跡が破壊され、その結果、当該期の考古資料も莫大な蓄積がなされている。とくに、遺構や包含層において土器と共伴する石鏃資料も多数報告されるようになった。そこで今回の分析では、報告書等において共伴する土器が明示されている石鏃に分析対象を限定し、帰属時期の厳密化をはかった。

第2点は、対象地域の限定である。松木武彦の研究によれば大阪湾沿岸地域でも、淀川下流域地域と大和川下流域とでは、石鏃の形態や製作技法などに違いがあることが指摘されている(松木 1989・1995)。また、今回の主要な分析対象である打製石鏃は、畿内地域では大阪府と奈良県の県境に位置する二上山で産出するサヌカイト、中部瀬戸内地域では

香川県中央部に位置する金山において産出するサヌカイトが、それぞれの地域で例外的な時期を除き排他的に用いられている。したがって、これらの産出地からの距離が、各集落で使用される石鏃の法量に影響を及ぼした可能性は十分想定できよう。そこで以下の分析では、対象地域を平野単位、最大でも 20 ～ 30 km程度の範囲に対象遺跡を限定して時期的な比較を行うこととする。

それでは以上の２点に留意して選択した資料を対象として、重量を中心に形態などの要素を加味した定量的な分析を行っていこう。対象地域としては、前章と同様、中部瀬戸内地域と近畿地方を中心とし、必要に応じて他地域のありかたについても述べることとする。

ちなみに本論では図１のように石鏃を分類する。まず下半部が凹形にすぼまる形態をもつ石鏃を凹基式とする。そして、下半部が直線もしくはわずかに突出する程度のものを平基式とする。平基式には松木武彦分類の凸基Ⅰ式を含む(松木 1989:p.70)。さらに最大幅が基部より先端部寄りに位置し、下半部が突出するものは凸基式とする。これは松木の凸基Ⅱ式にほぼ相当しよう(松木 1989:p.70)。最後に下半部が屈曲をもつ突出がみられるものを有茎式とする。

(４)弥生時代における石鏃の変遷

①近畿地方

<河内平野地域>

石鏃の変遷　今日の大阪府中央部、すなわち東大阪市、八尾市、大阪市南半の地域を対象とする。また、当地域は弥生時代において河内潟に面しており、大和川の下流域に位置していた。河内平野は大和盆地と並び、多くの弥生集落が形成される地域であり、打製石鏃についても詳細な検討がすでに行われている(松木 1989・管 1995)。そして、先に述べたようにサヌカイトを産出する二上山とは 10 ～ 20 km程の距離にあり、大和川を介することにより石材産出地との交通の利便性は実際の距離以上に高いといえよう。

図２は当地域における打製石鏃の重量および形態の時期的変遷を示したものである。まず、縄文時代晩期後半(滋賀里Ⅳ式)の例として、東大阪市鬼塚遺跡の資料を提示している(東大阪市文化財協会 1997)。当遺跡の石鏃は量的には少ないものの重量 1.0 ～ 1.2 ｇ、全長２㎝前後の打製石鏃が主体であった。また平面形態としては平基式のものが多い(図３―１・３・４)。ただし、図３―５のように伊勢湾沿岸地域に通用の五角形鏃との関連が

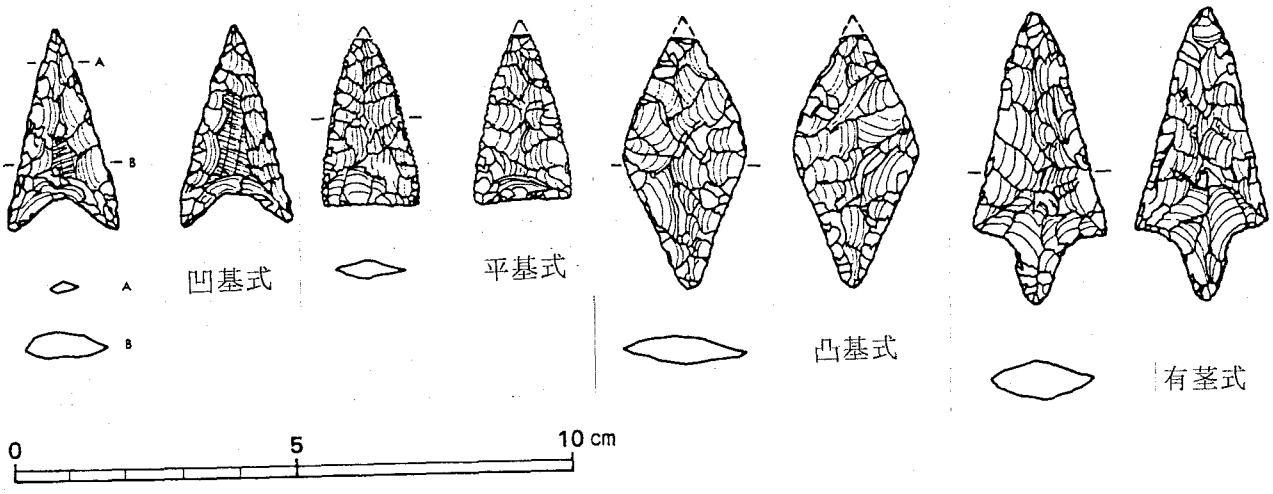


図1　打製石鏃の分類名称

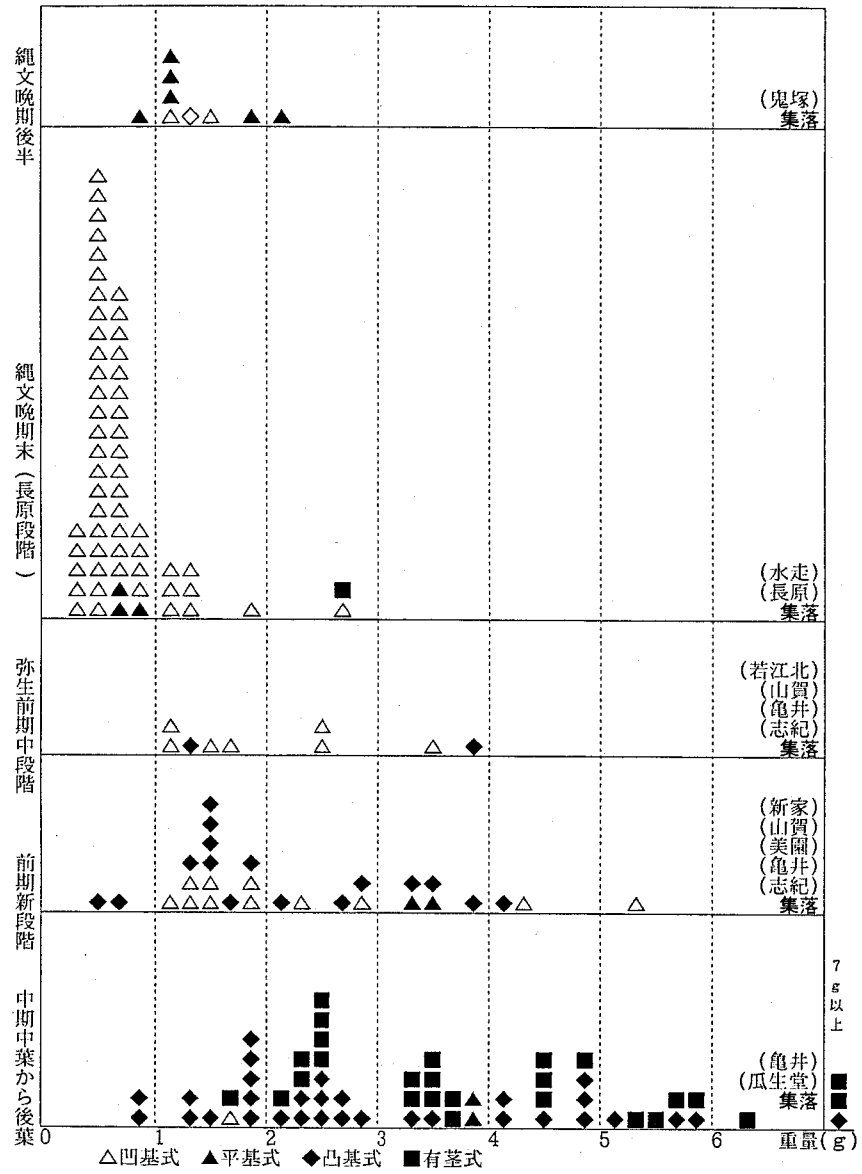


図２　河内平野における石鏃の重量と形態の変遷

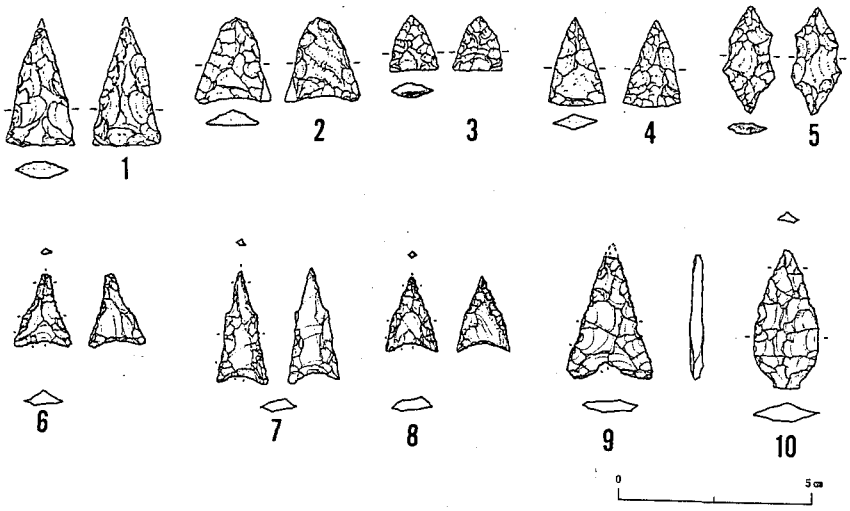


図３　河内平野における縄文時代晩期の打製石鏃（Ｓ＝ 1/2）
１～５鬼塚（東大阪市）　６～ 10 長原（大阪市）

うかがえるような凸基式石鏃が存在している。また蛍光X線分析によれば 10 %に満たないものの、金山産のサヌカイトの存在が指摘されている点にも注意が必要である(藁科・東村 1997:p.149)。

次に当地域における縄文文化の最末期である長原式段階の資料について検討していこう。ただし、多くの論者がすでに指摘しているように、長原式段階の土器は多くの場合、初期の弥生土器である遠賀川式土器と混在して出土することが多い。筆者も長原式土器と遠賀川式土器の併行する時期の存在を認める立場で以下の議論を進めたい。

さて、長原式段階に帰属する石鏃として今回分析の対象としたのは、大阪市長原遺跡(大阪市文化財協会 1982・1983)と東大阪市水走遺跡(東大阪市文化財協会ほか 1997・1998)の資料である。当期の石鏃は 0.5 gを中心に分布し、2 g以下におさまるようである(図3—6～10)。平面形態については、凹基式が圧倒的多数を占める。しかし、図3—10 のような有茎式打製石鏃が、この段階に存在することには注意が必要である。長原遺跡において長原式土器を主体としてわずかに弥生時代前期の土器を含む9層から出土した図3—10は、茎部を欠損するものの現状で全長3.7 cm、重量2.7 gと形態、法量ともに当期の打製石鏃のなかでは例外的な存在であった。もちろん、包含層出土の資料であるため、その取り扱いには慎重を期さなければならないであろう。当資料の位置付けについては、後に述べたい。また、長原遺跡出土の資料を対象とした蛍光X線分析によれば、ほとんどの打製石器石材は二上山産サヌカイトで占められている(大阪市文化財協会 1983:pp.213～214)。

縄文時代晩期において、長原式段階では例外的に大型の有茎式打製石鏃が認められるものの、圧倒的多数の石鏃は1 gに満たない軽量の凹基式あるいは平基式打製石鏃で占められる。それが、弥生時代前期中段階になると縄文時代晩期に属するものと比べ、重量が数倍にも増した打製石鏃の出現する様相が、八尾市山賀遺跡(大阪府教育委員会ほか 1991)や志紀遺跡(大阪府文化財調査研究センター 1998)から出土した打製石鏃の一部に認められるのである。

今回対象とした河内平野地域では、弥生時代前期初頭の土器と確実に伴う打製石鏃が不明瞭であり、中段階に伴う資料も少数であるため、図示したような状況が前期初頭にまで遡るのかについては現段階では不明といわざるをえない。しかし、資料の増加する前期新段階において、2 g以下の打製石鏃を主体としつつも、縄文時代晩期のものと比べて数倍の重さをもつ打製石鏃が、一定量存在するという状況が認められることは重要である。

0.5 g前後の石鏃が主体であった長原段階と比べると全体的に重量化しているようにも見受けられるが、晩期後半の鬼塚遺跡出土のものも含め、縄文時代と比較するならば、主体は相変わらず2g以下の石鏃であり、全体的な重量化は認められない。また、平面形態においても、図4—5のような凸基式打製石鏃が少なからず出現する。ただし、3g以上の石鏃の構成は必ずしも新出の凸基式打製石鏃のみで占められるのではなく、図4—6のような大型化した凹基式打製石鏃が、わずかながら認められるのも当期の特徴である。

ここで注意しておきたいのは、当地域における石器石材の大きな変動である。すでに述べたように縄文時代晩期の段階では近隣の二上山サヌカイトを用いた石器生産が、肉眼観察のみならず蛍光X線分析においても確認された。しかしながら、弥生時代前期初頭において、前章でも指摘したように金山産サヌカイトの比率が、河内平野地域においても急速に高まる様相が指摘されている(秋山 1999)。流通構造の変革は図5のような金山サヌカイト製素材剥片の集積がこの時期に限り、河内平野地域にも認められることからも明らかであろう(大阪府教育委員会 1996)。そして、弥生時代前期中段階以降、しだいに二上山サヌカイトはその比率を再び増加させていく。すなわち、前述したような弥生時代前期中段階から新段階にかけての石鏃の部分的な大型化、重量化は、二上山サヌカイトがそのシェアを回復させていく過程で生じた現象なのである。

次の段階すなわち中期前葉の状況は、確実な土器との共伴資料に恵まれないため、不明な点が多い。それが凹線文土器の盛行する中期後半段階になると石鏃の形態および重量は、大きく変化する。八尾市亀井遺跡、東大阪市瓜生堂遺跡出土の資料を中心に分析した図2からは、当期の打製石鏃が凸基式および有茎式主体(図6)となり、重量的にも2～3gと弥生時代前期の石鏃重量と比べて、主体となる石鏃が1g以上重くなっている様相がみてとれる。さらにこれまで全体の3割に満たなかった3g以上の石鏃が、5割をこえる比率を占めるようになる。

なお、河内平野における後期に属する石鏃の量的な抽出は現状では困難であった。ただし、河内平野の南方に位置する和泉市観音寺山遺跡では弥生時代後期に属する石鏃が多数出土している。全長4cm前後、重量3g前後のものが主体であり、ほとんどが有茎式石鏃で占められている(同志社大学歴史資料館 1999)。和泉地域におけるこのようなありかたを参照するならば、河内平野においても中期後葉と同様の状況が推定可能であろう。

以上の河内平野における縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての石鏃の変遷は次のようにまとめることができる。まず、弥生時代前期において一時的な二上山サヌカイト使用

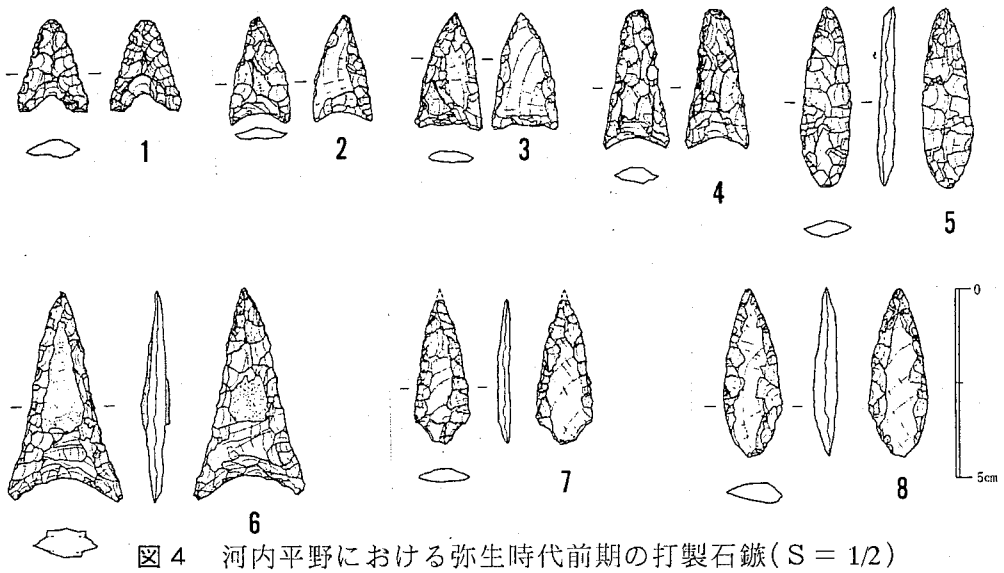


図４　河内平野における弥生時代前期の打製石鏃（Ｓ＝1/2）
１～６山賀（八尾市・東大阪市）　７・８美園（八尾市）
１～５前期中段階　６～８前期新段階

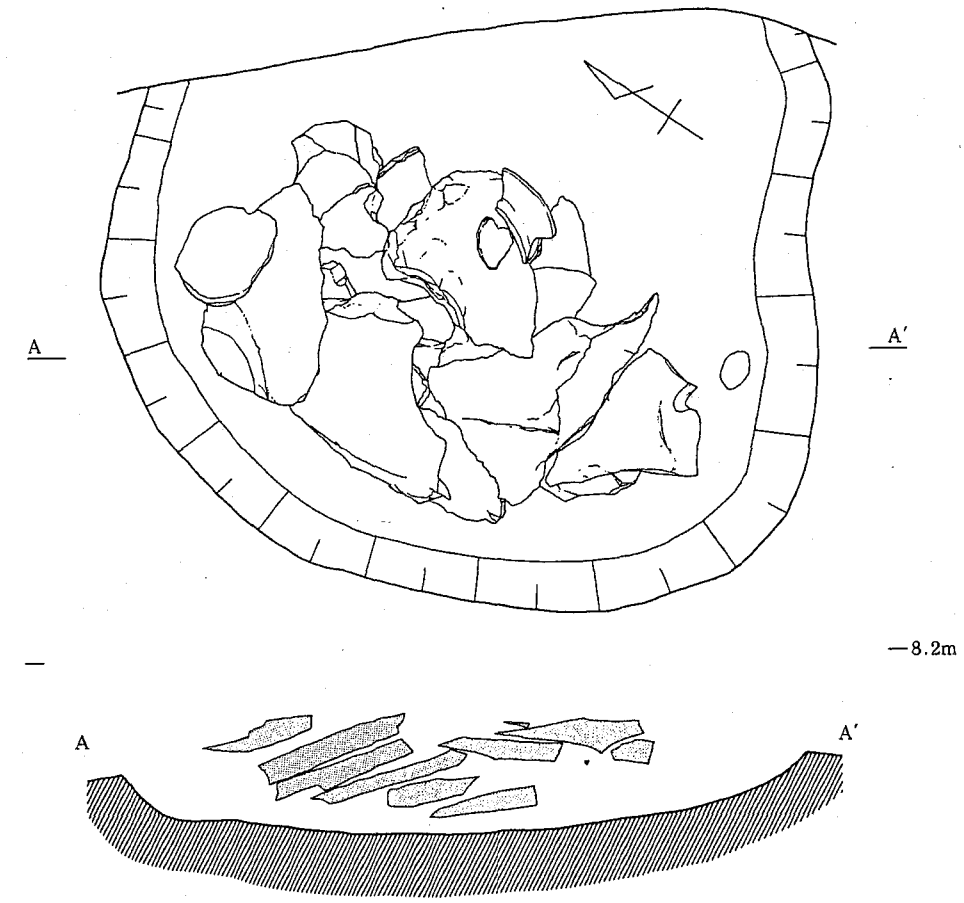


図５　大阪府八尾市田井中遺跡における弥生時代前期の
金山サヌカイト集積（Ｓ＝ 1/8）

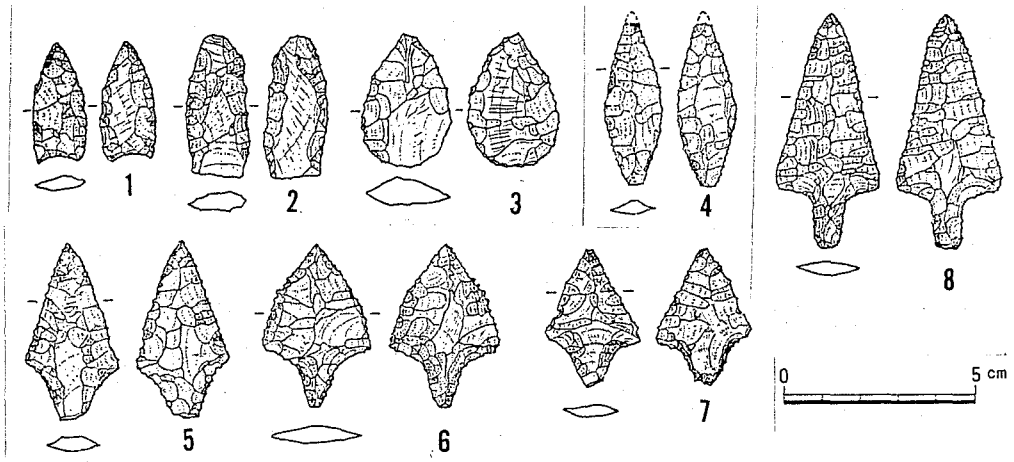


図６　河内平野における弥生時代中期の打製石鏃（Ｓ＝ 1/2）
１～８瓜生堂（東大阪市）

の断絶期をへて、図６に提示したような凸基式、平基式を主体とする石鏃群があらたに出現し、その一部には３ｇをこえる大型の打製石鏃が出現する。そして、中期前葉の様相は不明瞭ではあるが、中期後半になると、明らかに石鏃全体が総体的に大型化し、かつ３ｇ以上の鏃の比率も増加するのである。さらに中期後半には、明確な茎が造り出された有茎式が主体となるのも大きな特徴であった。

河内平野の状況に対するこれまでの見解　このような河内平野の様相に対して、松木武彦は佐原真の見解に自身の分析を加えて、次のように言及している(松木 1989:p.74)。まず、図２でも指摘した弥生時代前期新段階(前期末)に明瞭となる部分的な打製石鏃の大型化をもって、畿内地域における戦闘用石鏃(全長３㎝・重量２ｇ以上)の出現を規定した。そして、中期にいたり有茎式石鏃が出現すると述べ、中期後半には有茎式と凸基式が畿内地域の戦闘用石鏃の主体となることを指摘した。つまり、松木は前期末に在来の凹基式打製石鏃の法量を増すことにより重量化した戦闘用石鏃が出現し、その後形態的な変化をへて、次第にその比率を増していった結果、中期後葉には有茎式石鏃を中心とする大型石鏃が主体となる石鏃組成が成立したとの見解を示しているのである。

また、弥生時代前期末の戦闘用石鏃の発生は「この地方で内発的に生み出された」と述べていることから(松木 1989:p.74)、佐原真と同様、石鏃の大型化の要因に水稲耕作開始に伴う集団間の抗争発生を想定しているようである。一方、神野恵は弥生時代前期の石鏃大型化の要因を、大陸からの知識、技術の流入にともなう技術革新に求めている(神野 2000:p.26)。神野は外的な影響を受けて生じる弓の形態変化(松木 1984)に伴い、石鏃も大型化したと述べている。弓に関しての詳細な言及を本稿で行うことはできないが、神野があらたに提唱した外的要因に起因する大型化についても検討が必要であろう。

河内平野における縄文時代晩期から弥生時代中期までの石鏃重量変化(図２)の状況や、このような神野の見解をふまえるならば、河内平野における石鏃の変遷に対する松木の見解は、次の２点に関して検討の余地を残しているのではないだろうか。まず、松木と神野との間でその解釈の異なる**①弥生時代前期における一部の石鏃大型化の要因に対する解釈**、である。また、**②石鏃全体に占める比率や平面形態が異なる弥生時代前期の大型石鏃のありかたと中期後半における大型石鏃の関係**、についても問題となろう。②に関してはこれまで、抗争激化という内的現象を想定した上で、連続した石鏃大型化現象として捉えられてきたわけであるが、少なくとも中期前葉に属する石鏃の様相が不明瞭な河内平野の様相からでは、比率や形態の異なる両時期の大型石鏃に、連続性を認めるかどうかの判断は困

難なのである。

<亀岡盆地地域>

河内平野における石鏃の分析からは、２点の課題が抽出できた。これらの点に留意しつつ、次に石材産出地からより離れた地域の状況についても検討してみたい。京都府亀岡盆地は、二上山から北へ約 60 kmの位置に所在し、地理的にも北摂山系により河内平野と隔てられてる。当地域では、亀岡市太田遺跡において弥生時代前期新段階に属する全長 6.9 cm重量 3.0 ｇと長大で重い有茎式磨製石鏃(図 17 —２)が出土している(京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986)。また、図７—６のような有茎式打製石鏃も出土している。図７—６は残念ながら先端が欠損しているため全体の形状は不明であるが、刃部幅 1.4 cmに対し茎幅 0.8 cmと弥生時代中期後半に通用な近畿地方の打製石鏃(図６—８)と比べ刃部に対する茎幅が広く、現状で 3.4 cm以上と細身で非常に長く平行する刃部の形態も特徴的である。このような特徴は、当遺跡出土有茎式磨製石鏃(図 17 —２)の形態とはやや異なるものの、長身で刃部幅の狭いことを特徴とする朝鮮半島系の有茎式磨製石鏃の特徴を忠実に模倣した打製石鏃であると判断してまず間違いない。ちなみに、図７—６は現状で重量 2.6 ｇをはかる。

さらに先ほどの河内平野にみられたような(図４—６)大型の凹基式打製石鏃(図７—５)が出土していることにも注意が必要である。図７—５と前二者(図 17 —３・図７—６)は平面形こそ大きく異なるが、当遺跡では例外的に３ｇをこえる重量が想定できるいう点では、共通している(図８)。また、そういった観点で図７—５と６を比較すると、いずれも細長い形態をもち、機能的には貫通力を重視した作りである点も共通しているといえよう。

重量を重視するならば、他の凹基式打製石鏃と比べ２～３倍にも達する重量を有する図７—５の出現を、大陸系磨製石器の影響を受けて出現したとみられる図７—６との関連で理解することも可能ではないだろうか。最初に述べたように、亀岡盆地は大和川流域から離れたいわゆる口丹波地域に位置する。松木武彦が指摘しているように、多くの大型打製石鏃は大和川流域に集中しており(松木 1989・1995)、二上山から遠く離れた、いわば周辺地域に位置する亀岡盆地において、すでに弥生時代前期段階において一部に大型石鏃が認められることは、佐原や松木が想定した内的発展としての石鏃大型化では、説明困難な現象であるといえよう。ちなみに当地域は日本海を介した外来文化の伝播において重要な役割を果たしと考えられるが、この詳細については次節において詳しく検討したい。

また、当地域では弥生時代中期以降、断片的な資料ではあるが、磨製石鏃を主体とする

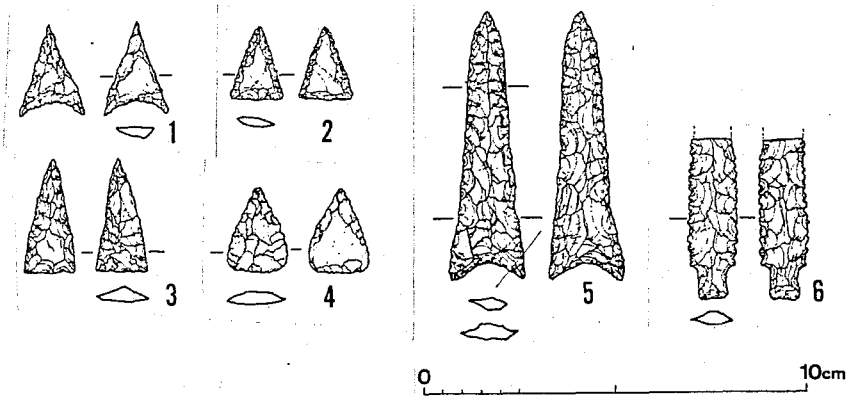


図７　亀岡盆地における弥生時代前期の打製石鏃（Ｓ＝ 1/2）
１～６太田遺跡（亀岡市）

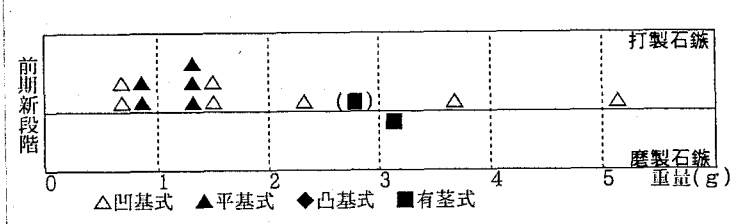


図８　亀岡市太田遺跡の石鏃重量比較

石鏃の大型化が亀岡市千代田遺跡や八木町池上遺跡において認められる[2)]。

さて、畿内周辺部に位置し、石材産出地からも遠く離れた亀岡盆地を検討することにより、河内平野の状況を分析する過程で生じた**①弥生時代前期における一部の石鏃大型化の要因**、を論じるうえで重量な論点が浮かび上がってきた。それは、外来の石器である図17 —2のような有茎式磨製石鏃と、在来の打製石鏃との関係である。佐原や松木は内発的な石鏃の大型化をこれまで想定してきたが、亀岡盆地における以上の状況を率直に受け止めるならば、石鏃の大型化は神野恵が指摘したように大陸系磨製石器を含む外来文化との関連を含めて、検討していく必要があるのではないだろうか。

②中部瀬戸内地域

次に中部瀬戸内地域の状況について検討していく。当地域は近畿地方より西方に位置するため、大陸系磨製石器である有茎式磨製石鏃が、弥生時代前期前半に属する類例が皆無である近畿地方と比べると少ないながらも数点の出土が認められるということは、すでに前章で論じたとおりである。そこで亀岡盆地地域における分析において浮かび上がってきた石鏃大型化における有茎式磨製石鏃の影響にも注意しながら、以下の分析を進めていきたい。

<岡山平野>

まずは、岡山平野における縄文時代晩期から弥生時代後期の石鏃の変遷について検討する。岡山平野は中国山地から瀬戸内海へと流れる高梁川と旭川に挟まれた東西約 20 kmの範囲であり、今日の岡山市、総社市を中心とする地域である。また、石材産出地である四国島の金山とは、児島および瀬戸内海をはさみ直線距離で約 40 km離れている。

図9は岡山平野における打製石鏃の重量と形態の時期ごとの変遷を示したものである。まず、縄文時代晩期では総社市窪木遺跡、南溝手遺跡、岡山市百間川沢田遺跡において次のような状況が認められる。重量は 0.8 gを中心に分布し、形態的には凹基式および平基式がほぼ同じ比率で認められる。全長は2.0 cm前後が中心であった。

次の弥生時代前期になると、先述の3遺跡でも次のような様相が認められる。基本的に前段階の縄文時代晩期同様、重量は 0.8 gを中心に分布する。ただし、形態については凹基式が主体となり、ごく少数であるが有茎式打製石鏃(図 10 — 11)が認められるのである。縄文時代晩期と比べ当期の資料は母数が倍以上増していることから、同様に比較するのはやや危険ではあるが、図 10 — 10 のような 3 gをこえる平基式打製石鏃が存在する点には

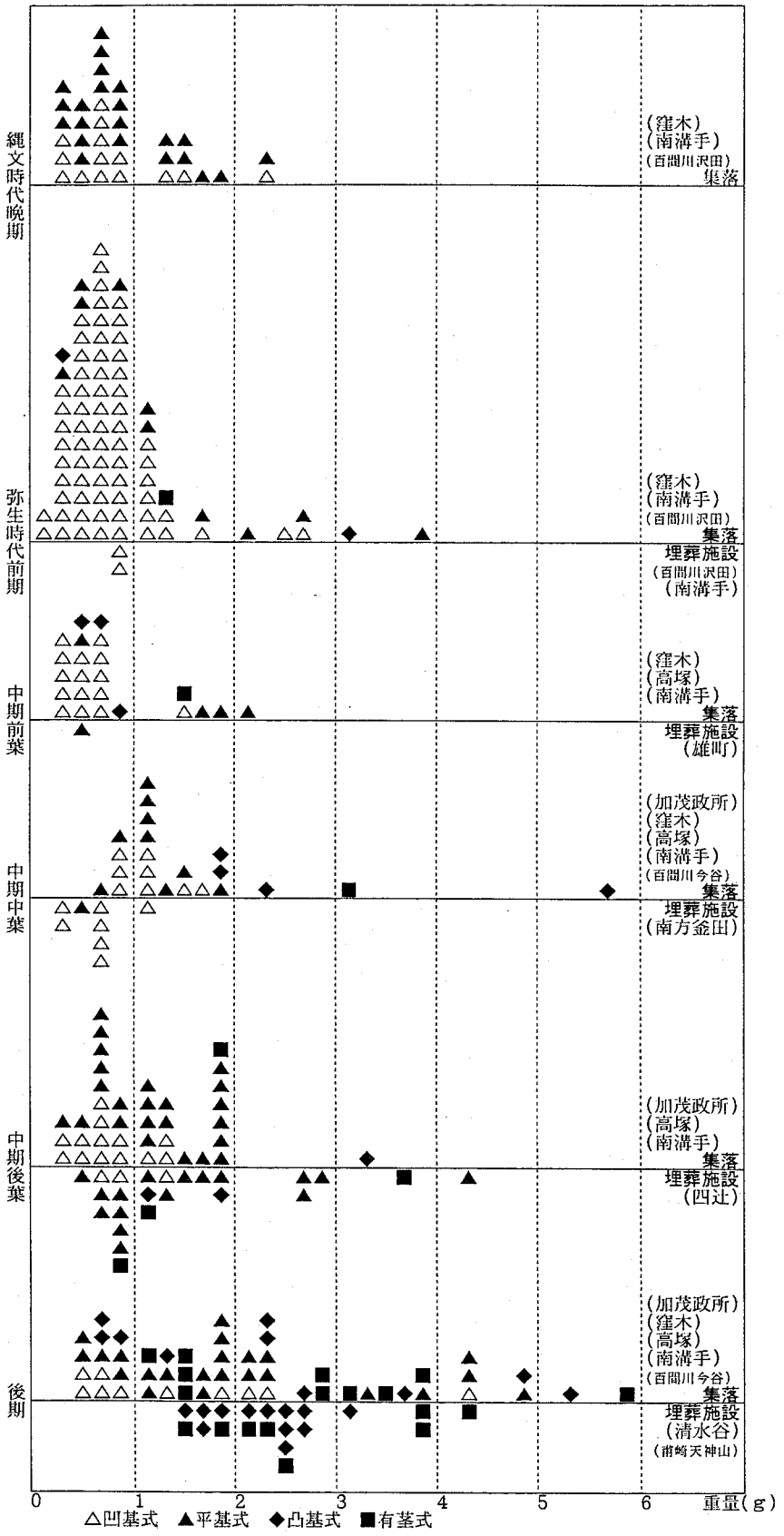


図9　岡山平野における石鏃の重量と形態の変遷

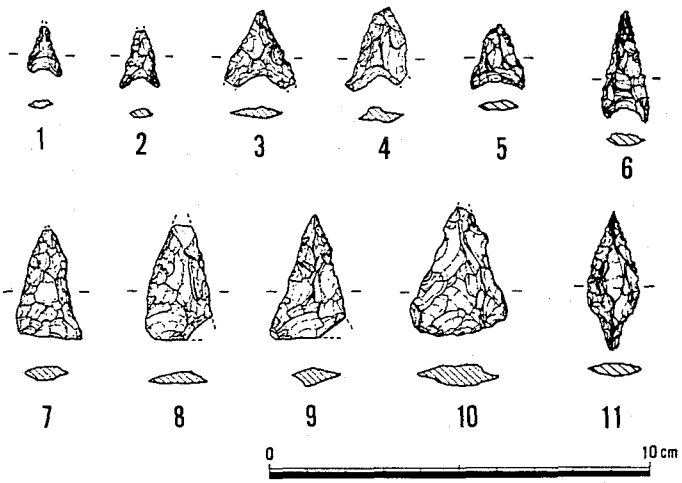


図10　岡山平野における弥生時代前期の打製石鏃(S＝1/2)
1～4・7～10南溝手(総社市)　5・6・11百間川沢田(岡山市)

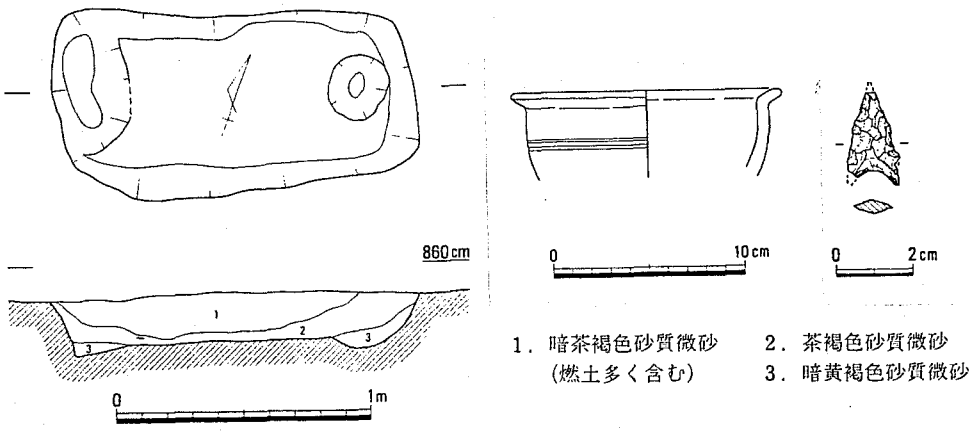


図11　岡山県総社市南溝手遺跡出土の埋葬施設(S＝1/30)と
出土土器(S＝1/4)および打製石鏃(S＝1/2)

注意が必要である。また、総社市南溝手遺跡からは、弥生時代前期に属するとみられる埋葬施設より、図11のような凹基式打製石鏃が出土している。全長2.5㎝、重量0.8ｇとこの段階の標準的な法量をもつ。中期以降も埋葬施設出土の打製石鏃は、少なからず認められるが、後期の埋葬施設を除き、基本的に各時期の標準的な法量のものが出土しており、特殊性は認められない(図９)。

中期前葉および中期中葉に石鏃の法量および形態に、きわだった変化は認められない。基本的に１ｇ前後が中心であり、中期後葉にむけて２ｇ前後の石鏃が徐々に増加していく。また、平面形についても、凹基式、平基式が中心であり、凸基式、有茎式は全体の２割程度である。

中期後葉においても、前述のありかたは基本的に変わらず、１ｇ前後に重量の分布の中心があり、形態的にも平基式・凹基式が９割以上を占める。ただし、２ｇ前後の石鏃の増加が認められる。さらに、岡山平野の南部に位置する児島地域の高地性集落に、岡山平野に先行して変化の兆しがあることが、宇垣匡雅により指摘されている(宇垣 1999:p.93)。例えば、当該期の高地性集落である岡山県倉敷市城遺跡では２ｇ以上の石鏃が４割以上を占める石鏃組成が認められる(岡山県教育委員会ほか 1977)。次に述べる岡山平野の後期の石鏃に先行するような状況が、近接する児島地域の高地性集落では、すでに弥生時代中期後葉の段階で認められることには注意が必要である。

弥生時代後期になると、岡山平野においても状況は一変する。図９から明らかなように３ｇをこえるような大型品が増加し、全体としても２ｇ以上のものが半数近くを占めるようになる。また、形態的にも有茎式および凸基式が４割近くを占めるのである。

以上の岡山平野の状況をまとめると、**①弥生時代前期になると、全体の中では数％とわずかではあるが３ｇ以上の鏃が出現し、また有茎式、凸基式もごくわずかに認められる、②この傾向は、弥生時代中期中葉までほとんど変化しない、③むしろ、弥生時代後期に大きな変化が生じる。すなわち３ｇ以上の石鏃が 25 ％を占めるようになり、凸基式・有茎式の石鏃も４割近くを占める、**となる。

ここで注意が必要なのは、②の中期前葉から中葉の状況である。松木武彦は岡山市南方遺跡の資料を根拠に、佐原真が弥生時代中期後葉としていた(佐原 1964)当地域の石鏃大型化を弥生時代中期中葉に遡らせた(松木 1989:p.75)。しかしながら、図９からは弥生時代前期の段階でごく一部に石鏃の大型化が認められる一方で、それ以後の各時期には漸移的な変化しか認められず、松木が提唱したような大きな画期を中期中葉に設定するのは困

難である。むしろ③の後期における変化がきわめて明確であることが、図９からは読みとれよう。

また、先に検討した河内平野地域と同様に、①前期における部分的な大型化、がみいだされたことも重要である。ごく一部ではあるが、弥生時代前期に属する有茎式打製石鏃も存在した。ちなみに当地域では図 23 —1のような長大な有茎式磨製石鏃が出土している。ただし岡山平野における石鏃大型化の比率は、河内平野のそれに比べるとはるかに少なく、磨製石鏃の出土も含めて亀岡盆地のそれに類似しているといえよう。両地域の共通性の背景には、亀岡盆地、岡山平野ともに石材産出地より 50 km前後離れた遠隔地であるという地理的条件が影響している可能性が高い。

<讃岐平野地域>

弥生時代前期におけるこの問題をさらに詳しく検討するために、次に対岸の讃岐平野の様相について検討していきたい。坂出市に所在するサヌカイト原産地である金山を中心に東西約 30 kmの範囲に所在する遺跡を今回は分析の対象とする。したがって、分析する遺跡は原産地から最大で 15 km程度離れていることになる。

当地域は、残念ながら中期以降の遺構に明瞭に伴う石鏃は量的に不足している。一方で、近年、森下英治や信里芳紀らによって、精緻な弥生時代前期土器編年が提唱され(信里 2000b・森下 1998・2000・森下・信里 1998)、また遺構に伴う石鏃の量的な蓄積も進んでいる。そこで讃岐平野の縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての石鏃の重量と形態変遷を彼らの編年案を参考にして段階設定したのが図 12 である。なお、以下に述べる資料は基本的に金山サヌカイト製であると考えられる。

まず、縄文時代晩期前半の資料として善通寺市の永井遺跡の資料と示した。また、縄文時代晩期末の資料としては、善通寺市の龍川五条遺跡と高松市の林・坊城遺跡の資料を用いている。晩期末の段階で図 13 —11 のような凸基式打製石鏃が存在することはやや気になるところではあるが、基本的に重量１ｇ内外、全長２cm程度の平基式、凹基式石鏃が主体であり、なかには図 13 —6 や 12 のように全長３～４cmで重量も３ｇ近い個体も認められる。それが弥生時代前期初頭である坂出市下川津遺跡では、次のような変化が認められた。まず、注目されるのは図 23 —3や4のような有茎式磨製石鏃が、讃岐平野では唯一出土しているのである。完形品である図23 —3は結晶片岩製で、全長 5.6 cm刃部幅 1.0 cm と細身ながら重量 3.9 ｇと在来打製石鏃の数倍の重さをもつ。また、茎部を欠く図 23 —4も結晶片岩製であり、現状で全長 4.8 cm重量 4.7 ｇである。前章で述べているように結

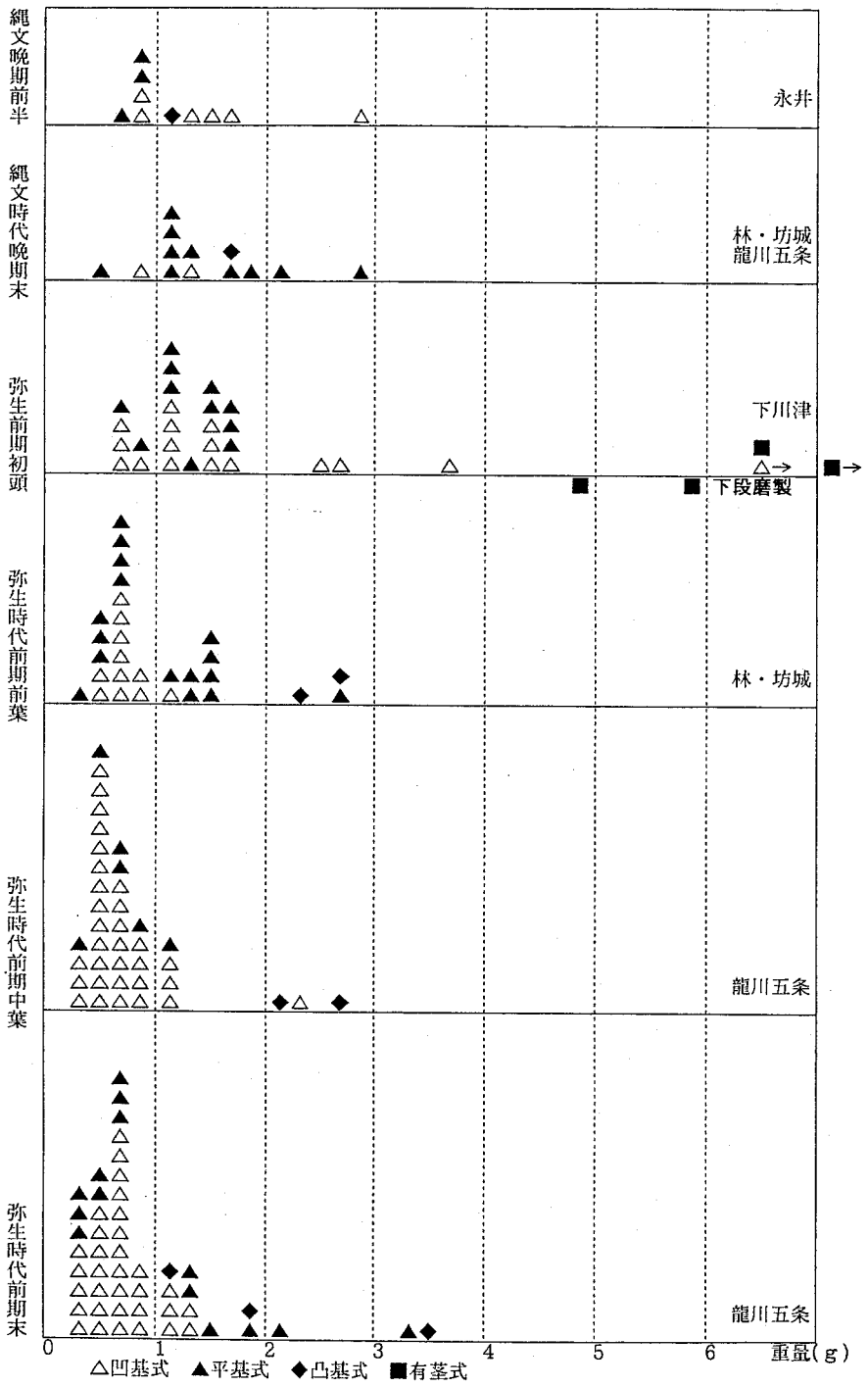


図12　讃岐平野における石鏃の重量と形態の変遷

晶片岩類は縄文時代晩期では永井遺跡などにおいて打製石斧の石材として用いられ、弥生時代になると磨製石斧類に用いられる当地域ではもっとも普遍的な石材の１つである。そのような石材を用いて新来品である有茎式磨製石鏃が製作されている点は興味深い。

さらに打製石鏃についても、次のような特徴がうかがわれる。図 12 をみるかぎり、縄文時代晩期同様、１ｇ前後の凹基式および平基式の打製石鏃が主体であることには変わりないが、一部に図 14 —７や８のような重さ５ｇを上回る有茎式打製石鏃が出現している。図 14—７は茎部を欠くものの、現状でも全長 5.0 ㎝、重量 6.3 ｇと他の打製石鏃と比べて明らかに大型化しており、形態的には図 23 —４との共通性が認められよう。さらに興味深いのは、河内平野地域より出土した図３—10 との類似性である。図３—10 は長原式を主体とし、わずかに遠賀川式土器を含む９層より出土しており、時期的にも図 14 —７と併行すると考えられる(第１章第１節注５参照)。当遺跡より検出された土器棺の中には、讃岐地域より搬入された可能性が指摘されている大型の壺形土器が存在し(家根 1992:p.72)、中部瀬戸内地域のように前期前半に遡る磨製石鏃こそ認められないものの、その影響を受けた有茎式打製石鏃の波及が認められることは、河内平野における石鏃大型化を考えるうえで重要となる。そういった視点で今一度資料を検討するならば、田井中遺跡より出土している有茎式の打製尖頭器(大阪府教育委員会 1999a:p.23 第 15 図 75)なども、そういった系譜で捉えることができるかもしれない。

議論を讃岐平野に戻そう。弥生時代前期初頭の下川津遺跡において石鏃の一部に５ｇを上回るような重量化が認められた。しかし、このような大型化した打製石鏃は、それ以降の段階に、ほとんど認められないのである。たしかに２ｇをこえる打製石鏃が、林・坊城遺跡や龍川五条遺跡において凸基式を主体としてわずかながら認められるものの、主体となる石鏃は平基式・凹基式であり、重量も 0.8 ｇ前後に集中する。また弥生時代前期初頭の下川津遺跡と比べると、石鏃全体に占める２ｇ以上の石鏃の比率は、同じくらいかそれ以下となり、下川津遺跡でみられたような５ｇをこすような打製石鏃はまったく存在しないのである。

つまり、石材産出地である讃岐平野においても岡山平野同様、弥生時代前期に部分的な石鏃大型化が、外来の磨製石鏃の影響下のもとに生じていることが確認できたが、その影響は極めて限定的であり、非定着的な現象であるといえよう。

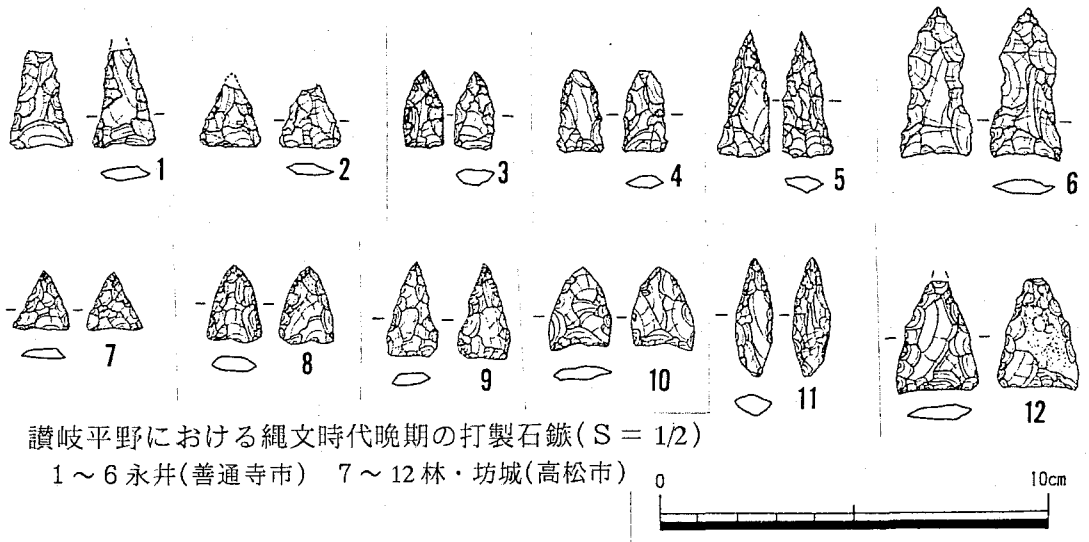


図13　讃岐平野における縄文時代晩期の打製石鏃（S＝1/2）
1～6永井（善通寺市）　7～12林・坊城（高松市）

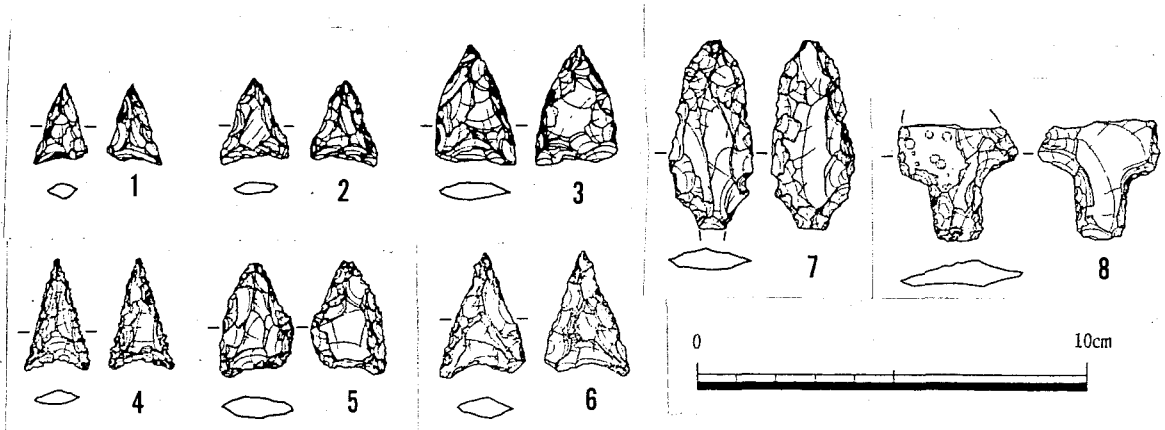


図14　讃岐平野における弥生時代前期の打製石鏃（S＝1/2）
1～8下川津遺跡（坂出市）

表1　近畿地方と中部瀬戸内地域における石鏃の変遷

	第1の大型化	磨製石鏃の影響	大型化の連続性	第2の大型化	大型化の要因
河内平野	前期　○ (石材画期)	?	?	中期後半	鉄鏃の影響?
亀岡盆地	前期　△	○	—	—	
岡山平野	前期　△	△	×	中期後葉(高地性集落) 後期(平野部)	鉄鏃の影響?・畿内系有茎式打製石鏃の影響
讃岐平野	前期　△	○	×	—	

(5)考察

さて、以上で西日本の4地域における石鏃の変遷について分析した。各地域の様相をまとめると表1のようにまとめることができるのである。

①石鏃大型化第1の画期

まず、近年強調されるようになった(松木 1999・神野 2000)弥生時代前期の石鏃の大型化は、今回分析したいずれの地域においても認められた。ただし、河内平野を除くとその変化はきわめて部分的であり、中部瀬戸内地域の分析に基づくならば、弥生時代前期の石鏃大型化は、中期後葉の総体的な大型化とは連続せず非定着的であることが判明した。そこで本稿では、弥生時代前期に各地でみられた部分的な石鏃の大型化を「石鏃大型化第1の画期」と位置づけることとする。

さらに今回の分析の結果、亀岡盆地と讃岐平野の第1の画期において、大陸系磨製石器である有茎式磨製石鏃との関係が明確に認められた。中部瀬戸内地域と大阪湾沿岸地域の弥生時代前期前半において、柱状片刃石斧や扁平片刃石斧などの外来系磨製石斧類のみならず、両刃石斧に関しても狭義の太型蛤刃石斧が出現することは、前章において指摘したとおりである。

したがって、弥生時代前期に生じる打製石鏃の部分的な大型化、すなわち第1の画期も、当該期における体系的な渡来文化の影響が想定できるのではないだろうか。この時期の変化は、弓の弭(ゆはず)形態にも認められることから(松木 1984・神野 2000)、石鏃の部分的な大型化とあわせて弥生時代前期における他律的な弓矢の変革として評価できよう。ただし、石鏃の大型化が部分的なものにとどまるのと同様、新たな弭形態もまた、すべての弓にみられるわけではないのである(神野 2000：p.26)。弓矢にみられるこのような状況は、前章で明らかにしたように石斧類が伐採斧、加工斧を問わず、弥生時代前期以降全面的に採用されていくのに対して、非常に対照的なありかたであるといえよう。

ただし、ここで注意が必要なのは河内平野における第1の画期、すなわち前期の石鏃の大型石鏃の占める比率が、他地域と比べ高いことである。このように高い比率で大型化した石鏃が認められるために、当地域の石鏃大型化は藤森栄一などにより最も最初に注目され、かつ内発的な現象として解釈しうる基盤を提供してきたのである。たしかに河内平野をはじめとする大阪湾沿岸地域は、西日本地域において水稲農耕に適した広大な沖積地をもつ地域の1つである。また、西からみれば瀬戸内回廊の終着点に位置することも当地域

を考えるうえでも重要である(松木 1996・森岡 1996)。こういった恵まれた自然環境や社会的条件が、列島のなかでいち早く抗争を激化させ、結果として石製武器の発達を促したという仮説が、これまで提示されてきたのである。

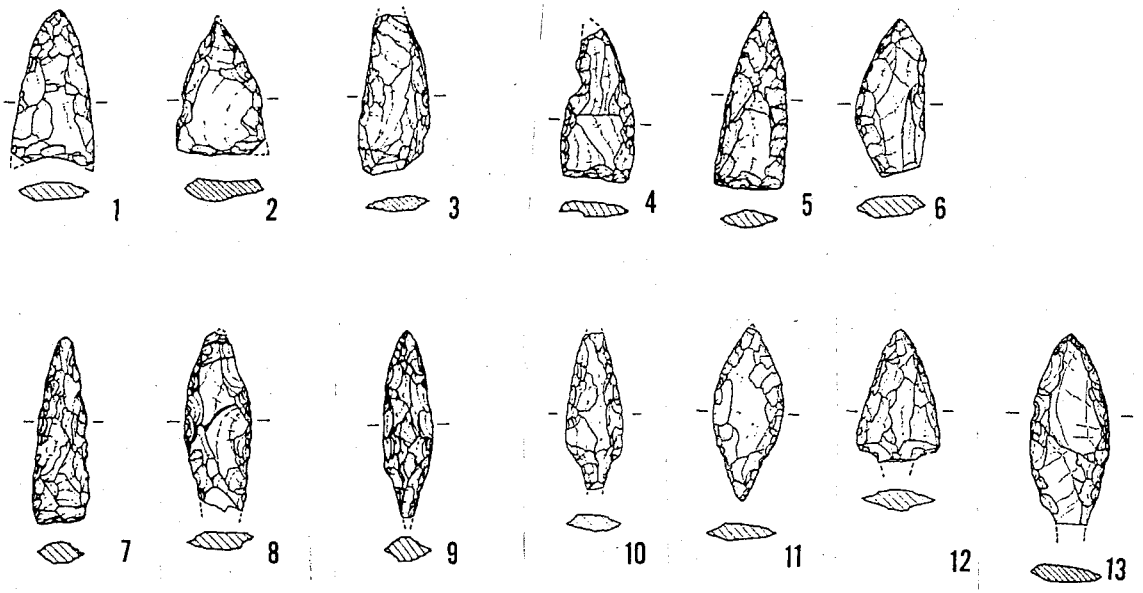
しかしながら、本稿で重視したいのは、当地域における石器生産の特徴である。つまり、石鏃の大型化が二上山サヌカイトのシェア回復過程で進行したこと、すなわち農耕社会の石器流通として、新たに二上山サヌカイトの生産と流通が再出現する過程で、当地域において石鏃の大型化が生じているのである。また、この過程において少数ながら大形の打製尖頭器の生産が二上山サヌカイトを用いて開始される(村田 1998)。大形の打製尖頭器の問題については次章において詳しく検討するが、こういった石材流通の変革期に、あらたな打製石器器種が出現していることは、中期以降のサヌカイト石器生産の意義を考えるうえでも重要である。

また、今のところ河内平野地域において弥生時代前期前半に遡る有茎式磨製石鏃が存在しないことも、これまで内発的な石鏃大型化を想起させてきた要因であるといえよう。しかし、本節における分析の結果、讃岐平野に所在する下川津遺跡の打製石鏃(図 14 —7)と長原遺跡出土の打製石鏃(図3— 10)の類似性から判断すると、当地域において弥生時代前期にみられる凸基式石鏃の増加の背景にも、西方からの外的な影響を考えざるをえないのではないだろうか。

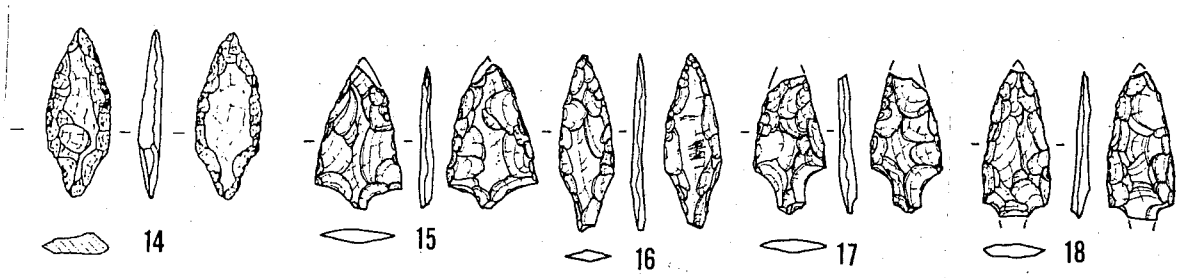
以上のような留意点がある以上、少なくとも石鏃の大型化の比率や開始時期をもって、河内平野地域の「発展性」を想定する従来の見解には無条件に賛同することはできない。むしろ、重要となるのは近畿地方におけるサヌカイト生産の特質であり、西日本社会全体としては、弥生時代前期において部分的な大型化石鏃の普遍的にみられる現象であるとともに、非定着的な現象なのである。

②石鏃大型化第2の画期

次に第1の画期に対して、河内平野では中期中葉以降に、岡山平野では後期以降に明確となる凸基式、有茎式石鏃を主体とする石鏃の全体的な大型化を、筆者は「石鏃大型化第2の画期」と位置づける。河内平野では中期前葉の資料が不明瞭であるため、第1の画期との関係は明確ではないが、少なくとも形態的な変化があることは明らかである。また、岡山平野において中期前葉から中葉に目立った大型化は認められず、後期に重量と平面形態に大きな画期が認められた。したがって、岡山平野では第1の画期とは明確に区分でき



集落 1 ・ 6 ・ 11 ～ 13 加茂政所(岡山市)　2 ・ 3 高塚(岡山市)
4 ・ 5 ・ 7 ～ 9 百間川原尾島遺跡(岡山市)　10 南溝手(岡山市)



埋葬施設 14 甫崎天神山土壙墓 28(岡山市)　15 ～ 18 清水谷 2 号木棺墓(岡山市)

図15　岡山平野における弥生時代後期の打製石鏃(S = 1/2)

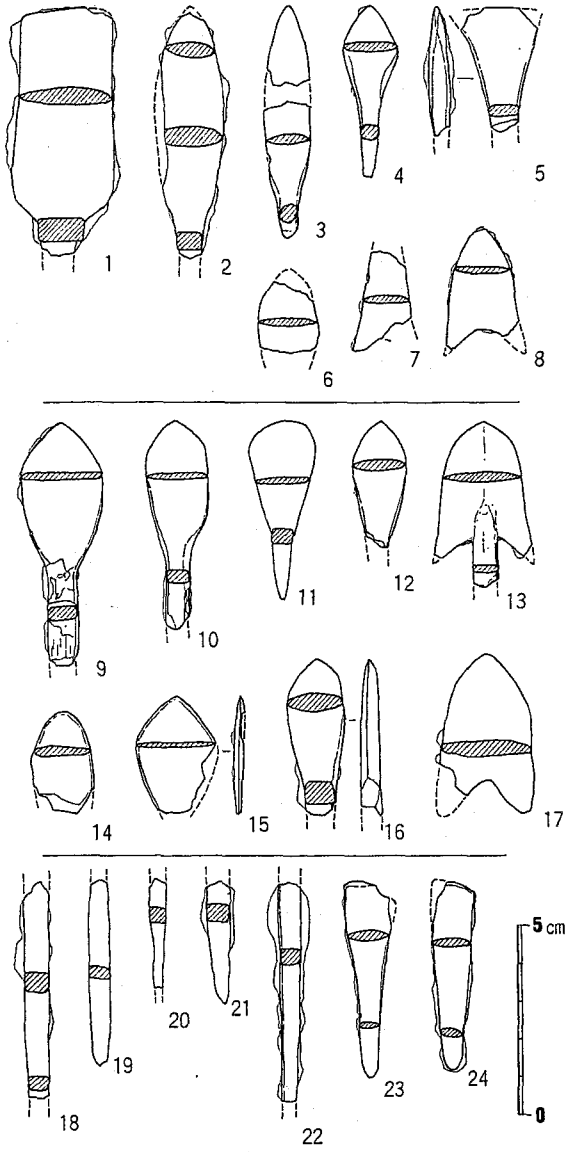


図16　岡山平野における弥生時代後期の鉄鏃（S＝1/2）

（上段：後期1段階の鉄鏃、中段：後期2段階の鉄鏃、下段：後期1～2段階の関連資料）
1・7原（御津町）、2・18小原（津山市）、3・12津寺（岡山市）、4西山（真備町）、5・6・11・20・24足守川矢部南向（岡山市）、8みそのお18号墳墓（御津町）、9・10・13・14・17百間川原尾島（岡山市）、15・16・19百間川兼基（岡山市）、21斎富（山陽町）、22・23足守川加茂B（岡山市）

る石鏃大型化の第２の画期が存在することは明白である[3)]。また、中部瀬戸内地域において平地に先駆けて高地性集落に大型化の傾向が認められる(宇垣 1999)ことは重要である。

では、石鏃大型化第２の画期の要因にはいかなる可能性が考えられるのであろうか。明確な画期が認められた岡山平野について考察を加えてみたい。

まず、岡山平野において弥生時代後期に属する３ｇ以上の石鏃の詳細について検討してみよう(図 15)。まず、図 15 ― 10 のように刃部から茎部への移行のあいまいな石鏃が認められ、なかには有茎式か凸基式かの区分の不明瞭な個体も存在する(図 15 ―９)。これらの有茎式石鏃に対して、松木は剥離方向を変えない技法であると評価し、中部瀬戸内地域に多くみられると述べている(松木 1989)。ここで興味深いのは、これらの石鏃に法量的にも形態的にも類似する図 16 ―２～４のような鉄鏃の存在である。両者の関係については不明な点も多いが、岡山平野では、両者が弥生時代後期において同時期に存在することから、これらの石鏃が鉄鏃を志向して、このような形態を作りだした可能性が高いと考えられている(松木 1989:p.93・1999:p.67)。

また、図 15 ― 12 のように河内平野の有茎式と類似する形態のものが認められる点も重要である。同様の状況は岡山市甫崎天神遺跡や同市清水谷遺跡などでみられる弥生時代後期の埋葬施設出土の打製石鏃に、とくに顕著に認められる(図 15 ― 14 ～ 18)。ただし、これらはいずれも金山産サヌカイトを用いており、大阪湾沿岸地域より確実に搬入された打製石鏃は、今のところ認められないのが現状である。

岡山平野における石鏃大型化第２の画期の具体的様相をまとめると、**①平野部に先行して高地性集落において盛行する、②一部に鉄鏃との関係が認められる、③畿内地域の有茎式石鏃の影響がみられる個体の存在**、という３点に整理できるのである。

この３点の様相は、佐原真が 1964 年の紫雲出遺跡の論考において、すでに提唱した内容とほぼ同一である(佐原 1964)。また、①の状況についても、同様の現象を松木武彦は播磨地域などの畿内地域周辺部において指摘している。しかし、松木は中部瀬戸内地域の石鏃大型化を中期中葉に遡らせ、主に③の点を否定することにより、佐原とは異なる中部瀬戸内地域の石鏃大型化の要因、すなわち内発的な大型化を想定したのである。しかし、当地域における部分的な石鏃の大型化は弥生時代前期に、総体的な大型化の画期は、これまでの検討の結果、高地性集落では中期後葉に、平野部では後期に求められる。したがって、本稿における第２の画期、すなわち中期後葉から後期の総体的石鏃大型化の背景には、中部瀬戸内地域と大阪湾沿岸地域の連動性を想定するのが最も妥当な解釈である。弥生時

代中期後葉から後期にかけての両地域間の関係の強さは、例えば土器における凹線文の広がり(深澤 1986)や、ケズリといった土器製作技法の伝播にも認められる(西谷 1999)現象であり、有茎式打製石鏃の広がりについても、この段階の総体的な文化要素交流を物語る現象であると考えられる。

では、佐原がかつて想定したような畿内地域主導の政治的現象の反映として、こういった石鏃にみられる広域関係は理解できるのであろうか。答えは否である。なぜならば、まず岡山平野において石鏃大型化第2の画期である後期には、少なからずの鉄鏃が出土しているという点である(図 16)。つまり、鉄鏃、石鏃が共存する段階において、石製武器の普及のみから、地域社会の優位性を主張するのは困難であり、あえて解釈するならば石製武器の充実は、鉄器の不足を補うものとして位置づけることになるのではないだろうか。また、弥生時代中期後葉から後期にかけての大阪湾沿岸地域は、墓制や集落に断絶や縮小化がみられるの対して、後期以降岡山平野では、むしろ階層的墓制が営まれるようになり、社会の集約化が進むという点も、畿内地域の政治的優位性を強調する立場には不利な状況となろう。さらに、佐原は石製武器の畿内地域の優位性や広がりを、魏志倭人伝中の記述にある「倭国大乱」をもって説明したが、貨泉などの中国系文物からの実年代推定や九州島と近畿地方との土器の併行関係(豊岡 1985・森岡 1985)、さらには近年の年輪年代法の成果によれば(光谷 1996)、弥生時代中期後葉から後期前半の実年代は、紀元後1世紀前後となり、倭国大乱の時期より150年近く前の状況なのである。したがって、石鏃にみられる地域関係から、大阪湾沿岸地域の優位性を主張するのは現状では困難である。

(6)まとめ

以上の分析の結果、弥生時代における石鏃の大型化は、少なくとも中部瀬戸内地域と近畿地方において2段階の画期が想定できることを提示しえたと思う。第1の画期の要因は外来文化の影響を受けて生じるが、基本的に非定着的であり、このことから社会の抗争頻度に直接連動した大型化ではないことが指摘できた。また、第2の画期については消極的にではあるが、鉄鏃との関係が想定でき、高地性集落との関係もふまえるならば、社会関係の広域化と緊張化に伴い、石鏃にも武器としての機能強化が推定可能となる。ここで注意が必要なのは、とくに中部瀬戸内地域おいては、明らかに連続的な石鏃大型化は認められないことである。つまり、弥生時代において主要な武器であった石鏃に、単系的な機能

強化はうかがえないのである。したがって、弥生時代開始当初からの打製石鏃の順調な大型化を根拠とする単系的な抗争論は、以上のような石鏃の分析からは賛成することは困難である。むしろ、鉄器化に関連した中期後半以降の石鏃の変化に初めて社会的緊張に伴う石鏃の機能強化の画期を求めることができるのではないだろうか。

さらに、中期後半から後期にかけての石鏃における中部瀬戸内地域と近畿地域の関係性についても、佐原の見解を支持する見解を提示しえた。石鏃からみる地域間関係については、次節に詳しく論じることとする。

【注】

1)本稿では九州島の石鏃の変遷について、具体的に検討することはできない。北部九州地域について、佐原真は弥生時代前期と比べて中期の打製石鏃は同形態で重量的にも変化しないと述べている(佐原 1964:p.131)。一方、下條信行は弥生時代の石器を概観するなかで、北部九州地域においても中期には打製石鏃のなかに大型品が出現するが、量は多くないとする(下條 1975:p.140)。また、中島直幸氏は佐賀県菜畑遺跡出土の石器を報告するなかで、弥生時代前期初頭において打製石鏃がやや大型化するとした(中島 1982p.202)。さらに縄文時代の打製石鏃を含めた石鏃の法量変化の検討を行った石井賢太郎、松本直子は、縄文時代晩期後半の黒川式期に石鏃大型化の画期を求めている(石井・松本 1998)。九州島北部地域における以上の研究は、いずれも打製石鏃を対象としたものである。

2)池上遺跡の状況については、京都府埋蔵文化財調査研究センターの野島永氏のご配慮により未報告資料を実見することができた。記して感謝します。

3)すでに石鏃が少数化していた福岡平野地域では、一貫して小型の石鏃が用いられており、中・四国地方以東にみられる第2の画期は認められない。また、橋口達也は、集落動向から弥生時代前期後半から中期前半にかけて抗争の激化を想定しているが(橋口 1987)、先に検討したように当該期に至ると磨製石鏃は小型化し、打製石鏃についても法量に大きな変化は認められないようである。この現象は、抗争の激化と石鏃の大型化が必ずしも結びつかない例として重要である。

2　磨製石鏃にみる地域間交流とその背景

(1)はじめに

前節では、在来の打製石鏃の変遷を分析することにより弥生時代の石鏃大型化に2段階の画期があることを指摘した。そして、弥生時代中期後葉から後期に生じる後者の画期に際して、大阪湾沿岸地域からの打製石鏃の影響が、中部瀬戸内地域に認められたのである。そこで、本節では近畿地方の磨製石鏃を分析することにより、広域での地域間関係の問題について、武器形石器の観点から迫っていきたいと思う。

弥生時代における地域差や地域間交流の研究は、これまで土器を中心として盛んであった。ただし、土器に基づく地域差の設定やその社会的意味の追究は「土器という、考古資料の中の限られた要素のみによって抽出された」ものであることも、また確かである(溝口 1987:p.155)。とくに武器としての存在が強調される弥生時代の石製武器にみられる地域間関係を明らかにすることは、土器のそれとは違った部分での地域間関係を浮かび上がらせるのではないだろうか。このような観点に立って、以下では、近畿地方において弥生時代中期を中心に盛行する磨製石鏃の様相を検討していく。

(2)研究史

前節において紹介したように打製石鏃は、型式分類や重量をふまえた地域差や時期的変遷の研究が古くより盛んであった。一方、磨製石鏃についての研究は相対的に少ない。そういったなかで、関俊彦による磨製石鏃の研究は特筆できる(関 1965)。氏は有孔磨製石鏃を集成し、その分布が東日本に偏ること、そしてその存続時期が弥生時代中期から後期にかけてであることを明らかにした。

また、一連の石鏃研究のなかで磨製石鏃は次のように言及されている。まず、藤森栄一は「量に於いても質に於いても実用性を持つ打裂製のものの比ではない」ことから、磨製石鏃は「実用利器以外の特殊な意義を持つもの、例えば儀仗として造られたところの、類稀なるものとすべきであろう」とした(藤森 1943:p.10)。

次に佐原真は、畿内地域の磨製石鏃について「前期・中期1にはその確例をみず、中期2以後出現するらしい。形態は打製石鏃と同様で、凸基式群が多く凹基無茎式もある。平基有茎式とすべきものもあるが、弥生式時代の銅鏃の形態として一般である凹基有茎式は

ない。すくなくとも畿内の磨製石鏃は、銅鏃の模倣ではなく、むしろ打製石鏃との関連が深いといえよう」と指摘している(佐原 1964:p.145)。

また、森本晋は弥生時代における近畿地方の石鏃を概観するなかで「畿内の磨製石鏃は有茎式のものが多いが、点数は少なく、組成比も北部を除けば低い。時期の限定できる資料は中期に限られている」とした(森本 1986:p.59)。

松木武彦は、磨製石鏃について「大半が有茎式と似た外形を呈するが、類型分化は顕著でない。数量的には少なく、もし実用の戦闘用具だとしても補助的な存在にとどまっていたであろう」としており、実用具としては消極的な評価にとどまっている(松木 1989:p.74)。ただし、畿内地域北部において磨製石鏃ならびに磨製刺突武器が高い比率でみられることから、二上山サヌカイトを補う存在として、これら磨製石器に注目している(松木 1989:p.88)点は重要である。

さらに種定淳介は銅剣形磨製石剣を論じるなかで、磨製石鏃についても次のように言及している。「打製石鏃に比べ出土数は限られているため、磨製石鏃のすべてが実用に供せられたとは断定しかねるのであり、石材や用途などは銅剣形磨製石剣と通じる点は少なくない」(種定 1990a:p.46)。種定はこの論考のなかで、銅剣形磨製石剣を祭器と判断しており(種定 1990a:p.42)、その文脈で以上の引用部分を読めば、氏の磨製石鏃の社会的機能に対する立場は自ずと理解できよう。

これらの先行研究の指摘は、いずれも示唆に富むものであるが、残念ながら磨製石鏃そのものの分析から導かれた研究ではなく、いずれも打製石鏃や磨製石剣を中心とする分析に付随した言及であった。とくに磨製石鏃の性格を祭器あるいは儀器として、打製石鏃と区分するという想定は、遺物そのものの検討からではなく、打製石鏃との量的比較や、武器形磨製石器は非実用品であるという固定観念から導き出された解釈であるといえよう。

そういった意味で、滋賀県の磨製石鏃を取り扱った田井中洋介の研究は興味深い(田井中 1998)。田井中は、滋賀県下の磨製石鏃を集成した上で、中部・関東地方からの系譜を引く穿孔が施された磨製石鏃が認められること、弥生時代中期末において打製石鏃を数的に凌駕する磨製石鏃を出土する遺跡が存在することの2点を指摘している。田井中の指摘した滋賀県の状況、とくに前者の中部・東海系譜の磨製石鏃の存在は、当時の地域間交流のあり方を考える上で重要であり、後に詳しく掘り下げて考察を加えることとする。

(3)近畿地方における磨製石鏃の時期的変遷

①弥生時代前期末～中期初頭

研究史の検討から明らかなように、いずれの論者も近畿地方において弥生時代前期にさかのぼる磨製石鏃の存在には、否定的であった。しかし近年、近畿地方においても弥生時代前期の磨製石鏃が各地で出土している。そこで以下では、まず出現期の磨製石鏃と出土集落の様相を概観したい。

図17—1は、京都府中郡峰山町扇谷遺跡の環壕No.5・6地点より出土した有茎式磨製石鏃である(田中 1988)。この環壕からは弥生時代前期新段階から中期初頭の土器が出土しており、当資料もその時期に帰属するものであると考えられる。切先部に鏑形成が認められるものの、全体としては断面凸レンズ状で鏑を形成しない有茎式磨製石鏃である。また先端部をわずかに欠くものの全長は8.2 cmで、弥生時代中期以前の鏃としては例外的な大きさである。

図17—2は、前節でも分析した京都府亀岡市太田遺跡の環壕検出部黒色包含層より出土した有茎式磨製石鏃である(田代 1986)。包含層出土のため、その帰属時期に明瞭さを欠くものの、全体の出土土器の割合と黒色土層の性格(村尾 1986:p.11)から、この環壕が埋没した弥生時代中期初頭を下限とする時期に本例も帰属する可能性が高い。製作技法としては、鏑形成が先端部にごくわずかに認められるのみで、断面凸レンズ状である。また全長6.9 cmと扇谷例よりやや小さいものの、同時期の打製石鏃と比べて非常に大型であるといえる。

図17—3は大阪府寝屋川市高宮八丁遺跡出土の有茎磨製石鏃である(若林 1992)。弥生時代前期から中期前半の遺構を切る古墳時代後期の河川より出土しており、共伴遺物からの時期の決定は困難である。ただし、当遺跡は弥生時代前期新段階から中期前葉の土器が主体を占めること、その時期の遺構を切る河川から出土していることから、前期新段階から中期前葉に属する可能性が極めて高い資料である。先端部と茎端部をわずかに欠損するものの、ほぼ完形で全長は5.6 cmであり、他例と同様非常に大型である。そして、ごくわずかに鏑形成が認められる。最大で厚さは0.32 cmであり、他例と比べると扁平であるのが特徴である。また、図17—1や2と比べて、刃部から茎部への角度変化の鈍いことには注意が必要である。

他にも、包含層出土のため共伴遺物からの時期の判断は不可能であるが、中期初頭の方

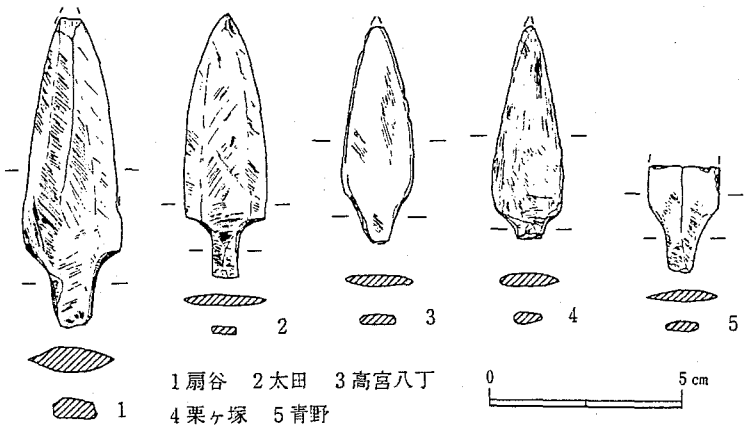


図17　近畿地方における初現期の磨製石鏃（S＝1/2）

形周溝墓が確認されている長岡京市南栗ヶ塚遺跡からも、法量と形態から前述の初現期の磨製石鏃に含むことができる磨製有茎石鏃(図 17 —4)が出土している(原 1995:p.176)。また、京都府綾部市青野遺跡からは、土壙より中期の土器と共に有茎式磨製石鏃(図 17 —5)が出土しているが、このことは前期以降もこの地域において、このような形態の磨製石鏃が存在していたことを示唆している(鈴木 1976:p.44)。

以上の分析の結果、近畿地方において磨製石鏃は、弥生時代前期新段階にその初現があることが判明した。さらに、類例が少ないため明瞭さは欠くものの、初現期の磨製石鏃は近畿地方北部に偏った分布[1)]をみせるのである(図 18)。このような状況から派生する問題については後に詳しく検討したいが、これら初現期の磨製石鏃の形態が、いずれもきわめて大型で形態的にも類似している点は重要である。

それ以後の磨製石鏃は、どのように変化するのであろうか。ここで興味深いのは、中期中葉以降、近畿地方北部を中心にその出土数が増加する磨製石鏃は、平基式や凹基式などが存在し、前段階と比べて多様性を増すという点である。さらにこのような平面形態の多様性は、同時期の打製石鏃の多様性に対応しており、地域差においても同様の傾向をみせるようである。とくに河内潟周辺地域から摂津、山城、近江地域南部を中心とした地域では、有茎式の磨製石鏃が多数を占めるのである。

②弥生時代中期後葉～後期初頭

次に近畿地方において、石器が激減する中期後葉から後期にかけての転換期における磨製石鏃について考えてみたい。

<磨製石鏃と鉄鏃>

先に指摘したように磨製石鏃の形態と打製石鏃のそれには密接な関係が認められ、有茎式打製石鏃が増加する中期後半以降、磨製石鏃も有茎式が多数を占めるようになる。そのなかでも、弥生中期後葉に限定される三田市奈カリ与遺跡(佐藤 1983)や、中期末から後期初頭という時期に比定される高槻市古曽部・芝谷遺跡などの高地性集落からは、有茎式でも次のよう形態の磨製石鏃がその一部に認められる。例えば、図 19 —1は古曽部芝谷遺跡出土の有茎式磨製石鏃で、残存長 4.0 ㎝、最大幅 2.7 ㎝と幅広であるのが特徴である(宮崎 1996:p.124・p.150)。同様の例としては図 19—2の奈カリ与遺跡出土のものがある。他にも、共伴土器からの時期比定は困難であるものの、弥生時代後期まで時期が下る可能性のある京都府向日市森本遺跡(長岡京発掘調査団 1970:p.22)や大阪府豊中市新免遺跡(松木

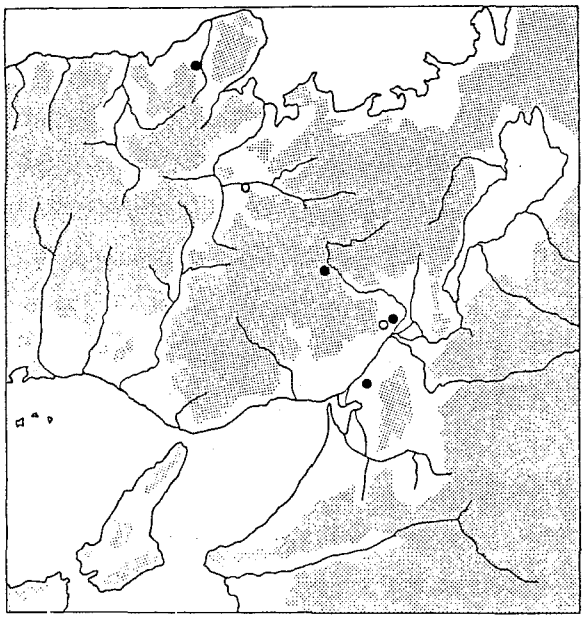
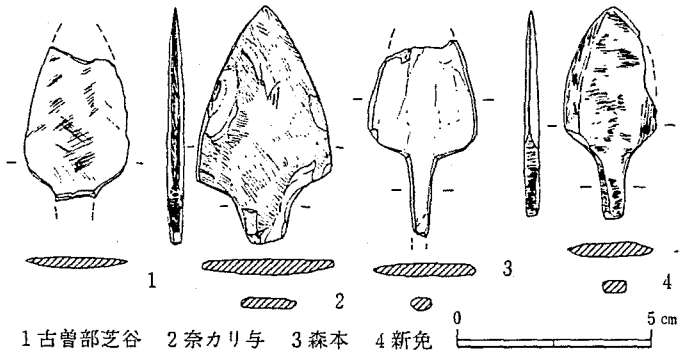
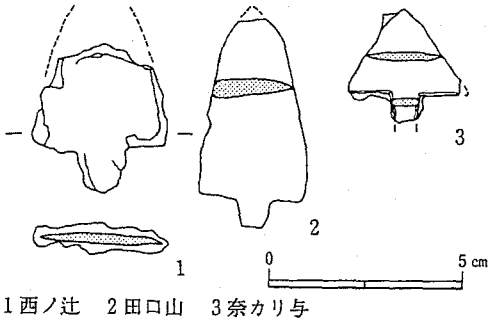


図18　初現期における磨製石鏃の分布



1古曽部芝谷　2奈カリ与　3森本　4新免

図19　金属製鏃と類似した有茎式磨製石鏃(S＝1/2)



1西ノ辻　2田口山　3奈カリ与

図20　近畿地方の有茎式鉄鏃(S＝1/2)

1990)からは、図19の3や4のような茎部が非常に長くつくりだされている磨製石鏃が出土している。

では、これらの特異な有茎式磨製石鏃の出現には、どのような要因が考えられるのであろうか。この問題について示唆を与えるものとして、弥生時代中期後葉以降増加する金属製鏃の存在があげられる。例えば、図 20 —1の東大阪市西ノ辻遺跡出土の鉄鏃は中期中葉から中期後葉の土器とともに方形周溝墓周溝埋土より出土したものであるが(曽我 1988:pp.52 ～ 53)、その形態は図19の幅広の有茎式磨製石鏃の形態に酷似しており、他にも幅広で有茎式の金属製鏃は、この時期の金属製鏃のなかで少なからず認められる(川越 1993:pp.236 ～ 238)。このような形態上の類似と出現時期の一致から、これらの幅広の有茎式磨製石鏃は、図 20 を模倣して生み出された石器であると考えられるのである。このことは、先に述べた近畿地方における打製、磨製の有茎式石鏃出現にも大きな示唆を与える。あくまで推定域をこえないが、同時期に存在する両者の関係をここでは重視しておきたい[2)]。

<有孔磨製石鏃>

さらに、弥生時代中期末から後期前半にかけての時期には、他にも以下のような形態の磨製石鏃が存在する。例えば、先述の古曽部芝谷遺跡ではK 24 住居址より、身部中心に穿孔をもつ、扁平で幅広の磨製石鏃片(図 21 —1)が出土している(宮崎 1996:p.124)。この円形竪穴式住居跡は、出土土器から当遺跡でも初現に位置づけられる遺構であることから、後期初頭の時期が考えられる(宮崎 1996:p.394)。また、堺市四ツ池遺跡では、溝状遺構より身部中心に穿孔がなされた扁平で幅広の凹基式磨製石鏃(図 21 —2)が出土している(北野 1977:p.10)。この遺構は庄内式土器の良好なセットを含む堆積土に覆われており、それ以前の時期に帰属すると考えられる。また、穿孔をもつ磨製石鏃は、滋賀県守山市服部遺跡や吉身西遺跡(図 21 —7)などでも認められ(山崎 1988)、扁平で幅広、平基式で構成されている点が以上の例と共通し、いずれの例も中期後葉から後期初頭の遺構より出土しているて。そして、吉身西遺跡(図 21 —8)や同市服部遺跡(図 21 —4)(山崎 1986)などから穿孔途中の未成品が出土しているという事実は重要であろう。

そこで、平基式あるいは凹基式で、身部中央に径2㎜前後の穿孔がなされた鏑をもたない扁平な磨製石鏃を、先学の成果にならい本稿でも「有孔磨製石鏃」と呼称し、以下の論を進めたい。

表2は近畿地方の有孔磨製石鏃を集成したものである。この表からは一部の例外を除い

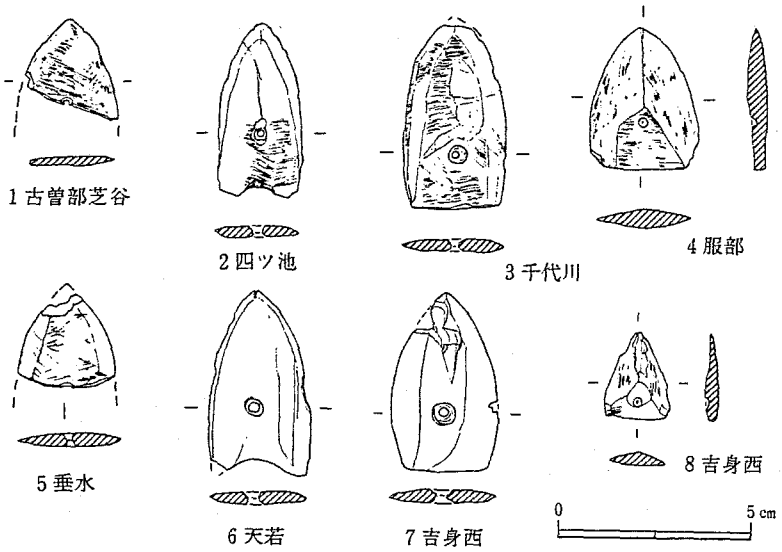


図21　近畿地方の有孔磨製石鏃(S＝1/2)

表2　近畿地方の有孔磨製石鏃(S＝1/2)

遺　跡	所在地	時　期	出土遺構	文　献
大池7号墳	兵庫県三木市	古墳時代後期?	墳丘表土	高瀬1995
四ツ池	大阪府堺市	庄内以前	溝	北野1977
垂水	大阪府吹田市	弥生V前	住居床面	吹田市編さん室1975
古曽部芝谷	大阪府高槻市	弥生IV末～V初	住居k24	宮崎1996
唐古鍵	奈良県田原本町	弥生中～後期		藤田・川上1996
唐古鍵	奈良県田原本町	弥生中～後期		藤田・川上1996
唐古鍵	奈良県田原本町			梅原1923
千代川	京都府亀岡市	～古墳前期	溝15040	鵜島1992
天若	京都府日吉町	古墳後期	住居9004柱穴内	三好1991
吉身西	滋賀県守山市	弥生IV期後半	第21号墓	山崎1988
吉身西	滋賀県守山市	弥生V期前半	住居1	山崎1988
服部	滋賀県守山市	弥生IV末～V初	ロ-III遺構面	山崎1986
服部	滋賀県守山市	弥生IV末～V初	住居125	山崎1986
鴨田	滋賀県長浜市			埋蔵文化財研究会1992
御倉	滋賀県草津市		A区土壙1	藤居1988
桜内	滋賀県余呉町	弥生V～古墳前		田中1989
熊野本	滋賀県新旭町	弥生IV期		新旭町教育委員会1998

て、弥生時代中期後葉から後期にかけての時期に属するものが多数を占めるということがいえよう。一部には古墳時代後期に下る遺構からの出土も見受けられるが、明瞭な遺構より出土したものはなく材質的にも粘板岩系石材が用いられていることから、古墳時代後期に製作されたものではなく後の攪乱による混入の可能性が高いと考えられる。

図 22 はその有孔磨製石鏃の近畿地方における分布を示している。この分布図からは野洲川下流域を中心に琵琶湖周辺地域おいて濃密な分布が認められる。また、磨製石鏃の出土数が６点しか認められない大和盆地地域において、有孔磨製石鏃が３点も出土しているという点が目につく。磨製石鏃全体に占める有孔磨製石鏃の占める割合が 50 %を占めるという状況は、他の近畿地方各地域の状況と比較して極めて例外的な状況であるといえよう(表３)。そして、全体の分布傾向としては、近畿地方でも東部に多く分布し、今のところ河内地域での出土が認められない。この有孔磨製石鏃の分布の背後には、当時の地域間交流を考える上で興味深い事実がうかがい知れるのだが、この問題については後に詳しく論じてみたい。

(４)磨製石鏃にみる地域間交流とその背景

①磨製石鏃にみる第１の地域間交流

まず、近畿地方において磨製石鏃は、弥生時代前期新段階にいずれも極めて大型の有茎式として出現していることが、前章の分析により明らかになった。さらに高宮八丁遺跡出土例では、茎の屈曲が不明瞭化し、いわゆる尖基式打製石鏃と形態上の類似が強い。つまり、有茎式と同様、縄文時代や弥生時代前期中段階以前にその存在がほとんど認められない尖基式打製石鏃、松木分類の凸基Ⅱ式(松木 1989:p.70)と、高宮八丁遺跡出土例のような有茎式磨製石鏃は形態的な類似性が高い。

出現期の磨製石鏃分布の近畿地方北部への偏りは、当期の地域間交流を考えるうえで非常に重要である。そこで、その系譜を考えていく上で重要な近畿地方以西の磨製石鏃の状況についてみていきたい。

まず、岡山県岡山市百間川原尾島遺跡では前期と考えられる土壙から、茎を欠くものの残存長 14.7 cmで明瞭な鏑をもつ厚みの有茎式磨製石鏃(図 23 —１)が出土している(高田 1996:p.30)。本例は下條信行の分類によれば、長峰Ⅰ a に分類できる磨製石鏃であり、縄文時代晩期後半から板付Ⅰ式間に盛期があったと指摘されている(下條 1991b)。

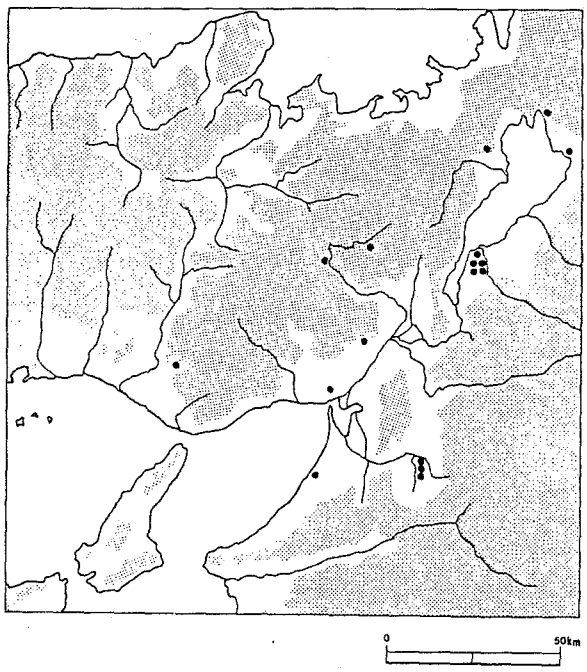


図22　有孔磨製石鏃の分布

表３　磨製石鏃全体に占める有孔磨製石鏃の比率

県　　名	兵庫県	大阪府	奈良県	京都府	滋賀県
有孔磨製石鏃数	1	3	3	2	8
磨製石鏃数	25	34	6	69	57
比率	4％	9％	50％	3％	14％

また、太平洋に面する高知県南国市田村遺跡からは明瞭な鏑をもち刃部、茎部とも肉厚の有茎式磨製石鏃(図 23 —2)が、前期古段階の土器と共に出土している(出原・松田 1986)。前章で指摘したとおり、高知平野では当遺跡を中心として、多数の磨製石鏃が出土している(出原 1999)。

さらに中部瀬戸内地域に位置する香川県坂出市下川津遺跡からも前期古段階に遡る土器と共伴して包含層および住居址から、図 23 —3や4のような有茎式磨製石鏃が出土している(西村 1990)。以上で紹介した有茎式磨製石鏃は、いずれも下條信行の分類によれば長峰Ⅰb であり(下條 1991b:pp.72 ～ 74)、時期的には板付Ⅰ式期から板付Ⅱa式期ごろまで存続するとされている。

以上の3遺跡は、いずれもそれぞれの地域における弥生的な要素を複合的にもつ初現の集落であり、時期的にも前期の最も古い段階にまで、遡る集落である。そして、これらの集落から出土した有茎式磨製石鏃は、いずれも肉厚な茎をもち、明瞭な鏑が観察できるという点で、近畿地方における初現期の有茎式磨製石鏃との間には型式学的にヒアタスがある。

それに対して、島根県松江市西川津遺跡からは、中期層出土ではあるが図 23 —6のような厚さが 0.4 cmと薄く鏑の不明瞭な有茎式と考えられる磨製石鏃が出土している(島根県土木部河川課・島根県教育委員会 1988)。さらに島根県浜田市鰐石遺跡からも、図 23 —5のように扁平で鏑形成の明瞭ではない有茎式磨製石鏃が出土している。鰐石遺跡の出土土器は弥生時代前期中頃から中期初頭に限定され、とくに前期後半の土器が主体的であることから、この磨製石鏃が属する時期も前期後半である可能性が高い(前島 1973)。前述の下條による磨製石鏃の分類に従えば、これらはいずれも長峰Ⅰc に属し、前期末から中期初頭まで存続する型式である。

つまり、型式学的にも時期的にも近畿地方における初現期の磨製石鏃は、島根県や鳥取県などから出土しているものとの類似性が強く、このことは初現期磨製石鏃の近畿地方北部への偏在(図 18)からも支持できるのである。したがって、近畿地方の磨製石鏃は、弥生時代前期初頭段階の瀬戸内地域を経由した文化要素というよりは、それより後の時期に主に日本海沿岸地域を経由して、近畿地方でも北部からもたらされた文化要素であると考えられるのではないだろうか。もちろんこの時期における瀬戸内海を中心とする交流の存在を否定するわけではない。ただし、瀬戸内海を介した交流は、むしろ、この前段階に認められることが、前節で指摘した下川津遺跡(図 23 —4)と長原遺跡出土の有茎式打製石

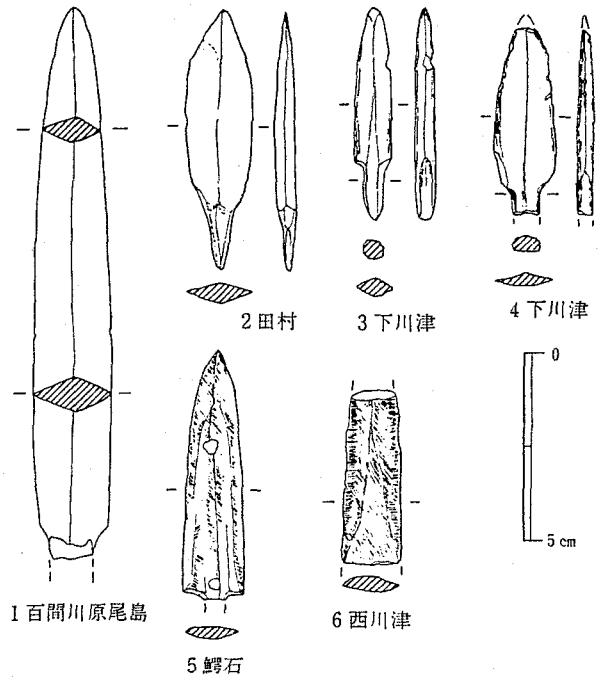


図23　中・四国地方の初現期磨製石鏃（S＝1/2）

鏃(図14—7)の類似性からは、うかがわれるのである。

ここで重視したいのは、前段階では不明瞭であった日本海沿岸地域が相対的に重要な伝播経路の一つとなったことである。当段階前後の時期における日本海沿岸地域との関連は、武器形石器以外の文化要素にも認められる。例えば京都府長岡京市雲宮遺跡出土の弥生時代前期土器を分析した田畑直彦によれば、前期中葉の壺形土器の紋様要素、例えば鋸歯紋や無軸羽状紋に山陰から丹後地域との交流がうかがわれるという(田畑 1997:p.119)。つまり、土器や石器といった材質をこえた文化要素に、日本海沿岸地域との共通性が認められるのである。さらに青銅器に占める武器形青銅祭器の割合といった面で、北部九州地域や瀬戸内地域とは異なる展開をみせる近畿地方の青銅器生産が、日本海沿岸地域を通した朝鮮半島との交流の結果、形成された可能性があるのではないだろうか。そういった意味で梅原末治がその分布状況から銅鐸の系譜を「山陰から畿内へ入ってきたもの」と指摘をしている点(梅原 1921)、そして島根県神庭荒神谷遺跡などの日本海沿岸地域における菱環鈕式銅鐸の分布は非常に示唆的であるといえよう。

②磨製石鏃にみる第2の地域間交流

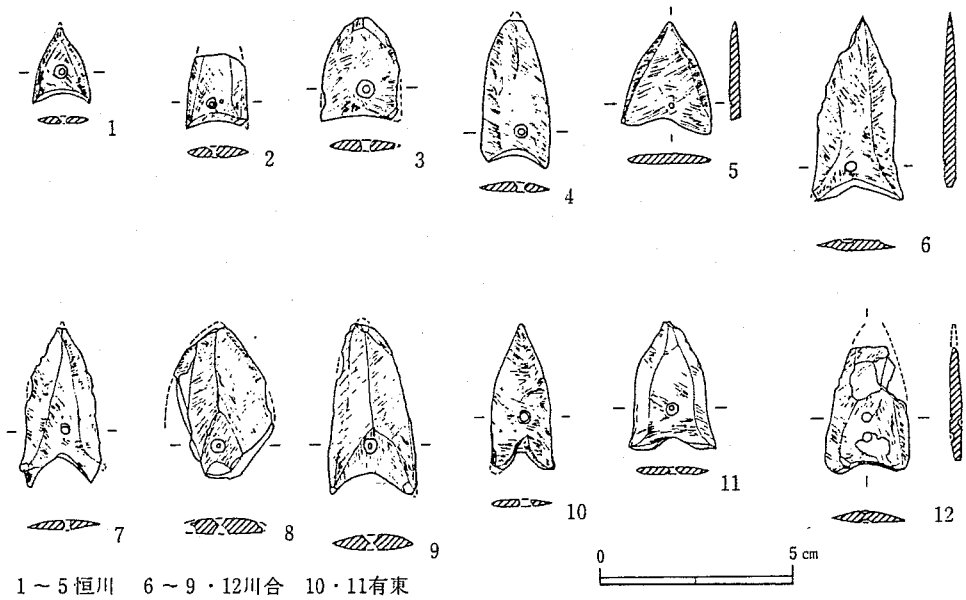
次に弥生時代中期後葉から後期前半にかけて、近畿地方に特徴的に認められる有孔磨製石鏃について考えてみたい。この型式の磨製石鏃の分布が中部、東海地方に多く分布することについては、すでに研究史上幾たびか指摘されている(佐原 1964・関 1965・桐原 1969・田井中 1998)。とくに関俊彦は274遺跡393点の有孔磨製石鏃を集成しているが、そのうち実に7割以上が長野県や静岡県に集中しているのである(関 1965:pp.28 ～ 30)。そして、ここで重要なのはその量的な多さとともに石鏃全体に占める当型式の割合である。例えば、長野県飯田市恒川遺跡からは中期後半の住居址から完成品16点、未成品93点が出土しており、そのほとんどを穿孔型凹基式が占める(桜井 1986)一方で、打製石鏃は4点に過ぎず、そのうち3点は縄文時代の混入の可能性が指摘されている。つまり、当遺跡において磨製石鏃が石鏃のなかでそのほとんどを占め、その多くが有孔磨製石鏃なのである。また、長野県下伊那郡高森町北原遺跡でも224点の磨製石鏃未製品が多数出土しており、その多さから磨製石鏃が「交易用商品」として製造された可能性すら推察されているほどである(神村 1972:p.33)。さらに有孔磨製石鏃が石鏃の多数を占めるという状況は、静岡県下の弥生時代中期後半に属する遺跡である静岡市有東遺跡(鈴木 1992・岡村 1997・天石 1997)や川合遺跡(伊藤 1992)などでも見受けられる。そして、これら地域の有孔磨製

石鏃は凹基式が主体でそこに平基式がわずかに存在する。また鍔の形成が認められない点も前述した近畿地方のものと類似した特徴である(図 24)。興味深い事例として有孔磨製石鏃の副葬例の存在である。図 24 — 11 は有東遺跡第 16 次遺跡において木棺墓より玉類とともに出土している。埋葬施設からの出土ではないが、近畿地方においても守山市吉身遺跡の方形周溝墓域より、有孔磨製石鏃(図 21 —7)が出土しており、注目される(山崎 1988)。また、有孔磨製石鏃は、岐阜県から愛知県にも分布しているが(石黒 1988・永井他 1994)、石鏃組成としてそれほど高い率を占めるものではない。

長野県南部から静岡県を中心に東日本に認められる有孔磨製石鏃が、近畿地方にも認められるということは、中期後葉から後期における両地域間の交流の存在を示すものであるといえよう。ただし、平基式が多数を占める近畿地方の有孔磨製石鏃と凹基式が多数の東日本地域の有孔磨製石鏃という形態上の差違の存在や、東日本地域で出土している未成品((図 24 —5 ・ 6 ・12)と同様の例が近畿地方でも認められる(図 21 —4 ・ 8)という事実から、近畿地方の有孔磨製石鏃は東日本からの搬入品ではなく、東日本の影響を受けて、地元で製作されたものが含まれていると考えられる。

このような文化要素のみの受容という現象は、当期の土器文化にも認められる。すでに指摘されているように、この時期において濃尾平野地域は近畿地方と同様の回転台を用いた土器製作技術が導入され、斉一的な土器群が広がりをみせる(伊藤 1994:p.72)。また、伊勢湾沿岸地域と近畿地方の関係を土器から分析した伊藤淳史は、弥生Ⅳ期併行の伊勢湾沿岸地域における特徴的な土器である円窓式土器が、近畿地方にも認められるということを指摘し、さらにそれらが搬入土器ではなく、近畿地方在地の壺形土器に胴部上半の焼成前穿孔という伊勢湾沿岸地域のもっとも目立つ特徴のみが模倣されて作られているということを明らかにした(伊藤 1994:pp.66 ～ 68)(高橋 1995:p.71)。

以上のような土器にみられる現象を参考にするならば、中期後葉から後期前半の有孔磨製石鏃の広がりも次のような解釈が可能である。つまり搬入土器の増加といった様相が特に認められないことから、人的移動の量的増加の反映として理解するよりも、相互の文化的類似性を高める、あるいは許容するような交流、つまり従来とは質的に異なる交流および社会環境が形成されたと結果であると解釈する方がより妥当なのではないだろうか。そして、磨製石鏃の分布状況を重視するならば、その質的に従来と異なった交流形態が形成された範囲は、伊勢湾沿岸地域にとどまらず長野県南部や静岡県などさらに東へ広がるのである。



1～5恒川　6～9・12川合　10・11有東

図24　東日本地域の有孔磨製石鏃（S＝1/2）

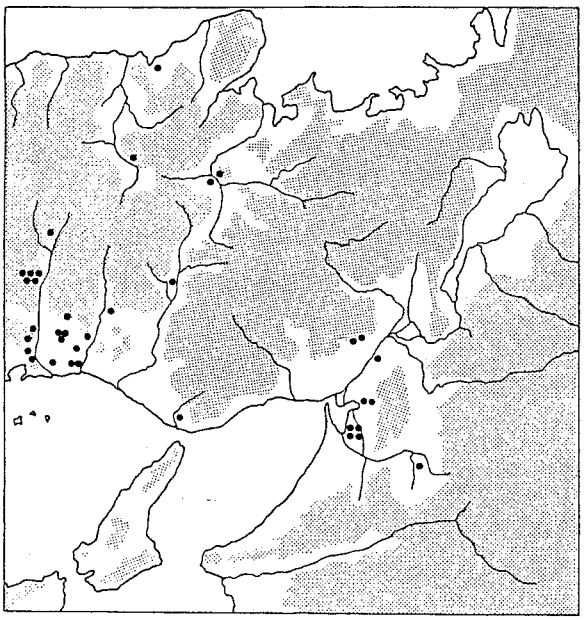
また、当期に認められる近畿地方の東西における相違は、同時期の瀬戸内地域系譜の文化要素の１つである分銅形土製品の分布(図 25)と対比するとさらに明瞭となる(角南 1993)。つまり、近畿地方の各地域社会が、あるレベルにおいて列島規模で東西に分離していく状況が、これらの考古資料の分布からはうかがい知ることができるのである。ただし、この分離とは列島東西の交流の断絶を意味するのではない。むしろ各地の交流は、東日本における金属器の出土量などからいっても、この時期以降より増大していくことは明らかであり、そういった列島規模での交流の結節点としての機能を果たした地域にこそ、西と東の文化要素の重なり合いが認められるのである(松木 1995:p.43・1996:p.257)。

弥生時代中期から後期の移行期は、日本列島における「構造変革期」(酒井 1996)として重視されている(松木 1995·1996、禰宜田 1998)。また、当期の地域間関係について森岡秀人は「Ⅴ期初頭までに拠点集落の衰退、集団編成を余儀なくされた近江以南、河内以西の西日本、とりわけ中・東部瀬戸内および大阪湾沿岸を中心とする地域」と拠点集落の環濠廃絶が遅れる大和盆地を区分し、大和盆地とそれ以東の社会との強いつながりを示唆している(森岡 1996:pp.48 ～ 49)。そういった意味で、先に検討した有孔磨製石鏃の分布の偏在は、東日本地域との結びつきの強弱を示す指標として重要な意味をもつのである。例えば、当型式の濃密な分布が認められる野洲川下流域についても、同様の背景がうかがわれるのではないだろうか。当地域では、弥生時代中期後葉以降、守山市下ノ郷遺跡をはじめとする大型環濠集落が次々と形成され、後期に至っても方形区画の内部に数多くの大型独立棟持柱付建物をもつ伊勢遺跡が存在し(伴野 1995・1997)、河内潟周辺地域の集落変遷とは異なった様相をみせるのである。つまり、野洲川下流域にみられる当期の大規模集落形成と継続の背景には、東日本との交流が重要な役割を果たしていると考えられるのである。

(５)まとめ

本節では、近畿地方の磨製石鏃の分析を分析を通して、弥生時代の地域間交流の解明を目指した。その結果、次のような２段階の地域間交流の存在が浮かび上がってきたのである。

まず、**①弥生時代前期新段階を前後とする時期における日本海沿岸地域との交流**が、有茎式磨製石鏃の検討から見出された。近年の相次ぐ発見により、日本列島の物資流通や社



※角南1993をもとに作図・一部改変

図25　分銅形土製品の分布

会構造の変革を考える上で弥生時代中期後半以降の出雲地域や丹後地域は極めて重要な地域として注目されている(河野 1997・広瀬 1997:pp.234 ～ 236・禰宜田 1998:pp.82 ～ 83)。そして、本節における磨製石鏃の関係性を評価するならば、すでに弥生時代前期末において日本海沿岸地域は、近畿地方の弥生社会形成を考える上で極めて重要な地域なのである。

ただし、このことはこの時期の交流を日本海地域のみに限定するということではない。本稿で筆者が最も強調したいのは、主に瀬戸内海沿岸をへて近畿地方へ到達した弥生時代開始期以後においても、いくたびかの文化伝播があり、そのルートとしては瀬戸内海地域とともに日本海沿岸地域も重要な役割を果たした地域であるという点である。

また、第2段階の地域間交流として、近畿地方において弥生時代中期後葉以降にみられる有孔磨製石鏃が、長野県南部や静岡県を中心に分布している磨製石鏃と極めて類似した形態をもつことから、**②この時期に東日本と野洲川流域や大和盆地地域の集団が、武器の受容を生じさせるような地域間関係を形成していたこと、**を明らかにした。前節で指摘した畿内的な打製石鏃の西方への波及を考えるならば、弥生時代中期後葉から後期にかけて石鏃においても、中部瀬戸内地域と畿内地域、そして近畿地方と東日本地域という石鏃分布圏の連鎖が認められるのである。この交流の具体像については、中期後半以降、東日本でも出土例が増大する金属器(安藤 1997)を中心とした流通である可能性が現段階では最も有力である。しかし、流通物資の内容や量的な問題以上に、その流通が各地域内のどのような需要によって形成され、その社会を変質させていったかという過程の解明が課題であるといえよう。前節、そして本節において認められた弥生時代中期後葉から後期における活発な石鏃型式の移動現象の背後に、筆者は従来の地域社会をこえた武器型式の供給と受容を可能とするような新たな人的ネットワークの形成を想定するのである。

【注】

1) 同様の大型有茎式磨製石鏃は、筆者が整理作業に参加した 1997 年度の長岡京市雲宮遺跡における調査においても、前期新段階の包含層より出土している。当遺跡の情報に関しては、古代学協会の堀内明博、桐山秀穂の両氏よりご教示いただいた。記して感謝したい

2)ただし、大村直は近畿地方の有茎式金属製鏃の系譜を打製石鏃に求める見解を示している(大村 1984:p.43)。

第３章　携帯武器の普及と展開

前章までにおいて、主に弥生時代開始期の石製武器の普及と、石鏃の変遷および石鏃からみた地域関係について論じてきた。次に、本章では弥生時代前期末以降、北部九州地域から東日本地域までの広い範囲で顕在化する金属製と石製の刀剣類について論じることとする。本章では、これらの携帯武器の普及形態を詳細に分析することにより、その盛行の背景と具体的な普及の様相、社会的機能を明らかにすることをめざす。

１　武器形金属器の出現過程と地域性の展開

(１)はじめに

武器形金属器自体の初現は、福岡県津屋崎町今川遺跡などにおいて、すでに弥生時代前期前半の土器と伴う類例が認められている(津屋崎町教育委員会 1981)。ただし、これらは遼寧式銅剣が鏃等に転用された例であり、完形品の武器形金属器としては、弥生時代前期末に出現する細形銅剣があげられる。細形銅剣は朝鮮半島において成立した青銅製武器であり、厚葬墓の副葬品目として分布している(岡内 1982・後藤 1984・2000a・b)。また、わずかながら、北部九州地域においても鋳型の出土がみられることから、列島における生産も行われたと考えられる(森ほか 1960)。

本節では、列島初現期の金属製携帯武器である細形銅剣の分布とその出土状況を、最初に検討し、あわせてその他の実用武器類の展開についても分析する。そして、列島に及んだ武器波及第２波とでもいうべき、金属製武器の受容形態の地域差とその社会的機能について論じてみたい。

(２)列島各地における武器形金属器の出現過程

①細形銅剣の分布とその出土状況

細形銅剣は、弥生時代前期末以降中期にかけて北部九州地域を中心に分布する。ただし、その出土状況は多様である。そこで、まずは細形銅剣の出土状況を①埋葬施設より峰(切先)部出土、②副葬状態での出土、③単独出土(埋納)、の３つに区分して、その分布を検討してみようと思う。

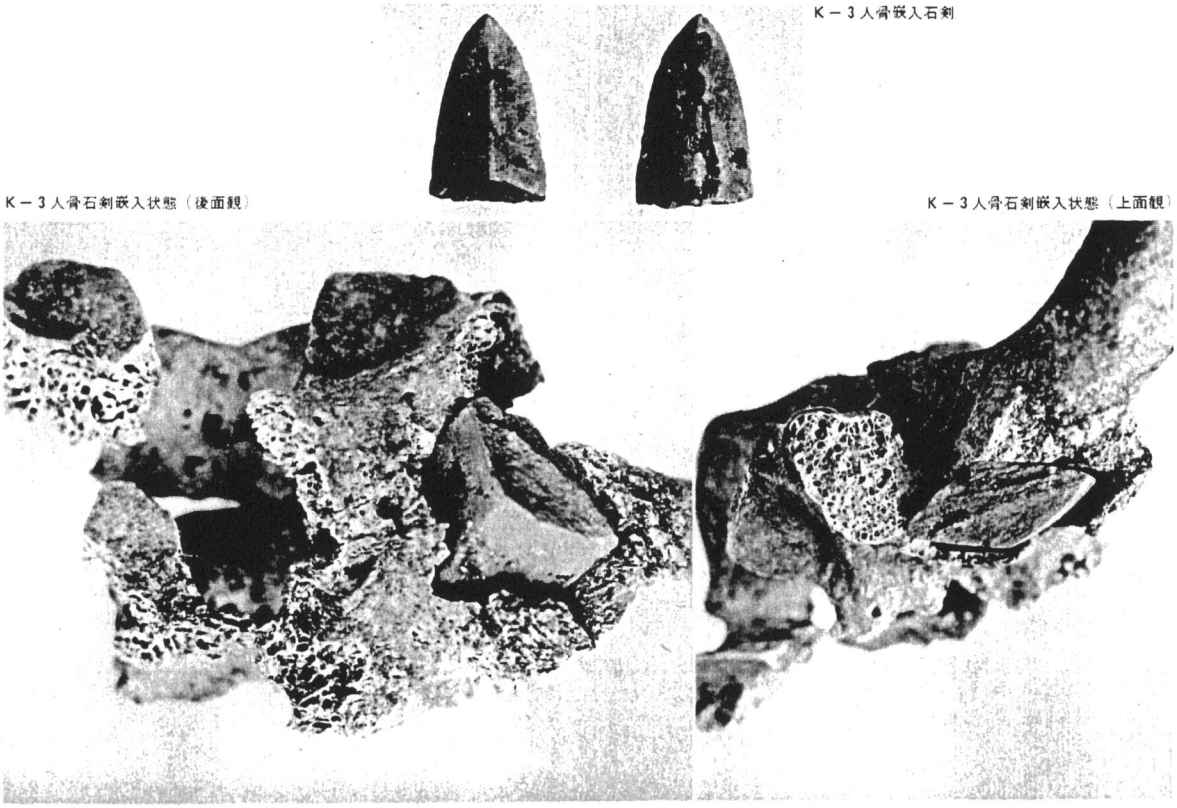


図1　スダレ遺跡(福岡県嘉穂郡穂波町)甕棺墓出土の殺傷人骨

埋葬施設より石剣や銅剣の峰部が出土する現象は、福岡県嘉穂郡穂波町スダレ遺跡(穂波町教育委員会 1976)における人骨への石剣峰部嵌入例(図１)などを検討した橋口達也の研究以来(橋口 1987・1992・1995)、石剣や銅剣等の武器が実用品として用いられた考古学的証拠として重視されてきた。ただし、峰部出土埋葬施設を一律に戦いの痕跡とすることに対しては、福島日出男(福島 1998)や下條信行(下條 2000)などにより異論が唱えられている。両氏の指摘する出土状況にも注意しながら、銅剣峰部埋葬施設の分布を示したのが(図２—１)である。

一方、図２—２は副葬品として完形もしくはそれに準ずる状態で出土した細形銅剣の分布を示したものである。細形銅剣の副葬は福岡平野、唐津平野そして佐賀平野に集中する。この分布は弥生時代前期末から中期の厚葬墓や青銅器生産遺跡の分布とほぼ等しいといえよう。そして、この分布をさきほどの峰部出土埋葬施設(図２—１)と比較するならば、次のような特徴がうかがえるのではないだろうか。まず、銅剣副葬集中地域である福岡平野、唐津平野そして佐賀平野に、峰部埋葬施設の分布が認められる一方で、銅剣副葬の少ない遠賀川流域[1]や山口県響灘沿岸にも峰部が出土する埋葬施設が存在する。さらに銅剣副葬墓が全く存在しない岡山平野、播磨平野にも銅剣峰部埋葬施設が認められることには注意が必要である。仮に埋葬施設出土の峰部検出例を当時の社会における銅剣の普及度と使用の頻度を示す指標として採用するならば、量的な格差は当然あるものの、副葬の盛行する北部九州地域をこえて細形銅剣は「普及」していたと考えられる。

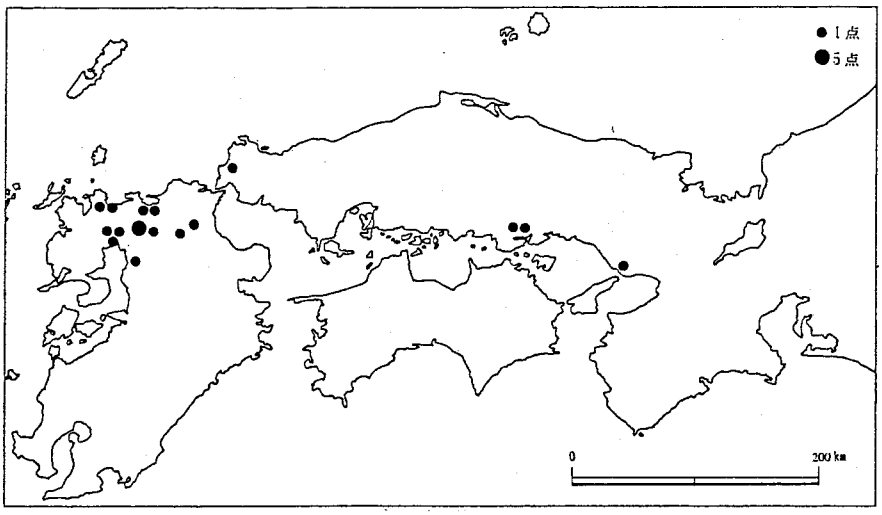
このことは、単独出土の細形銅剣を検討するとより明確になる。次に単独出土(埋納)状況で検出された細形銅剣の分布を検討してみよう。細形銅剣の副葬が全く認められない中部瀬戸内地域や高知平野では、細形銅剣の単独出土もしくはその可能性の強い類例が少なからず認められ、なかには埋納されたとみられる細形銅剣も存在する(図２—３)。

さらにこれらの単独出土例のほとんどに、関部に双孔が穿かれている。この双孔加工については槍として使用するための加工(田中 1977：p.164)と垂飾りなどのための紐孔とする説(森 1960：p.84.)がある。いずれにせよ、北部九州地域とは異なる外見が想定される点は重要であろう。以上の分析の結果、

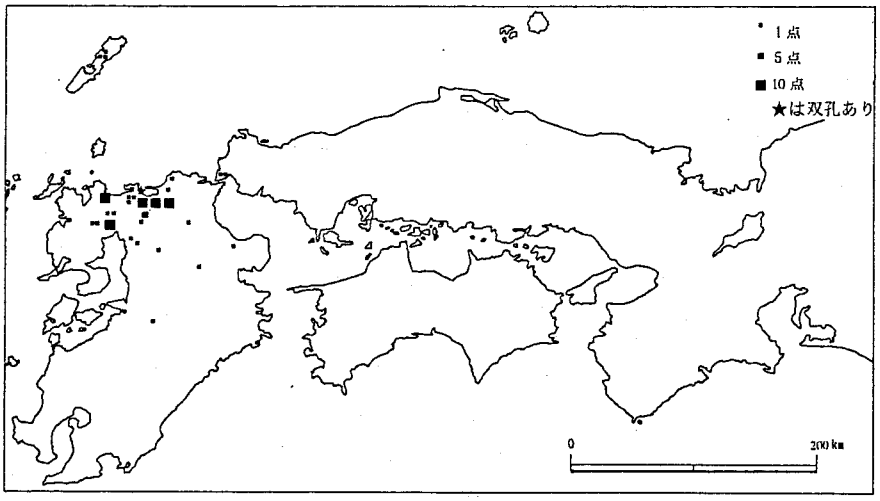
北部九州地域→多数の細形銅剣の実用と副葬行為の顕在化する地域

中・四国地方以東→少数の細形銅剣の実用と埋納行為の顕在化する地域

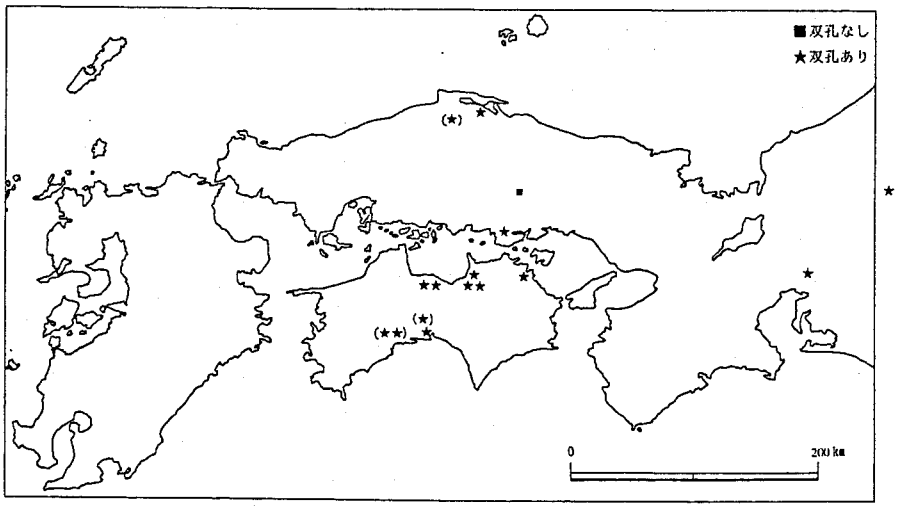
という対比が主に関門海峡をはさんで成立し、さらに双孔の有無に基づき異なる柄装を想定するならば、北部九州地域とそれ以東の地域には、外見上の差異も認められるのである。



①埋葬施設出土銅剣峰部



②埋葬施設副葬銅剣



③単独出土(埋納　)銅剣

図２　細形銅剣の分布

以上のおおきな地域差をふまえた上で、次に両地域の詳細について検討していきたい。

②北部九州地域

<細形銅剣>

当地域には「王墓」とも形容されるような厚葬墓が存在する。それらの多くは、細形銅剣副葬集中地域である福岡平野、唐津平野、佐賀平野に分布している。なかでも、1984年に実施された福岡県福岡市西区吉武遺跡群における発掘成果(福岡市教育委員会 1996)は、細形銅剣の導入時の様相を具体的に示すものとして興味深い。

当遺跡群では弥生時代前期末から中期に属する甕棺墓、木棺墓が 1200 基以上検出されている。そのうち吉武高木遺跡(４、５次調査)では３群の埋葬施設域が認められ、うちF 15 地区では木棺墓４基と甕棺墓 50 基が検出されている(図３)。なかでも、吉武高木遺跡第３号木棺からは、多鈕細文鏡１枚と多数の装身具そして城ノ越式の小壺とともに細形銅剣２点、細形銅矛１点、細形銅戈１点、合計４点の武器形青銅器が副葬されていた。周辺の埋葬施設からも、細形銅剣をはじめとする多数の副葬品が検出されている。F 15 地区は、同時期における吉武遺跡群の他の墓域に比べ、副葬品の集中、大規模な墓壙や大型の甕棺、そして埋葬施設の上部の標石の存在から、階層的に突出した集団墓が営まれた可能性が指摘されている(力武 1986、寺沢 1990、高倉 1995)。

吉武高木遺跡に典型的な青銅製武器類が組み込まれた階層的墓制の形成は、第１章で検討した弥生時代前期前半における磨製石鏃や有柄式磨製石剣副葬墓に墓制上の卓越性が認められなかったのと比べ、非常に対照的といえよう。

このような階層的葬制における青銅製武器の位置づけは、それ以降も継続される。次に中期における武器副葬について述べていきたい。中期の墓制については下條信行(下條 1991a)や中園聡(中園 1991)が明確に整理している。 彼らの研究成果である表１～３からは、細形銅剣をはじめとする武器形青銅器を最上位とし、鉄製武器を下位とする階層的墓制が北部九州地域において形成されている様相がみてとれる。ただし、この階層構造の分布は甕棺墓制の分布と一致する傾向があり、限定された範囲で形成され定着した墓制上の階層ルールであるということもできよう。

<その他の携帯武器>

弥生時代前期末以降にも一部の地域でみられる石製武器副葬墓について述べておきたい。図４からは、細形銅剣副葬の高密度域(図２—２)の周縁部に磨製石剣、石戈の副葬が少数

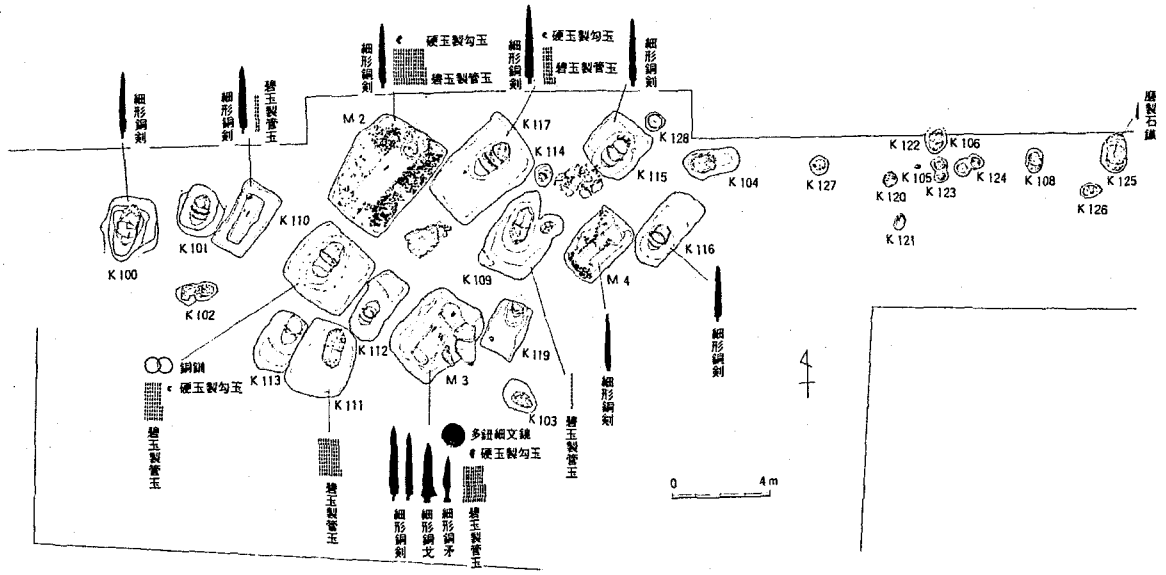


図３　吉武高木遺跡(福岡県福岡市早良区)
における墳墓と副葬品の分布
K：甕棺墓　M：木棺墓

表１　北部九州地域弥生時代中期後半の「王墓」比較

	王墓	王墓の性格と種類	副葬品 前漢鏡	ガラス璧	ガラス勾玉	武器形青銅器	武器形鉄器	その他
中核圏	須玖岡本D地点甕棺(福岡平野)	特定個人墓(墳丘墓)	●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●	◎◎	𝄞			ガラス管玉12
	三雲1号甕棺(糸島平野)	特定個人墓	●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●	◎◎◎◎◎◎◎	𝄞𝄞			ガラス管玉61 飾金具8
周辺圏	立石堀田10号甕棺(墓標墓地)	特定集団墓(自然墳丘墓)	●●●●●					鉄鏃1 砥石2
	吉武樋渡62号甕棺墓(早良平野)	特定集団墓(墳丘墓)	●					
	東小田峯10号甕棺墓(朝倉平野)	特定集団墓(墳丘墓)	●●					ガラス有孔円板2 鉄鏃1
	環・西小田13地点23号甕棺墓(筑紫平野北部)	特定集団墓(自然墳丘墓)	●					貝輪
	吉野ヶ里(佐賀平野)	特定集団墓(墳丘墓)	●					

表２　北部九州地域弥生時代中期後半の副葬品セット関係

		ガラス璧	鏡		武器形青銅器	鉄製利器	ガラス勾玉	ガラス璧加工品	玉類	貝輪
1群	(1)	あり	多数	30面台	複数(銅矛を含む)	なし	あり	なし	あり	なし
	(2)	なし		20面台	なし			あり		
2群	(1)	なし	数面	6面	銅矛1	あり(複数)	なし	みられる	みられる	なし
	(2)			2面	なし					
3群		なし	1面		なし(銅剣1)	あり(単数が多い)	なし	なし	まれにあり	みられる
4群		なし	なし		なし	あり(単数)	なし	なし	なし	(なし)？
5群		なし	なし		なし	なし	なし	なし	なし	あり

表３　北部九州地域弥生時代中期後半の墓制の階層性

	副葬品のセット	棺体の器高	上下棺の組合わせ	赤色顔料	墳丘	群集性
レベルⅠ	1群(1)(2)	大	系列Aで同大	あり	明確	低(単独)
レベルⅡ	2群(1)(2)					
レベルⅢ	3群					
レベルⅣ	4群・5群					
レベルⅤ	6群(副葬品なし)	小	その他	なし	不明確	高(群集)

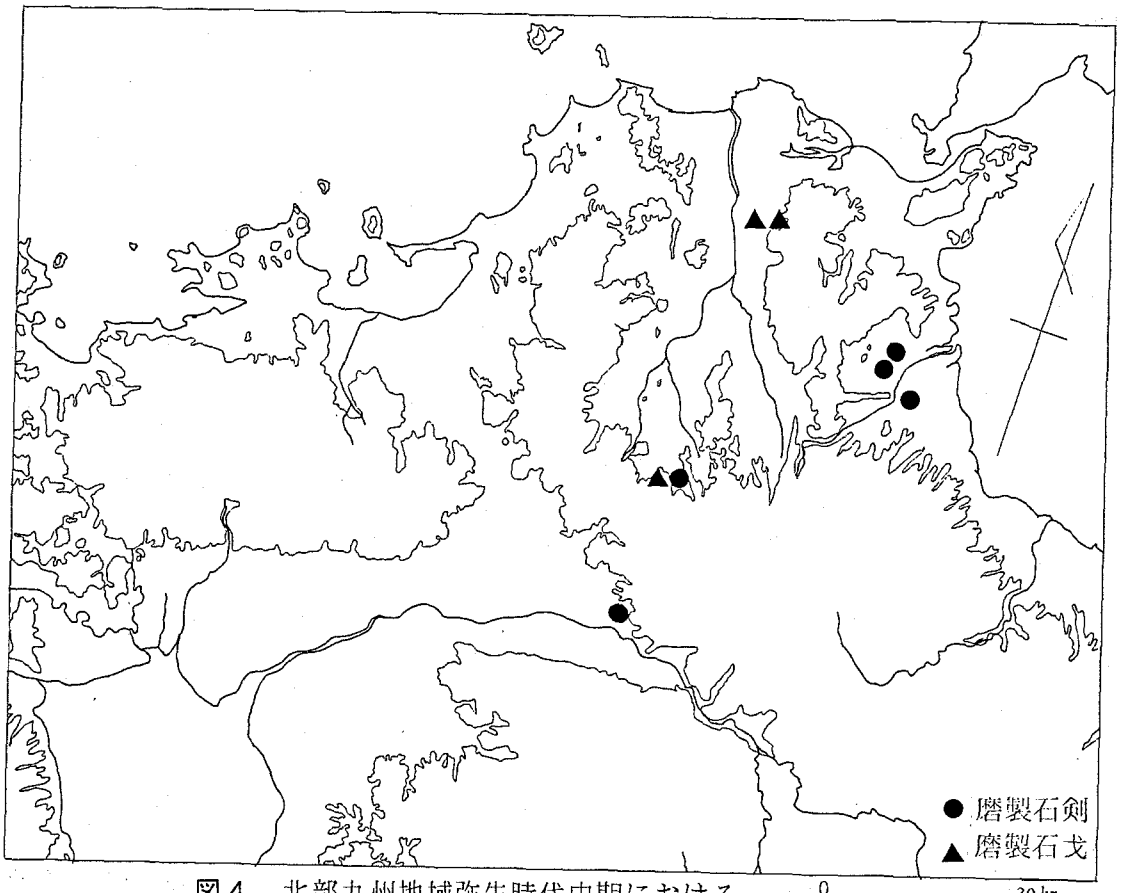


図４　北部九州地域弥生時代中期における
完形磨製石剣・磨製石戈副葬墓の分布

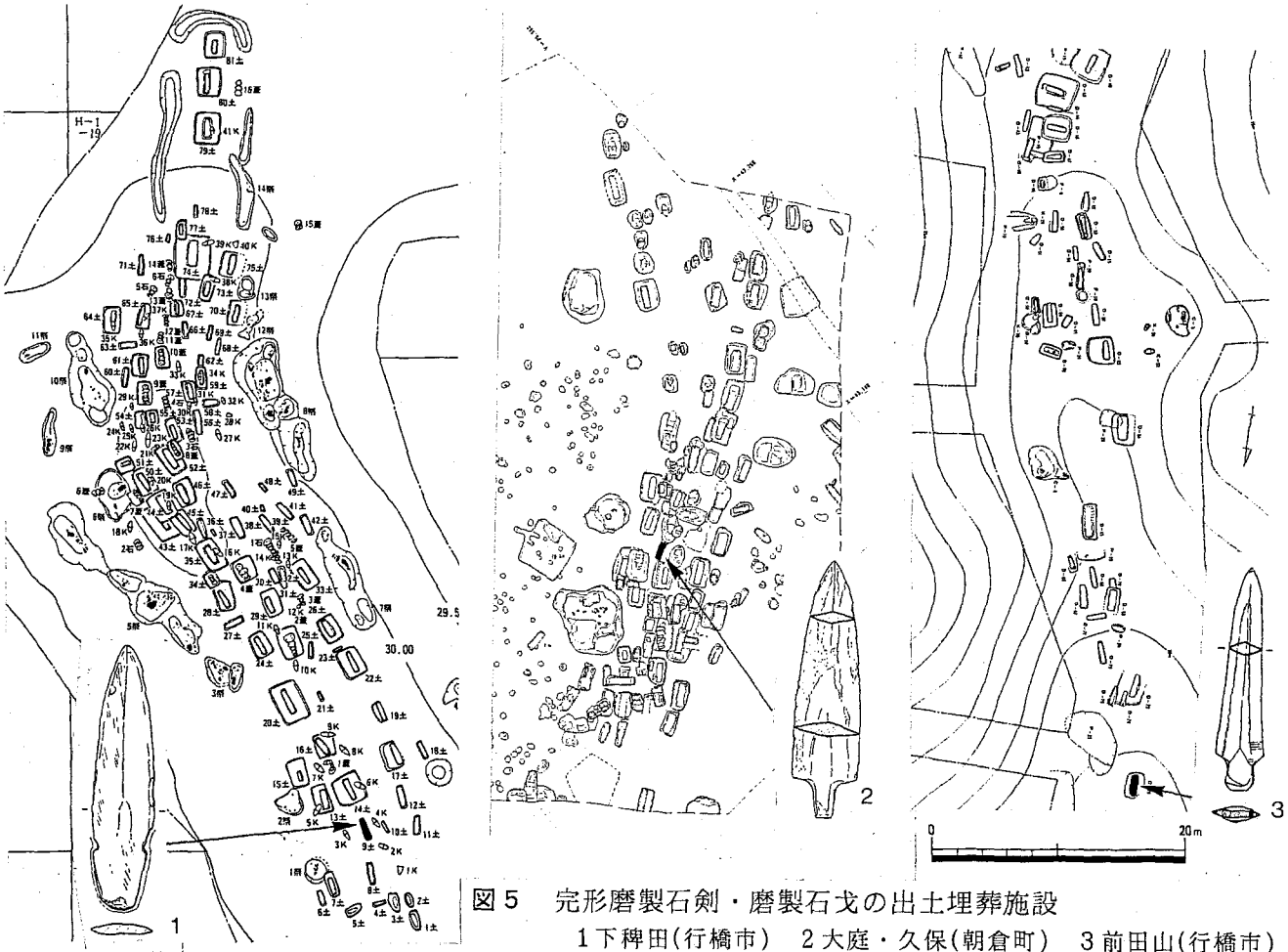


図５　完形磨製石剣・磨製石戈の出土埋葬施設
１下稗田(行橋市)　２大庭・久保(朝倉町)　３前田山(行橋市)
※遺物のスケールはＳ＝1/4

ながら分布する傾向が認められる。いずれも甕棺墓ではなく、木棺墓や土壙墓などからの出土であり、それぞれの墓域の中での卓越性は認められない(図５)。このようなありかたは、第１章２節で分析した弥生時代前期の北部九州地域の武器副葬と共通しているといえよう。

また、中期中葉以降には、鉄剣副葬墓が出現する。例えば、有明海を望む背振山南麓の丘陵部に位置する佐賀県神埼郡神埼町志波屋六本松(しわやろっぽんまつおつ)乙遺跡では、中期中葉(須玖式)の甕棺墓内より図７―１のような鉄剣が出土している(佐賀県教育委員会 1991)。図７―１が出土したＳＪ 65 甕棺は、100 基近い埋葬施設が検出されている当遺跡において、甕棺の法量や墓壙規模、そして墓域内での立地に卓越性は認められない(図６)。また、墓域全体としても管玉等が出土している程度であり、墓域全体としても有力集団墓とは、いいがたい様相をみせる。

一方、先述の吉武遺跡群に所在する吉武樋渡遺跡では、南北約 27 m、東西約 25 mの墳丘墓中の甕棺墓から、次のような鉄製武器が出土している。まず、中期中葉のＫ 61 甕棺墓からは、残存長 25.6 cmで関部に双孔をもつ図７―３のような鉄剣が出土している。また、中期後葉(立岩式古段階)に属するＫ 62 甕棺墓からは、全長 35.2 cmの素環頭刀(図７―４)とともに面径 6.9 cmの前漢鏡(重圏文星雲鏡)が出土している(福岡市教育委員会 1996)。前漢鏡と鉄製武器との共伴は、他にも福岡市丸尾台遺跡(中原ほか 1970)や福岡県飯塚市立岩遺跡(飯塚市立岩遺蹟調査委員会 1977)などにおいて認められる。

つまり、鉄製武器副葬は必ずしも階層的に上位の墓制から導入されるのではなく、むしろ、福岡平野などにおいては階層的に卓越した墓制への導入は一段階遅れて中期後葉から後期にかけて進行したと考えられるのである(岩永 1994a:p.51)。そして、中期後葉以降、武器形青銅器は、副葬品目自体から基本的に欠如していくのである。弥生時代後期になると中国鏡副葬の低下から明確な厚葬墓が抽出できなくなり、やや不安定さを増すが、弥生時代後期初頭から中頃に属する福岡県前原市井原鑓溝遺跡や佐賀県唐津市桜馬場遺跡の鉄製武器副葬から(高橋 1994)類推すると、弥生時代後期に至っても厚葬墓と鉄製武器副葬の一致が認められよう。弥生時代後期については他地域を含め、本章の最後に詳しく検討する。

③北部九州地域と朝鮮半島との関係

北部九州地域では、以上で述べたように武器形青銅器を含む階層的墓制が弥生時代前期

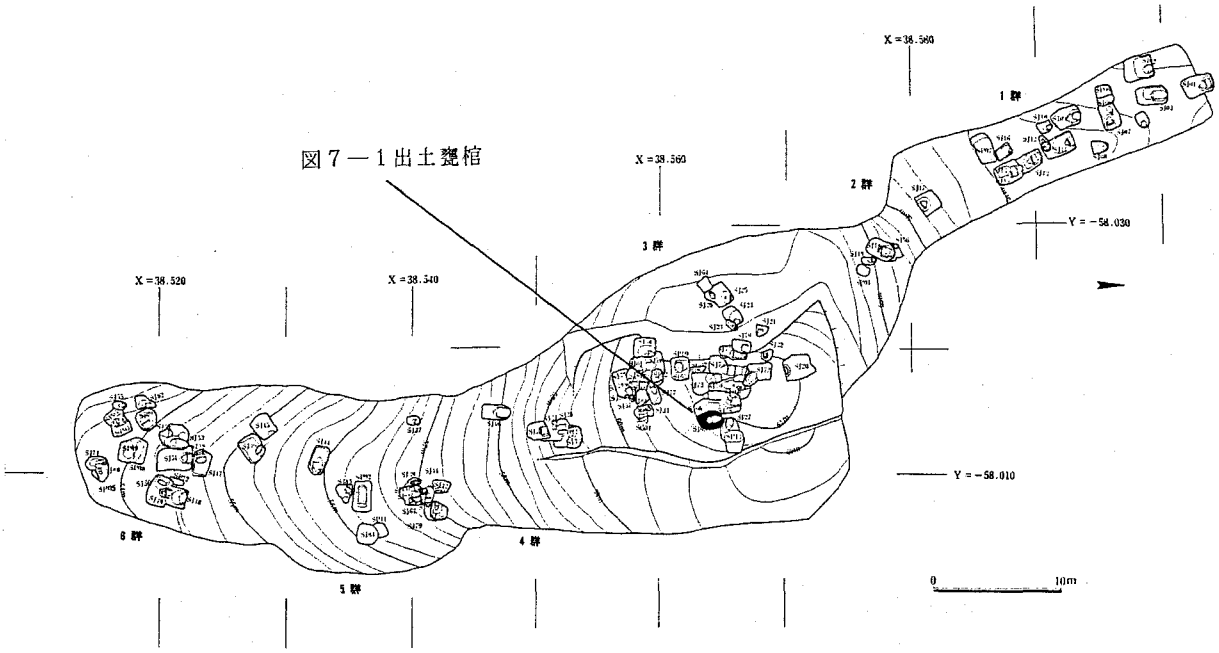


図６　志波屋六本松乙遺跡(佐賀県神埼郡神埼町)における墓域構成

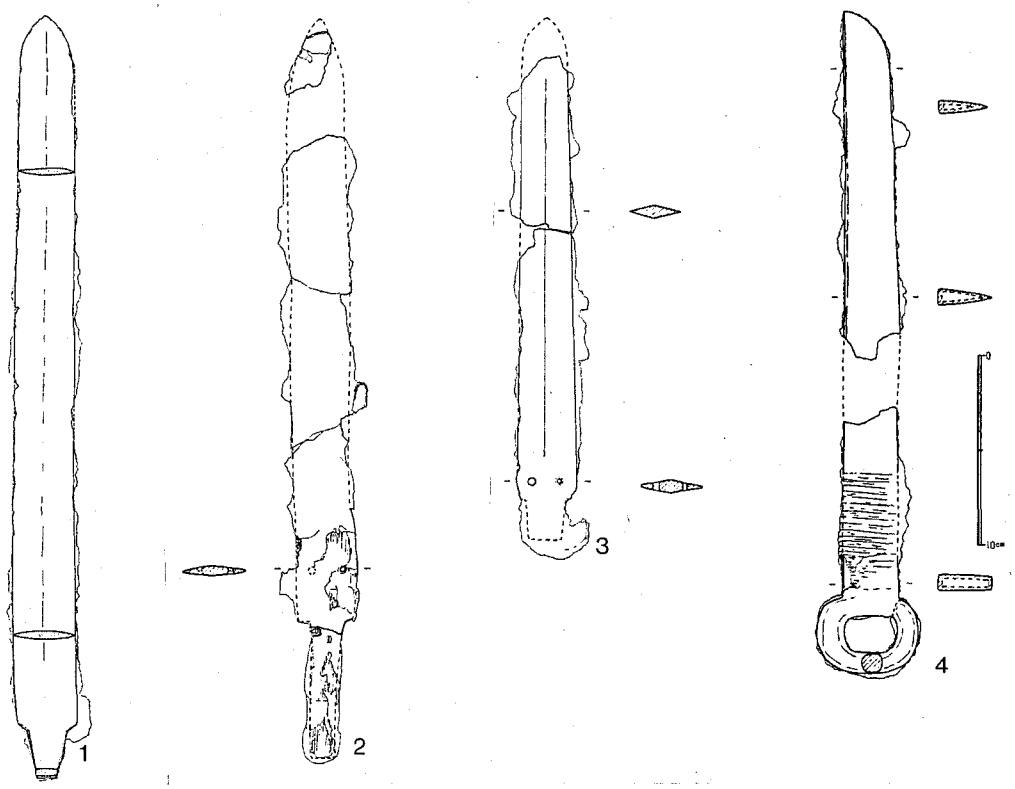


図７　北部九州地域弥生時代中期の鉄剣・鉄刀(Ｓ＝1/4)

1志波屋六本松乙 SJ65 甕棺　2吉武高木Ｋ５甕棺

3吉武高木Ｋ 61 甕棺　4吉武高木Ｋ 62 甕棺

末以降成立する。これらのうち前述の吉武高木遺跡の副葬品目に朝鮮半島製と考えられる多鈕細文鏡や朝鮮半島に類例が多い細形銅剣II式が認められることから、被葬者自体が渡来人である可能性も指摘されているほどである(黒沢 2000)。その正否をここで論じることはできないが、副葬品目などを重視するならば吉武高木遺跡における墓制と朝鮮半島のそれとの間には密接な関係が認められるのである(高倉 1995:p.99・広瀬 1997:pp.118 ～ 121)。ただし、朝鮮半島の青銅器副葬の様相と比べ、次のような相違点が指摘されている。

それは、同時期の朝鮮半島にみられる多様な青銅器のすべてが、列島において出土しているわけではないという点である。例えば、全羅南道草浦里遺跡では、複数の細形銅剣、銅矛、銅戈に加えて多鈕細文鏡や、銅ヤリガンナ、銅ノミなどの青銅製工具、銅鈴、竿頭鈴、双頭鈴などの楽器類が出土している(国立中央博物館 1992:pp.40 ～ 41)。ここで注意が必要なのは、武器形青銅器以外の青銅器は多鈕細文鏡を除くとほとんど列島では出土していないという点である。つまり、弥生時代前期末以降の副葬品目における朝鮮半島との類似性は、青銅製武器類にもっとも顕著なのである(広瀬 1997:p.120)。このことは、第1章で検討した弥生時代開始期における武器副葬の消極的な受容と比べると非常に対照的であるといえよう。

一方、青銅武器に関しては、その副葬習俗のみならず形態的に次のような共通点が指摘できるのである。それは、柄の端部に装着し、剣身とのバランスをとるための加重器である青銅製把頭飾の存在である。青銅製把頭飾は日本列島において、福岡県吉武樋渡遺跡75 号甕棺(福岡市教育委員会 1996)や佐賀県吉野ケ里遺跡 ST1001 墳丘墓などから出土しており(佐賀県教育委員会 1994)、いずれも帰属時期は中期中頃から後半(汲田式・須玖式)である。列島にみられる青銅製把頭飾は対馬島を除くと、方柱付十字形に限定されている(近藤 2000)。図8は朝鮮半島と列島における方柱付十字形把頭飾の分布を示したものである。当図からは、朝鮮半島では楽浪地域にその出土が集中しており、平壌市貞柏洞M1などの楽浪漢墓においてその存在が認められる。一方、日本列島では山口県大津郡油谷町向津具遺跡を除いて、北部九州地域にその分布が集中している(近藤 2000)。

つまり、列島においては北部九州地域を中心とする青銅製把頭飾の分布は、銅剣副葬という所作だけではなく外装(柄装)の面でも、朝鮮半島の銅剣との類似性が北部九州地域では中期に至っても維持されていることを示しているのである。

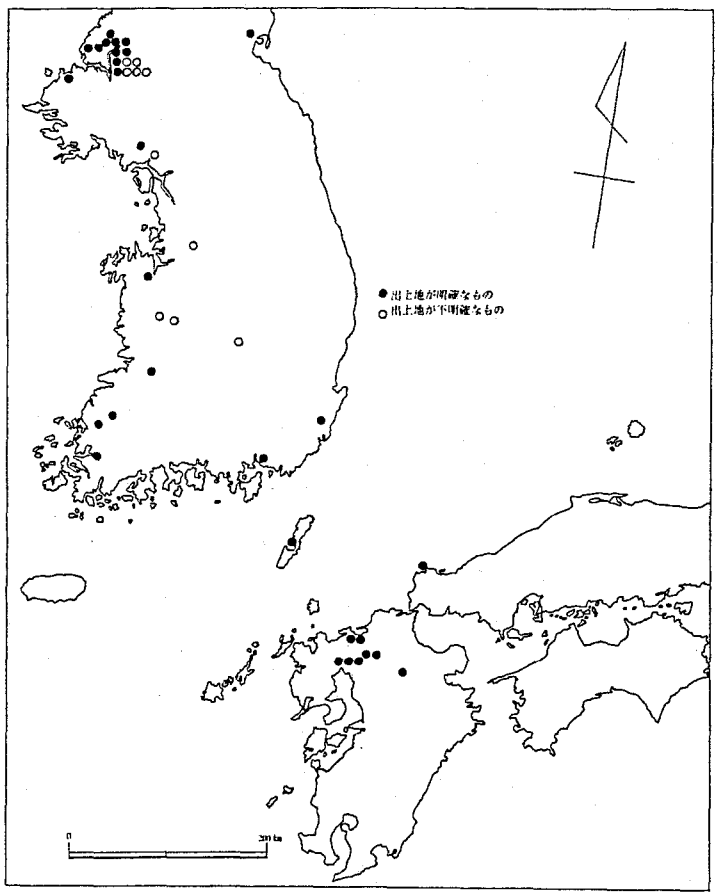


図８　青銅製方柱付十字形把頭飾の分布

④中・四国地方以東の地域

<細形銅剣>

一方、中・四国地方以東においても弥生時代前期末以降に属する埋葬施設の調査は、北部九州地域の甕棺墓の調査数に遠く及ばないものの、少なからずの資料蓄積がある。しかし、山口県響灘沿岸地域を除くと、武器形青銅器副葬墓は皆無であり、岡山県岡山市南方遺跡(岡山市教育委員会 1971)や兵庫県神戸市玉津田中遺跡(種定 1990c)から弥生時代中期に属する埋葬施設より銅剣の峰部が出土しているのみである。

むしろ、図２で示したように中・四国地方において特徴的なのは単独での検出例の豊富さである。ほとんどの例が、不時の発見であるため出土状況の詳細は、必ずしも明らかではないが、例えば、香川県観音寺市藤の谷出土の細形銅剣は尾根末端の山林中において、礫石下より３本の銅剣(図９—１～３)が重なった状態で出土している(福家 1962)。共伴遺物は皆無であった。また、岡山県久米郡久米南町別所からは図９—４のような細形銅剣が比高差約 140 mの尾根稜線上から単独で出土したという。その後の踏査によっても周辺地からの遺物出土は皆無であった(神原 1969) 。

さらに当地域には、少数であるが斧や鏃に転用された武器形青銅器類が存在する。例えば、岡山県岡山市高松田中遺跡からは、弥生時代中期前葉の土器と共伴して、図９—６のような青銅器が出土している(岡山県教育委員会ほか 1997)。吉田広によれば、本例は細身の銅剣峰部を鏨として転用した個体であり(吉田 1999:p.51)、同様の例は、中細形銅剣を転用した香川県空港跡地遺跡出土例(香川県埋蔵文化財調査センター 1992)、細形銅矛を転用した奈良県唐古・鍵遺跡出土例(藤田 1989)などにおいて認められ、中・四国地方の青銅器の特徴ともいえる分布をみせるのである。

<その他の携帯武器>

細形銅剣の埋納例が認められない近畿地方においても、次のような金属製武器および関連資料が出土している。

まず、兵庫県三田市有鼻遺跡からは段状遺構 63 より図 10 —４のような鉄剣が出土している(兵庫県教育委員会 1999)。全長 23.0 cmで、茎、関部分が認められないのが特徴である。目釘孔は認められない。下半には木質が残存しており、本来、木製柄が伴っていたと考えられる。本例と形態的に類似した鉄剣は、韓国慶尚南道茶戸里遺跡１号墳の副葬鉄剣のなかに認められる(韓国考古美術研究所 1989)。

さらに奈良県磯城郡田原本町に所在する多(おお)遺跡からは図 10 —２の銅剣の先端部約 13 cm

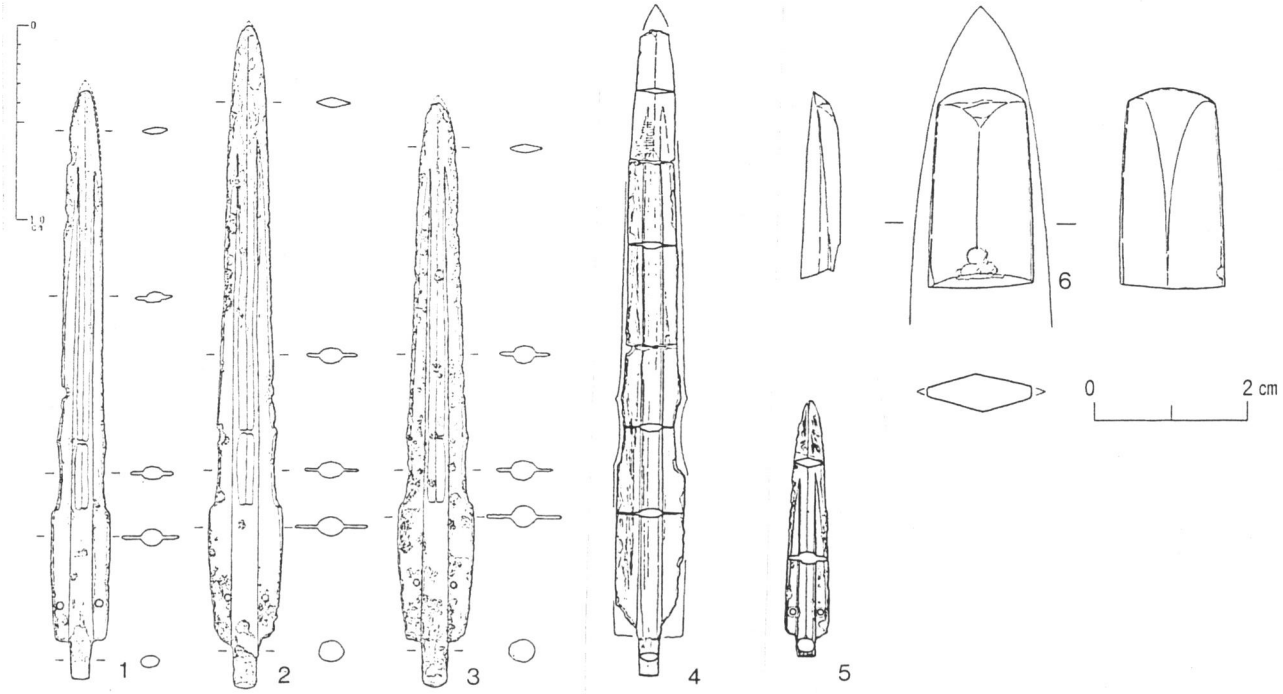


図９　中・四国地方以東の細形銅剣（Ｓ＝ 1/4・６のみＳ＝ 1/1）
１～３藤の谷（香川県観音寺市）　４別所（岡山県久米郡久米南町）
５若宮箭塚（長野県埴科郡戸倉町）　６高松田中（岡山県岡山市）

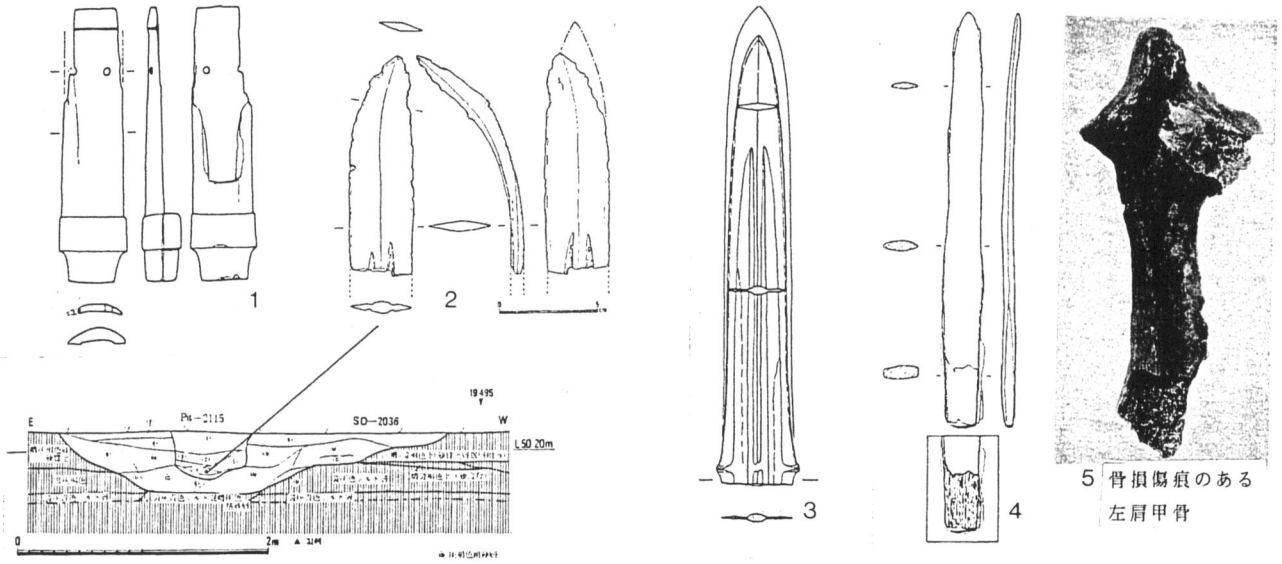


図10　近畿地方における弥生時代中期の金属製武器とその関連品（５を除きＳ＝ 1/4）
１木製　２～３青銅製　４鉄製
１奈具谷（京都府竹野郡弥栄町）　２多（奈良県磯城郡田原本町）　３下ノ郷（滋賀県守山市）
４有鼻（兵庫県三田市）　５四分（奈良県橿原市）

の破片が、径 40 cm程度のピットより出土している(奈良県立橿原考古学研究所 1989)。銅剣は全体にねじ曲がった状況であり、破断面からも強い衝撃により欠損したものとみられる。さらに刃部にも、激しい刃こぼれが認められる。

本例と類似した様相が認められる武器形青銅器として、滋賀県守山市下ノ郷遺跡(伴野 1997)を取り上げておきたい。本例は、中期後葉の環濠内より出土した残存長 23.3 cmの銅剣先端部片であり、中細形銅剣と速報されている青銅器である(伴野 1997)。しかし、吉田広によれば、本例は研ぎ直しを受けて変形した平形銅剣であるという(吉田 2001b)[2)]。武器形青銅器に対する研ぎ直しや二次的加工は、長野県埴科郡戸倉町若宮出土の細形銅剣(図９—５)などをはじめとして(桐原 1966)、中・四国地方以東の青銅器にとくに顕著に認められる現象である。先述の多遺跡出土銅剣の激しい「使用」状況も合わせて考えると、中・四国地方以東の金属製武器も、北部九州地域同様(橋口 1995)、実用的な使用がなされた可能性が高い。

このことは、奈良県橿原市四分遺跡の弥生時代中期に属する埋葬人骨の、次のような解剖学的知見からも支持される。四分遺跡で検出された土壙墓に埋葬されていた壮年前半の男性人骨には、少なくとも４箇所の骨損傷が認められ(図 10 —５)、いずれも鉄製刀剣などの利器でしかできないような傷であった(片山 2000:pp.105 ～ 106)。また、いずれの骨にも治癒反応がみられないことから、死亡前後に受傷した可能性が高い。人骨を良好に遺存させる甕棺墓制や砂丘部の墓域がみられない近畿地方では、当該期の人骨資料はきわめて少ない。そのような資料的状況のなかで、北部九州地域において顕著な殺傷人骨(中橋 1999)が近畿地方にも認められることは重要である。

さらに京都府竹野郡弥栄町奈具谷遺跡より出土した図 10 —１の木製柄の存在にも注意が必要である。図 10 —１は柄部内の彫り込みが片側２㎜と浅いことから、金属製の剣身を想定することが妥当であろう(京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997)。また、剣身関部にあたる部分に双孔が穿たれているのが特徴的である。関部双孔を施し目釘穴で固定する鉄剣は、立岩 35 号甕棺出土鉄剣(飯塚市立岩遺蹟調査委員会 1977)や福岡県春日市門田北 24 号甕棺および 27 号甕棺出土鉄剣に認められており(福岡県教育委員会 1978)、先述の吉武樋渡遺跡出土例(図７—２・３)も、その範疇に入るであろう。川越哲志によれば、これらのように柄木が剣身下端を覆う拵は、中国、朝鮮半島には認められず、列島独自の拵であるとされている(川越 1993:pp.180～ 181)。

以上の分析の結果、副葬品として出土する金属製武器が皆無である近畿地方にも、弥生

時代中期に属する集落出土例や関連遺物の様相から実用的な金属製武器が存在していたことが確認できた。むろん、量的には北部九州地域と比べて少量であったと考えられるが、弥生時代中期における中・四国地方以東の社会において、明らかに金属製武器は存在するが、副葬品としては選択されず、転用や欠損例、そして埋納品としてのみ出土するという北部九州地域との取り扱いの差異を、ここでは強調しておきたい。

⑤小結—弥生時代中期における武器形金属器の地域性—

初期の細形銅剣の各地における様相は表４のようにまとめることができよう。ここで興味深いのは、朝鮮半島と北部九州地域が、副葬行為や青銅製把頭飾の採用といった点で共通性がみられるのに対し、同様に細形銅剣の分布が認められる中・四国地方以東では出土状況や、想定される柄形態が異なるのである。もちろん、中・四国地方における細形銅剣の出土状況は不明瞭なものが多く、副葬品が含まれていることも完全には否定できない。それでも、関部双孔の有無は中・四国地方の細形銅剣に特有の特徴として認められるのである。つまり、弥生時代前期末から中期およびその時期に併行する細形銅剣分布域を大きく２つに分けるのならば、それは対馬海峡ではなく、関門海峡によって区分可能なのである。このことは、単に細形銅剣の出土状況のみならず、各地域社会における武器の位置づけにも関連することであるが、この問題については後に詳しく検討する。

(３)金属製武器埋納の社会的背景

①埋納をめぐる従来の解釈

中・四国地方以東の青銅製武器は埋納状態で出土することが一般的であった。次にこの埋納という状況が、いかなる社会的意図の反映であるかについて、次に考えてみたい。

埋納品の性格は個人の埋葬に伴う副葬品との対比において、共同体的所有の反映としてみなされてきた。例えば、小林行雄は、輸入銅利器と国産銅利器の出土状況の差異を次のように強調している(小林 1951)。小林は、北部九州地域において細形銅剣などの輸入銅利器が墳墓の副葬として用いられるのに対して、国産銅利器を墳墓に納められた例がほとんどなく、埋納状況で見つかる点を強調した(小林 1951:p.144)。このような資料的状況に基づき、輸入銅利器は、富と権力をもった指導者により舶載され、その個人の富と権力を強化し、そして彼の死に際してはともに埋葬されると述べる一方で、国産銅利器および銅

表４　細形銅剣の分布域における地域性

	副葬	埋納	把頭飾	双孔	実用
朝鮮半島	◎	△	○	×	○?
北部九州地域	◎	×	○	×	○
中・四国地方以東	×	◎	×	○	○

鐸については埋納を当時の儀礼形態の１つとし、埋納以前の所有形態についても個人の富の内容としてではなく、あくまで民衆の代表として宗教的政治的指導者がこれらを管理し、民衆との媒介役を果たしたと述べている(小林 1951:pp.145 ～ 146)。森貞次郎も、細形青銅器類は、豪族個人の副葬品と処理されるのに対し、列島で生産された広形類は共同体の祭器として尊重され、最後には埋蔵されたと述べ、銅鐸との共通性に注目した(森 1960:p.91)。

以上のような見解をふまえて、原島礼二は銅鐸などによる集団的な祭祀の存在が、世帯共同体の余剰を吸収、集中する役割を果たし、私的利害を制約すると分析した(原島 1968:pp.95 ～ 110)。さらに、このような社会規制の結果、銅鐸分布圏、すなわち近畿地方や中・四国地方では墓制の上では貧弱な副葬品しかみられないとする。原島のこの枠組みは、弥生時代において厚葬墓の欠如した畿内地域が、なぜ大型前方後円墳の中心地になるかを、論理的に説明しうる理論として、弥生時代研究に取り込まれることとなる(都出 1970)。

さらに、埋納行為自体を個人の権力の発現形態の１つとして評価する論調もみられる。大林太良は、東南アジアにおける銅鼓の所有形態などを参考として、銅鐸も「高い社会的地位のシンボルとして珍重され、各地の有力者が家宝として伝えていたものであろう」と述べている(大林 1979:p.208)。また、桑原久男は、西日本東西の副葬習俗の有無、近畿地方から中・四国地方における副葬品の欠如を、青銅器をはじめとする威信財の消費形態の違いという観点で整理し、埋納行為の主体者に地域の有力な個人を想定した。そして、貴重財である銅鐸を惜しげもなく放棄することにより、社会的威信を獲得するという機能を銅鐸埋納にもあてはめたのである(桑原 1995)。

しかし、このような桑原の見解に対しては、岩永省三による次のような批判がある(岩永 1998)。岩永は、桑原の立論は現象上の理解の可能性を示しているだけに過ぎず、青銅器が個人所有である考古学的証明が欠如している点などをあげ、青銅祭器と大型墳丘墓の関係を含め、整合性のある埋納行為への解釈の必要性を説いた(岩永 1998:p.84 ～ 89)。さらに、岩永は供儀や埋納、副葬行為を含めた財の浪費を２つに区分した。第１は、その社会的目的が、特定個人への富の集中を抑制する目的での浪費である。この場合、エリートが、力や富を誇示するためには、財や権威の象徴を井戸や沼に放り込む儀礼を進んで引き受けなければならないが、その結果彼らは物質的には平民に近くなってしまい、不平等に起因する社会的緊張が緩和されるという。この見解は、先に紹介した原島礼二の銅鐸の社

会的機能に対する見解に類似している。一方、第２の浪費は、それを実行する首長や富裕層の目的が、他集団間あるいは自集団内での自らの政治的、経済的優位性を保全・再確認することであり、富の浪費が、既存の富の不均等を維持するという結果をもたらすのである。つまり、埋納行為の背景にも、①富の拡散・平準化という目的と、②さらなる威信の強化という、全く別個の社会的機能が復元可能であると岩永は指摘した。そして、財の交換様式の表面的類似性をもって、その社会的意味を同一視することの危険性を強調する。

②金属製武器埋納の解釈

以上の研究史をふまえたうえで弥生時代の金属製武器埋納の背景に対する筆者の見解を筆者も表明しておきたい。基本的に筆者は岩永の見解に賛成である。つまり、銅鐸や武器形青銅器の埋納の背後に、岩永が整理した後者の社会的機能、すなわち主催者の権力強化の意図を見出すためには、埋納青銅器の存在からではなく居住形態や墓制などの他の考古資料から資料から、埋納行為を利用した権力者の存在を立証する必要があるといえよう。

そして、中・四国地方における埋納青銅器の出現時期と考えられる弥生時代前期末から中期前半において、そのような権力者の存在を墓制や居住形態から帰納的に抽出することは、現状では困難である。

さらに青銅器自体の観察から次のような指摘がなされていることにも注意が必要である。福永伸哉は、外縁付鈕式１式から扁平鈕式２式が一括して出土した兵庫県神戸市桜ヶ丘銅鐸を観察するなかで、次のような指摘を行っている。福永は型式学的に先行する外縁付鈕式銅鐸の内面突帯に明確な磨滅がみられる一方で、後出する扁平鈕式銅鐸のそれには磨滅が認められないこと、外縁付鈕式銅鐸の器面が扁平鈕式に比べ、なめらかな肌合いを呈していることを根拠に、外縁付鈕式銅鐸は製作時から長期の使用期間をへて埋納されたのに対し、扁平鈕式銅鐸は製作からさほど時間をへずに埋納された可能性を指摘している(福永 1998:pp.222 ～ 225)。埋納時期の共時性は一括出土から明らかであり、古式の外縁付鈕式銅鐸が長期間保有されていたことは福永の遺物観察からも明白であろう。したがって、青銅器「所有者」の選択肢のなかには、埋納と副葬だけではなく伝世という選択肢も存在するのであり、桜ヶ丘出土の外縁付鈕式銅鐸は、伝世された青銅器の存在を証明する資料なのである。また、中・四国地方に数多く認められた青銅器の転用品の存在も興味深い。つまり、青銅器埋納が細形銅剣段階から認められる当地域には、転用品の分布も少なからず認められるのである。

以上のような状況をまとめると　墓制や集落形態から中・四国地方における青銅器伝来期である弥生時代前期末から中期前半には、卓越した特定個人像の考古資料からの証明は今のところ困難であり、青銅器の伝世現象や転用からは、青銅器の保管者(集団)が入手した青銅器を常に埋納として「浪費」するというよりは、世代を越えた長期保管をへて所有が引き継がれる、あるいは破損に際して転用されるという実態が浮かび上がってくる。そして今日の我々が目にする青銅器の埋納は、春成秀爾や寺沢薫、福永伸哉がすでに想定しているように特殊な社会的契機に際して執り行われる最後の青銅祭祀なのではないだろうか(春成 1982・寺沢 1992・福永 1998)。各論者が想定する社会的契機はそれぞれ異なるが、その大きな画期の１つを弥生時代後期の開始におく点では共通している。弥生時代後期における社会的契機の具体像については、後にくわしく論じることとする。

埋納行為の社会的背景に議論を戻そう。以上の検討の結果、桑原などの異論はあったものの、当該地域の墓制や居住形態などをみるかぎり青銅器の埋納行為は、共同体的な集団所有の器物に相応しい最終の消費形態とするのが、現状ではもっとも妥当な解釈であるといえよう。

このことは、鋳型の出土から遅くとも弥生時代中期初頭には近畿地方でも開始されていたと考えられる青銅器生産の様相からも支持できる。つまり、近畿地方では個人所有に適した携帯性の高い武器形青銅器類が、ほとんど製作されず、楽器として儀礼に用いられる銅鐸をもっぱら生産し、中・四国地方においても武器形青銅器は携帯性を否定する型式変遷を遂げるのである。つまり、中・四国地方における青銅器は、**①階層上位者の副葬品目としての性格が故地である朝鮮半島および北部九州地域では強かったにも関わらず、その規範を拒絶し、伝世(転用)—埋納という所作を新たに生みだし、②所有者、保管者にとってその利器の実用が、実際の生産力、武力の向上に結びつくような青銅器自体を生産しない、**という２重の意味での脱個人化を遂げるのである。

(４)まとめ

本節での分析の結果、まず列島初期の武器形青銅器である細形銅剣は、関門海峡東西において、着柄方法と出土状況に大きな差異が生じていることが判明した。そして、北部九州地域の細形銅剣のあり方は、むしろ対馬海峡をこえた朝鮮半島における状況に類似しているのである。さらに中・四国地方以東にも、中期後葉には鉄剣の出現が認められたが、

副葬品としての検出例は認められなかった。また、当地域に特徴的な武器形金属器の出土状況について検討した結果、希少な青銅製武器は、朝鮮半島や北部九州地域で一般的であった所作、つまり副葬品としては消費されず、長期保有や転用、そして埋納品として最終的には消費されることが一般的であった。このような消費形態を先学の見解を検討した上で解釈するならば、希少な器物が特定個人に独占されることを避けることにより、地域社会全体の秩序維持をはかるという共同体的「規制」がうかがわれたのである。ただし、人骨の殺傷痕や埋葬施設出土の峰部片の存在より、中・四国地方以東においても北部九州地域同様、武器としての実際の使用が金属製武器に対して想定できる。

では、以上のような金属製武器の普及過程と共同体規制を、武器の発達および地域性の面から、いかに整理することができるであろうか。まず、重要となるのが朝鮮半島および北部九州地域で金属製武器に付加されていた階層区分機能が、以東の地域では拒絶されているという点である。金属製武器が当地域において一貫して埋納品として出土するとともに、武器形金属器が形態変化を遂げて非実用品化する点も、この階層性の拒絶という観点から理解できよう。つまり、金属製武器については明らかに実用的な使用が認められる一方で、中・四国地方以東の社会では、脱個人化をはかる目的で、金属製武器を副葬しないばかりか、本来の実用的価値までも否定する非実用的な武器形青銅器の生産および消費を行うのである。優れた新来利器である金属器の実用性、この場合は殺傷能力を捨ててまでも、共同体秩序を優先した選択が、武器形金属器に認められることは、中・四国地方における武器そして武力の社会的意味を考えるうえで非常に示唆的である。

ただし、これらの分析、とくに中・四国地方以東の分析は北部九州地域と比べて出土数の少ない金属製武器を用いた分析であることは否めない。そこで、次節では中・四国地方以東において豊富に分布する石製武器を分析することにより、北部九州地域と当地域の差異の背景について、さらに迫っていこうと思う。

【注】

1)ただし、遠賀川流域の嘉穂郡嘉穂町鎌田原M1や田川郡大任町柿原などの資料については、全長が 10 cm近くあるため、峰部副葬の可能性が指摘されていることから(福島1998)、その取り扱いには注意が必要である。

2)下ノ郷遺跡出土の銅剣の詳細については、吉田広氏にご教示いただいた。記して感謝

します。

2　石製武器の展開と社会的機能

(1)はじめに

第1章で検討したように弥生時代前期において北部九州地域以外の地域では磨製石剣類は散発的にしか認められなかった。しかし、弥生時代前期末以降になると中・四国地方以東でも、石剣類の増加が打製石器、磨製石器を問わず認められるようになる。そこで、本節では、弥生時代中期を中心に中・四国地方から近畿地方において盛行する石鏃以外の武器形石器[1)]を中心に、その流通や消費形態について検討することにより、前節で明らかとなった中・四国地方以東の武器の社会的意味の特殊性についての具体的な検討を行う。

これまで武器形石器は、石剣や石槍などさまざまな名称で報告されているが、以下では機能を限定しない尖頭器という用語をまず使用し（増田 1978:p.88)(蜂屋 1983:pp.40 ～44）、石器自体の分析から機能が推定できるものについてのみ、個別に名称を与えていくこととする。ただし、先行研究に言及する場合は各研究者が使用した呼称を尊重する。

(2)研究史とその問題点

①磨製尖頭器

いわゆる磨製石剣の研究は朝鮮半島と北部九州地域を中心として、多くの蓄積が戦前より存在する。それに対して、本節でとりあげる中・四国地方以東の磨製石剣を対象にした研究は相対的に少ない。そのために、形態や存続時期に違いがあるのにもかかわらず、朝鮮半島や北部九州地域における磨製石剣の分類、例えば鉄剣形といった名称が、近畿地方の磨製石剣にもそのまま使用されることが、今日においても一般的である（長沼 1986・平井 1991）。

この鉄剣形磨製石剣という名称の誕生は古く、その起源は戦前にさかのぼる。それは梅原末治がおこなった磨製石剣の4分類（梅原 1922）の1つに対して、高橋建自が「斷面概ね菱形を成して鎬があり、一見鐵劍に類せる」ことから鉄剣形と呼称したことに始まる。ここで注意が必要なのは、鉄剣形磨製石剣には形態上の相違がかなり認められることを、すでにこの時点で高橋が指摘していることである（高橋 1923:p.21）。また他の磨製石剣とは違い、鉄剣形磨製石剣には堅緻な石質を使用したものがあり、さらに打製石槍との形態上の類似があることを、梅原が指摘していることも重要である（梅原 1924:p.38）。

その後、しばらくの間、近畿地方の磨製石剣についての研究は低調であった。しかし、佐原真は弥生文化全体に関する考察のなかで、近畿地方の磨製石剣についても次のように言及している（佐原 1970）。佐原は、磨製石剣を「金属の武器を模した粘板岩や砂岩製の中期後半に属する石器」、銅剣形磨製石剣を「身の中央に突起、その左右に溝を作った銅剣の形を忠実にまねた形式」、鉄剣形磨製石剣を「身の断面形が扁平な菱形をなし鉄の剣に似た形式」と定義付け、さらに鉄剣形磨製石剣が、東北地方を含めた弥生文化が及んだ全域に広く認められるのに対し、銅剣形磨製石剣は、畿内地方北部とその周辺固有の石器であるとした。この論考は、さまざまな遺物の分析から、近畿地方の弥生社会の様相を明らかにした画期的なものであり、近畿地方の磨製石剣についても、地域性の面で新たな意義付けがなされている。しかし、多様性が指摘されている鉄剣形磨製石剣という分類が、そのまま踏襲されていることは問題であろう。

このように梅原の磨製石剣分類がその後も継承されるなかで、中村友博は近畿地方の武器形石器に新しい認識を示した。中村は、打製石槍と呼ばれていた石器と近畿地方の磨製石剣の共通点を指摘し、それぞれを畿内式打製尖頭器、畿内式磨製尖頭器と命名した（中村 1980a）。そして続く論考（中村 1980b）では、さらに詳しく畿内式磨製尖頭器を定義付けている。それは明確な茎がなく、長く平行する両側縁がそのまま柄部に移って終わること、鏑の有無に関係なく基部に近い両側縁の刃部をすり潰していること、全長が 10 cm をこえるという定義である。ここにおいて近畿地方の磨製尖頭器は、初めて朝鮮半島や北部九州地域出土の磨製石剣分類とは、異なる定義と名称が与えられたのである。しかし、この論考でも、その分類案を生かした磨製尖頭器の分析はそれ以上進められてはいない。

銅剣形磨製石剣については、種定淳介が形態の分析から３型式に分類し、各型式の時期差と地域差について詳細に論じている（種定 1990a）。筆者も、銅剣形磨製石剣の性格についての考え方は氏と異なるものの、氏の分類案自体に異論はない。

北部九州地域以外において磨製尖頭器の分布は近畿地方に集中する。しかしながら、銅剣形磨製石剣については種定の研究により大きな進展がみられたものの、それ以外の実態については不明瞭な点が多い。そこで、次節では近畿地方の磨製尖頭器を中心にその動態の分析を行うこととする。

②打製尖頭器

次に打製尖頭器の研究史についても検討しておきたい。鳥居龍蔵は畿内地域の石器を概

観するなかで、具体的分類基準を示していないものの、打製の石槍とともに打製石剣も存在するとの指摘をすでに行っている(鳥居 1917:p.11)。その後、藤森栄一も畿内地域に特有な石器として長大な打製石槍の存在に注目している(藤森 1943:p.10)。また、奈良県磯城郡田原本町唐古・鍵遺跡の報告書では、石槍と尖頭器が区分されて報告されており、さらに共伴土器との関係から小型の石槍から長大な打製石槍への変遷が想定された(藤岡・小林 1943)。

春成秀爾は打製石槍の下半部縁辺に刃潰しがみられることから、打製尖頭器は、磨製石剣同様、鉄剣を模倣して作られた石剣であるとした(春成 1978:pp.84 ～ 85)。同様の見解がその後、中村友博によって詳細に言及されているのは先に指摘したとおりである(中村 1980a・b)。

また、禰宜田佳男は打製尖頭器を次の３つに分類した(禰宜田 1986)。まず幅 2.5 ～ 5.0 cmで全長 12 cm未満のものをⅠ類、全長 12 cm以上のものをII類とし、さらに全長 12 cm以上で幅 5.0 cm以上のものをIII類とした。さらにⅠ類は槍、II類のうち両側縁が平行で厚みがなく掌の幅に等しい８～ 10 cmの長さの刃潰しが認められるものを短剣、III類を大型の槍や戈というように、各類の機能を想定している。

近年、粟田薫は打製石剣の製作技法に注目し、鉄製パンチの使用が想定できることを論じ(粟田 1995)、さらに打製尖頭器の製作段階について製作時に生じる剥片のありかたを詳細に分析している(粟田 1997)。また、村田幸子は近畿地方の打製尖頭器を法量と形態から分類した(村田 1992・1998)。そして、大形の打製尖頭器が、磨製石剣を起源として成立した可能性を指摘し、部分的に研磨がなされている打製尖頭器を磨製品から打製品への過程で生じた移行期の尖頭器であるとの認識を示した。村田が、磨製、打製の尖頭器に葬送儀礼とも関わる儀礼性を強調していることには注意が必要である。

以上のように打製尖頭器についても、石剣としての機能が明らかとされ、磨製石剣等との形態的、機能的な関連が論じられるにいたっている。ただし、いずれの論者も、多様な磨製、打製の尖頭器を包括的に区分できる基準を示されていない。そこで、本節では磨製と打製尖頭器との関係についても、注意を払いながら以下の議論を進めていくこととする。

(３)磨製尖頭器の分類

①製作技法

磨製尖頭器はその名のとおり研磨によって器形が作り出される石器である。したがって器形の決定から刃部形成にいたる研磨工程が、磨製尖頭器の最終形態の決定において重要な位置を占めるという認識に基づき、各資料を観察していった。そしてその結果、磨製尖頭器の製作技法は、次の４種に分類できるとの認識に至ったのである（図 11）。

A技法　外形を作り出すにあたり、中央付近で研磨の角度を変える。また同時に、刃部も形成される。その結果、断面は菱形となり、中央に一本の直線的な鏑が作り出される。表面にみられる研磨痕は、一定方向である場合が多い。

B技法　研磨により扁平な面をつくり、その後、両側辺に刃を付けるための研磨を外形形成時とは違う角度でおこなう。その結果、断面は扁平な六角形となり、平面的にみると逆Ｙ字の鏑が観察できる。中央平坦面の研磨痕と刃部の研磨痕の方向は、異なる場合が多い。

C技法　研磨工程は基本的にＢ技法と同じであるが、縁辺部に刃をつけるためだけに研磨をおこなう。したがって、Ａ技法やＢ技法にみられるような鏑は、形成されない。

D技法　研磨の角度は一定せず、結果として断面形は不定形な杏仁形となる。Ａ技法やＢ技法のような一定の法則に基づく鏑の形成はみられない。

Ａ技法を用いて製作された例としては、京都府長岡京市神足遺跡から出土した全長 18.3 cmのもの（図 11 —１）をあげることができる。この資料には明確な鏑が中央部に観察でき、鏑の左右において研磨痕は同一方向である。つまり、砥石を当てる角度を変化させて、直線的な鏑を作り出すが、一定方向から研磨するため、表面に観察できる研磨痕は同一方向なのである。また、幅２㎜前後の刃つぶし研磨面が、基部から約９cmに渡り両側縁に認められる。一方、Ａ技法を用いて製作されたもののなかには、比較的長さの短いものも少数であるが存在する。例えば、大阪府茨木市東奈良遺跡出土例（図 11 —２）は全長 11.7 cmと短い。しかし製作技法は神足例と同じで、一定の方向からの研磨で角度のみを変え、中央の鏑を作り出している。ただし側縁の刃潰し研磨面は、基部から５cmほどの範囲にしか施されていない。

Ｂ技法を用いて製作された例としては、奈良県橿原市新沢一遺跡出土例（図 11 —３）や、奈良県天理市平等坊岩室遺跡出土例（図 11 —４）があげられる。この２例では、まず研磨により中央の平坦部分を作り出し、次に研磨方向を変え、刃をつけるための研磨を

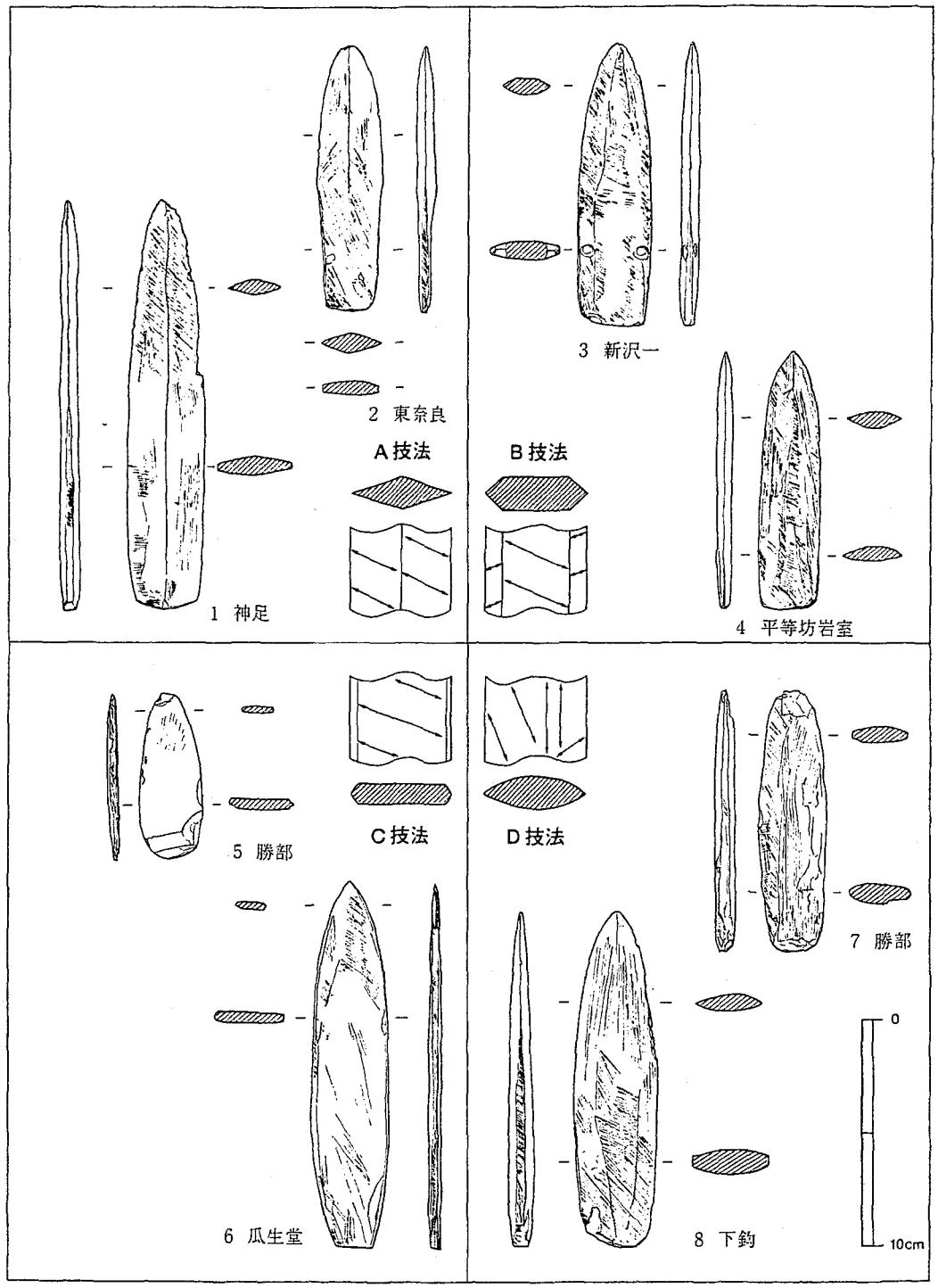


図11　磨製尖頭器の製作技法（S = 1/3）

両側縁に施す。また、A技法を用いるものと比較して、明確な鏑を形成しないものが多い。つまり、B技法はA技法ほど外見を重視した技法ではないといえるかも知れない。ただし、奈良県北葛城郡当麻町竹ノ内・キトラ山遺跡出土の資料（樋口 1936:p.21）のように、明確な逆「Y」字の鏑を磨ぎだすものも、少数であるが存在する。

C技法を用いて製作された例としては、瓜生堂遺跡出土例（図 11 —6）があげられる。この資料は石庖丁のように扁平であるが、両側辺が線対称であり先端から2cmほどの範囲の両縁に刃が作り出されていることから、磨製尖頭器であると考えられる。また大阪府豊中市勝部遺跡出土例（図 11 —5）のように本来刃がつけられるべき範囲全面にわたり、2㎜前後の刃つぶし研磨が施された特異な例も、C技法で製作されたもののなかには存在する。

D技法を用いて製作された例としては、勝部遺跡出土例（図 11 —7）や滋賀県栗太郡栗東町下鈎遺跡出土例（図 11 —8）をあげることができる。これらには、表面に平坦な面が作り出されてはおらず、そのため明確な鏑は観察できない。また基部端部が丸く整形され全体としては木葉形となるものが多い。さらに全長 20 cmに満たないものが、ほとんどを占めるのもD技法で製作されたものの特徴である。

②各製作技法と法量の関係

次に法量と各技法の関係について、詳しく考えてみたい。まず、全長と各技法の関係をみてみる。図12からは、全長13 cmをこえる磨製尖頭器のほとんどにA技法が用いられ、一方 13 cm未満ではA技法がむしろ少数派となり、B技法やD技法で製作されたものが多くなるというきわめて明確な傾向が認められる。したがって、A技法は 13 cmを超える大形品を製作する場合、もっぱら用いられる技法であるといえよう。従来、全長5cm程度のものから 30 cmを超えるような大形のものまでが、磨製石剣という1つの名称で呼ばれてきたが、以上のように磨製尖頭器には全長13～14 cm前後を境にして、大小で製作技法が異なるのである。さらに全長 15 cm以上の磨製尖頭器には、側縁基部付近に長さ8cm前後で幅約2㎜の研磨面が、ほぼ普遍的に認められるのである。この8cmという長さは、手でモノを握る幅に相当するので、この基部両側縁の全長8cm前後の研磨面は、石器自体を直接握り使用する目的の加工である可能性が高い。そこで、本稿ではこの研磨面を「握り研磨面」と呼称することとしたい。

次に幅、厚さと各技法の関係について考えてみたい。すでに製作技法の違いと握り研磨

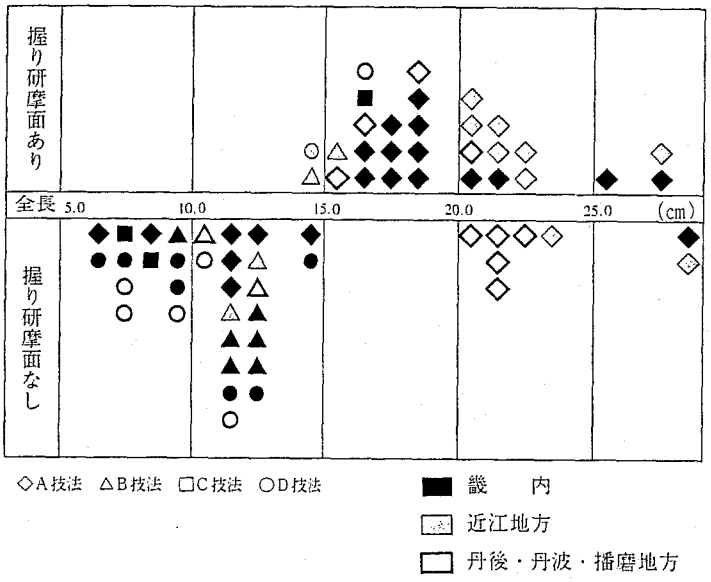


図12　磨製尖頭器各製作技法と全長、握り研磨面の関係

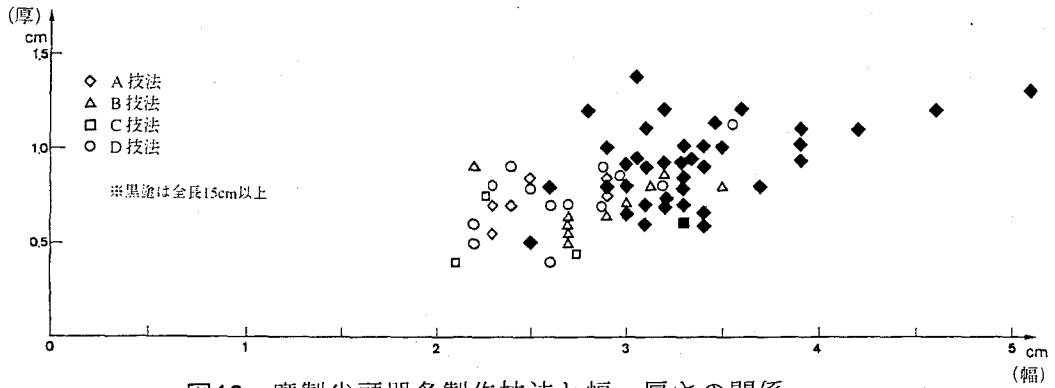


図13　磨製尖頭器各製作技法と幅・厚さの関係

面の有無から、全長 14 cm前後で磨製尖頭器の様相が異なることを確認しているので、その点を考慮し、幅、厚さと各製作技法の関係を示したのが図 13 である。この図からは、扁平に製作されることを特徴とするC技法以外、各技法ともその法量分布に際立った傾向は認められない。とくに刺突に使用する場合、重要な要素である厚さが、C技法以外の各技法ともあまり違わないという事実は重要である。つまり、厚みの点からみると製作技法の違いは、素材の法量や使用目的の違いを反映したものではなく、それ以外の要因、例えば外見上の見栄え、あるいは製作者の属する集団の技術系譜が考えられるのではないだろうか。とくに外見という観点からこれら資料を観察していくと、一見して鏑が明らかなものと、よく観察しないと鏑の存在が不明確であるものが存在する。そして、前者はA技法を用いて製作されたものでも 13 cmを超える大形品に多く認められるのである。つまり、明瞭な鏑は、A技法で製作された大形品の特徴なのである。

③磨製尖頭器の形式分類

以上のように、近畿地方の磨製尖頭器はその大小において大きな差異を認めることができる。すなわち全長13 cm以上の磨製尖頭器には、

・視覚的な鏑

・握り研磨面

・A技法の卓越

という3つの要素がみられ、それ未満の長さのものとは、かなり違った様相をみせるのである。とくに全長の違いと握り研磨面の有無は、直接、使用方法の違いを示しているといえよう。そこで、これらの機能差を形式[2]差と認識して、次に磨製尖頭器を機能別に分類したい。

まず、従来磨製石鏃と呼ばれており、本稿でも前章において磨製石鏃として分析を行った小形の磨製尖頭器については、その鏃という機能推定に異論はない。ただし、他の磨製尖頭器と比較する場合は小形磨製尖頭器として、ここでは議論を進める。また磨製石鏃の一部には、より大きな磨製尖頭器の切先などを鏃として再利用したものがある。再利用品の特徴としては基部に欠損面が観察できる点があげられ、他にも通常の鏃に比べて幅、厚さそして重量が大きくなるという点があげられる。

次に磨製石鏃以外で、前述の3つの条件を満たさない全長 13 cm以下の磨製尖頭器について考えてみたい。これらの磨製尖頭器は全長の短かく、握り研磨面が認められないこと

から、石器自体を直接握るような使用は考えられない。したがって、使用時には別に柄が必要であるので、この一群は柄の長短により短剣あるいは突槍や投槍として使用されたと考えられる。また、この使用法の推測を支持する武器形木器が、大阪府八尾市亀井遺跡から出土している（図 14）。別柄の槍としての使用が推定できる磨製尖頭器を、ここでは中形磨製尖頭器と呼称したい。ただし、この中形磨製尖頭器とより大形のものの区分においても、前述の再利用品の存在という問題がある。しかし中形と大形品では傾向として、幅と厚さの法量分布に相違があることは明らかであるので（図 13）、この点から、ある程度、中形品とより大形のものとは区分可能であると考えられる。

次に全長 13 cm以上の磨製尖頭器について考えてみたい。この一群については、これまでの分析から、刃部と柄部が一体として作られた短剣であると考えるのが、もっとも妥当である。さらに①視覚的な鏑、②握り研磨面の存在、③A技法で製作という３つの特徴が認められるような規格性の高いものが、全長 13 cm以上の磨製尖頭器のなかでも多数を占めるのは重要である。そこで、これらの規格性の高い磨製尖頭器をとくに「有鏑磨製短剣」と呼称し、以下の論を進めたい。この有鏑磨製短剣は図 12 でも明らかなように全長 14 ～ 22 cmに集中し、法量面でも規格性が高いのである。ただし、全長 13 cm以上の磨製尖頭器のなかには、幅や厚みに関しては先程述べた有鏑磨製短剣と変わらないにもかかわらず、握り研磨面にあたる部分が刃部に比べて狭まり茎状になっているものや、左右の刃潰しの長さが異なるものが少数であるが存在する（図 17 —4）。これらは石器自体を直接握って使用するのに不適であり、また左右の刃潰しの幅が異なることが多いことから、戈として使用された可能性が高い(中村 1996・三好 1997）。いわゆる磨製石戈が銅戈の模倣石器であるのに対し、ここでいう磨製石戈は模倣品ではなく、実用を目的とした石製の戈であると考えられる。以上の検討から、短剣もしくは戈としての使用が考えられるこれら磨製尖頭器を、ここでは大形磨製尖頭器と分類する。

最後に法量面、とくに幅が大形磨製尖頭器を大きく上回る磨製尖頭器について考えてみたい。このような特徴をもつ類例は出土例が少なく、そのほとんどが破片資料であることから、不明な点が多い。しかし大形磨製尖頭器のように、それ自体を握って使用することは困難であるので、別に柄を着けて戈あるいは槍（下條 1982）として使用された可能性が高い。大形磨製尖頭器と比べて例外的に大きいという意味で、このような磨製尖頭器を極大形磨製尖頭器と命名したい。極大形磨製尖頭器は前期に多数の類例がみられ、さらに素材石材についても砂岩やサヌカイトなど粘板岩以外の石材を用いて作られたものが多い

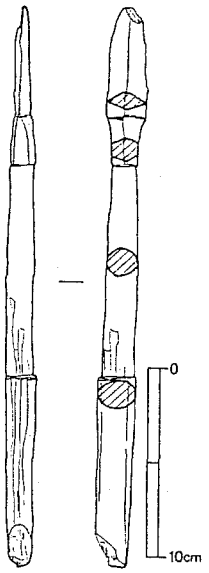


図14　大阪府八尾市亀井遺跡出土の中形磨製尖頭器模倣の武器形木器（S＝1/4）

のが特徴である。

また以上の各形式のほとんどに鋭い刃部形成と刃こぼれが認められることから[3)]、尖頭器として実際に使用されていたことを否定するのは困難である。この点は、以下の議論を進めるにおいて重要である。

(4)打製尖頭器の形式分類

①分類

次に打製尖頭器の分類を行う。ただし、研究史を検討するなかで紹介したように打製尖頭器の具体的な分類案としては、禰宜田佳男（禰宜田 1986）や村田幸子(村田 1998)により、提示されている。とくに法量を基準とし、各型式の機能についても言及した禰宜田佳男の分類案、すなわち、

・全長 12 cm・幅 2.5 ～ 5.0 cm未満 —Ⅰ類(槍)

・全長 12 cm以上 —II類(短剣)

・全長 12 cm以上・幅 5、0 cm以上 —III類(大型の槍・戈)

とした分類は、先に提示した筆者の磨製尖頭器の形式分類と基本的に一致する。このように打製尖頭器についても、磨製尖頭器分類と対応するような分類が可能であり、さらに同様の機能推定がおこなわれていることは重要である。

さらに禰宜田は平面形についても、側縁の形態に注目して３つに区分している(図 15)。そこで、禰宜田の分類に準じて、側縁の一カ所に最大幅があり、尖頭部および基部に向かって幅が減じるものを木葉型とし、両側縁が平行なものを側縁平行型、また柄状に基部幅を増したり、刃部と柄部の幅を変えたりするものを側縁柄型とする。これら平面形と全長の関係を示したのが図 16 である。この図からは全長 13 cm前後で平面形が、木葉型から側縁平行型そして側縁柄型へと変化していることがみてとれる。

石器自体を直接握るのに適した側縁柄型や、少なからずの資料に側縁下半に刃潰しが認められ、一部には樺巻きがなされたものもみられる側縁平行型が、全長 13 cm以上の打製尖頭器の大多数を占める。したがって、先述の磨製尖頭器同様、13 cm以上の打製尖頭器には、石器自体を直接握って使用する短剣としての機能が想定可能である。

そこで、打製尖頭器に関しても先述の磨製尖頭器と対応するよう、中形打製尖頭器（禰宜田分類Ⅰ類）・大形打製尖頭器（禰宜田分類II類）・極大形打製尖頭器（禰宜田分類III類）と分類して、以下の論を進めたい（図 17）。このうち大形打製尖頭器には、丁寧に

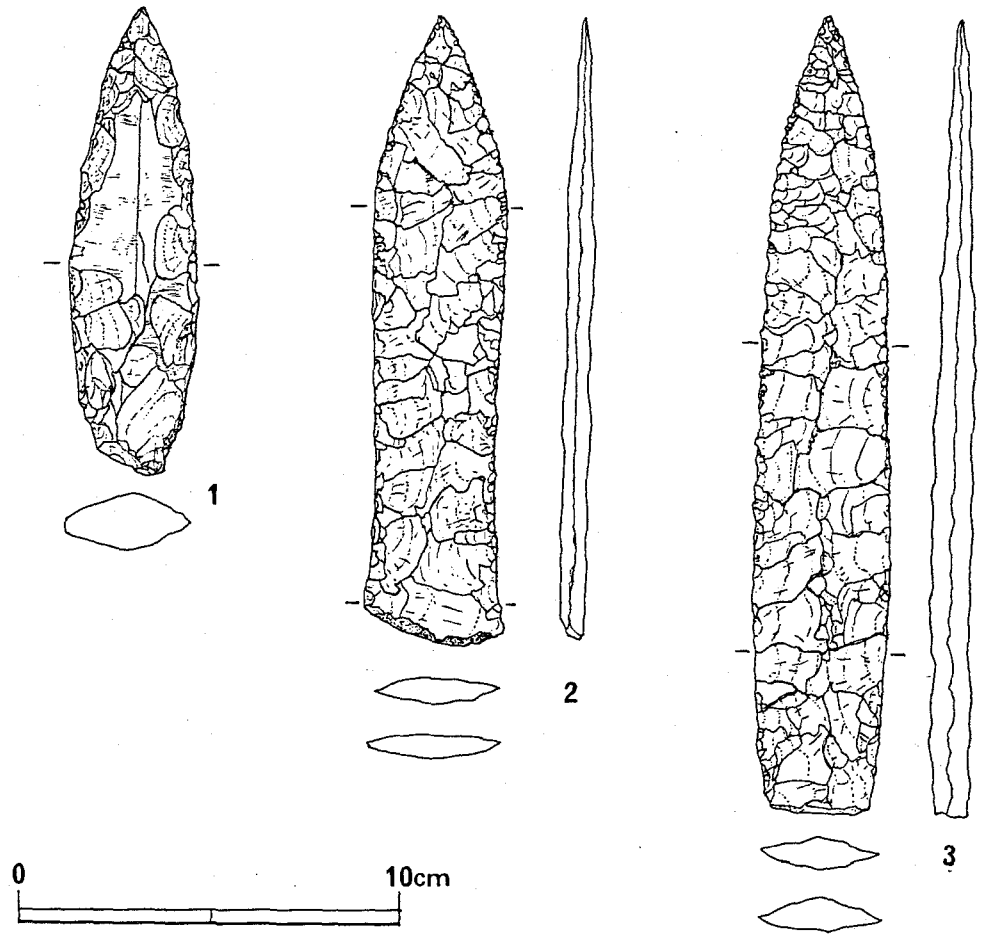


図15　打製尖頭器の平面形分類(S＝1/2)
1恩智(大阪府八尾市)　2美園(大阪府八尾市)　3森小路(大阪府大阪市)

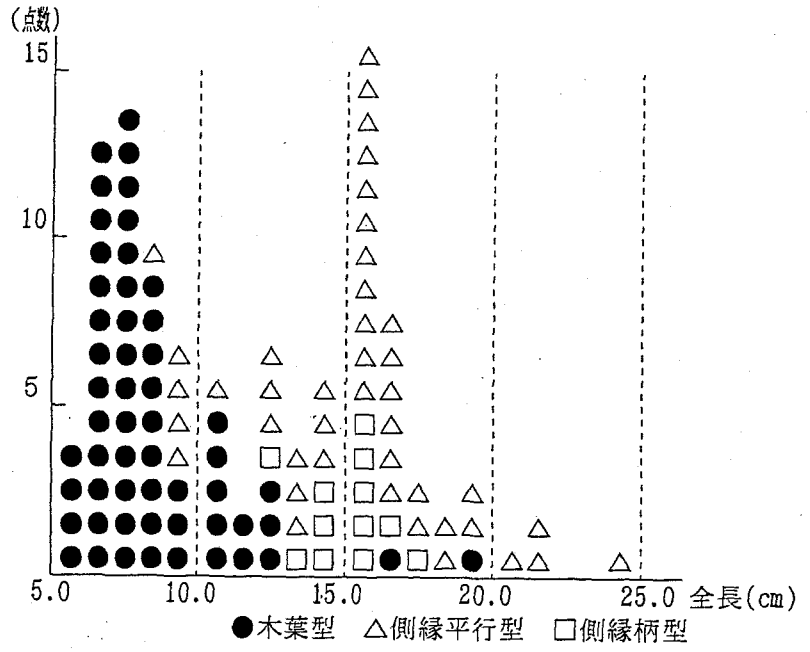


図16　打製尖頭器の平面形態と全長の関係

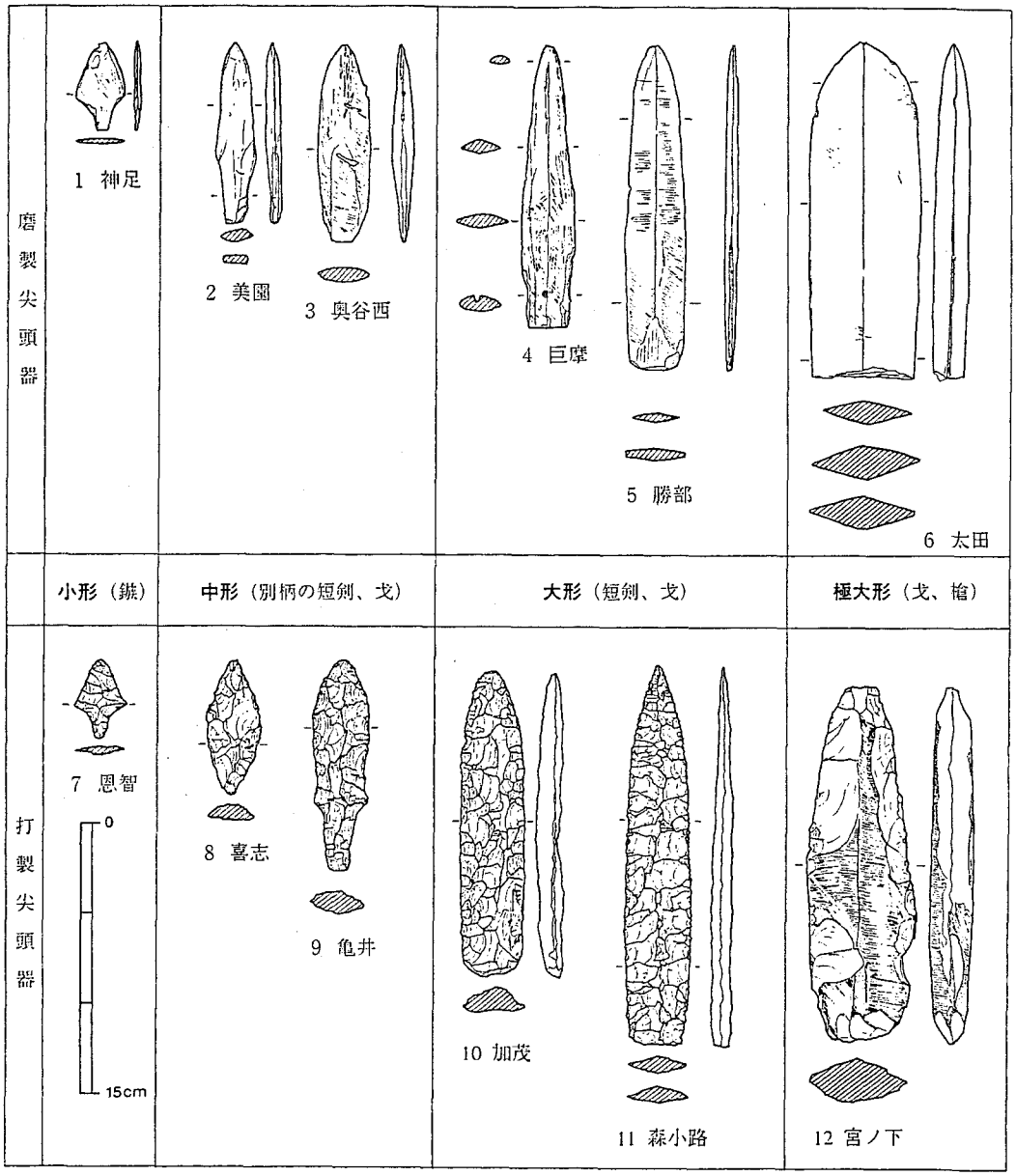


図17　磨製尖頭器と打製尖頭器の各形式（S＝1/4）

調整剥離が加えられ、鉄製工具の使用が想定されているような(粟田 1995)精微な鋸歯状の加工が施されたものが、少なからず認められる。このような加工は直接その機能に影響するとは考えられない工程であり、そのような工程がわざわざ追加されているものが、大形打製尖頭器に多数認められるということには、注意が必要である。

また、極大形打製尖頭器には、木葉形になるものが多いこと、次章の図3—2のように基部に抉りをもつものが、しばしば見受けられる。さらに大阪府東大阪市鬼虎川遺跡より出土した木製品のなかには、極大形打製尖頭器と組み合わさったカシ材製で全長約 67 cm の長柄が出土していることから(芋本 1987:p.30)、極大形磨製尖頭器と同様、戈あるいは大型の槍としての機能が考えられる。

②生産と流通

中形と大形の打製尖頭器の違いは、未成品や完成品の原礫面残存状況の相違つまり製作工程の違いからも認められる（図 18）。中形打製尖頭器には、完成品にもしばしば平面に原礫面が残存していることがあり、基端部には原礫面が残されているものはほとんどない(図 18 —1～3)。したがって、拳大よりやや大きい亜角礫もしくは円礫を輪切り状に分割して得られた剥片を素材とし、調整していくという製作工程が推測できる(進藤 1985)。

このような作業工程を推定させる原石や未製品は、原材産出地である二上山から離れた中河内地域においても認められる(西村 1982)。それに対して、大形打製尖頭器には基端部に原礫面が普遍的に認められるが、平面には原礫面が観察できるものは未製品においても、ほとんど存在しない。例えば、大阪府富田林市喜志遺跡出土の未成品接合資料（図 18 —4）は、長辺 18 cm、短辺 12 cm、厚さが5cm以上の周辺側面に原礫面をもつ平面菱形の板状剥片であったと推測されており(粟田 1997:p.30)、その長軸両端の対角をなす原礫面を残し、素材の長さを最大限、製品に生かそうという試みが認められる。つまり、大形打製尖頭器製作における最も重要な課題は、いかに素材の長さを保ったまま製品を作り上げるかということであり、そのためには人頭大もしくはそれ以上の原石を板状に剥離して、素材剥片を用意する必要があるのである。

ところで、大形打製尖頭器と中形打製尖頭器の違いは、流通形態の違いとして蜂屋晴美によりすでに指摘されている。蜂屋は、各集落の原石そして未成品の出土量と質的な検討から、次のようなモデルを提示した(蜂屋 1983)。それは大形打製尖頭器が製作可能な大

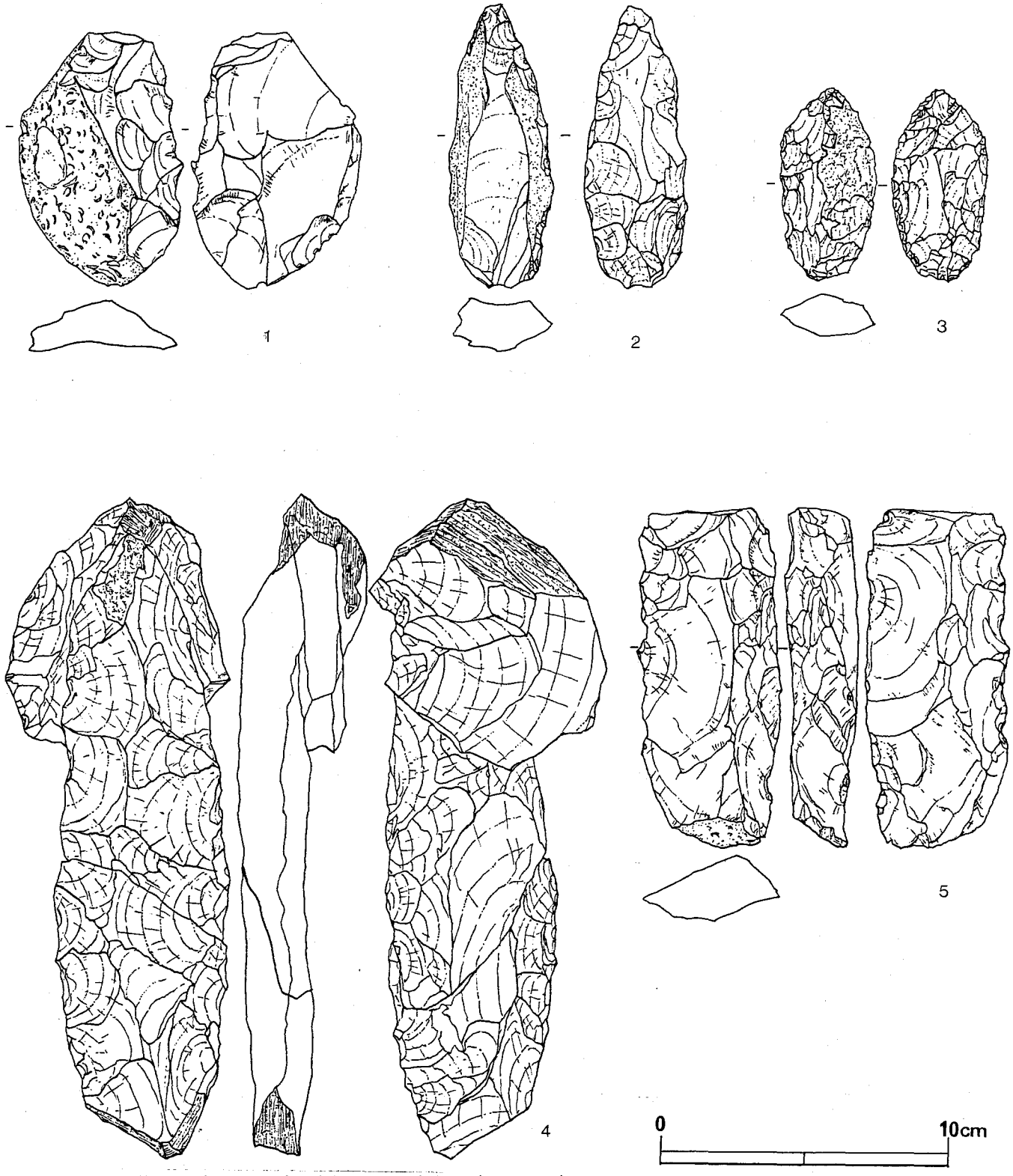


図18　中・大形打製尖頭器の未製品(S＝1/2)

1瓜生堂(大阪府東大阪市)　2・3亀井(大阪府八尾市)　4喜志(大阪府富田林市)

5田尻峠第2地点(奈良県香芝市)

形の剥片や未成品が大阪府富田林市喜志遺跡などの二上山近辺に限って出土することから、二上山近辺において少なくとも未成品段階までの集約的な大形打製尖頭器の生産がおこなわれ、各地に流通したとする。一方、中形打製尖頭器はその素材となりうる大きさの剥片が、二上山から離れた集落でも認められることから、広い範囲での生産を認めたのである。

では、この問題について製品の規格性の面から検討してみよう。打製尖頭器は両面から細部調整を施すことにより、平面形態と断面形態を整えていく。その過程で重要なのは、いかに厚さを整えるかである。図 19 で模式的に示したように厚さを薄くしていくためには、中心軸をこえて広く浅い調整剥離を連続して行わなければならない。このような剥離を連続して行うと、当然破損の危険性は増す。また、全長の大きい大形品ほど剥離回数は増すわけであるから、さらにその危険性を増す。そこで、こういった危険性をへて整えられたと考えられる打製尖頭器の厚さと全長を比較したのが図 20 である。図 20 からは相対的に剥離回数が少ない中形打製尖頭器よりも、むしろ大形品の厚さに均質性が認められる。例えば、側縁柄型は厚さ 0.7 ～ 1.2 ㎝程度に集中し、図 15 —2 のように極めて薄く仕上げられた個体も存在する。つまり、大形打製尖頭器は蜂屋が指摘したように生産に地域的な偏在が認められるのみならず、その製品についても中形品に比べて規格性が認められるのである。

③分布

次に大形品と中形品の分布を示したのが図 21 である。図 21 では、打製尖頭器のもう一つの中心地である中部瀬戸内地域の状況も合わせて図化した。ちなみに中部瀬戸内地域では、打製石器の石材として香川県中央部に位置する金山産のサヌカイトが用いられることが一般的であり、打製尖頭器類もその例外ではない(山中 1992)。中部瀬戸内地域における打製尖頭器の全長と厚さの関係については図 22 に示したとおり、近畿地方で確認できた大形品と中形品との厚さの規格性の差異はほとんど認められない。この要因は、素材である金山サヌカイトが二上山サヌカイトに比べて、石目が強く平らな面で節理に沿って割れる特徴があるためである(山中 1992:p.88)。この石材を用いた剥片は平板状になるので、素材剥片時の厚さを減じる必要性がほとんどない。したがって、金山サヌカイトを用いて製作される中部瀬戸内地域の打製尖頭器のほとんどは、幅の狭い調整剥離を施すのみで完成品に仕上げられ、素材剥片時の厚さが、完形品にもそのまま反映される場合が多い。

打製尖頭器の分布に議論を戻そう。中・四国地方の打製尖頭器分布で興味深いのは、中

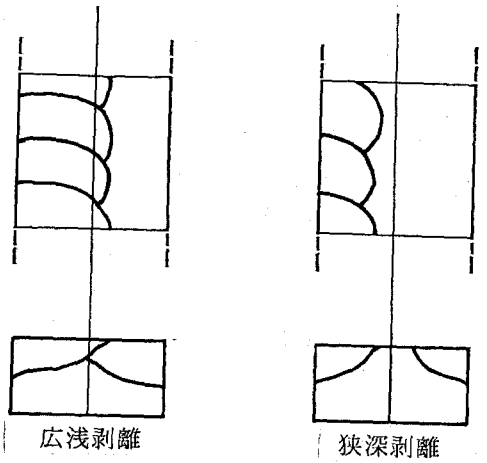


図19　打製尖頭器剥離技法の分類とその類例(S＝1/2)

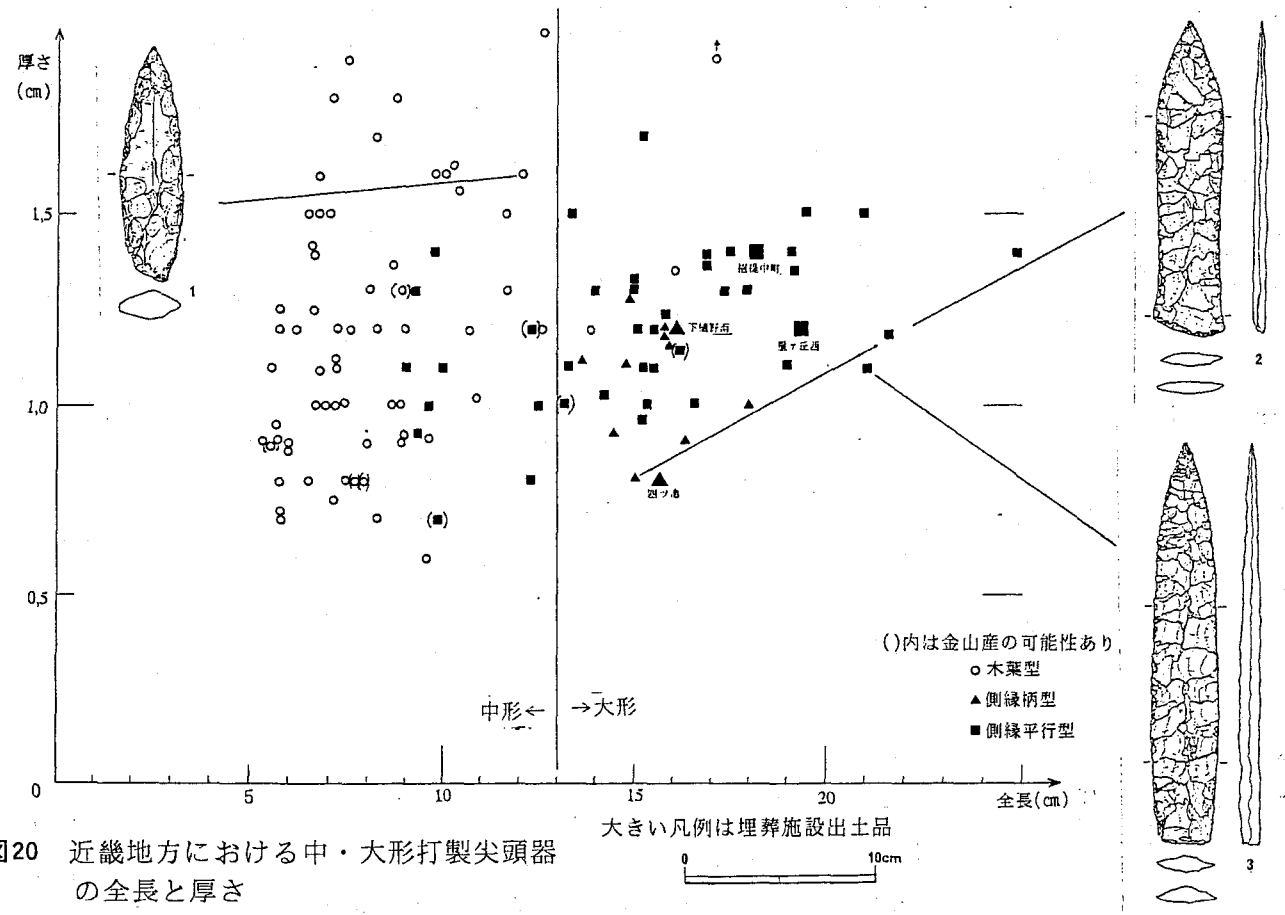


図20　近畿地方における中・大形打製尖頭器の全長と厚さ

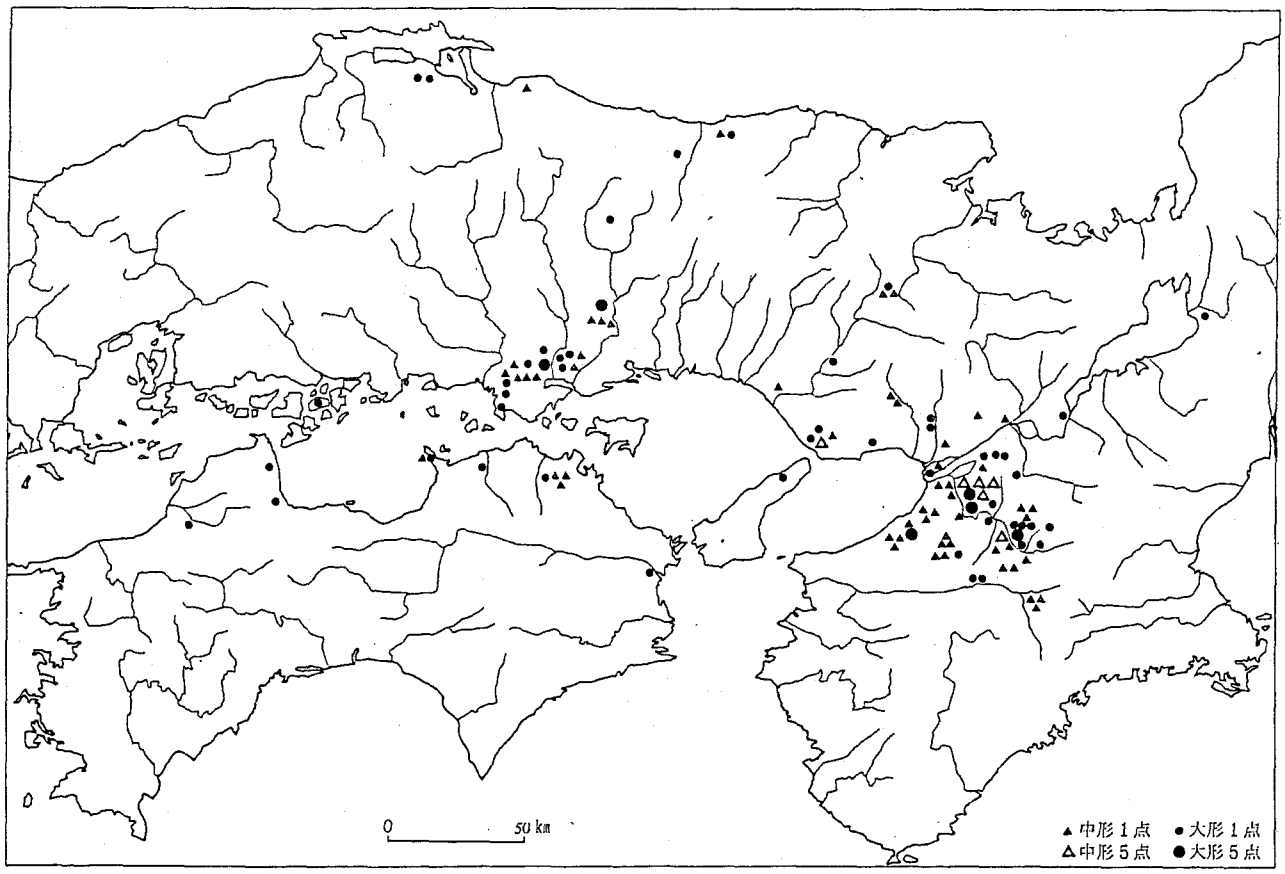


図21　中・大形打製尖頭器の分布

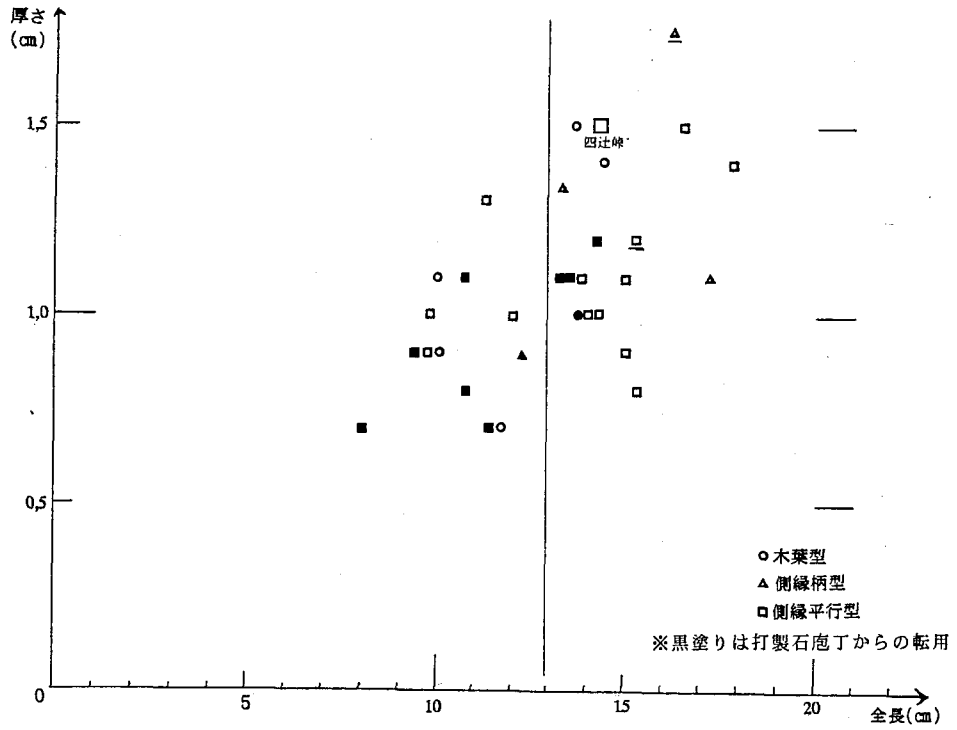


図22　中部瀬戸内地域における中・大形打製尖頭器の全長と厚さ

形品に比べて大形品がより広い範囲に分布するという点である。図 21 からは、例えば四国島南西部愛媛県下では大形打製尖頭器が３点認められるにも関わらず、中形品は１点も認められない。同様に広島県においても大形品が１点分布するのみである。さらに日本海沿岸地域でも、松江平野に認められる打製尖頭器は２点とも大形品であった。中形品に比べて、大形品がより広範囲に分布する背景には、大形品に広域流通、移動を促進するような特別な社会的機能が付加されていたと考えられる。同様の分布状況は、不明瞭ながら近畿地方の大形打製尖頭器の分布にも認められるかもしれない。

(５)大形・中形磨製尖頭器の地域差と存続時期

①地域差について

ここでは、先に設定した磨製尖頭器各形式の分布状況について、もっとも分布が集中する近畿地方を中心に検討する。図 23 で示すのは完形品もしくはそれに準ずる資料の分布であり、破片資料については必要に応じて言及していくことにしたい。

図 23 の上図は中形磨製尖頭器の分布を示したものである。この図でまず目に付くのは、各技法が地域的に偏りをもって分布しているという事実である。

Ａ技法で製作された中形磨製尖頭器は、河内潟周辺[4]に多く分布している。一方、Ｂ技法で製作されたものは大和盆地南部周辺に集中し、他にも丹後地方や近江地方からも出土している。ここで注意が必要なのは、大和盆地周辺部では磨製尖頭器に利用される石材が、他の地域とは異なるという点である。つまり、大和盆地以外の地域では磨製尖頭器石材に粘板岩や頁岩が普遍的に選択されているのに対して（図 24）、大和盆地南部周辺の磨製尖頭器には、紀ノ川流域で産する結晶片岩などの石材が使用される傾向がある（表５）。またＣ技法で製作されたものは、類例が少ないため不明な点が多いが、破片資料を含めて考えると丹後地方などに多いといえる。例えば、京都府舞鶴市志高遺跡からはＣ技法で製作された磨製尖頭器片が多く出土している（京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989）。Ｄ技法で製作されたものは、山城、丹波、丹後地方など近畿地方北部に多く分布している。以上をまとめると、中形Ａ技法品は河内潟周辺地域、中形Ｂ技法品は大和盆地南部周辺地域、中形Ｃ、Ｄ技法品は近畿地方北部に、それぞれ地域的に偏在して分布していることが判明した。

次に大形磨製尖頭器の分布、とくに有鎬磨製短剣の分布について考えてみたい。図 23 の下図からは有鎬磨製短剣という規格性の高い型式が、近畿地方の広い範囲に分布してい

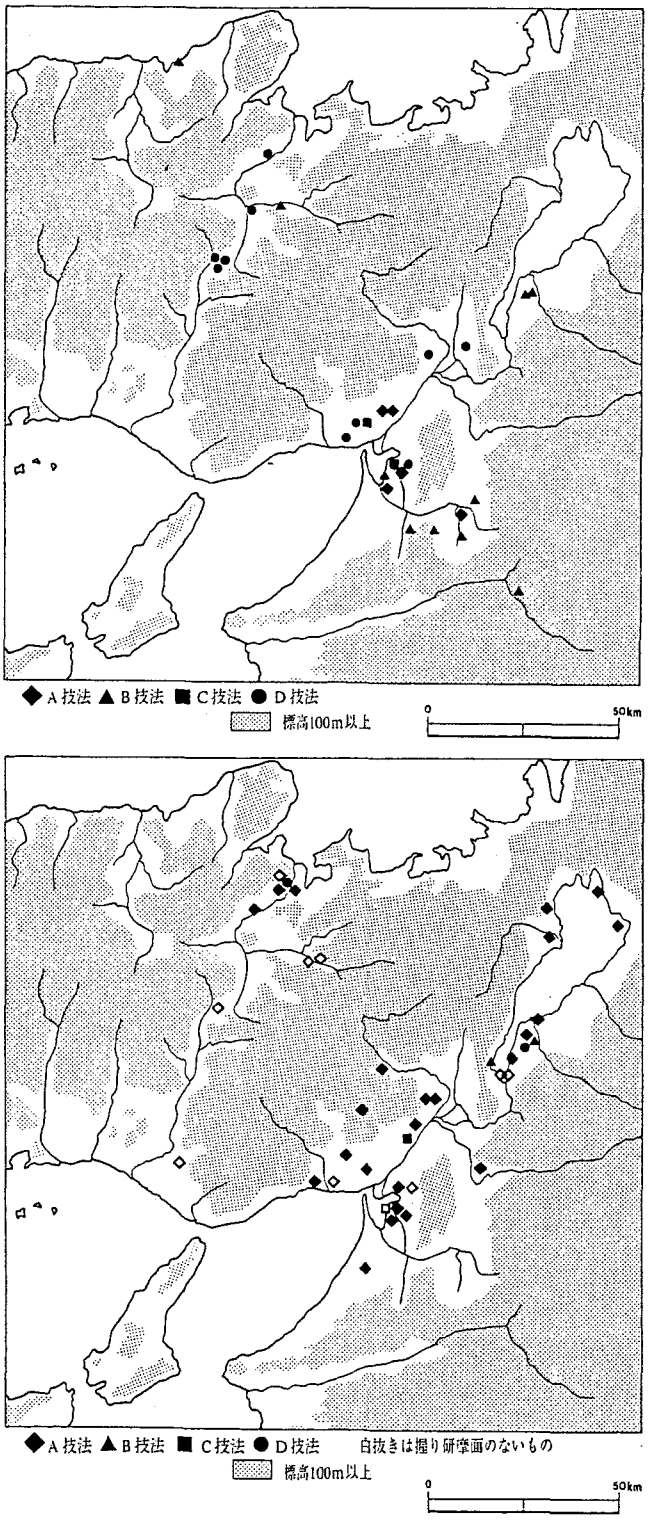


図23　中形磨製尖頭器(上)と大形磨製尖頭器(下)各技法の分布

表５　大和盆地周辺地域における磨製尖頭器

遺跡名	所在	分類	全長(cm)	石材
唐古・鍵*	奈良県田原本町	中A	13.8	黒色粘板岩
新沢一	奈良県橿原市	中B	12.5	斑点入粘板岩
竹ノ内キトラ山	奈良県当麻町	中B	(12.9)	緑泥片岩
平等坊岩室	奈良県天理市	中B	11.5	サヌカイト
宮瀧	奈良県吉野町	中B	7.2	角閃片岩
中野	大阪府富田林市	中B	11.5	緑泥片岩
宮ノ下	大阪府東大阪市	中B	12.6	玄武岩質凝灰岩

*は未発表資料、( )内は復元値

るということがみてとれる。これは上図で示した中形磨製尖頭器各型式の地域的な多様性の存在と比べると、非常に対照的である。また完形の有鎬磨製短剣は、河内潟周辺地域から淀川流域、そして琵琶湖沿岸にかけて多く分布する。さらに京都府福知山市興遺跡（福知山市教育委員会 1995・京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992）、兵庫県神崎郡福崎町南田原長目遺跡（福崎町史編纂委員会 1990）、同県揖保郡太子町川島遺跡（太子町教育委員会 1971）、奈良県磯城郡田原本町唐古・鍵遺跡（京都帝國大學文學部考古學研究室 1943）、三重県四日市市永井遺跡（埋蔵文化財研究会 1992）、津市納所遺跡（三重県教育委員会 1980）などからも破片ではあるが、A技法を用いて製作され、法量的にもみても有鎬磨製短剣の可能性が高い資料が出土しているのである。ただし、丹後地方や丹波地方の大形磨製尖頭器には、握り研磨面がないものが多い。また、前述の図 12 から分かるように、近江地方出土の有鎬磨製短剣は、全体的に他地域のものに比べて全長が数cm長い[5]。つまり、同じ技法で製作され、一見同様にみえる有鎬磨製短剣にも細微な地域差が存在するのである。このことは有鎬磨製短剣の生産体制を考えるうえで重要である。

②生産と流通

次に完成品の分布の意味を考えるうえで、重要である未製品について考えてみたい。大形磨製尖頭器の未製品と考えられる資料は、大阪府では、八尾市亀井遺跡（大阪文化財センター 1984）、茨木市東奈良遺跡、高槻市安満遺跡、豊能郡能勢町大里遺跡（大阪府教育委員会 1986）、京都府では神足遺跡（長岡京市史編さん委員会 1991）、福知山市ケシケ谷遺跡（京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988）、亀岡市千代川遺跡（京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985）、滋賀県では守山市服部遺跡（滋賀県教育委員会他 1986）などから出土している。粘板岩は近畿地方北部の丹波層群で広域に産出するので、石材の産出地を特定するのは困難である[6]。しかし、以上のように淀川流域を中心としてに広域に未製品が出土しているので、少なくともこの地域の大規模集落では、普遍的に大形磨製尖頭器は生産されていたと考えられる。さらに先に述べた近畿地方縁辺地における有鎬磨製短剣の要素の欠落は、丹後や近江地方の有鎬磨製短剣が、摂津や山城地方から運ばれたものではなく、現地で生産されたものであるということを示唆している。この点については、他地域では例のない赤褐色の粘板岩が、丹後地方の有鎬磨製短剣には用いられていることからも補強されよう。

それでは、磨製尖頭器の石材はどのような基準で選択されていたのであろうか。そのこ

とを考えるために、近畿地方において普遍的な石器の一つである磨製石庖丁と中、大形尖頭器類の石材選択状況について検討してみよう。図 24 は各遺跡における磨製石庖丁と中、大形磨製尖頭器に用いられた石材の相違を示したものである。酒井龍一の研究によれば、近畿地方南部では紀ノ川水系産出の結晶片岩が、近畿地方北部では丹波層群に産する粘板岩系の石材が、それぞれ石庖丁の石材として選択されているという（酒井 1974）。この指摘はその後の資料増加によっても裏付けられており、図 24 においても粘板岩系石材の利用は近畿地方の南に下がるにつれて、低下していくという傾向が認められる。これに対して中、大形の磨製尖頭器における粘板岩系石材の割合は南に下がってもあまり低下しない。つまり、石庖丁と中、大形の磨製尖頭器とでは、とくに畿内地域南部において異なった石材選択が認められるのである。この選択差の背景には、道具による価値観の違い、つまり武器である磨製尖頭器の石材には、粘板岩系石材のもつ光沢や黒さといった外見上の特徴が重視されたためであると考えられる。

③近畿地方における磨製尖頭器の出現過程

まず、近畿地方各地出土の磨製尖頭器のなかでも、初現期に位置づけられる資料について検討したい。滋賀県栗田郡栗東町霊仙寺遺跡では、弥生時代前期新段階から中期初頭の溝状遺構より大形磨製尖頭器の基部片（図 25 —1）が出土している。幅 3.8 cm厚さ 1.3 cm で、基部片であることから限定はできないものの、平坦な面はほとんど作り出されておらず、定型化した鏑は観察できないので、D技法によって製作されたものであると考えられる。

京都府亀岡市太田遺跡からは、前期新段階から中期初頭に属する資料が4点（図 25 —2・3、図 17—6）出土している。図 25—2は基部端部に特徴があり、種定により有柄式磨製短剣と命名されている資料である（種定 1990b）。3は基部の破片資料であり、中央部に鏑らしきものも観察できるが、明確な鏑を形成しているとはいえず、厚さも 1.5 cm と他の有鏑磨製短剣と比較するとかなり肉厚である。図 17—6は幅 6.1 cm厚さ 1.9 cmと極めて大きく、先に極大形磨製尖頭器と分類したものである。したがって、有鏑磨製短剣などとは異なる使用方法が考えられるが、明確なA技法が導入されている初現として注目できる資料である。美園遺跡出土例（図 17 —2）はD技法により、製作されたものである。平面形態に特徴があり、銅剣などの形態を意識した可能性が指摘されている。前期末から中期初頭と考えられる資料である。

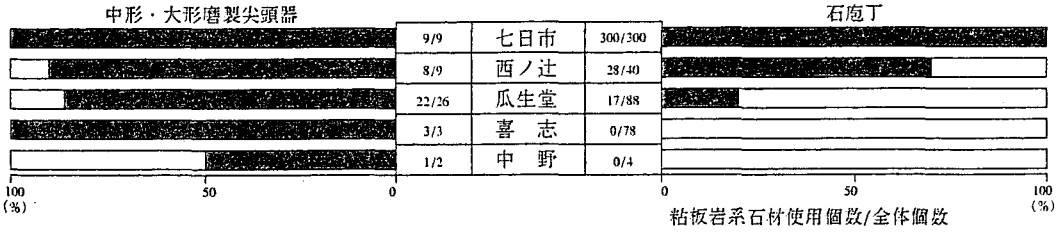


図24　中・大形磨製尖頭器と磨製石庖丁の粘板岩系石材選択率の各遺跡における変化

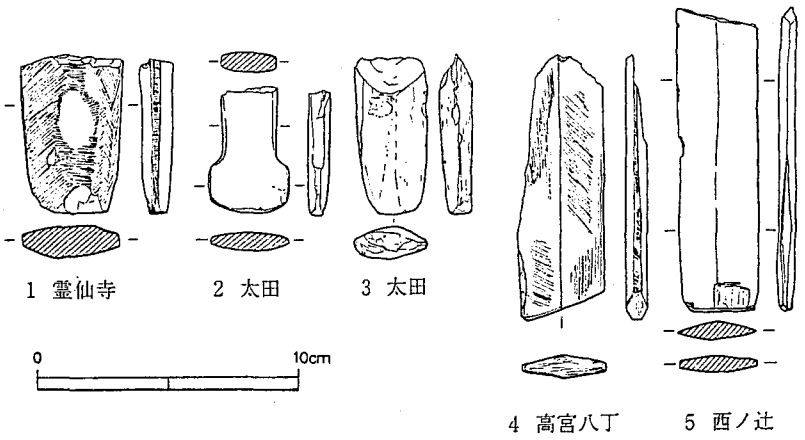


図25　近畿地方各地における初現期の磨製尖頭器(S = 1/3)

以上のような初現期の磨製尖頭器は製作技法や法量の面で多様であり、規格性のきわめて高い有鍔磨製短剣と比較すると、その差は明瞭である。それに対して、大阪府寝屋川市高宮八丁遺跡の前期新段階包含層出土例（図 25 —4）や、東大阪市西ノ辻遺跡の中期前葉から中葉と考えられる方形周溝墓周溝出土例（図 25 —5）は重要である。これら2例は、A技法で製作されており、さらに法量や全体の形態も中期に至って盛行する有鍔磨製短剣と同一である。したがって、この2例をもって有鍔磨製短剣の初現と考えることができよう。

ここで注意が必要なのは、こういった有鍔磨製短剣の出現が第1章で検討した有柄式磨製石剣B類とほぼ同時期であるという点である(長沼 1986)。このような広域での同型式の石製武器出現現象は、極大形尖頭器(図 17 — 12)にも認められる(下條 1982)。極大形尖頭器は、近畿地方以外にも岡山県南方遺跡[7]、香川県大川郡支度町鴨部川田遺跡(香川県教育委員会ほか 1998:p.41)、徳島県庄・蔵本遺跡(徳島大学埋蔵文化財調査室 1998:p.76)などから出土しており、九州地方でも豊前地域などに数多くの類例が認められる(下條 1982)。つまり、弥生時代前期末にみられる近畿地方の有鍔磨製短剣および極大形磨製尖頭器の出現は、北部九州から瀬戸内地域そして大阪湾沿岸地域に広がる広域での連動した石製武器の出現現象なのである。また、二上山サヌカイト製のものが少なからず認められる石製短剣や極大形尖頭器が近畿地方に出現する時期は、第2章において指摘したように大阪湾沿岸地域における二上山サヌカイトの需要回復期とほぼ同一である点にも注意が必要である。

④小結—有鍔磨製短剣広域分布の形成—

高い規格性と広範囲の分布が、弥生時代中期後半に認められる有鍔磨製短剣は、現状では河内潟周辺地域に古い例が認められる。また図 23 で確認したように、A技法で製作された中形磨製尖頭器は、河内潟周辺地域に多く分布するのである。

さらに、磨製石庖丁と比較すると、磨製尖頭器は黒色の粘板岩、頁岩類がどの地域においてもほぼ排他的に選択されていることが判明した。これら大形尖頭器はいずれも刺突具としての機能を保持しているのであり、決して武器形祭器として製作されたものではない。

このような事実関係をふまえてと磨製短剣の近畿弥生社会における存在意義、つまり武器としての社会的価値は、次のような考えられる。例えば、小林行雄は武器形青銅祭器の成立について述べるなかで「われら備えありという武器に対する信頼が、信仰まで昇華し

武器形青銅祭器が成立した」としている（小林 1951:p.146）。小林のいうように、武器とは単なる道具としての意味をこえた社会的意義をもちうる道具である。このように特別な意味をもちうる武器形石器が、近畿地方において弥生時代中期後半に盛行すること自体、当時の近畿地方の社会段階を考えるうえで重要な意味があると考えられる。

粘板岩などを用いて製作された有鍔磨製短剣の殺傷能力は、サヌカイト製短剣に及ばず、サヌカイト製短剣の不足を補う代用品と考える見解もある（松木 1989:p.88）。しかしながら、単なる代用品では、有鍔磨製短剣の広い分布と規格の高さは説明困難である。実用本位にこの精製武器を考えるのではなく、実用以外の社会的機能が当時の社会において重視されたからこそ、有鍔磨製短剣は規格性を保ち広域に分布するのではないだろうか。

特定の武器を特別視するような価値観[8)]を共有していれば、その実際の機能に関わらず、それを携帯する人間は自らの「身分」を、見知らぬ人にも知らしめることができたはずである。私は、以上の分析と考察をもって、こういったシンボル的な意義が、近畿地方の有鍔磨製短剣には見出しうることを強調するのである。

同様の社会的機能は先に検討した大形打製尖頭器にも、認められるのではないだろか。大形打製尖頭器は、有鍔磨製短剣と形態的に非常に類似しており、用途としても同じ短剣としての機能が推定できた。さらに中形品との厚さの比較において一定の規格性を意図した生産が確認されたのである。このような類似性をもって、本稿では短剣としての機能が推定できる大形打製尖頭器についても、有鍔磨製短剣と同様の性格を認めるのである。

（６）石製短剣の社会的機能

以上の分析の結果、磨製、打製を問わず石製短剣の機能が推定される武器形石器に、一定の規格性と広域の分布が確認された。そこで次に当時の社会におけるこれらの武器形石器の性格をより詳しく考察するために、①石器組成のなかの位置と、②葬制における位置づけについて検討していこうと思う。

①石器組成のなかの石製短剣

それでは、まず大阪湾沿岸地域における石器全体に占める大形尖頭器類の比率について検討する。表６は、蜂屋晴美の近畿地方における石器流通を論じるなかでの分析資料をもとに作成した。蜂屋による中形と大形尖頭器の区分は、厳密には報告者の基準とは異なる

表６　大阪湾沿岸地域における大形尖頭器(石製短剣)と磨製石庖丁の数量比率

遺跡名	大形尖頭器	石庖丁	大形尖頭器／石庖丁	集落の性格
中野	１４	９	１５６％	大形打製尖頭器
喜志	１８９	７４	２５５％	生産遺跡
亀井	４６	８１	５７％	河内潟周辺
恩智	４０	５４	７４％	の拠点集落
瓜生堂	７９	１０５	７５％	
鬼虎川	２１５	２５５	８４％	
池上曽根	４１１	１５０３	２６％	石庖丁の流通、製作拠点
勝部	２４	２０３	１２％	摂津地域
田能	６４	３３７	１９％	の拠点集落
加茂	１３７	２３０	６０％	

が、全体の傾向をだすために参考としておきたい。ただし、近年、石器組成論に対しては、発掘精度や石器に対する認識によりその比率が大きく異なってしまうことが指摘されている(中川 1997)。そこで、大形尖頭器と法量的に類似することから発掘現場における認識度においても大きな差異がないと考えられ、かつ当地域の普遍的な石器でもある磨製石庖丁との数量比較を大阪湾沿岸地域の各遺跡においておこなってみた。

表6からは、河内潟周辺地域の拠点集落において大形尖頭器は磨製石庖丁の2割から8割ほどの量が出土しており、各地域ともその比率は決して低くない。つまり、磨製石庖丁が当時の畿内社会における一般的な生産道具である(蜂屋 1983:p.58)とすると、全体で磨製石庖丁の半分程度の量が出土している大形尖頭器類は、少なくとも大阪湾沿岸地域の社会において、それほど希少な道具ではなく、かなりの普及率が想定できるのである。

②出土状況

次に石製短剣の出土状況からその性格について考えてみよう。まず、石製武器の実際の使用の反映であると考えられる埋葬施設に伴う峰部の出土例をみていく。京都府京都市東土川遺跡では、方形周溝墓の溝内に設けられた埋葬施設から打製石鏃 11 点とともに大形あるいは極大形の磨製尖頭器の峰部片5点が多数出土している(京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000)。さらに京都府園部郡八木町池上遺跡からも埋葬施設に伴い磨製石剣の峰部が出土している[9]。また、打製尖頭器の出土例としては、兵庫県神戸市出合遺跡があげられる(神戸市教育委員会 1994)。打製尖頭器のみならず、磨製尖頭器についても峰部の出土が埋葬施設からみられることは、先に想定した磨製尖頭器実用武器説を支持する資料であるといえよう。

また、近畿地方の磨製尖頭器は中形、大形を問わず方形周溝墓の溝からの出土が少なからず認められる。とくに完形品が方形周溝墓溝から出土するという事実には、注意が必要である。この場合、厳密にいうと溝の埋土からの出土が多いのだが、滋賀県野洲郡中主町の湯ノ部遺跡からは、溝底部より有鎬磨製短剣が出土しており(埋蔵文化財研究会 1992)、方形周溝墓築造に近い時期に「放棄」された可能性が高い。一方、打製尖頭器の出土遺構は、磨製尖頭器のそれほど明確な傾向はない。しかし、兵庫県川西市加茂遺跡では方形周溝墓の溝から完形の大形打製尖頭器(図 17 — 10)が出土しており、同様の状況は、八尾市亀井遺跡1号方形周溝墓においても認められる(大阪府教育委員会ほか 1986b:p.209)。

そして、近年の注目すべき状況としては、埋葬施設に伴う完形の打製、磨製尖頭器の出土例の急増である。その類例を集成したのが表７であり、やや不確定なものも含むと近畿地方では、今のところ８基の埋葬施設からの石製尖頭器の出土が認められる。

興味深いことに、磨製、打製を問わず、埋葬施設から完形で出土した尖頭器類は大形品のみで占められるのである。完形品であることから副葬品であると考えられるこれらの尖頭器類が、大形尖頭器、すなわち石製短剣のみで占められることは、先述したこれらの規格性の高さと広域分布に加えて、当時の社会における石製短剣類の特別な社会的性格を強く示唆する状況証拠であるといえよう。また、埋葬施設からの遺物出土が装身具類にほぼ限られる近畿地方において、石製短剣が 10 例近くも認められるということも重要である。つまり、これらの石製短剣に対して、当時の人々が装身具同様の属人的な器物としての性格を付加していたと考えられるのである。

では、当時の方形周溝墓制において、どういった階層に石製短剣副葬は認められるのであろうか。大庭重信によれば、近畿地方の方形周溝墓には、墳丘規模、区画内での埋葬配置、赤色顔料の使用という３点において、階層構造が中期後半には認められるという(大庭 1999:p.176)。そこで、畿内地域における赤色顔料使用墓 40 例と石製短剣出土墓８例の墳丘規模および棺形態、埋葬配置等について検討したのが表８である。ちなみに完形の石製短剣が検出された埋葬施設で赤色顔料の使用が認められた埋葬施設は今のところ存在しない。表８からは、赤色顔料使用埋葬施設のほとんどが木棺墓であり、かつ方形周溝墓内に配置されたものであるのに対し、石製短剣副葬墓の場合、確実な木棺墓は少なく、図 26 の大阪府高槻市宮田遺跡(高槻市教育委員会 1993)や同府枚方市招提中町遺跡(大阪府教育委員会 1999b)のように単独で営まれた土壙墓からの出土も見受けられる。一方、枚方市星ヶ丘西遺跡(瀬川 1985)や大阪府能勢町原田遺跡(重金 1996:p.121)のように、長辺 20 m前後にも達する大型の方形周溝墓内の埋葬施設に伴い、石製短剣が出土する例も存在する。ただし、このような大型方形周溝墓から出土する場合も、中心埋葬施設ではなく区画内の周辺部に位置する埋葬施設から石製短剣は出土している。さらに確実に副葬品として装身具類と共伴した例は今のところ存在しない。

石製短剣副葬墓の階層的位置を当時の方形周溝墓制に位置づけると、図 27 のようになる。大型方形周溝墓内周辺被葬者層から単独の土壙墓に葬られる人々までの幅広い階層に石製短剣副葬が認められる一方で、大型方形周溝墓の中心埋葬施設からの出土例がなく、赤色顔料や装身具との共伴例もみられない。したがって、石製短剣は、傾向として上位階

表７　畿内地域における埋葬施設出土の完形石製短剣一覧

遺跡名	市町村	形式	型式	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	時期	共伴遺物	埋葬施設
星ヶ丘西	枚方市	大形打製尖頭器	側縁並行型	19.4	3.3	1.2	中期?	なし	木棺
招提中町	枚方市	大形打製尖頭器	側縁並行型	18.1	3.0	1.4	前期末～中期中葉	先端欠損の打製石鏃	土壙墓
四ツ池	堺市	大形打製尖頭器	側縁柄型	15.7	3.5	0.8	中期	なし	土壙墓
勝部	豊中市	大形打製尖頭器	側縁並行型	17.0	3.5	復元1.1	中期後葉	なし	木棺
勝部3次	豊中市	大形磨製尖頭器	A技法	17.6	3.2	0.6	中期後葉	なし	土壙?
原田	能勢町	大形磨製尖頭器	A技法	17.9	3.4	0.6	中期後葉	なし	土壙
宮田	高槻市	大形磨製尖頭器	A技法	22.0	3.2	1.0	中期?	なし	土壙
下植野南	大山崎町	大形磨製尖頭器	側縁柄型	15.7	3.7	1.2	中期中葉	先端欠損の打製石鏃3点	木棺

表８　畿内地域における石製短剣副葬墓と赤色顔料使用墓の比較

	木棺		墳丘上埋葬施設		中心埋葬		墳丘長軸 15 m以上		装身具共伴	
赤色顔料(40)	36/40	90%	39/40	98%	8/39	21%	28/39	72%	5/40	13%
石製短剣(８)	3/8	38%	6/8	75%	1/6	17%	2/6	33%	0/8	０%

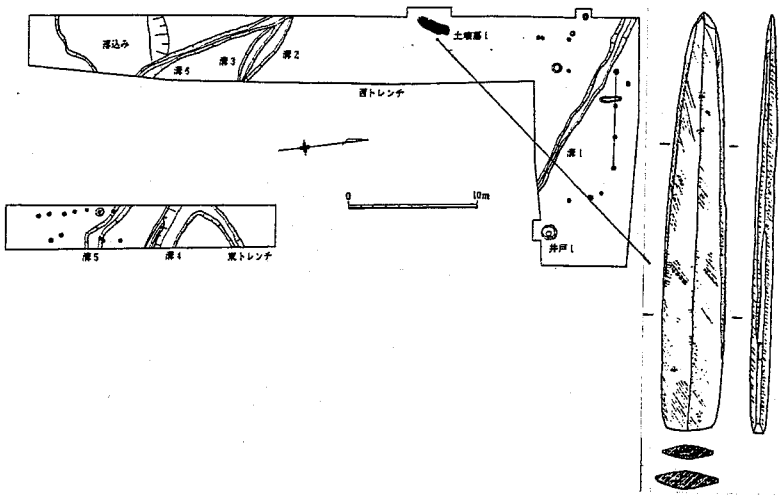


図26　宮田遺跡(大阪府高槻市)における石製短剣出土土壙墓(遺構S＝1/600・遺物S＝1/4)

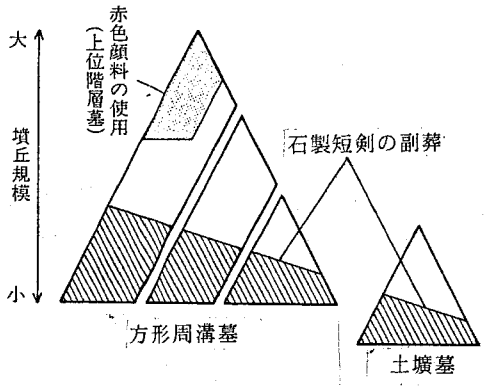


図27　近畿地方方形周溝墓制の階層構造と石製短剣副葬墓
大庭 1999:p.175 図4をもとに作成

層には伴わず、下位層に伴いやすい副葬品目であると判断することができるのである。

③石製短剣の所有形態

さて、以上の分析の結果、大阪湾沿岸地域における石製短剣の量的な普及状況と、埋葬施設における取り扱いから、被葬者像の抽出を試みた。ただし、後者の分析については、10 例に満たない副葬石製短剣をもって、石製短剣の所有形態を語ることは必ずしも適切ではないかもしれない。さきほどの石製短剣の量的な普及状況をもって、仮に当時の多くの人々に、石製短剣が普遍的に普及していたとすれば、その保有者がその死に際し、常に石製短剣を埋葬施設に持ち込んだとは、先の埋葬施設出土数からは到底考えられないのである。しかし、埋葬施設の調査例が北部九州地域と比べ格段に少なく、結果として副葬品検出例も稀少な近畿地方において、石製短剣副葬８例の存在は無視できる数ではない。石製短剣副葬に仮託された意図について、筆者は明確な答えを今のところ持ち合わせていないが、生前の石製短剣の保有者がその死に際し、武威に関わる特別な事情があったときのみ、石製短剣は埋葬施設内に持ち込まれたのではないだろうか。そういった意味で招提中町遺跡や京都府大山崎町下植野南遺跡(野島・魚津 2000)において、完形の石製短剣とともに先端が欠損した打製石鏃が共伴していることは、非常に示唆的である。

少なくとも磨製石庖丁や石斧類などが、その他の石器類が埋葬施設にほとんど持ち込まれないなかで、石製短剣のみ装身具に近い数の埋葬施設出土例が存在することは、装身具に近い性格、すなわち属人性の高い着装品としての機能を石製短剣にみいだすことができよう。そこで本稿では、**①短剣としての携帯機能、②埋葬施設出土という属人的性格**の２点から、これらの石製短剣を、個人や世帯共同体(都出 1970:pp.42 ～ 43)に帰属する、いわば私的所有性の強い石器であるとみなすこととする。

さらに、磨製石庖丁との比較から指摘したその普及度の高さ、そして墓制における被葬者像の推定からは、石製短剣が上位階層に限られた稀少な所有物ではなく、当時の成人男性一般もしくは世帯共同体単位で、普遍的に所有が許容されていた石器であるとみなすことができるのである。

(7)まとめ—中・四国地方以東における携帯武器の社会的機能—

①石製短剣の社会的機能

以上の分析の結果、大阪湾沿岸地域では石製短剣が共同体一般成員の武器、人民の武装とでもいうべき(都出 1996:p.13)形態で、普及していたことが明らかとなった。ただし、これは磨製、打製の石製短剣が豊富な大阪湾沿岸地域に限った分析からの結論であり、相対的に石製短剣の周辺地域では、次のような様相が認められる。それは完形の石製短剣の単独出土例の存在である。

例えば、淡路島に所在する兵庫県津名郡北淡町掛内遺跡からは、全長約 20 cmのサヌカイト製磨製短剣が完形で出土している(兵庫県教育委員会 1997:p.61)。当該地区からは、その他に弥生時代の遺物は全く出土しておらず、本例に伴う遺構こそ検出されていないが、意図的な埋納の可能性も否定できない。類似した状況は播磨地域から丹波、丹後地域における銅剣形磨製石剣の出土状況にも認められる(種定 1990a)。このような事例の存在から、石製短剣分布の周辺地において稀少な石製短剣は、前節で分析した青銅製武器と同様、個人所有を否定するために埋納にて最終的消費を行っている可能性が高いのである。

また、中部瀬戸内地域を中心とする打製尖頭器の出土状況には、今のところ目立った傾向はうかがわれないが、唯一、埋葬施設から出土した例として、岡山県山陽町四辻峠台状墓出土例があげられる(山陽団地埋蔵文化財発掘調査団 1973:p.53)。当台状墓は長径約 15 m、短径約 12 mをはかり、計7基の埋葬施設が検出されているが、そのうち最も北側に位置する第1土壙より全長 14.2 cmで側縁並行型、部分的に研磨された打製短剣が出土している。土壙規模や埋葬施設配置からは、第1土壙の卓越性はとくに認められない。したがって、打製短剣出土埋葬施設は台状墓に位置しているため、墓制上の優位層に属しているといえるが、先述の星ヶ丘西遺跡や原田遺跡などと同様、区画内での卓越性は認められないのである。

中・四国地方における石製短剣の性格は現状では不明な点が多い。しかし、少なくとも量的な稀少さに基づき、階層的上位者の所有物として限定されていた様相は認められないことから、ここでは大阪湾沿岸地域と同様に一般成員が所有しうる石製武器としての性格を想定しておきたい。

②中・四国地方以東における携帯武器の社会的機能

それでは、本節で分析してきた当地域における石製武器の性格と、前節で検討した金属製武器の社会的機能をあわせると、いかなる社会的位置づけを当地域の弥生時代中期に属する携帯武器に与えることができるであろうか。前節で分析した当該期の北部九州地域の状況とも比較しながら、当地域における武器の特質について述べていこう。

まず、北部九州地域と比べ、最も顕著なのは、稀少な金属製武器のみならず、素材的に恵まれていたはずの石製武器についても、積極的に階層区分原理に使用しないということである。むしろ、大阪湾沿岸地域の状況をみるかぎり、石製短剣は、共同体一般成員が普遍的に所有するために、豊富に生産されていたと考えられるのである。

すでに論じたように当地域において、稀少な金属製武器は私的所有を排して、長期保有され、埋納という所作において最終的に消費されていた。つまり、①稀少な武器類は北部九州以西において付加されていた副葬の原則を排してまでも、脱個人化をはかり、②豊富に生産しうる石製武器類については、多量の生産を行い一般成員に行き渡らせる、という２つの選択をもって、いずれも所有の有無による格差の発生を巧妙に回避する社会戦略がとられているのである。

弥生時代中期(併行期)の朝鮮半島や北部九州地域において武威の表象を担い、階層区分原理に用いられていた携帯武器は、関門海峡以東の地域において、その素材を問わず全く別の社会的機能を帯びていたのである。それは、稀少な金属製武器については副葬の原則を排して私的所有を避け、地域内で産出する石製短剣については、一般成員に広く普及させることにより、武器所有の有無による格差が生じることを回避していたのである。

【注】

１)例えば土器は厳密にいうと甕形土器、壷形土器と呼称されるように石器についてもそれ自体の分析により、機能が推定できるまでは武器形と呼称する。

２)本稿では、形式を機能や用途にもとづく分類単位、同じ形式に属するものを形態・材質などの特徴から細分した単位を型式とする（横山 1985:pp.54 ～ 55）。

３)刃こぼれが存在することに対しては、それが模擬戦等の祭祀行為によりついた可能性も考えられる。しかし、本稿では刃こぼれの存在をもって武器としての「使用」の可能性を考えたい。実用か非実用かというのは非常に困難な問題ではあるが、宮井善朗は銅剣を

論じるなかで「武器として使える銅剣は、使われることもあった」というあたりまえだが、重要な観点を示唆している（宮井 1989:p.29）。近畿地方の磨製尖頭器についても刃部形成がみられるものについては「武器として使える石剣」として以下の論を進める。

４)以下でいう河内潟周辺地域とは、今日の行政区分でいうと茨木市の南部から大阪市にかけての地域であり、東は東大阪市や八尾市などいわゆる中河内地域も含む。

５)他にも丹後、丹波、播磨地方出土の有鍔磨製短剣は畿内地方のものに対して、数cmではあるが長さが大きいものが多い。これは同じ社会的役割を果たしたと考えられる打製短剣を補完するために、二上山から遠隔のこれら地域では、有鍔磨製短剣が畿内地方に比べて、わずかに大きくなったのではないだろうか。

６)西口陽一は、歴史時代の硯産地から、弥生時代の磨製石剣の石材産出地および生産の中心を琵琶湖西岸の高島地域に求めている(西口 1986・1989)。しかしながら、中川和哉が批判しているように、堆積岩の産地を肉眼観察で決定することは極めて困難であり、硯石材の産地自体、滋賀県高島以外にも丹波地域にいくつか存在するのである(中川 1996:pp.130 ～ 132)。さらに未製品の分布からも、西口が想定するような一元的な石材の配給および生産を裏付けるような資料的状況は全く認められない。

７)南方遺跡出土の極大形磨製尖頭器については、岡山市教育委員会の宇垣匡雅氏、扇崎由氏のご厚意により、実見することができた。記して感謝します。

８)例えば、岩永省三は装身について以下のように述べている（岩永 1989:p.150)。「装身はそれを身に施す人が属する社会の人々が用意に理解できる社会的記号であって、暗黙の約束の上に成り立っている。美醜の基準も、文化の産物として人間を規制しているのだから、装身が社会的機能・宗教的機能を果たす場合には、そうして規制力はさらに強烈なものとなる」携帯性の高い短剣も、この装身の概念のなかに含めることができるのなら当時の社会において、短剣は極めて重要な意味を与えられた「記号」であったと考えられる。

９)八木町池上遺跡の事例については京都府埋蔵文化財調査研究センターの中川和哉氏にご教示いただいた。記して感謝します。

3　弥生時代後期における武器の変質

さて、前節までの分析の結果、弥生時代中期の列島社会は次の２地域、すなわち①朝鮮半島同様、武器を墓制上の階層表示の手段として用いる北部九州地域と、②希少な金属製武器については副葬に持ち込まず、自給が可能であった石製武器類は普遍的に普及させる中・四国地方以東の社会に区分できることが判明した。

このような地域性、とくに後者の地域における武器の社会的機能の特質は、弥生時代後期において、どのように変化していくのであろうか。当該期の石製、青銅製、鉄製の武器類の動向を検討することにより、本節ではこの問題を追究していこうと思う。

(１)弥生時代後期の武器形石器

石器は、一部の地域を除き弥生時代後期に消滅していく利器であり、武器形石器もその例外ではない。前節では、打製、磨製をあわせて武器形石器を、小形尖頭器(鏃)、中形尖頭器(槍、別柄の短剣)、大形尖頭器(短剣、戈)、極大形尖頭器(槍、戈)の４つに形式分類した。そのうち、極大形尖頭器については、その盛期が弥生時代前期後半から中期初頭にあり、中期後半以降ほとんどみられなくなるということを前節で指摘した。そこで、まずは弥生時代中期の中・四国地方以東において、武器の中心的存在であった石製武器各形式の消滅過程を提示することとする。

まず、小形尖頭器すなわち石鏃について検討してみたい。すでに指摘されているように石鏃は、近畿地方においても比較的遅くまで残存する石器である(禰宜田 1992a:p.68)。例えば大阪府南河内郡河南町寛弘寺遺跡では、住居址において鉄鏃と共伴して打製石鏃が出土している(大阪府教育委員会 1987b:p.58)。さらに前章１節で検討したように、岡山平野では弥生時代後期においても多数の打製石鏃が存在する。ただし、弥生時代終末期(庄内式併行期)以降になると、少なくとも中・四国地方から近畿地方では、磨製、打製を問わず、石鏃はほとんどみられなくなる。

次に中形尖頭器類について検討しよう。中形尖頭器、とくに木製の柄に装着されて、槍などとして用いられたと考えられる打製尖頭器類は、弥生時代後期においても、大阪府東大阪市岩滝山遺跡(東大阪市教育委員会 1971:p.９)や、同府和泉市観音寺山遺跡(同志社大学歴史資料館 1999:p.148)、河南町東山遺跡(大阪府教育委員会 1970:p.36)などより比較的

多くの類例が出土している。とくに存続時期が弥生時代後期に限定された高地性集落である観音寺山遺跡からは、31点もの中形打製尖頭器が出土しているのである。

一方、弥生時代中期社会において、特別な社会的機能が付加されていた石製短剣類、すなわち大形尖頭器は、中形尖頭器と比べて弥生時代後期における出土例は非常に少ない(禰宜田 1990:p.294)。もっとも、亀井遺跡などの中河内の遺跡では、弥生時代後期の遺構に伴う出土例があるので、後期に大形品が残存する可能性は否定できない。しかし、中形打製尖頭器が 30 点以上出土した観音寺遺跡において、大形尖頭器類の出土が1点もないことから、弥生時代後期に大形品が残存したとしても量的にはごくわずかであったと考えられる。大形磨製尖頭器についても同様の状況が認められる。

つまり、共同体成員一般あるいは世帯共同体レベルでの普及が、前節における分析により想定できた大阪湾沿岸地域の石製短剣は、武器形石器のなかでもっとも最初に消滅する石器なのである。従来、このような現象の説明として有力であったのは、利器が石器から鉄器へ置換されたという解釈であった(小林 1952)。しかし、弥生時代中期の大阪湾沿岸地域において、すでに少量ながらも鉄剣等の鉄製武器が存在していたことは先に指摘したとおりである。さらに、近年の弥生時代鉄器研究は、弥生時代後期の大阪湾沿岸地域に急激な鉄器の増加や技術革新はなかったという見解が提示されてる(村上 1996・2000)。したがって、この問題を解決するためには、当該期における鉄製武器の動向を明らかにしたうえで議論することが必要であろう。

(2)弥生時代後期の武器形鉄器

①鉄製携帯武器の分布

それでは、次に石製武器消滅の背景を考えるうえでも重要な鉄製武器の普及状況について、分析していこう。図 28 は弥生時代後期における鉄製武器(鏃を除く)の列島各地における出土数を示したものである。グラフの地域区分としては、基本的に今日の都道府県区分を採用しているが、同府県内で日本海沿岸地域とそれ以外に区分する必要のある地域については、旧国名を用いて地域区分をおこなっている。図 28 は、埋葬施設出土のものとそれ以外の遺構から出土したものとを区分して、各地における数量を比較している。まず、目に付くのは長崎県や京都府北部に位置する丹後地域における副葬鉄製武器の量的な卓越性であろう。前者の地域の出土点数は主に対馬出土のもので占められており、また鳥取県、

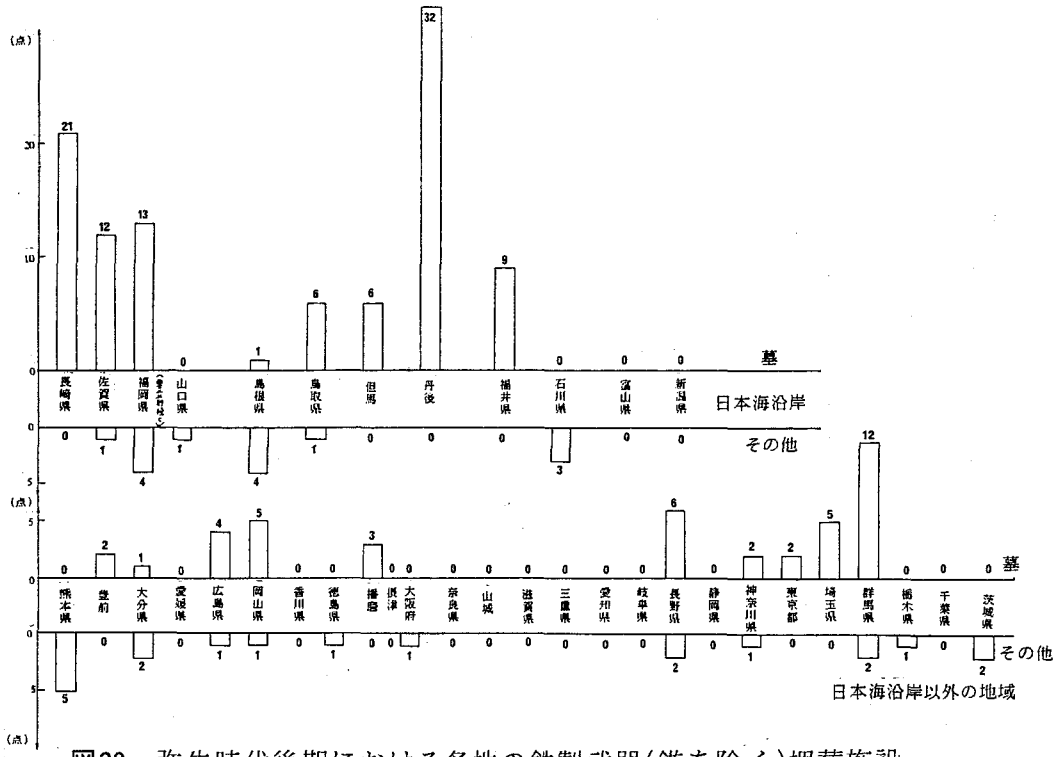


図28　弥生時代後期における各地の鉄製武器(鏃を除く)埋葬施設出土量と集落出土量の比較

兵庫県北部の但馬地域、そして福井県など、総じて日本海沿岸地域における副葬鉄製武器の多さが際立っている。これらの地域は、弥生時代中期には副葬鉄製武器の存在がほとんど認められなかった地域であり、その急増ぶりは非常に特徴的である。もちろん、すでに弥生時代中期において多数の副葬鉄製武器(図７)が認められた福岡県や佐賀県にも、継続して鉄製武器の存在が認められるが、前者の諸地域と比べると弥生時代中期のような卓越性は認められなくなる。また、図 28 からは、北陸地方から長野県をへて、群馬県など関東地方北部にも鉄製携帯武器が、副葬品として波及している様相が認められる。

次に注目されるのは、大阪府や奈良県をはじめとする畿内地域における鉄製武器の空白である。これらの地域は中期には石製短剣が最も盛行した地域であり、それが弥生時代後期になると激減する様相はすでに確認した。ところが従来の見解によるならば、石製短剣を量的に消滅させるはずの鉄製携帯武器は当地域において、ほとんど認められないのである。また、畿内地域における弥生時代後期に属する鉄製携帯武器の唯一の例である大阪府八尾市大竹西遺跡出土の鉄剣(図 32 —1)は、集落縁辺部より埋納状況で検出されている(渡辺 1997)。つまり、中・四国地方以東の弥生時代中期以来の伝統的な所作にて、いまだ鉄製武器が消費されている様相がうかがえるのである。もちろん、副葬品としての鉄製武器出土例が現状で皆無なのは、弥生時代後期以降、当地域の方形周溝墓が減少することによる埋葬施設検出自体の減少に起因する母数の少なさということも考慮すべきであろう。しかしながら、当該期においても埋葬施設は、少なからずの検出例が丘陵部などでは認められ、低地部の方形周溝墓からも、管玉等の装身具が出土する埋葬施設は依然存在する。したがって、図 28 における畿内地域の空白を、単に「みせかけ」の空白として(佐原 1985:pp.127 ～ 129)無視することは、他地域において鉄製武器の出土が顕在化している現状においては、もはや不可能であるといえよう。本稿で強調したいのは単なる分布上の空白ではなく、ごく少数ではあるが、弥生時代後期の鉄製武器が埋葬施設からではなく、その他の遺構より検出されるという質的な差異を含めた地域性である。このことは後に述べる青銅製武器の様相からも支持できるのである。

②鉄製武器からみた弥生時代後期の地域間交流

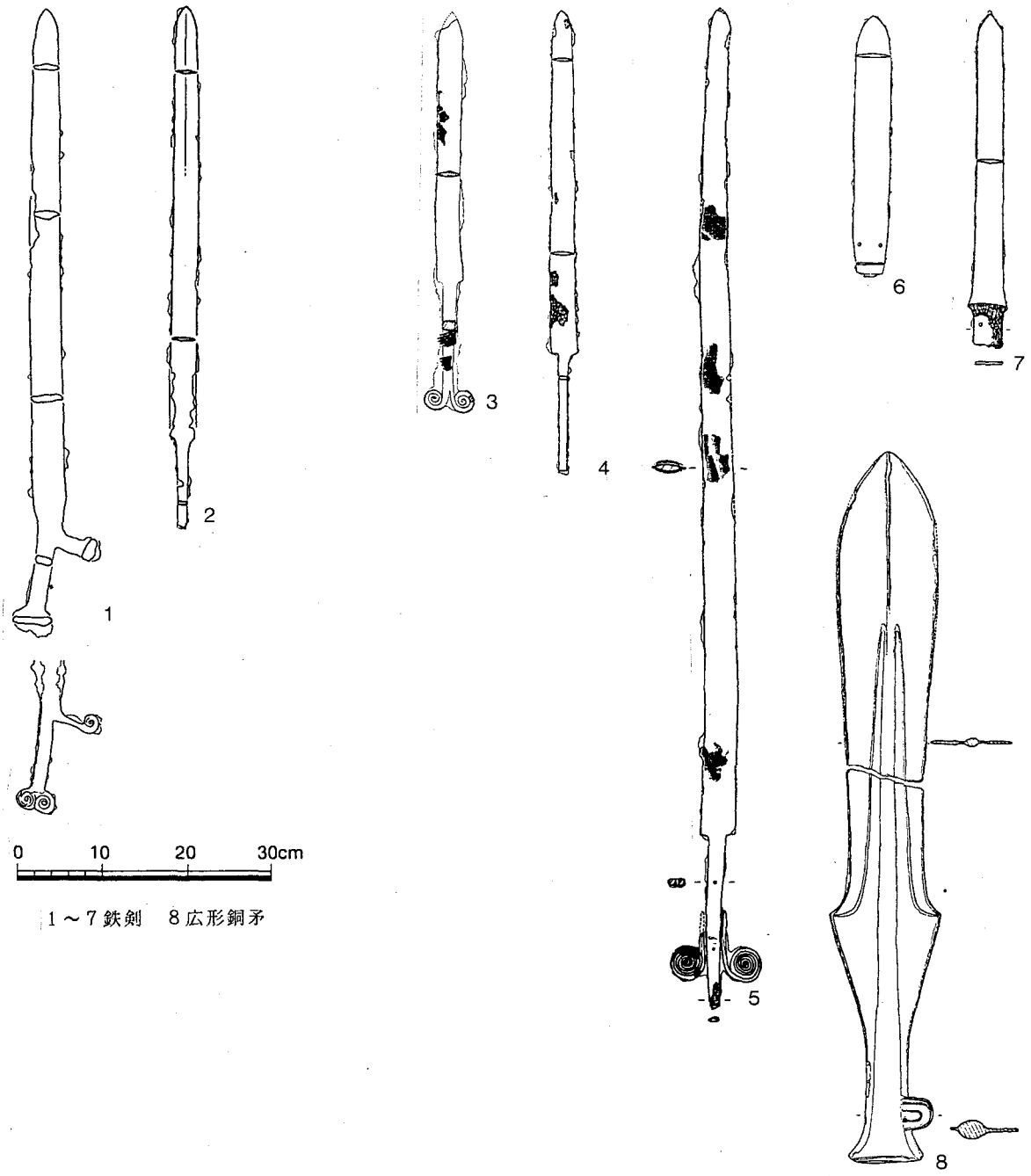
さて、弥生時代後期の鉄製携帯武器の分布を検討することにより、日本海沿岸地域や関東地方などそれまで武器副葬が顕著ではなかった地域において、副葬品として取り扱われる鉄製武器が急増することが判明した。そこで、次に広域に展開する鉄製武器の質的な比

較を行うことにより、各地における鉄製武器副葬の開始の要因を追究する。

まず、興味深い資料としてあげられるのは長野県下高井郡木島平町根塚遺跡より出土した図 29 —1のような渦巻装飾付長剣である(吉原 1997)。渦巻き装飾をもつ鉄器は、朝鮮半島南部、いわゆる伽耶地域に多くの類例が認められる。例えば、慶尚南道金海に所在する良洞里遺跡第 212 号土壙木槨墓からは、多数の副葬品とともに渦巻装飾付鉄剣(図 29 —3・5)が出土している(東義大学校博物館 2000:p.143)。また、図 29 —2のような長剣が、福井県や石川県など北部九州地域以外からも出土することも重要である。図 29 —2のような長身長茎の長剣は、朝鮮半島に多数の類例がみられることから(図 29 —4)、さきほどの渦巻装飾付長剣と同様、朝鮮半島からもたらされた鉄製武器であると考えられている(川越 1993:p.174・村上 2000:p.163)。さらに、京都府中郡大宮町三坂神社墳墓群 3 号墓第 10 主体から出土している素環頭刀の系譜についても同様の解釈が可能である(大宮町教育委員会 1998)。

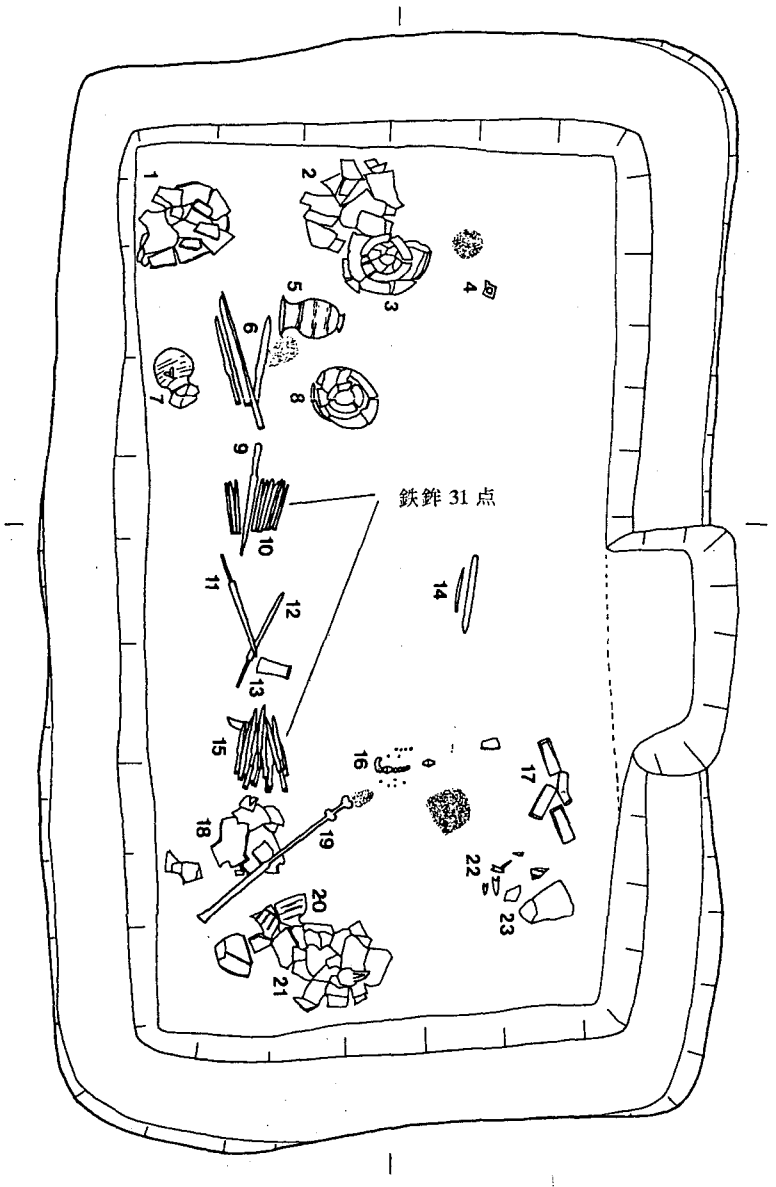
つまり、弥生時代後期以降、東日本を含めた列島全体に分布を拡大する副葬鉄製武器のなかには、少なからずの朝鮮半島製の鉄製武器が含まれているのである。

さらに、こういった製品の移動のみならず副葬習俗の点でも次のような共通性が指摘されている。京都府与謝郡岩滝町大風呂南遺跡では弥生時代後期後半に属する台状墓が検出されており(岩滝町教育委員会 2000)、なかでも 1 号墓の中心に位置する第 1 主体部(図 30 —2)からは、50 cm前後の長剣 2 点、30 cm前後の短剣 9 点の合計 11 点の鉄剣が副葬されていた。そのうち短剣は、被葬者の右頭側に 5 点、左頭側に 4 点ずつ、いずれも峰部を上にしてまとめて配置されていた。村上恭通は、大風呂南遺跡におけるこのような鉄製武器の配置と朝鮮半島南部における鉄鉾副葬との共通性(図 30 —1)を指摘している(村上 2001:p.65)。本章第 1 節で指摘したように、列島における初期の金属製武器である細形青銅器類は、朝鮮半島同様、厚葬墓の副葬品目として出現するものの、1つの埋葬施設に対する副葬数は故地の数量と比べて少量であった。このような状況は、武器形青銅器副葬および武器形鉄器副葬が盛行する弥生時代中期に至っても一般的であり、武器副葬における朝鮮半島との差異は中期にも継続されていた。それが弥生時代後期において北部九州地域から遠く離れた丹後地域で、金属製武器の大量副葬が出現しているのである。このことは朝鮮半島における鉄鉾副葬の直接的な影響の有無は別にしても、非常に興味深い一致であるといえよう。そして、このような鉄製武器の大量副葬が、北部九州地域ではなく、丹後地域にみられるということは、弥生時代後期の鉄製武器の拡大を考えるうえでも重要であ

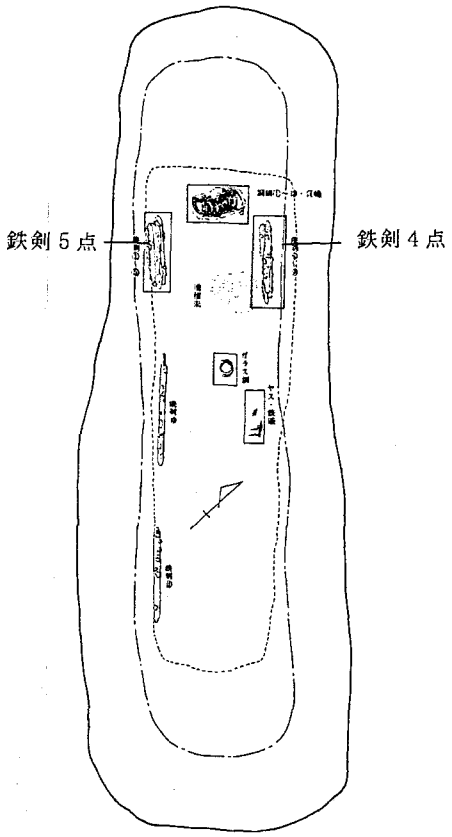


1～7鉄剣　8広形銅矛

図29　弥生時代後期(併行期)における武器の広域化を示す各地の武器形金属器(S＝ 1/8)
1根塚(長野県下高井郡木島平町)　2向山B(福井県遠敷郡上中町)
3・5・8良洞里(韓国慶尚南道)　4・6・7下垈(韓国慶尚南道)



1 下垈遺跡 44 号木槨墓(韓国慶尚南道)



2 大風呂南遺跡 1 号墓第 1 主体
(京都府与謝郡岩滝町)

0 1.0 2.0 3.0 4.0m

図30　日韓における武器形金属器の副葬品配置(S = 1/40)

ろう。

さて、以上の検討の結果、朝鮮半島製の鉄製武器搬入のみならず、副葬所作を含めた影響が日本海沿岸地域を中心に列島各地において認められたのである。ただし、朝鮮半島との影響は一方向的な関係ではなかった可能性がある。

例えば、慶尚南道下垈遺跡2号木槨墓、23号木槨墓からは図29—6や7のような扁平で薄い鉄剣が出土している(釜山大学校博物館 1997)。これらの鉄剣にみられる特徴として興味深いのは、剣身下半部に双孔が認められる点である。すでに指摘したように、剣身下半部に双孔をあける加工は、弥生時代中期後半列島にみられる鉄剣(図7—2・3)に顕著な特徴であった。川越哲志は、このような双孔を目釘穴と評価し、国産品、もしくは朝鮮半島製の剣身に列島製柄装具を装着するために目釘穴を穿孔した可能性を指摘している(川越 1993:p.176)。したがって、弥生時代後期に併行する時期に属する図29—6や7は、列島における双孔鉄剣の影響により製作された可能性があるのである。

また、朝鮮半島で出土する確実な列島産の武器形品としては、実用武器ではないが図29—8のような広形銅矛があげられる。武器形青銅祭器については、次に詳しく述べることとする。

以上の分析の結果、弥生時代後期の鉄製携帯武器の特徴は、次の3点、**①丹後地域や対馬をはじめとする日本海沿岸地域、そして東日本地域における副葬鉄剣の急増、②畿内地域における副葬鉄製武器の空白、③朝鮮半島との密接な影響関係**、にまとめることができる。

(3)弥生時代後期の武器形青銅器

①武器形青銅祭器の動向

まず、弥生時代中期後半以降、北部九州地域においても盛行する実用機能が完全に喪失した青銅製武器形祭器[1]について概観しておきたい。弥生時代後期における青銅器の分布は、すでにさまざまな論者によって議論されている(和島 1939、佐原・近藤 1974、下條 1982、春成 1982c、武末 1982、岩永 1988・1994a・1997a・1998、吉田 1993・1996・2001a)。したがって、新たな知見を加えることは現段階では困難であるといえよう。しかしながら、本稿の課題である弥生時代における武器の特質を抽出していくうえで、重要となる事象を1、2点指摘しておきたい。

まず、埋納される武器形青銅祭器の分布の変遷である。先に述べたように細形青銅器の段階では、銅剣、銅矛、銅戈を問わず九州島において確実に埋納された例は存在しない。それが次の中細形段階になると、まず大分県大分市浜遺跡において中細形銅剣Ｂｙ４本の埋納が認められ、中細形銅矛についても遠賀川流域や熊本県下などに埋納例が出現する。一方、福岡平野、背振山脈南麓、糸島平野、唐津平野などにはこの段階の埋納例が認められないことから、当時の非中心地に埋納例が偏在する可能性が指摘されている(岩永 1988:p.568・1994b:pp.49 ～ 53)。そして、中細形ｃ類銅矛、銅戈の段階になると、ようやく福岡平野などの中心地においても青銅器の埋納が認められるようになる(武末 1982:p.135)。さらに中広形銅矛、広形銅矛の段階になると、福岡平野から春日丘陵にかけて分布が集中する様相をみせる。また、対馬、愛媛県南部、高知平野にも比較的多数の分布が認められる。ちなみに鋳型等の帰属時期から中広形銅矛の一部と広形銅矛は、弥生時代後期に生産されたと考えられている(境 1998)。

とくに対馬にはその分布が集中し、他地域ではほとんどみられない副葬品としての使用が、例えば上対馬町塔ノ首３号石棺において確認されている(長崎県教育委員会 1974)。先に指摘したように同様の副葬例は、朝鮮半島南部の慶尚南道良洞里遺跡においても認められた(図 29 —８)。したがって、北部九州地域とは異なる広形銅矛の副葬は、対馬の住民を介在とした交通関係のなかで朝鮮半島に伝えられた所作であると考えられよう。また、弥生時代後期において鉄製携帯武器の分布が急増する山陰地方では広形銅矛や広形銅戈の分布は全く認められない。

分布の空白という点では、北部九州地域でも糸島半島や唐津平野地域には中広形、広形銅矛の分布があまり顕著ではないという点にも注意が必要である。つまり、弥生時代後期における鉄製武器を副葬した厚葬墓として先に提示した井原鑓溝遺跡や桜馬場遺跡の所在する糸島および唐津平野において、弥生時代後期の武器形祭器は必ずしも顕在化しないのである。鉄製武器を副葬する厚葬墓と武器形青銅祭器の分布上の不一致は、弥生時代後期の北部九州地域における埋納祭器と副葬習俗の関係を考えるうえで、非常に示唆的である。

②細身薄型銅剣の動向

さて、武器形青銅祭器の動向については以上の通りである。しかし、これまでほとんど重視されてこなかったが、弥生時代後期には深樋式、多樋式そして鉄剣式と分類される細身の銅剣類(近藤 1974:p.69)が存在する。これらのうち深樋式銅剣については、福岡県春

日市須玖坂本遺跡第５次調査において鋳型が出土していることから、列島における生産が推定されている(吉田 2001b)。これらの弥生時代後期における大型化しない銅剣を、ここでは一括して細身薄型銅剣と呼称し、検討を加えていくこととする。

まず、図 31 —１は、春日市須玖岡本Ｄ地点(島田 1930)から出土した多樋式銅剣である。全体として薄みで、基部付近には関部に２孔、茎部に１孔の計３箇所に穿孔が認められる。須玖岡本Ｄ地点は大石の下層に位置した甕棺より多数の漢鏡が出土しており、中期後半の「王墓」として有名であるが(小田 1991:p.185・下條 1991a:p.81)、この銅剣と同時に採集されている鏡のなかにキ鳳鏡が含まれている点には注意が必要である。キ鳳鏡は岡村秀典によると漢鏡７期に位置づけられる鏡であり、その時期は２世紀後半から３世紀初頭と考えられている(岡村 1992:p.106)。その点を重視して、この銅剣を中期後半よりも新しいとする見解がある(近藤 1974:p.70)。筆者もＤ地点出土の鏡の時期幅から、この銅剣が弥生時代後期以降に下る可能性を、ここでは重視しておきたい。

さらに同様の箇所に穿孔がなされた深樋式銅剣が、福岡県三潴郡三潴町御廟塚の箱式石棺上において発見されている。記録によれば全長約 39 cm(一尺二寸九分半)で脊部や剝片部表現が認められないという(中山 1920:p.29)。また、広島県府中市盾石の粗製組合式石棺からも、関に２孔と茎に１孔の計３孔が基部に認められる深樋式銅剣(図 31 —２)が出土している(水野 1928)。

細身薄型銅剣は、朝鮮半島においても存在する。岡内三眞は、朝鮮半島の銅剣を編年するなかで、半島の銅剣の系譜において最末期に位置するものをＣ式とした(岡内 1982:p.795)。なかでも図 31 —３の(伝)金海出土の深樋式銅剣にも、前述のような３箇所の穿孔が認められる。岡内はＣ式銅剣を、その共伴遺物より紀元前後に位置づけている(岡内 1982:p.823)。さらに先述の良洞里遺跡第 427 号木槨墓からも図 31 —６のような細身薄型銅剣が出土している(東義大学校博物館 2000:p.129)。本例は確実に弥生時代後期に併行する時期に下る細身薄型銅剣の類例として重要である。また深樋式銅剣は、対馬において埋納品(図 31 —４)、副葬品の両者が認められることも、その特徴の１つである(長崎県教育委員会 1974:p.525・吉田 2001a)。

次に鉄剣式銅剣について検討しておきたい。深樋式銅剣同様、鉄剣式銅剣は対馬や長崎県島原半島から中部高地までの広域に分布している。なかでも注目されるのは中・四国地方から大阪湾沿岸地域に散在する基部に双孔をもつ鉄剣式銅剣の存在である。図 31 —７は岡山県岡山市百間川原尾島遺跡の古墳時代初頭の竪穴式住居床面より出土したものであ

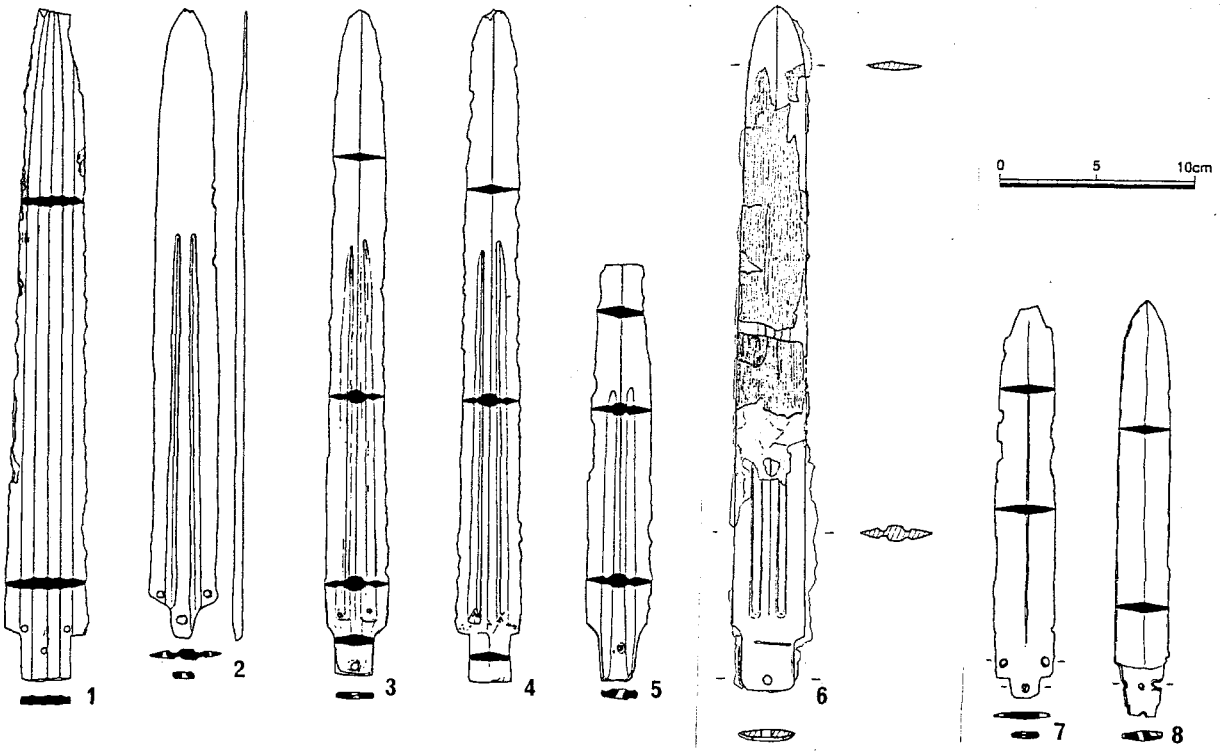
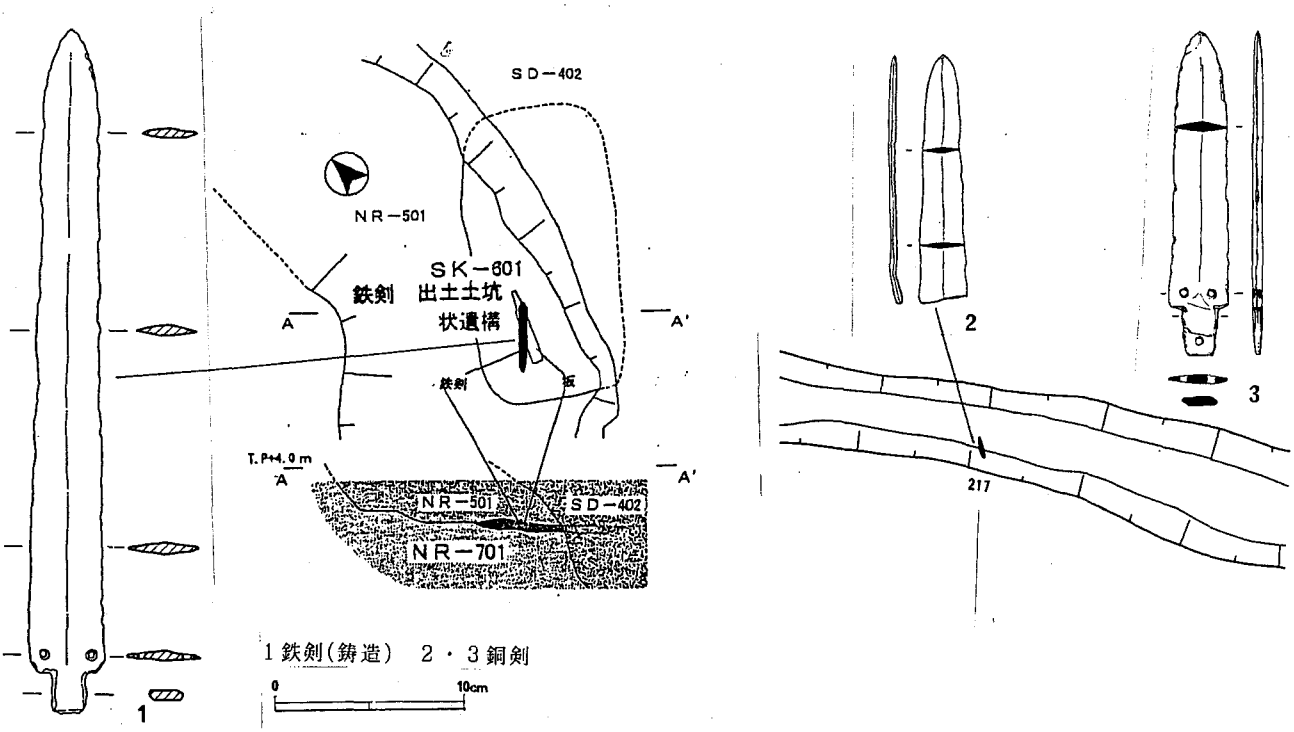


図31　弥生時代後期(併行期)以降における細身薄型銅剣(S＝1/4)
1須玖岡本D地点(福岡県福岡市)　2盾石(広島県府中市盾石)　3(伝)金海(韓国慶尚南道)
4シゲノダン(長崎県下県郡豊玉町)　5かがり松原(長崎県下県郡美津島町)
6良洞里(韓国慶尚南道)　7百間川原尾島(岡山県岡山市)　8長瀬高浜(鳥取県東伯郡羽合町)



1鉄剣(鋳造)　2・3銅剣

図32　大阪湾沿岸地域における弥生時代後期以降の武器形金属器
(遺物S＝1/4・遺構は縮尺不同)
1大竹西(大阪府八尾市)　2萱振(大阪府八尾市)　3加美(大阪府大阪市)

る(岡山県教育委員会 1995:p.121)。当資料は鉛同位体分析の結果、突線鈕式銅鐸にみられる画一的な鉛を使用していることが判明している(平尾ほか 1995:p.305)。つまり、出土遺構からは古墳時代初頭と考えられる資料であるが、その鉛同位体の分析結果より弥生時代後期に生産された可能性が高い。他にも鳥取県東伯郡羽合町長瀬高浜遺跡からは、古墳時代生活面より単独で同形態の銅剣（図 31 —8）が出土している(清水 1983:p.150)。当資料の基部は3箇所に穿孔された後、茎部の欠損のため、上側2孔間に新たな穿孔がなされている。

大阪府八尾市萱振遺跡からは、弥生時代後期の溝より銅剣の切先（図 32 —2）が出土している(大阪府教育委員会 1992:p.88)。先端から 13.2 cmが残存しており、幅 2.4 cm、厚さ約 0.3 cmと非常に薄い。下半部が欠損しているため全形は不明であるが、樋や刳込の表現は認められず、非常に薄みであることから鉄剣式銅剣であると考えられる。銅剣片の傍らからは小形の壺が出土しており、意図的な廃棄である可能性も否定できない。

さらに大阪市加美遺跡からは、完形の銅剣（図 32 —3）が竪穴式住居周溝埋土中より出土している(田中 1986:p.26)。庄内式土器が多数出土した層の上層から出土しており、層位的には弥生時代終末から古墳時代初頭であると考えられる。無数の傷が刃部、茎部を問わず観察でき、刃部も磨滅により鋭さが完全に失われていることから、何らかの利器として転用されていた可能性もあろう。全長 17.1 cm、幅 3.0 cm、厚さ 0.5 cmと全体として非常に小さく、関部に一対と茎部に1孔の計3孔の穿孔が施されている。法量、形態ともに先述の百間川原尾島遺跡出土例に類似しており、また基部の3箇所の穿孔も全く同様である。

弥生時代後期以降の土器と共伴した細身薄型銅剣の諸例について検討してきたが、以上の諸例からは、先述の鉄製武器同様、**①朝鮮半島を含めた広域での分布が認められ**、出土状況については**②朝鮮半島から西部瀬戸内地域では副葬品として、中・四国地方から大阪湾沿岸地域では集落より出土するという弥生時代中期以来の地域性がいまだ継続して認められる**のである。①の状況は先に検討した鉄製武器と類似した状況であり、②の点ではとくに畿内地域において、先述の鉄製武器同様、青銅製武器もまた副葬品以外の出土状況で検出される傾向が強いのである。

(4)まとめ—弥生時代後期における武器の拡大と変質—

さて、以上で3つの素材の武器形品の弥生時代後期における伸長について検討してきた。後期において、もっとも特徴的な現象は、鉄製武器の東への分布拡大現象である。日本海沿岸地域において、鉄製武器副葬が急激に増加し、さらに弥生時代中期段階では石製、青銅製を問わず、武器自体の存在が、顕著ではなかった東日本地域にも鉄製武器の普及が認められたのである。

ただし、弥生時代後期に至っても鉄器生産技術自体の拡散が急速に進むわけではないことは、すでに村上恭通が指摘しているとおりである(村上 1998・2000)。むしろ、そういった技術差をこえて、鉄製携帯武器は広域に波及し、かつ副葬品という消費形態も合わせて受容されていくのである。

弥生時代後期におけるこのような鉄製武器の波及状況は、本章1節において分析した弥生時代中期の細形銅剣の波及状況とは次のような点で非常に対照的である。まず第1に、朝鮮半島と同様、個人所有を背景とする副葬品としての消費形態がとられた北部九州地域と、共同体規制のなかで埋納行為により最終的な消費が行われる中・四国地方以東という、きわだった消費形態の相違が、列島の細形銅剣分布圏では形成されていた点である。そして、第2としては、製品や鋳型の出土から弥生時代中期における近畿地方の青銅器生産技術は、北部九州地域と比べても遜色のないレベルに達しているという点である(佐原 1960a・b)。つまり、弥生時代後期の鉄製武器とは反対に、中期の青銅製武器は副葬という習俗が全く受容されない一方で、青銅器生産技術に関して円滑な導入がはかられているのであった。

新たな技術が定着するためには、製作者が移動するだけではなく、定着先で彼の生産活動が維持できるような社会的環境と、原材の安定した入手が保証されている必要がある。いうならば新技術の定着には、地域社会との共存関係の構築が必要となる。一方、特定の器物が移動し、それに関する所作が伝播するためにも、人的な交流が不可欠である。ただし、交流者の数はとくに問題ではなく、交換に介在した当事者間の利害さえ一致すれば、むしろ少人数間の交流の方が、習俗の均質性が保たれると考えられる。

このような仮定に基づいて、筆者は弥生時代後期の鉄製武器が技術的格差をこえて、短期間に分布を拡大させ、関連する所作までも維持される背景を、次のように推定するのである。それは地域社会を形成していた各地の集団全体が、これらの外来武器や所作を総体

として受容したのではなく、特定個人、集団の象徴としてこれらが個別に交換された結果、前述のような広域での均質性が形成されるのである。むしろ、副葬という特定個人を表象する所作のなかで用いられる目的が鉄製武器に付加されていたからこそ、このような迅速かつ均質な拡大が、弥生時代後期に生じたと考えられるのである。

では、どのような環境におかれた特定個人、集団が、鉄製武器の急速な波及に関与しえたのだろうか。まず、前提となるのは**①交流範囲の大きさ**であろう。また、新たな利器や習俗の導入に際して、当然予想される在来社会、共同体との摩擦を克服するためには、**②地域紐帯や伝統に縛られない生業活動**を基盤とする集団のほうが、円滑な受容が可能であったと考えられる。また、その特定個人、集団にとって**③新しい利器と習俗の獲得が自らにとって有益であること**が、不可欠である。

このような条件は、弥生時代後期の鉄製武器の中核地域であった丹後地域をはじめとする日本海沿岸地域に適合する。まず、①の点は、下條信行により九州東北部、玄界灘沿岸地域と日本海沿岸地域との交流が、石錘の型式学的検討からすでに指摘されている(下條 1984)。また、縄文時代後・晩期以来の玉類を中心とした物流にも、北部九州地域から北陸地方に広がる交流網の存在が推定されている(小林 2001)。つまり、日本海沿岸諸地域は海を介在とした広範囲の交流圏が縄文時代以来形成されており、その担い手としては石錘などの共通性から、海人的な性格をもった人々の姿が想定できよう。また、天然の良好な港を提供する潟が、日本海沿岸地域には数多く形成されていることも重要である(森 1990:p.114)。

さらに重要と思われるのは②の点である。図 33 は新納泉により地理情報システムを用いたシュミレーションによる西日本各地の農耕適地分布を示した図である(新納 2001)。当図からは、瀬戸内海沿岸地域と比べて、山陰地方にはあまり広い農耕適地は存在しないことがみてとれよう。例えば、小河川ごとに形成された谷状の狭い小平野に細かく区分された丹後半島における協業規模は、河内平野における協業規模に比べて、相対的に小さいことが容易に想像できるのである。

図 33 とさきほどの鉄製武器の地域別数量比較図(図 28)を見比べると、次のような興味深い対比が成り立つ。それは、濃尾平野や奈良盆地、あるいは河内平野など広大な沖積平野を有する地域には当該期の鉄製武器はあまり出土せず、むしろ丹後半島や対馬など大規模な灌漑水稲農耕に適さない地域にこそ、鉄製武器は濃密に分布するのである。一方、広大な農耕適地には、突線鈕 2 式段階以降のいわゆる「みる銅鐸」(春成 1982)が埋納品と

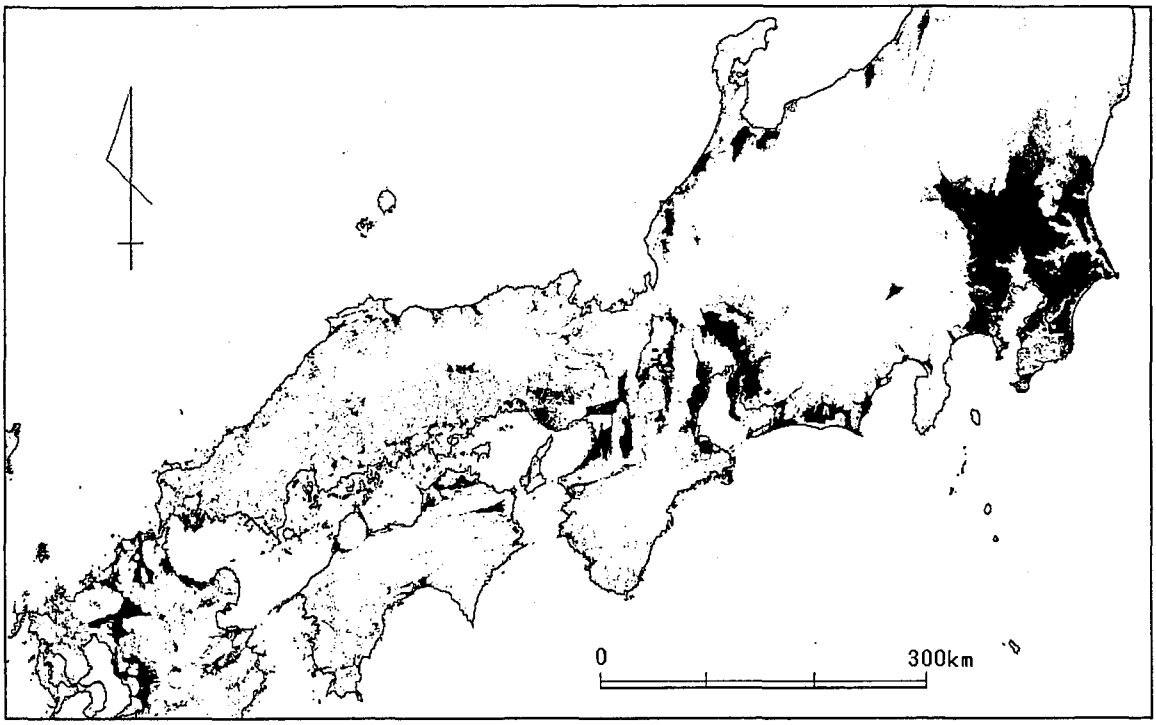


図33　地形から推定される農耕適地の分布

図34　みる銅鐸の分布

して分布する(図34)。

また、列島産鉄素材使用の確実な証拠がみつからない現状では、列島における鉄器原材の大部分は、海を越えてもたらされたと考えざるをえない(藤尾 1999)。したがって、当時の社会のなかで、広域流通を実行する航海術や他地域との交渉関係をもった集団の重要性は、必然的に高まっていたと考えられる。とくに広域での密接な関係の形成は、交易を成功させ、維持していくためには必要不可欠な要素である。したがって、遠隔地と共通の武威を取得し、同様の所作を実行することは、彼らの生存戦略にとって重要な要素になったと考えられるのである。

以上の3つの要素の説明のなかでは、筆者はあえて首長という概念を用いなかった。それは近年の弥生時代研究のなかで頻繁に用いられる「首長」という概念(広瀬 1997・寺沢 2001)を、今一度、武器という面から再検討したかったからである。

本節のこれまでの分析では、弥生時代後期の日本海沿岸地域における鉄製武器の円滑な波及の担い手として、水稲農業経営とは異なる広義の生業戦略を実行し、広域な地域関係を形成した特定個人、集団を想起した。これは従来の弥生時代研究が想定してきた水稲農耕を指揮し、地域内での水利権を差配することを権力基盤とする首長像(広瀬 1997)とは異なった特定個人、集団像である。このような想定が、従来の弥生時代社会像との関係において、いかなる座標を獲得しうるであろうか。この問題については終章において考察を加えることとする。

【注】

1) 祭器という用語について、一言述べておきたい。それまで儀器(森 1960:p.85)あるいは聖器(小林 1951)と呼ばれていた非実用的な青銅器を祭器と命名し、その概念を規定したのは、佐原真と近藤喬一であった(近藤 1974・佐原 1975b)。

近藤喬一は矛形青銅器について「中広形、広形両段階では、袋部内の内型の土は鋳造後ほとんど取り出していない。これは柄をつける意図を放棄したことを示しており、着柄しないということは、また矛から矛形祭器への転換を示している」と述べ、製作者側の意図の反映を重視して、祭器という用語を用いている(近藤 1974:p.72)。一方、佐原真は武器形青銅器を朝鮮製・日本製、実用・非実用、副葬品・埋納品、の3種に区分し、「銅鐸と同様、土中に埋納したものを矛形祭器、戈形祭器、剣形祭器とよび、(青銅)武器形祭器の

名でまとめ、これらを銅鐸とともに青銅祭器の名で総称」(傍点筆者)しており(佐原1975b:p.164)、この記述からは埋納という出土状況を重視していることが分かる。つまり、近藤が型式学的特徴から祭器を認定しているのに対し、佐原は出土状況から祭器という用語を用いているのである。

以後の武器形青銅器研究においても以上の２つの意味、①型式学的特徴、②出土状況、という２つの観点から、武器形青銅祭器の研究は進められてきたといえよう。

しかしながら、すでに述べたように埋納行為は、実用品である細形銅剣にも認められる。したがって、埋納という出土状況のみから、祭器という認定は困難である。このような状況は、武器形青銅器以外の遺物にも認められる。例えば、大阪府和泉市池上・曽根遺跡において、ベンガラを伴い多数のサヌカイト剥片とともに埋納されていた太形蛤刃石斧は、その出土状況の特殊性以外、一般によく出土するものと全く変わらないのものであった(乾1995)。

第４章　弥生時代における武器形木器の再検討

1　はじめに

考古学において儀礼、祭祀を論じることは、危うく、しかし魅力的である。考古資料を用いて、儀礼を語ることは資料的なバイアスが大きい一方で、当時の人々の精神活動を復元し、その系譜や地域性を明らかにすることは、その活動を担った人々の帰属意識や社会の結合原理を論じることができるからである。本章では、これまで弥生時代の儀礼論のなかで分析されてきた武器形木器を型式学的に分類し、その機能論を論じることにより、弥生時代における武器形木器がはたした社会的機能の多様性を解明することをめざす。

2　武器形木器研究史と問題点

武器形木器が、初めて考古資料として登場したのは、奈良県磯城郡田原本町唐古・鍵遺跡の調査においてである(小林・末永 1943)。当遺跡から出土した武器形木器は、形態が平形銅剣に類似するものや、赤彩が施されているものがあり、これらの特徴は武器形木器を「祭器」とみなす場合、重要な要素とされている(中村 1987:p.25)。しかし、一方で唐古・鍵遺跡出土の武器形木器の一部には、イチイガシやアベマキが用いられており、「それが形を武器になぞらへた儀器的なものと解せられるとしても、なほ相当の強靱さを備へていて、ある程度の武器的な使用には耐え得たであらうと思はれる」(小林・末永 1943:p.180)という指摘があることには、注意が必要である。

次に武器形木器が論じられたのは、静岡県静岡市登呂遺跡出土の弥生時代後期に属する資料についてである。後藤守一は「木製の刀剣を利器として実用することはできなかったろう」(後藤 1954:p.244)という前提にたち、登呂遺跡出土の武器形木器を、カミを祀るときに用いる奉納用の道具であると解釈した。また、岡崎敬は非実用品である広形銅矛や銅戈が「木製のダンビラ状の矛・戈の形と相互媒介的」に出現したと指摘し(岡崎 1955:p.212)、原田大六も平形銅剣と先述の唐古・鍵遺跡出土例との関係に言及している(原田 1961)。さらに、喜谷美宣は単独出土の銅鐸には本来、木製の剣や戈が伴っていた可能性を推定しており(喜谷 1977:p.177)、近年、春成秀爾も、カミへの武器奉納行為に際して数に限りのある青銅製品に代えたり、量の不足を補うための代用品として一部の武器形木器が用いられた可能性を指摘している(春成 1996:p.172)。一方、金関恕は山口県阿武

郡阿東町宮ヶ久保遺跡出土の武器形木器の先端が磨滅していることから、武器形木器が祭儀の過程で行われた模擬戦に使用された可能性を指摘した(金関 1978:p.176)。一見矛盾したこの見解、すなわち「使用痕」が存在しているという観察結果にもかかわらず、実戦ではなく模擬戦での使用が本例に想定されたのは、当時の武器形木器研究が青銅祭器との関連を軸に祭祀論のなかで進行していたためであると考えられよう。

また、中村友博は武器形木器の性格と変遷について、次のような総合的考察を行っている(中村 1980b・1987)。まず、氏は弥生時代を通して剣形木製品には長短の2種類が存在し、短小な刃部をもつものは武器形青銅器の刃部を萎縮したもの、刃部の長大なものは武器形青銅器の刃部を肥大して表現したものと解釈した。そして、国産の青銅祭器は弥生時代前期の刃部が長大な武器形木器の影響を受けて成立したとの見解を示した。さらに「刃部の肥大した武器を青銅で造れば、刃部を肥大模造した木製品は不要となるはず」であるから、刃部が肥大した青銅器が出現した後、新たに刃部を縮小して武器形木器を模造する風習が許容されたとしている(中村 1987:p.29)。ただし、短小な刃部をもつもののなかには、近畿地方に特有の武器形石器である「畿内式磨製尖頭器」を忠実に模作したものが存在すると述べている点には、注意が必要である(中村 1980b:p.60)。氏は武器形木器の大小の違いを、武器形青銅器の変質と連動させて意義づけたのであり、以後の武器形木器に対する解釈にこの見解は大きな影響を与えることとなる。ただし、中村は赤彩の存在と表現の簡便化をもって、武器形木器を祭器と判断しているが(中村 1987:p.25)、実際に赤彩が認められる武器形木器はごくわずかであり、表現の簡便化についても、簡便化と実用的属性の変化との関連を具体的に検討する必要がある。

また、中村の見解に対しては、次のような異論が唱えられている。例えば、武器形青銅器の大型化の要因を検討するなかで、岩永省三は刃部が肥大した武器形木器が畿内地域に分布する一方で、刃部肥大の武器形青銅器は当地域にほとんど分布しないことを指摘している(岩永 1988:p.567)。さらに、岩永は、金関が想定した「模擬戦」の概念についても、武器形木器の着柄部が祖型と同じく貧弱であり、実際の模擬戦行為に適しているかどうかという点に疑問を呈した(岩永 1994b:p.59)。また、春成秀爾は、武器形木器模擬戦使用説に対して、切先の磨滅は実戦でもありえることから、武器形木器の中には実用武器が含まれている可能性を指摘している(春成 1999:p.126)。

中村が想定した武器形木器と武器形青銅器との関係は、各論において以上のような批判がなされているものの、全体としては弥生時代の祭祀を考えるうえで有効な概念として、

広く普及している。例えば、春成は、唐古・鍵遺跡出土の弥生時代前期に遡る大型の武器形木器の存在から、武器形祭器は木製品からはじまり、武器形青銅器の大型化に影響を及ぼしたという中村友博の説を追認している(春成 1999:p.134)。また、種定淳介は武器形青銅器と武器形石器の関係について述べるなかで、武器形木器と比べ銅剣形磨製石剣は忠実に銅剣を模倣していることから、中村が提唱した青銅と木という素材間の祭器の重層性(中村 1980b:p.68)に石器を加え、青銅、石、木という3段階の祭器の重層性を主張している(種定 1990b:pp.48～49)。

一方、武器形木器の出現や盛行を地域的要因から説明する研究も進展している。例えば、豊岡卓之は「武器形木器のなかでも朝鮮系青銅武器の木製模造品の分布」は「大阪湾沿岸でとどまっており、このうち帰属時期の明らかなものはすべて第Ⅲ様式である」と指摘している(豊岡 1987p.112)。さらに寺沢薫は「この段階(中期前半～中頃)では青銅製武器形祭器は北部九州にかたよっており、分布の東辺にあたる近畿地方などではそれを補う形で、木製や石製の武器形祭器が製作されている」(カッコ内筆者補)との見解を示した(寺沢 1991:p.174)。両者とも、武器形木器を武器形青銅器を補うものであるという観点において先の喜谷や春成の意見と共通しているといえよう。また、地域性という点で武器形木器を捉え、武器形木器の有無から青銅器の絶対量の地域格差を説明しようとしている点も興味深い。

以上のように、中村友博による総合的な論考以降、今日まで弥生時代の武器形木器は弥生祭祀論のなかで重要な役割を担い続けており、その社会的機能についても、模擬戦や埋納品などという当時の儀礼内容にまで踏み込んだ魅力的な諸説が提示されている。しかし、一方で武器形木器の型式学的検討は、いまだに中村友博が大小に区分した段階にとどまっているのが現状であり、昨今の武器形青銅器・石器の型式学的研究の進展と比較すると大きな格差が生じている。そこで、本章では、第3章において明らかにした武器形石器の型式学的成果をふまえたうえで、武器形木器の型式分類を試み、祖型との比較検討を通して武器形木器各型式を設定する。そして、これらの分析をふまえた上で武器形木器の社会的機能と時期的変化について言及してみようと思う。

3　武器形木器の分類

以下では武器形木器の出土が集中する中部瀬戸内地域から近畿地方の資料を中心に分析

し[1]、必要に応じて他地域のものについても言及していく。これまで武器形木製品としてひとまとめに論じられる傾向があった武器形木器は、法量そして形態の上で非常に多様である。そこで、本稿では法量や形態的特徴を通して武器形木器の祖型の類推を行うことにより、多様な武器形木器を次の３つに分類する。ただし、筆者が実見できた資料は一部の例外を除き、ほとんどが保存処理後のものであり、細部観察については、その制限があったことを断っておきたい。

(１)Ｉ類(骨角器系)

まずは、樹木の枝分かれする部分を利用した二股の木器をＩ類とする。具体的には、二股の一方が扁平に加工され、もう一方が木の形態をそのまま生かし、断面円形に加工されたものである。そして、扁平な刃部状に加工されたほうは全長 20 ～ 30 cmであり、柄もしくは着柄部として機能する断面円形の部分は大阪府和泉市池上・曽根遺跡出土例（図１―１）のように長さが 10 cmに満たないものと大阪府八尾市恩智遺跡出土例（図１―２）のように 25 cm以上のものとがある。材としてはサカキが用いられているものが多い。赤彩が認められる資料は見当たらず、また確実に中期後葉に下る資料は今のところ存在しない。

Ｉ類の祖型について、中村徹也は中国漢代の画像石資料にみられる武器に祖型を求め(中村 1978:p.74)、中村友博は銅戈の模作品として評価している（中村 1980b:p.54）。これに対して、春成秀爾は縄文時代中期より存在する鹿角製有鉤短剣の系譜を引く木器との見解を示した(春成 1985:p.12)。中村友博も続く論考では春成と同様の見解を示し(中村 1987:pp.25 ～ 26)、報告書においてもこの見解は支持されている(大阪文化財センター 1988:p.65)。鹿角製有鉤短剣は、弥生時代でも中期中頃まで存在することが、滋賀県坂田郡米原町入江遺跡出土例(図１―３)から明らかである。入江遺跡出土例は、全体の法量や瘤状隆起が造り出されている点などの細部までが、図１―１の池上・曽根出土例と一致する。したがって、本稿でも春成の見解を支持し、武器形木器Ｉ類は縄文時代から存在する鹿角製有鉤短剣を祖型として誕生した木器であると考える。ただし、山口県宮ヶ久保遺跡出土例(村岡 1998)や佐賀県千代田町託田西分遺跡出土例(千代田町教育委員会 1983)などの九州島や西部瀬戸内地域の諸例については、金属器の影響も考慮に入れて検討する必要がある。

また、図１―２のように一端の長さが 25 cm以上あり、鹿角製有鉤短剣の着柄部とは異

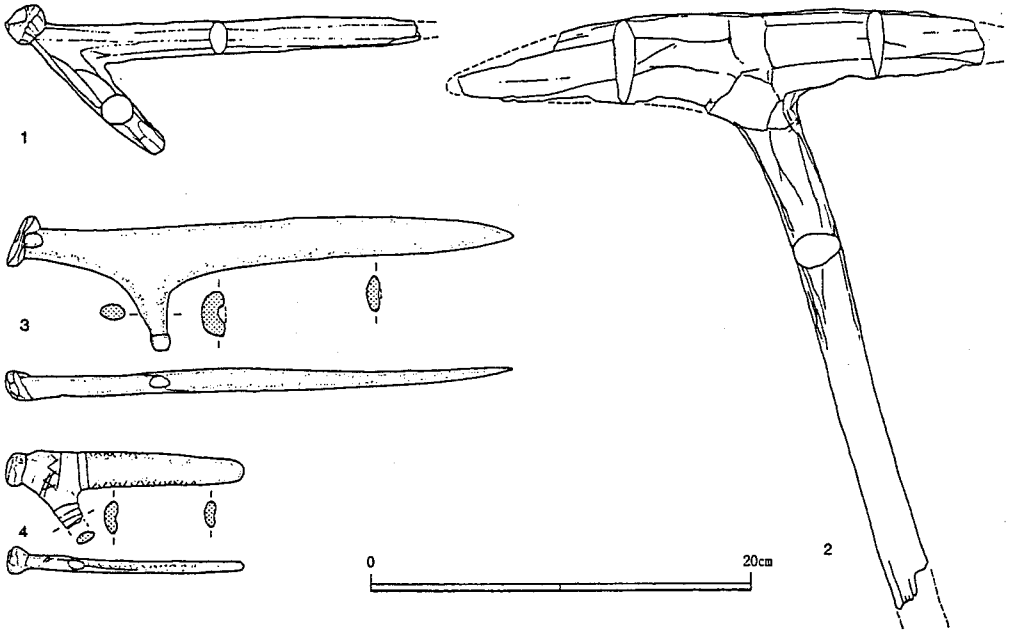


図１　武器形木器Ⅰ類と祖型(Ｓ＝1/4)
１池上・曽根(大阪府和泉市)　２恩智(大阪府八尾市)　３入江(滋賀県米原町)
４唐古・鍵(奈良県田原本町)

なる表現がみられるものは、宮ヶ久保遺跡などにみられる武器形木器の系統あるいは鹿角製の短剣を模倣しつつも、木材という特性を生かして新たに柄を長く造り出した可能性が考えられる。したがって、図1—1と図1—2の使用法は異なることから、特に後者の祖型を鹿角製短剣に限定することは困難であるが、図1—1との木取りの共通性を重視し、本稿ではⅠ類に含めておきたい。

(2)II類(石器系)

先に紹介したように中村友博は武器形木器の一部に関して武器形石器との類似を指摘しているが、大部分の武器形木器に関しては金属製武器の刃部縮小あるいは刃部肥大と解釈した。しかし、前章の法量に基づく武器形石器の形式分類をふまえるならば、武器形木器と武器形石器の間には次のような関係が成り立つのではないだろうか。

まず、図2—1の大阪府高槻市安満遺跡出土例や図2—3の唐古・鍵遺跡出土例は、弥生時代前期に属しており、全長と刃部幅が他の武器形木器に比べて大きいのが特徴である。これらは中村の提唱以来、近藤喬一(近藤 1986:p.143)や岩永(岩永 1988:p.567)そして春成(春成 1999:p.134)によって、武器形青銅器肥大化と関連して言及されてきた資料である。例えば、中村は図2—1にみられるような刃部下半両側面の抉りと、細形銅剣の剳方との共通性を根拠に、本例を銅剣模倣の木器であるとみなした(中村 1980b:p.63)。

ただし、図2—1にみられる抉りは「く」字状の加工であり、細形銅剣の剳方とは幅や形状の点で大きく異なる。後述する確実に銅剣を忠実に模したと考えられる木器や石器のなかに、このような「抉り」の表現は見当たらないという点にも注意が必要である。一方で細形銅剣を特徴づけるその他の要素、例えば脊や樋といった特徴が、これらの武器形木器には表現されていない点について、これまでの研究では、表現の簡便化やディフォルメといった型式学的に検討不可能な議論でしか説明しえないのである。

筆者は、これらの武器形木器に共通する菱形の刃部断面を最も重視したい。明瞭な鎬を意識したこの加工が、一律的にこれら武器形木器にみられることは、銅剣の簡便化から偶然このような共通性が生じたのではなく、特定の祖型を意識して、選択された加工であると考える方が理解しやすい。さらに刃部幅や厚さといった法量面での類似から、図3のような石器との関係を重視したい。これらは、打製品については禰宜田佳男がIII類としてもの(禰宜田 1986)、磨製品については西口陽一の鉄剣形石剣III式h(西口 1989)にそれぞれ

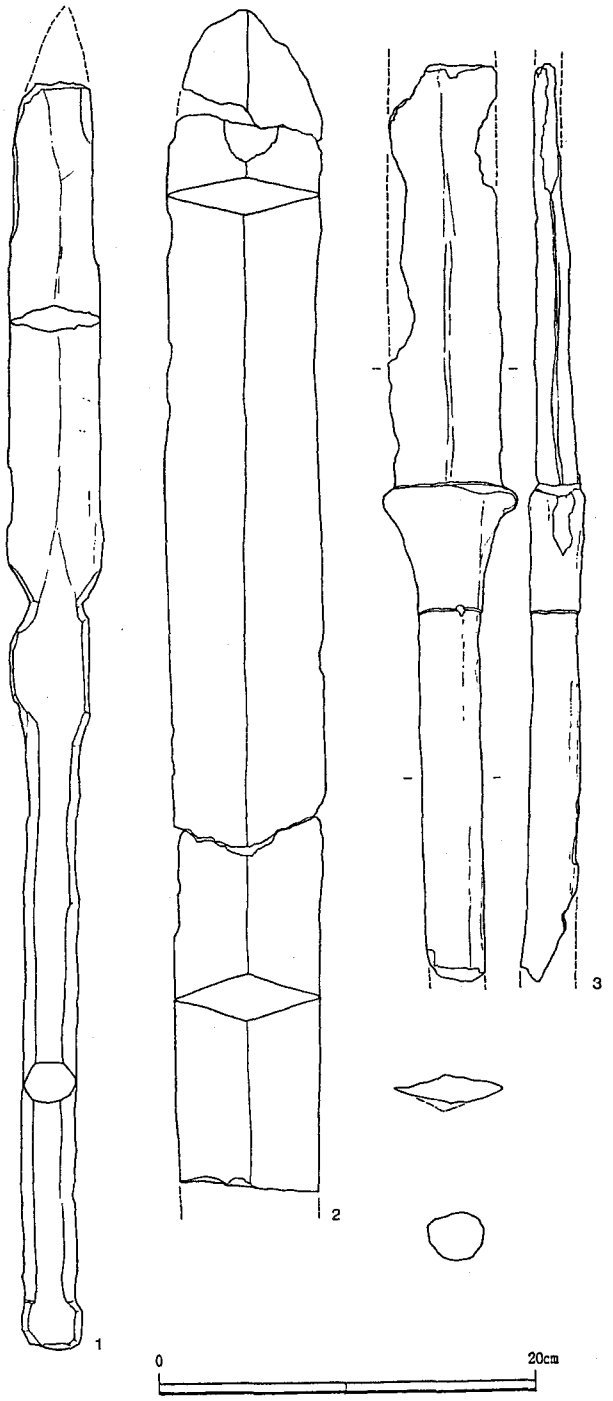


図２　極大形石製尖頭器模倣の武器形木器Ⅱ類（Ｓ＝ 1/4）
１安満（大阪府高槻市）　２・３唐古・鍵（奈良県田原本町）

相当し、筆者が打製、磨製を統合して前章において極大形尖頭器と命名した武器形石器である。極大形尖頭器は、弥生時代前期後半から中期初頭の土器と共伴して出土するものが多い。また①極大形尖頭器は幅が5cm以上あり、直接手で握って使用することが困難であること、②長柄に装着され、石戈として用いられた例があることから(芋本 1987:p.30)、先に述べたように筆者は極大形尖頭器が長柄と組み合わせた戈あるいは槍として用いられたであるとする。こういった観点から図2の武器形木器を解釈するならば、これらは石製の極大形尖頭器が槍として長柄に装着された状態を模した武器形木器であると考えられる。両者の帰属する時期が、主に弥生時代前期から中期初頭であるという点も、この推測を補強するものである。さらにこれまでの研究において、これらの武器形木器と銅剣を結びつける唯一の根拠であった両側の抉りも、片側だけにではあるが、これらの石器(図3—2)にも認められる。

また、図2と図3を比べれば、明らかなように、これらの武器形木器は極大形尖頭器よりはるかに全長が増しており、図2—2のように幅においても増加が認められるものもある。このようなありかたについては、これまでの研究史のなかで指摘されてきた「肥大化」という変化が認められよう。しかし、筆者は前述した理由で、これらの祖型は武器形青銅器類ではないと考えている。あくまで実用志向のなかで、これらの武器形木器は、石器ではかなわなかった長大化を、木材という素材の特性を生かして達成したのではないだろうか。ただし、武器形木器にみられるこのような現象と、武器形青銅器の大型化とは無関係ではないと筆者は考えている。この問題については、後に言及する。

次に中村が銅剣の刃部縮小とした図4—1の弥生時代中期初頭に属する池上・曽根遺跡出土例に関しても(中村 1980b:p.70)、同様のことが指摘できそうである。図4—2は大阪府八尾市美園遺跡において同じく前期末から中期初頭の土器を伴って出土した中形磨製尖頭器であり、その基部付近には茎の表現が認められる[2)]。なお、このような基部構造をもつものは打製品にも認められ、時期はやや下るが図4—3の八尾市亀井遺跡出土例などをあげることができよう。また、同遺跡からは全長29.7cmのうち刃部は8.3cmであり、中形尖頭器が長柄と着柄され槍として使用されている姿を模倣した武器形木器も出土している(宮崎ほか 1982:p.44)。

最後に中村友博により武器形石器との類似性がすでに指摘されている図4—4、5などの武器形木器類の特徴をみてみよう。鬼虎川遺跡より出土した図4—5は、身の中央に鏑が認められ、鏑より左右を削って刃部が表現されている。残存長18.8cmで最大幅2.8cm、

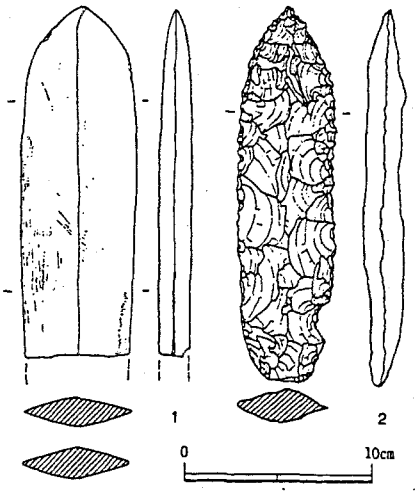


図３　極大形石製尖頭器（Ｓ＝1/4）
１太田（京都府亀岡市）　２唐古・鍵（奈良県田原本町）

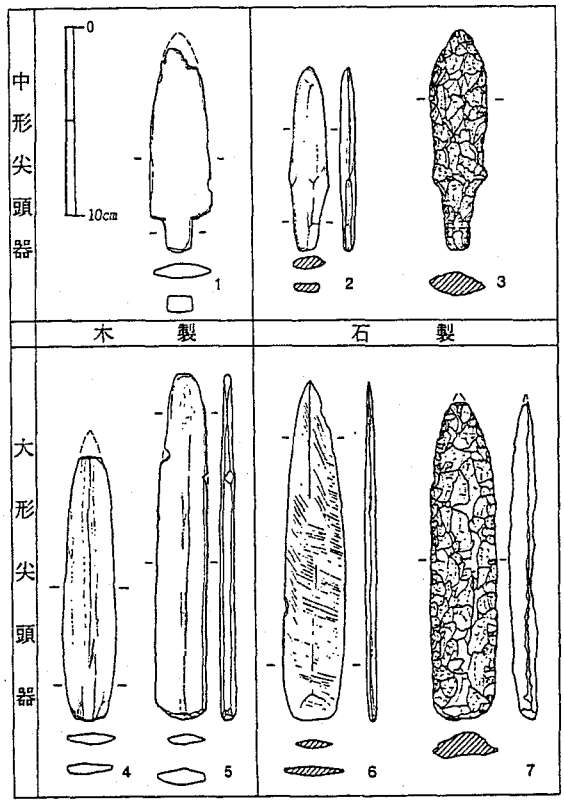


図４　中・大形石製尖頭器模倣の武器形木器Ⅱ類と祖型（Ｓ＝1/4）
１池上・曽根（大阪市和泉市）　２美園（大阪府八尾市）　３亀井（大阪府八尾市）
４・５鬼虎川（大阪府東大阪市）　６原田（大阪府能勢町）　７加茂（兵庫県川西市

最大厚1.0㎝をはかり、その材はアカガシ亜属である(才原1988:p.32)。本例の形状、そして刃部と柄部に境が認められない点などは、図4—6、7の剣身と柄が一体となった短剣として用いたと考えられる石製大形尖頭器と非常に類似している[3)]。

以上の分析の結果、従来、武器形金属器の刃部肥大や萎縮と考えられていた武器形木器も、新たな武器形石器の分類に照らし合わせてみるならば、それぞれ極大形、大形、中形に対応する武器形木器が存在し、その存続時期もおおむね一致することが判明した。したがって、銅剣などの武器形金属器を祖型と仮定したうえで、肥大や萎縮もしくはデフォルメといった変形を想定せずとも、武器形木器の多くは武器形石器との関係で捉えた方がよりスムーズな模倣関係の説明が可能となるのである。

(3)III類(青銅器系)

まず、問題となるのは武器形木器のなかからどのような属性を基準として、武器形青銅器の模倣品を抽出するかということである。例えば、中村友博は図2—1の安満遺跡出土例を杆にかざした細形銅剣を一木で表現したものであると解釈し、本例の帰属時期が前期であることから、「畿内で銅剣が長杆をつけた祭器となり、ついでその西辺の瀬戸内で細形銅剣が変形し、国産の祭器である中細形銅剣を生じた」とした(中村 1987:pp.26 ～ 28)。安満遺跡出土例に対するこのような解釈は先に紹介したように近藤や岩永そして春成らにより継承されてきた。しかしながら、先の分析の結果、図2の武器形木器は同時期に盛行する石製の極大形磨製尖頭器を模倣したものであることが判明した。したがって、細形銅剣等の肥大化あるいは変形という見解をこれらの説明に持ち出す必要がないことは明白である。そこで本稿では関部双孔の存在や茎の表現といった形態的特徴、そして法量的な類似から銅剣や銅戈を模倣したと判断できるものを武器形木器III類とする。III類が他の武器形木器と違う点は、茎が忠実に表現されている点である。つまり、武器形木器III類は、木材を用いて製作されたと考えられる柄部をあえて省き、金属部分のみを模倣しているのである。材としてはヒノキやコウヤマキなどの針葉樹が用いられたものが多い。また、中村友博が武器形木器を祭器とする根拠の1つとした赤彩が(中村 1987:p.25)、今のところIII類には認められない点をここでは強調しておきたい。

それでは各地の武器形木器III類をみていこう。ただし、銅戈を模したIII類は兵庫県神戸市玉津田中遺跡(兵庫県教育委員会 1996:図版 384 — 6355)や唐古・鍵遺跡(藤田 1989:p.60

43 —5)などで出土が認められるものの現状では出土数が少ない。したがって、以下では銅剣を模倣したと思われるIII類を中心に分析を進めたい。

まず、近年多くの武器形木器が出土している中部瀬戸内地域では、次のような武器形木器III類が認められる。それは岡山県岡山市南方遺跡出土の脊部や刳方そして脊部上の研ぎ出し面の形状までも忠実に模倣した武器形木器(図5—1・2)である。完形例である図5—1の剣身長、刳方部下長、脊部幅、剣身幅といった各数値を、銅剣の型式分類に関する研究成果(岩永1980:pp.2～3・吉田1993:p.12)に照らし合わせてみると、剣身長に対する刳方部下長の比がやや大きい以外は、細形銅剣のそれとほぼ一致する。したがって、図5—1・2は、細形銅剣を模倣したものである可能性が高い。とくに図5—1は脊上の研ぎが刳方下端に対応していることから細形銅剣I式を忠実に模倣したと考えられる。一方、図5—4や5のように、刳方や関部双孔の存在から銅剣を模倣したと考えられるものの、脊部の表現を欠いたものも認められる。

次に四国島東部と近畿地方のIII類を検討する。まず、図6—2は徳島県徳島市庄遺跡出土の武器形木器である。本例は、わずかな凹凸により片面のみに翼部と脊部の区分が認められる。また、全長約 33 cmとIII類のなかでもっとも大型のものであるが、中細形銅剣と比べると全長の上ではむしろ短いという点には注意が必要である。つまり、木材という自由度の高い素材にも関わらず、関部に双孔をもち刳方が表現された武器形木器、すなわち武器形木器III類のなかには、銅剣を「肥大」して模した武器形木器は見当たらないのである。さらに一部の例外を除けば、極端に縮小したIII類も存在しない[4]。

図6—1の鬼虎川遺跡出土例は、弥生時代中期前葉の土器と共伴して出土しており(才原 1996:pp.58・93)、共伴土器から明確に時期が判明しているIII類のなかでは、もっとも時期の遡るものである。片側面に刳方の表現があることから銅剣の模倣であると考えられるが、瀬戸内地方以東の銅剣の特徴である関部の双孔がみられない。脊部表現も欠くことから銅剣の忠実な模倣とはいえず、ここでIII類としたものの中では最もその根拠の弱いものである。図6—4の玉津田中遺跡出土例は中期中葉の河道からの出土であり、コウヤマキ製で厚さは1cmに満たないが、元部幅6.2cmと非常に幅広であるのが特徴である。さらに、弥生時代中期前葉から中葉に属する八尾市恩智遺跡出土例(図6—5)は基部付近の双孔や全体の形状から、報告書では大阪湾型銅戈を模倣したものであるとされているが(毛利光1980:p.182)、樋や脊部の表現を欠き具体的な祖型を推定することは困難である。そこで図6—5のように剣と戈の区分が難しいものについては、ひとまず銅剣模倣として、

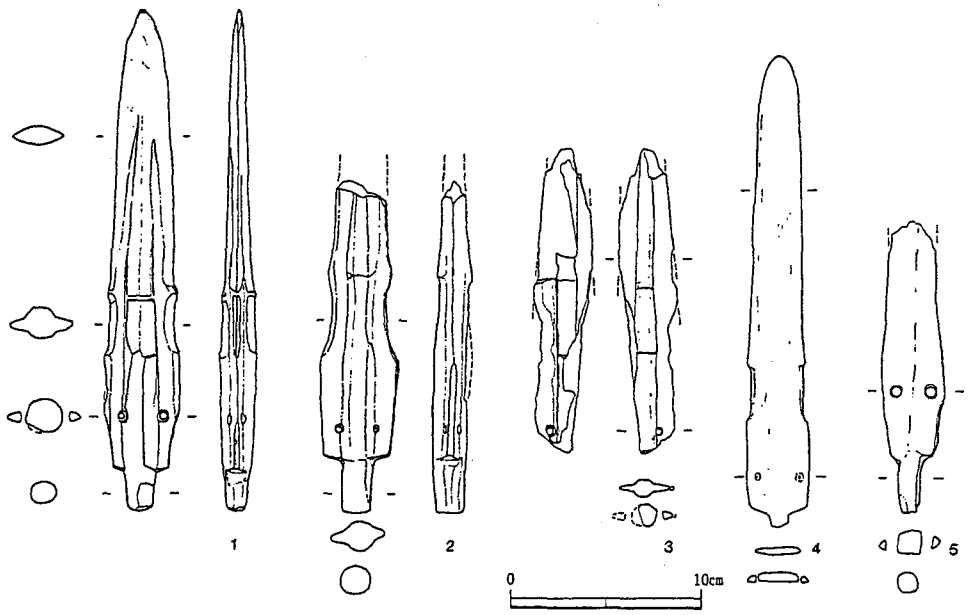


図５　中部瀬戸内地域の武器形木器Ⅲ類（Ｓ＝ 1/4）
１・２・５南方（岡山県岡山市）　３・４多肥松林（香川県高松市）

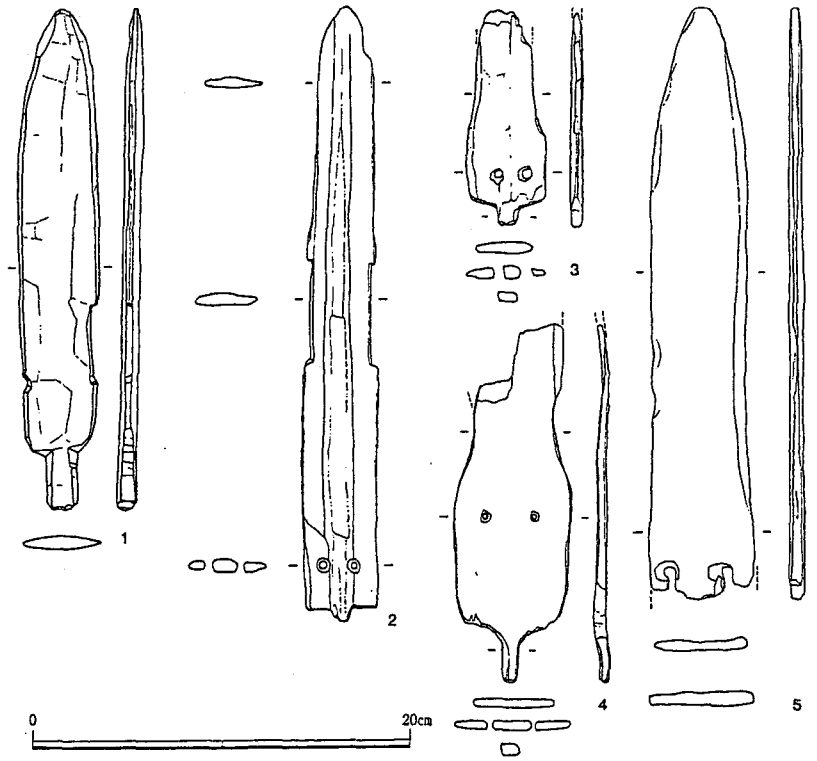


図６　徳島県および大阪湾沿岸地域の武器形木器Ⅲ類（Ｓ＝ 1/4）
１鬼虎川（大阪府東大阪市）　２庄（徳島県徳島市）　３・４玉津田中（兵庫県神戸市）
５恩智（大阪府八尾市）

以下の議論を進めたい[5]。

それでは武器形木器Ⅲ類について、祖型である銅剣の諸属性の欠落を基準として、次のような型式分類を行う。まず、刳方などの平面的形態を忠実に模倣し、剣身横断面が水平な翼と肉厚な脊部で構成され、立体的な形状が削り出されたもの(図５—１～３)をＡ式とする。Ａ式の祖型は完形品(図５—１)から類推すると細形銅剣であると考えられる。次に肉厚な脊部表現が省略され、扁平な木板に刳方や関部双孔が表現されているもの(図５—４・５、図６—１～５)をＢ式とする。Ｂ式の祖型については　表現の形骸化のために不明瞭ではあるが、図６—１～３のように刳方下端の幅が４cm以下のものが多くみられる一方で、図６—４や５のように関部幅が６cm前後のものも存在する。祖型である銅剣についても、細形銅剣との区分が微妙な中細形銅剣Ａ類を除けば(吉田 1993:pp.11 ～ 12)、刳方下端幅(元部幅)4.5 cm前後を境として、細形銅剣と中細形銅剣は区分できるようである[6]。そこで、本稿では関部幅５cm以下の武器形木器Ⅲ類Ｂ式をＢ１式(図５—４・５、図６—１～３)、５cm以上のものをＢ２式(図６—４・５)として区分する。そして、銅剣との関係から前者を主に細形銅剣の模倣であるＡ式の形骸化したもの、後者を中細形銅剣の影響を受けて刃部幅が拡大した武器形木器であると位置づけることとする。ただし、Ｂ１式については、図６—２のように刳方位置など平面形において、細形銅剣模倣とするには違和感のある資料も含まれ、単系的にＡ式からＢ１式への変化を単純化することは困難である。

では、各型式の帰属時期について検討しておこう。Ａ式である図５—１・２の南方遺跡出土例は弥生時代前期中葉から中期中葉の土器と共伴し(岡山市教育委員会 1996:p.10・1997:p.６)、図５—３の香川県高松市多肥松林遺跡出土例は弥生時代前期末から後期の土器と共伴している(山下 1999:p.132)。したがって、Ａ式の出現が弥生時代前期末に遡る可能性があり、同じくＢ１式も前期末に遡る可能性が南方遺跡出土例からは考えられるが、確実な例としては図６—１の鬼虎川遺跡出土例であり中期前葉となる。一方、Ｂ２式は図６—４の玉津田中遺跡出土例(甲斐 1996:p.234)などから中期中葉から後葉に属すると考えられよう。さらに祖型である銅剣の型式変化を重視するならば、少なくとも、Ａ式とＢ２式との間には時期的な前後関係が成り立つと考えられる。

次にこれら各型式の分布を示したのが図７である。当図からは、銅剣形木器Ａ式が少ないながらも岡山平野と讃岐平野に限って認められ、播磨平野から大阪湾沿岸地域にはＢ式のみが分布するという傾向がみてとれる。

それでは、次にこれらの銅剣形木器と銅剣形磨製石剣を比べてみよう。種定淳介は、銅

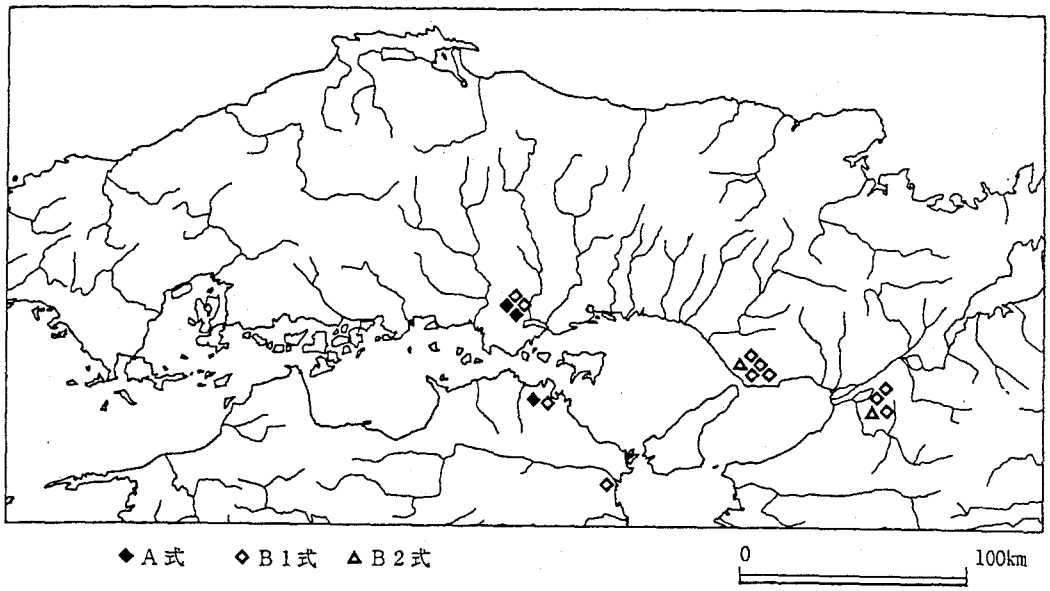


図7　武器形木器Ⅲ類各型式の分布

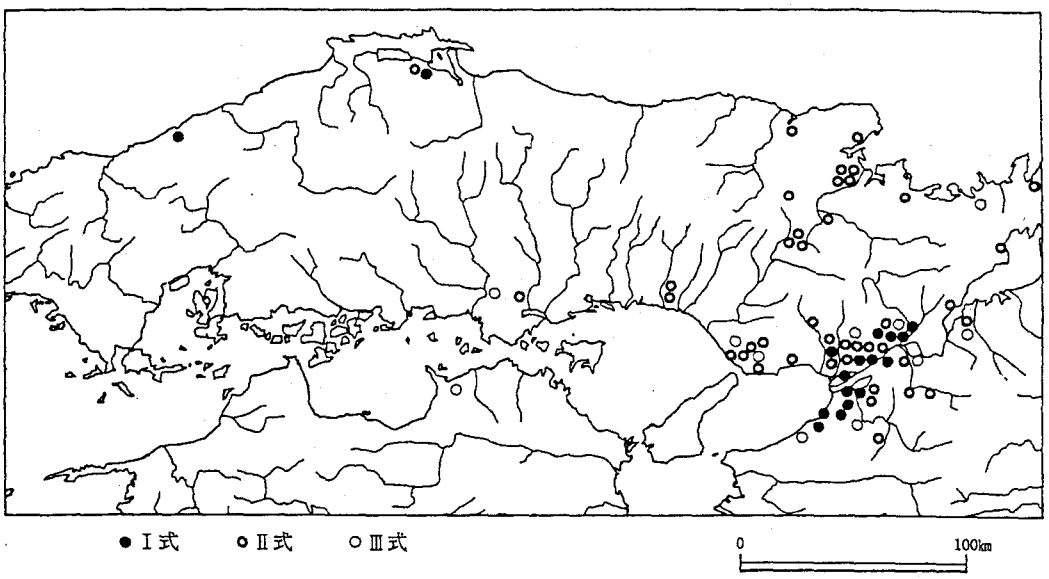


図8　銅剣形磨製石剣各型式の分布

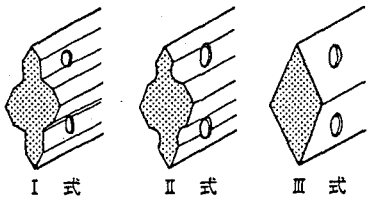


図9　種定による銅剣形磨製石剣の分類案

剣形磨製石剣の横断面形態に着目して、図９のようにⅠ式からⅢ式に銅剣形磨製石剣を分類した(種定1990a)[7]。図８は種定の分類による銅剣形磨製石剣各型式の分布を示したものである。当図からは忠実な銅剣の模倣品であるⅠ式が大阪湾沿岸地域に限って分布するのに対して、播磨地域や丹後、丹波地域などのいわゆる「畿内」周辺地域にはより変容した銅剣形石剣Ⅱ式やⅢ式のみが分布しているという様相がみてとれる。

つまり、銅剣形木器は中部瀬戸内地域においてより忠実な模倣品が存在するのに対し、銅剣形磨製石剣はむしろ大阪湾沿岸地域において祖型との類似度が高い型式が認められるのである。種定は模倣の忠実度から、青銅器を最上位とし、石器をはさんで木器を最下位とする祭器の重層性が畿内北部とその周辺地域に成立していたと述べている(種定1990a:pp.46～51)。しかし、模倣の忠実度を祭祀の階層性と解釈するかは別にせよ、青銅器の模倣精度が大阪湾沿岸地域と中部瀬戸内地域では石器と木器の間で逆転しているのである。つまり、中部瀬戸内地域では銅剣形磨製石剣より銅剣形木器の方が忠実に銅剣を模倣しているということが、図７と図８からは読みとれるのである。

この背景には、弥生時代中期以降頁岩や片岩を用いた磨製石庖丁の生産体制を確立する大阪湾沿岸地域と、穂摘具は打製石庖丁を主体とし、石器全体としても伐採石斧を除き磨製石器生産が低調な中部瀬戸内地域との間にみられる石器生産における技術的相違が要因としてあげられよう。さらに大阪湾沿岸地域の銅剣形磨製石剣のほぼすべてに頁岩類が用いられていることから推測するならば、頁岩類特有の黒さや光沢といった要素を志向して、大阪湾沿岸地域の人々は、黒色の堆積岩類を用いて銅剣を模倣したといえるかもしれない。

武器形木器Ⅲ類と祖型である銅剣、そして銅剣形磨製石剣との関係をまとめると図 10 のような関係が成り立つ。また、Ⅲ類各型式の分布(図７)に注目するならば、細形銅剣を祖型とするⅢ類Ａ式の形成は中部瀬戸内地域において、中細形銅剣を祖型とする模倣は大阪湾沿岸地域において生じた現象であると考えられよう。

(４)　その他の武器形木器

さて、以上で武器形木器を祖型別に大きく３型式に分類した。しかしながら、これまでの武器形木器研究のなかでは、次のような武器形木器の存在もまたが重視されてきた。例えば、鬼虎川遺跡出土の図 11 —４は、中村友博が「何らかの金属製利器を大きさの上からも忠実に模倣したとすれば、こうした小形の利器は鉄製刀子以外にありえないことにな

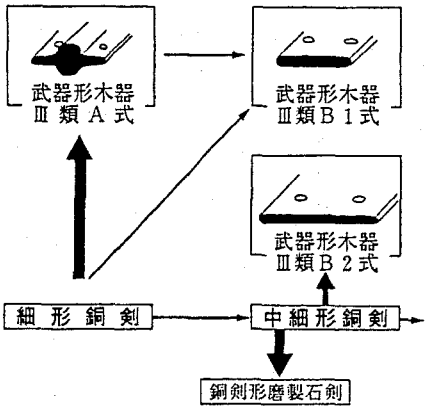


図10　武器形青銅器と木製・石製模倣品の関係模式図

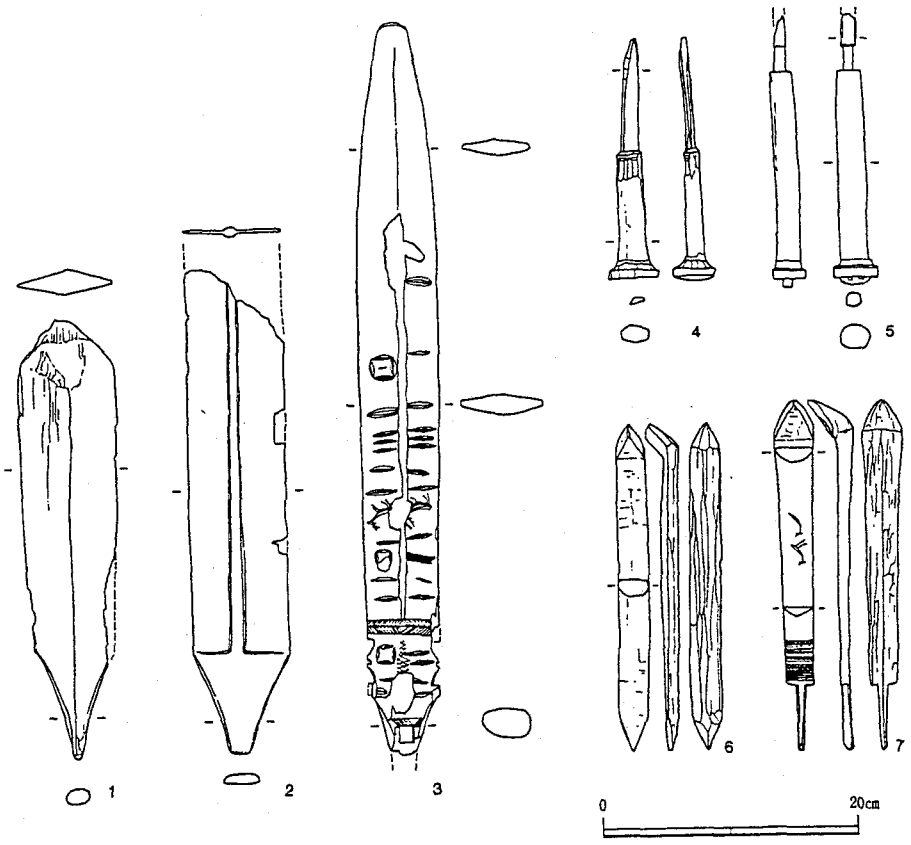


図11　その他の武器形木器と関連品（S＝1/6）
1・2唐古・鍵（奈良県田原本町）　3南方（岡山県岡山市）
4・6・7鬼虎川（大阪府東大阪市）　5恩智（大阪府八尾市）

る」としながらも、柄頭が突出した半球状の形状をもつことを根拠として、オルドス青銅器文化の青銅短剣との共通性を見いだし「中国・朝鮮に主流に非ざる把頭をもつ刀剣が、彼の地の文物とともに、弥生文化にも流入した可能性」を指摘した木器である(中村1980b:pp.62 ～ 63)。そして、以上の前提から図 11 —4を刀身が萎縮して模作された例と理解した。しかし、同様の柄形状をもつ図 11 —5のような鑿形の木器が、鬼虎川遺跡近傍の恩智遺跡から出土している。したがって、図 11 —4も、武器の萎縮ではなく刀子形木器と解釈するのが、最も整合性があるといえよう。本稿ではこのような理由で、図 11 —4は武器形木器ではなく工具形木器として分類する。

また、図 11 —2は戦前の唐古・鍵遺跡における調査において出土した木器であり、その剣身横断面形から、平形銅剣との関連が注意されてきた木器である。しかし、先に指摘した極大形石製尖頭器と武器形木器II類との関係を重視するならば、次のような影響関係が想定可能である。まず、同じく唐古・鍵遺跡出土の図 11 —1は、先の検討に基づくと極大形尖頭器模倣木器であると考えられるが、下半部形態が内湾してすぼまる形状である点は、図2の武器形木器II類とは異なる。同様の下半部形態は図 11 —2や3に認められ、さらに法量は異なるものの鬼虎川遺跡出土の図 11 —6や7もこれに含むことができるかもしれない。このような下半部形態は、少なくとも武器形青銅器にはまったくみられない。

筆者は、法量および刃部断面形の類似から、図 11 —2は図2の武器形木器の着柄機能が省略された形態、すなわち極大形尖頭器模倣の武器形木器II類が儀器化したものであると考えている。そして、銅剣の断面形態を取り入れたもの(図 11 —2)や、装飾性を高めるために線刻が加えられたもの(図11—3)が出現するのである。図11—6や7も、このような木製儀器の影響を受けて製作された木器であるといえよう。先述の極大形尖頭器を模倣した武器形木器II類の時期が、弥生時代前期後半であり、図 11 —2も前期後半に属することから、これら儀器化した武器形木器の形成は弥生時代前期後半を中心とした時期に生じたと考えられる。そして、武器形石器から派生したこれらの木器の存在、つまり木製儀器を用いた所作の存在が、これまで指摘されてきたように(岡崎 1955・中村 1980b・春成 1999)、実用的機能を喪失した武器形青銅器に対する需要を生み出したのであろう。また、図 11 —3のような木器、さらには復元長約 90 cmにも達する戈形木器(扇崎1995:p.14 図4—38)が中部瀬戸内地域に位置する南方遺跡から出土している。このことは、かつて岩永省三が指摘した肥大化した武器形青銅器とこのような武器形木器との分布上の不一致(岩永 1988)を解消する資料として重要である。

4　武器形木器の機能

それでは、次に前章において細分した武器形木器それぞれの機能について検討する。まず、模擬戦の根拠として従来から重視されている先端部の磨滅について考えてみたい。ここで問題となるのは、何をもって使用痕と認定するかということである。出土遺物は通常、使用の結果だけではなく、埋没過程でさまざまな影響を受け破損、磨滅する。とくに木器は出土遺構が自然流路や溝などにほぼ限定されるため、水中においての破損が予想できる。また、その過程でとくに切先や基部などの端部が破損、磨滅しやすいのは当然である。このような前提に基づき武器形木器を観察していったが、確かに木目の春材と夏材の磨滅度の違い(横山 1978)に起因する凹凸は先端や基部に認められるものの、これらを廃棄後の損傷ではなく「使用」痕と断定することは困難であった。したがって、磨耗度から武器形木器の機能を推定するという方法には限界があるといわざるをえない。

そこで、本稿では樹種の選択と全体の形態から機能の推定を行うこととする。ただし、以下で述べる実用度とは、製作段階で刺突あるいは打撃具として使用可能な樹種や柄構造を選択しているかどうかという問題であり、実用度が高いものがマツリに用いられた可能性を否定するものではない。

まず、武器形木器Ⅰ類には、鍬の柄などに利用される硬質な材（芋本 1987:p.80）であるサカキが選択されている例がある。Ⅰ類が実用的機能を保持した縄文時代の鹿角製有鉤短剣の系譜にある道具であることも勘案すると、対人用の殺傷具かどうかは不明であるが、刺突具としての機能は評価すべきであろう。

次に武器形木器Ⅱ類について検討する。Ⅱ類すなわち武器形石器を模した武器形木器の材には、図４―５のように硬質の木材であるアカガシ亜属が選択されるものもあるが、全体としては針葉樹が多いようであり、強度的にいえば実用度は低いといわざるをえない。

ただし、Ⅱ類でも前期後半に盛行する石製の極大形尖頭器を模倣したものに限っては、カシなど硬質の木材が用いられるということには注意が必要である。また、これらの柄部は、斧柄などとも共通する丈夫な構造であるという点も重要である。樹種や柄部の構造から、極大形尖頭器模倣の武器形木器は、Ⅱ類のなかでも例外的に実用度の高い武器形木器であると判断することができる。

興味深いことに、これと類似したありかたは祖型である極大形磨製尖頭器に関しても認

めることができる。近畿地方において磨製尖頭器は、磨製石庖丁などにも用いられる頁岩や粘板岩製のものが一般的である。しかしながら、極大形磨製尖頭器には前章で指摘したように打製石器にほぼ限定して用いられるサヌカイト製のものが、数多く認められるのである。つまり、硬質の素材を用いて大型の槍や戈が製作されるという現象が、弥生時代前期後半から中期初頭において武器形の石器、木器に共通して認められるのである。

次に青銅器模倣である武器形木器Ⅲ類について検討する。Ⅲ類にはほとんどの例にヒノキやスギなどの針葉樹が用いられており、すでに指摘があるように短小な茎構造などからも実用度は低いと考えてまず間違いない(岩永 1994b:p.59)。ただし、このことはⅢ類でも形骸化が進行したＢ式に関して該当するのであり、忠実な細形銅剣の模倣品であるＡ式では異なった状況が認められる。例えば、細形銅剣を模したＡ式の図５―３は、肉厚な剣身部をもちアカガシを用いて製作されている。一方、中細形銅剣の影響を受けていると考えられるＢ２式のうち、樹種が判明している図６―４はコウヤマキ製であった。樹種や扁平な剣身部、脆弱な茎の作りから判断するならば、Ⅲ類Ｂ式を実用的な武器とすることは困難である。つまり、祖型である武器形青銅器に対応して、武器形木器Ⅲ類にもＢ式と比べ相対的に実用的なＡ式と、樹種および形態的に全く実用的とはいえないＢ式という２者が認められるのである。

最後にその他の武器形木器について述べておきたい。図 11 ―２はイチイガシを用いて製作されている。ただし、非常に薄い扁平な形状から実用性を主張するのは困難であり、赤色顔料が塗布されていることもあわせて考えると、儀礼用に特化した木器であるといえよう。

5　まとめ

本章では、青銅器以外の武器形品との関係を重視した武器形木器の型式分類を行い、その結果、従来、武器形青銅器の肥大あるいは萎縮表現として認識されてきた武器形木器の多くが、実は同時期に存在した武器形石器の模倣品であることを指摘した。また、樹種と基部構造から実用度の高低をみいだすことにより、武器形石器を模した武器形木器Ⅱ類のなかにも弥生時代前期後半に実用的なものが存在することを明らかにした。そして、武器形青銅器を模倣した武器形木器Ⅲ類についても、細形銅剣を模倣した実用的なⅢ類Ａ式とＡ式と比べ相対的に非実用的であるⅢ類Ｂ式があり、祖型である武器形青銅器の型式変化

同様、実用度が低下していく型式変化が武器形木器Ⅲ類にも認められるという指摘を行った。

本章の成果として強調しておきたいのは、これまで儀礼論のなかで議論されてきた弥生時代の武器形木器のなかに実用的な武器の可能性のある型式をみいだしたことである。それらのうち、時期が明確な武器形木器Ⅱ類極大形尖頭器については、弥生時代前期後半に属しており、中期後半以降には実用的な武器形木器は認められなかった。つまり、前章において確認した青銅製武器や石製武器と同様、武器形木器もまた弥生時代中期初頭までに実用的なものが製作あるいは用いられているのに対し、中期後半には実用機能が強化されないばかりか、祭器として特化したもののみで占める状況がうかがわれたのである。

【注】

1)本章では、本州島西部地域、すなわち近畿地方から中・四国地方において出土した武器形木器を対象として検討する。ただし、近年、朝鮮半島でも全羅南道光州市新昌洞遺跡(国立光州博物館 1997)において、多数の武器形木器が出土している。また、本遺跡出土の木器と類似するものが、福岡県福岡市比恵遺跡第 25 調査地点から弥生時代前期後半の土器を伴い出土している(田崎・小畑 1991:p.84)。したがって、このような武器形木器を製作するという文化も、武器形石器などと共に朝鮮半島から北部九州地域に伝来した可能性が考えられる。以上で述べた武器形木器はいずれも青銅器を模倣した木器である。山陰地方や福岡県遠賀川流域に少量認められる古式の銅剣形磨製石剣の位置づけとも関連して、こういった木製、石製の青銅器模倣品の初現を考えるうえで以上の資料の分析は重要である。

2)ただし、池上・曽根遺跡出土例(図4—1)と美園遺跡出土例(図4—2)の茎部形態はやや異なる。池上・曽根遺跡出土例により類似する磨製尖頭器は、破片資料ではあるが大阪府寝屋川市高宮八丁遺跡出土例(塩山 1988:図版 19—1)などがあげられる。

3)弥生時代中期後葉に属し明瞭な柄部が作り出されている武器形木器が滋賀県針江中遺跡(尾崎ほか 1983:p.30)などでは出土しており、柄部形態から鉄剣との関係が類推される存在である。しかし、これらは剣身と木製柄が組み合わさった状態を模倣したものである。したがって、祖型の剣身が石製か鉄製かという区別は、模倣品である武器形木器から判断することは困難である。もちろん、同形態の武器形木器が石製の大形尖頭器の消滅する弥

生時代後期以降にも認められることから、これらと鉄剣が無関係でないこともまた明らかである。

４)別府洋二は、玉津田中遺跡出土の武器形木器を分類するなかで、ミニチュア品の存在を指摘している(別府 1996:p.363)。しかし、全長を根拠としてミニチュア化を主張することは祖型である細形銅剣のなかにも研ぎ直しなどをへて 20 cmに満たないものが存在することから慎重にならざるえない。むしろ、研ぎ直しの影響を受けない刳方下端長に注目するならば、ほとんどのⅢ類は祖型である細形銅剣の法量をほぼ忠実に踏襲しているといえよう。

５)祖型の限定が困難である要因としては、模倣の簡略化や祖型からの情報量の低下といった現象に加えて、次のような要因が考えられるのではないだろうか。それは情報量の低下に伴い、異なった器種の要素が融合して模倣品製作者の「範型」を構成した結果、このような模倣品が製作されるという現象である。すでに、吉田広は銅矛形石矛の分析のなかで、宮津市日置遺跡出土の「銅剣形磨製石剣」に銅矛の要素と銅剣の要素の両方を認めており、祖型が銅剣か銅矛かという問題ではなく、模倣においてどちらに比重が置かれたかが問題であると指摘している(吉田 1997:p.43)。

６)銅剣の剣身幅は、研ぎ直しなどによる減少が想定できる。しかし、銅剣の大型化を示す指標として、刳方下端幅(元部幅)は無視できない属性であり、実際、銅剣形磨製石剣についても同様の視点からの分析がおこなわれている(種定 1992:pp.97 ～ 98)。本稿では銅剣から模倣品である石器、木器への一方向の影響を重視したが、模倣石器からの型式的フィードバックも想定されており(吉田 1993:p.37)、両者の時期的関係を含めて検討が必要である。今後の課題としたい。

７)この分類は祖型である中細形銅剣Ｂ'(種定 1992:pp.95 ～ 98)からの簡略化を示した分類である。したがって、種定の見解に従えば、銅剣形木器と銅剣形磨製石剣ではそれぞれの祖型が異なるということになる。この問題は中部瀬戸内地域以東における武器形祭器出現にも関わる重要な問題であるが、銅剣形磨製石剣と武器形青銅器の検討なしには、この問題の分析は困難である。両者の関係については今後の課題としたい。

終章　弥生時代における武器の特質と歴史的意義

これまでの各章における弥生時代の武器に関する考古学的分析は、先学の研究と比べていくつかの点で異なった結論を導くこととなった。最後にこれまで分析のなかで明らかにした事象を研究史上の意義に注意しつつ、①列島のおける武器普及段階と地域性の展開、②武器の機能強化の実態、③武器所有形態の変遷過程、という３つの論点にまとめることにより、本稿の結論としたい。

1　列島における武器普及の諸段階と地域性の展開

弥生時代開始期における武器の波及は、磨製石斧などの新来石器と比べ、低調であることが第１章の分析により判明した。とくに墓制におけるその取り扱いは、朝鮮半島にみられる武器形石器の扱いと大きく異なっていたのである。

続く弥生時代前期末以降には、新たに細形銅剣をはじめとする青銅製武器の普及が北部九州地域を中心に認められ、その分布は、長野県にまで及んでいる。副葬品として出土しない中・四国地方以東の青銅製武器出現時期は必ずしも明瞭ではないが、峰部の出土例から確実に弥生時代中期中葉には、確実にその出現が認められる。したがって、遅くとも弥生時代中期には北部九州地域から近畿地方にかけて、金属製の実用利器である細形銅剣が普及していたと考えられる。

ここで注目されるのは、北部九州地域と中・四国地方以東における青銅製武器の出土状況の違いである。また、着柄方法の差異などを含めると、弥生時代中期(併行期)において青銅製武器は、階層的な副葬品として利用される朝鮮半島、北部九州地域と、副葬品としての扱いを受けない中・四国地方以東の２地域に大別できるのである。

また、第２章における石鏃の検討により、弥生時代中期後葉から後期初頭において、次の２つの地域間交流の存在を指摘した。まず、有茎式打製石鏃から中部瀬戸内地域と大阪湾沿岸地域の交流が判明し、有孔磨製石鏃からは近畿地方と東日本地域との交流が導き出されたのである。ただし、波及先でみられる石鏃石材が異なることや、未製品が出土していることから、単純に外来品が搬入されたのではなく、ともに弓矢の使用時には確認できない石鏃と矢柄の装着原理を広域で共有できるような、在来の地域関係をこえた新たな人的ネットワークの出現が想定できたのである。ただし、両者とも波及先での石鏃組成のな

かでは、少数派であることから、以上の石鏃型式の交換は、あくまで各地域における一部の人々の介在した部分的な現象であったと考えられる。

さらに、第３章で指摘した弥生時代後期における鉄製携帯武器の列島規模での広域波及は、弥生時代中期における青銅製武器の関門海峡地域をはさんだ地域性が解消され、東日本地域を含む列島社会の一体化を示しているかのような錯覚を与える。しかし、第３章３節において論じたように、生産技術の広がりをこえて、拡大する当該期における鉄製武器の普及は、鉄器生産や流通網が拡大したことによる面的な普及ではなく、特定個人、集団間で武威が交換されたからこそ円滑に達成された、点的でかつ関連所作を含めた鉄製携帯武器共有関係の形成なのである(図１)。

つまり、鉄製携帯武器の分布および出土状況の列島規模での均質化は、列島規模での平準な民族形成を意味しない。弥生時代後期における鉄製武器副葬の広域化をあえて日本列島における民族形成論と絡めて論じるのならば、列島の民族性(ethnicity)形成過程を論じたブルース・バートンの次のような議論が参考となるかもしれない(バートン 2000)。バートンは、奈良時代の律令体制下に存在した中央および地方のエリートのみが「日本」民族意識を構成したのであり、列島の大部分の住民は、当時の「日本」民族的共同体の傍観者に過ぎなかったと述べている(バートン 2000:p.106)。本稿では奈良時代の社会に対する彼の認識の可否を問うことはできない。しかしながら、本稿で検討した鉄製武器副葬の広域化は、それらが分布する各地域社会の同質化を示すのではなく、第３章の最後で論じたように、広域での社会的紐帯の維持が不可欠な交易活動などを営んでいた特定個人、集団の参画により形成された点在的な交流網の反映なのである。つまり、結果として多くの傍観者を生み出しつつ達成された広域の紐帯であるという点で、弥生時代後期の鉄製武器副葬墓の拡大は、バートンのいう律令期における民族意識のありかたと共通項をみいだすことができるのである。そして、弥生時代の武器の地域的展開にみられるこのような現象は、水稲農耕開始期である弥生時代において均質な農耕社会の形成を想定することにより、それ以降の列島文化を単一的にとらえる議論に対して、重大な反証として提示しうる事象なのである。

２　弥生時代における武器の機能変遷

それでは、次に弥生時代における武器の機能面での変遷過程について、本稿での成果を

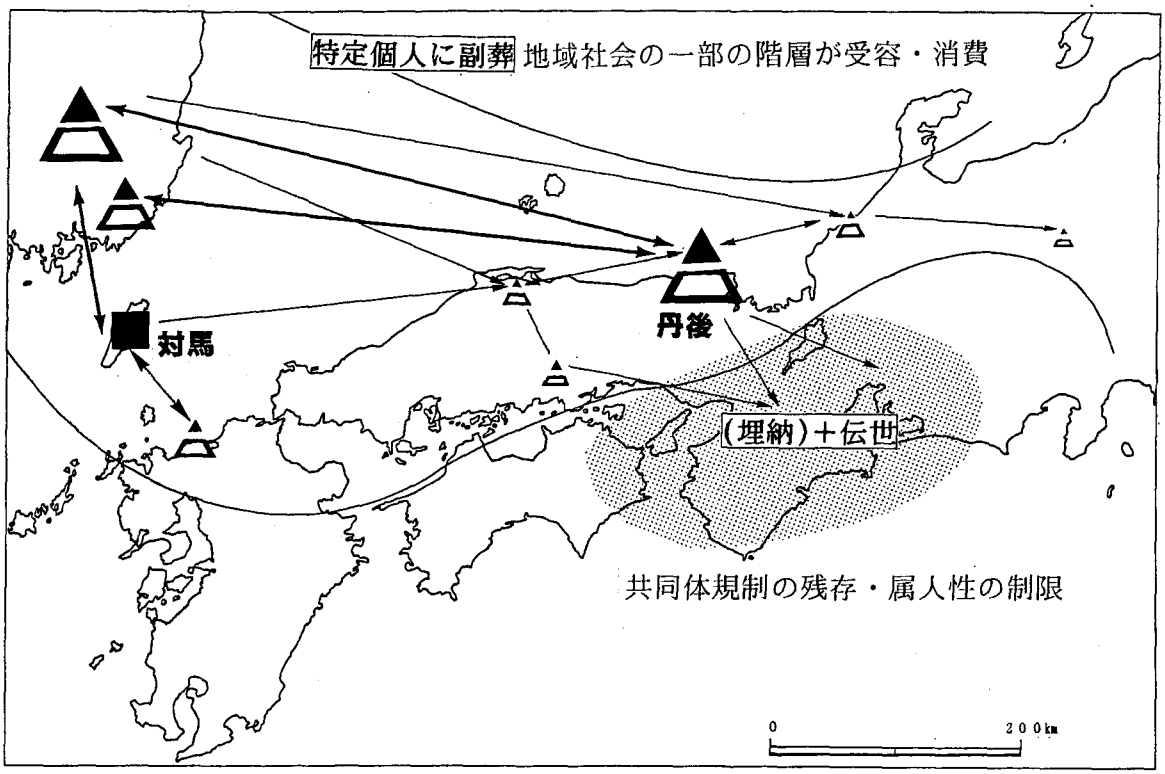


図1　弥生時代後期における武器消費形態の地域性

まとめることにより、従来の単系的な武器強化論と、本稿における分析結果との相違を明示していくこととする。

まず、弥生時代開始期において、在来の打製石鏃に比べて重く形態的にも貫通力が重視された磨製石鏃が、新たな石製木工具とともに弥生時代開始期の列島社会に波及する。しかし、新来の石製木工具に比べて、石製武器類の普及する範囲は狭く、非定着的であることが、第１章の分析により明らかとなった。さらに外来の大型磨製石鏃の影響を受けて、重量化により機能が強化された打製石鏃が、中部瀬戸内地域や大阪湾沿岸地域において出現することが第２章において確認できたのである。ただし、在来の石鏃のなかで大型化する石鏃はごく一部であり、中部瀬戸内地域では弥生時代前期における部分的な石鏃大型化と中期後葉以降の総体的な石鏃大型化の間には明瞭な断絶が認められたのである。

つまり、これまで弥生時代研究におけるの抗争論の重要な資料的根拠であった石鏃の大型化は、弥生時代開始期、すなわち水稲農耕定着期から連続的に発展するのではなく、中期後葉以降における交流圏の広域化に付随して石鏃大型化が総体的に進行するのである。

さらに弥生時代前期後半から中期初頭に極大形石製尖頭器および石製短剣が、九州島北部から近畿地方にかけてほぼ同時期に出現する。なかでも戈や大形の槍として用いられた極大形尖頭器は、磨製品にも硬質なサヌカイトが用いられる強力な石製武器であった。しかし、第４章で確認したようにその模倣品である木製武器も含めて、中期後半には大幅に減少する武器なのである。

代わって弥生時代中期後半に盛行するのは、非常に精緻なつくりではあるが薄く加工されたために明らかに強度を喪失した打製短剣や、粘板岩などを用いて製作された厚さ１cmにも満たない磨製短剣であった。極大形尖頭器と石製短剣は、先に述べたように近畿地方において、ほぼ同時期に出現する武器形石器である。そして、構造的には極大形尖頭器と比べて明らかに脆弱な石製短剣が、むしろ中期後半に盛行するのである。つまり、弥生時代後期以前において弓矢以外の石製武器は機能強化に向かわず、むしろその象徴的側面を発達させた石製短剣が顕在化するのである。

さらに弥生時代中期以降、その生産技術も含めて西日本社会に普及する青銅器文化のなかでも、武器形青銅器は一貫して強化の方向には向かわない。かつて、銅剣などの短兵が強化に向かわない背景の説明としては、鉄製武器の導入と普及を想定する見解が存在した(岡崎 1955:p.211、田中 1977:p.166)。しかし、少なくとも中部瀬戸内地域以東において、鉄器以外の短兵を不要とするほどの量的な鉄製武器の普及を弥生時代中期に想定すること

は困難であり(川越 1993:pp.170 ～ 184)、仮に実用の銅剣を不要とするほど鉄製武器が弥生時代中期に普及していたとすれば、銅剣よりも機能的に劣っていると考えられる打製、磨製の石製短剣の盛行は大きな矛盾をきたすのである。

つまり、弥生時代後期以前の武器の多くは、弓矢に関しては中期後葉において、ようやく総体的な強化がはかられるのであり、それ以外の武器類については、実用機能より、むしろ象徴的側が重視されてた様相が、石製短剣の分布圏の広がりや規格性の高さから指摘できたのである。

さらに筆者は、埋納や墓制における取り扱いの状況から弥生時代後期以前の武器の全般に認められた象徴的機能が、均質的な社会を維持するため用いられたとの結論に至ったのである。しかし、武力の強化ではなく象徴的機能を追求し、均質的な社会の維持を支えていた中・四国地方以東の石製短剣や武器形青銅祭器は、弥生時代後期から終末期に消滅を余儀なくされたのである。その要因として、これまでも重視されてきた階層社会形成過程については、次に武器の所有形態を論じるなかで追究することとする。

3　武器所有形態の変遷とその背景

(1)財の所有形態をめぐる諸説

それでは、最後に弥生時代における武器所有形態の変遷について論じていこう。しかし、その前に弥生時代における財の所有形態をめぐる従来の議論を概観しておきたい。

すでに第3章で分析したように、副葬品を個人所有の表象であるとみなし、一方で埋納品を共同体所有の反映であると定義することによって、弥生時代における財の所有形態の議論は進展してきた。そして、その成果は次の原島礼二の理論的考察に最も端的に表現されている。

原島礼二は、副葬品と埋納品に対する上記の見解をふまえたうえで、氏族共同体が農業共同体へ変質するという理論的枠組み(大塚 1955)に基づき、弥生時代における農業共同体と世帯共同体の関係について、次のように論じている(原島 1968)。

まず、滋賀県大中の湖南遺跡において、住居址と区画された水田のセットが認められることから(滋賀県教育委員会 1967)、各住居址単位が農業生産の主体となっていることを想定した。また、岡山県沼遺跡において数軒の竪穴式住居と掘建柱建物の数単位が認められることから(近藤 1959)、それぞれの世帯共同体は、農具を私有して水田を個別的に耕

作し、かつ稲などの生産物を世帯共同体単位で蓄えるという社会状況を想定することにより、各世帯共同体の相対的自律性を提起したのである。

さらに原島は、世帯共同体の自律的運動が、従来の氏族共同体に変質をもたらし、あらたに動産私的所有制の段階に即した「規制力」を必要とする社会的環境を弥生時代に見いだした。具体的には、銅鐸による集団的な祭祀が、世帯共同体の余剰を吸収、集中し、私的利害を調整する強制力の機能を果たしたとする。

以上のような考古資料の理解をもとに、原島は「世帯共同体相互の私有財産上の不平等を解消するための手段」としての機能を農業共同体の強制力の具体的役割として推察した(原島 1968:pp.95 ～ 110)。また「個別的労働と私有制の存在を否定せず、かえってそれを発展させつつ共同の利害に即した強制力」という側面にも注意を即している(原島 1968:p.99)。

原島の以上の見解のなかで興味深いのは、金属製武器もまた、稀少な素材を用いるという点で銅鐸と共通することから、銅鐸と同様の所有形態を類推している点である(原島 1968:p.102)。そして金属製武器が共同体所有下にあるという前提に基づき、戦争や紛争の主体としての農業共同体の存在し、かつ世帯共同体の自由な発展を抑制するにも有利な作用を果たしたという理解を示した

このような原島の枠組みは、その後の弥生社会像に大きな影響を与える。例えば都出比呂志は、原島の提言を受けて北部九州地域と畿内地域における副葬品の多寡や埋納習俗の有無を、農業共同体の規制力をもちいて次のように説明した(都出 1970)。それは、副葬品の寡少性こそが、畿内地域において首長の私有財形成を阻止する強固な農業共同体規制がいち早く形成された証拠であり、このような共同体規制力がピラミッド的集約を遂げることにより、政治的結合体の優位性が形成されると述べたのである(都出 1970:p.55)。

また、ピラミッド的集約の具体的要因として、土地や水利をめぐる他の農業共同体との抗争などを通じた優位な共同体による他の共同体の従属化を想定した(都出 1970:pp.62 ～ 63)。

同様の見解を、近藤義郎も示している(近藤 1983)。近藤は部族相互の利害の衝突の結果、形成される部族間の結合にも、部族内の構造原理である擬制的あるいは事実的たるを問わず、血縁的な同祖同族関係が形成されると述べ、共同体内の構造を維持したままでの、ピラミッド構造の形成、いわばトーナメント方式での部族連合体の形成を想定しているのである(近藤 1983:p.139)。

また、これらの議論の前提となるのは、農業生産や手工業生産および交易などの集団的諸機能の首長への集中化であり(近藤 1962:pp.181 ～ 187、1983:p.136)、そして農業共同体あるいは部族という単位の結合原理となる水稲農耕社会の存在である。

さらに都出は、世界各地における農業共同体と世帯共同体の関係を、次の２類型に区分した(都出 1989:pp.484 ～ 487)。まず、西アジア初現期天水ムギ栽培やアメリカ大陸のトウモロコシ栽培などを類例にあげ、採集経済段階と同様、小集団の労働協業に基づく小経営単位が主体となる農耕社会を想定し、これを「小経営顕在型の農耕社会」と命名した。一方、東アジアの水稲農耕や西アジア沖積地で顕著となる人工灌漑を伴った大規模な農業社会を「小経営抑圧型の農耕社会」と呼び、灌漑のための土木事業等の必要性から小経営体間の恒常的な協業が不可欠となり、結果として共同体機能を体現する首長の経済的、政治的機能が大きくなると述べた。そして、列島における初期農耕社会は灌漑施設を伴う水稲農耕から開始されることから、「灌漑を軸とする農業共同体的な社会関係」が成立し、後者の「小経営抑圧型の社会関係がいちはやく成立した」と指摘したのである(都出 1989:p.491)。都出のこの考察において重要なのは、生業形態により共同体の規制力もまた、変化しうるということを明示した点である。

(２)弥生時代における武器の所有形態

それでは、以上の議論をふまえたうえで、弥生時代における武器所有のあり方について筆者の見解を述べることとする。

まず、本稿の分析における大きな成果としてあげられるのは、大阪湾沿岸地域を中心とした地域において、弥生時代中期に顕在化する次のような武器の様相が確認できたことである。まず、朝鮮半島や北部九州地域において青銅製武器は、階層的区分を担った機能が墓制における用法から推定可能であった。しかし、当地域では集落や埋葬施設から破片等の出土が少数ながら認められるのみであり、西方地域で一般化していた葬制での階層区分原理としての利用は全く認められない。一方、地域内で自給可能な石製短剣は、打製、磨製を問わず精巧で規格性の高いものが、大量に生産、流通していたことが、第３章２節における分析により明らかとなったのである。

さらに墓制においても、多様な武器形石器の中で石製短剣のみが副葬品として選択されていることが確認できた。しかしながら、葬制における石製短剣副葬墓の位置づけは、西方地域における青銅製武器副葬墓の様相とは大きく異なり、必ずしも大型の方形周溝墓に

伴うものではなく、区画外の土壙墓からの出土例も、少なからず認められるのである。したがって、大阪湾沿岸地域において石製短剣の副葬行為は、階層区分を意図したものではない。さらに石器組成の検討からも、石製短剣が当時社会において普遍的に普及していた石器であることが指摘できたのである。つまり、大阪湾沿岸地域において石製短剣は、共同体一般成員に普遍的に普及した武威の象徴であると考えられるのである。

当地域において、稀少な金属製武器類は北部九州地域以西において付加されていた副葬の原則を排してまでも、脱個人化がはかられるのであり、一方で自給可能な石製短剣については、多量の生産を行い一般成員に行き渡らせることにより、所有の有無による格差の発生が回避されていたと考えられるのである。このような状況を先学による財の所有形態をめぐる議論のなかにその位置づけを求めるならば、次のような座標を与えることができよう。

まず、埋納される稀少な金属製武器は、先学の指摘通り、所有の有無による不平等の発生を防ぐ農業共同体的規制の発現として理解することができる。一方で副葬品としての消費が認められた石製短剣は、そういった農業共同体規制と相互に依存しながら、発展していた世帯共同体の一定の自律性と私的所有の発達を示すものであると解釈できるのである(原島 1968:p.99)。しかし、このような社会的機能を帯びていたと考えられる石製短剣は、弥生時代後期以降、他の石製武器に先駆けて、急速に消滅する。この現象が鉄製刀剣類の量的な普及によるものではないことは、弥生時代後期における鉄製武器の出土数から明らかである。石製短剣の消滅は、その価値観を支えてきた秩序の喪失、すなわち共同体的紐帯の喪失によりもたらされたと考えられるのである。

したがって、弥生時代後期において鉄製武器を副葬するような有力個人墓の出現が、大阪湾沿岸地域にいまだ認めれないことも、次のような解釈が可能となる。それは弥生時代後期の大阪湾沿岸地域における石製短剣の消滅、土器文様の喪失(都出 1982:p.238)、そして環濠集落の解体(都出 1989)の要因は、農業共同体規制を体現する「首長」の卓越を示すのではなく、農業共同体規制と相互に依存しながら、発展していた世帯共同体との安定した関係の崩壊なのである。もちろん、弥生時代後期の大阪湾沿岸地域には、共同体的祭器として、さらに強化された新式銅鐸が存在すること(田中 1970)から崩壊期においても、水稲農耕経営維持の必要から在来の農業共同体的秩序の維持が試みられていたと考えられるのである。

弥生時代後期の以上のような大阪湾沿岸地域の状況は、第3章の分析により明らかとな

ったように、鉄製武器副葬の浸透において、例えば近接する丹後地域との間において、大きな差異が生じているのである。

そこで、この２地域、大阪湾沿岸地域と丹後半島地域の弥生時代後期における武器の状況および自然環境等を比較したのが表１である。表１の比較からは、農業の協業規模は相対的に小さく、一方で縄文時代以来日本海を介した交易活動(小林 2001)を広義の生業活動に組みこんでいた丹後半島は、大阪湾沿岸地域より相対的に自律した世帯共同体が存在しうる基盤を有していたということがうかがわれるのである。そして、弥生時代後期は丹後地域のみならず、その後背地域である畿内地域においても外部物資である鉄素材への依存度が総体的に高まる時期に相当するのである(藤尾 1999)。つまり、

①地理的多様性にともなう灌漑水稲農耕への依存度の差異

②生業自体に交易が組み込まれた地域経済の存在

③外部依存社会の形成に伴う交易活動の社会的比重の増大

という諸要素が、当該期において大阪湾沿岸地域と丹後半島地域における差異を生み出した要因として考えられるのである。

つまり、都出比呂志が明示したように農業共同体による世帯共同体への規制力(本稿では、②で示したように交易を広義の生業に加えて議論するので、都出の農業共同体を生業共同体と読み替えることとする)は、その生業形態に左右されるのである。したがって、以上のような条件のもと、列島各地における「生業共同体」と世帯共同体の関係は均質ではなく、また交易や生産技術の変化、発展によりその関係も変化していくと考えられるのである。

そして、第３章３節の最後で議論したように、農耕適地と鉄製武器副葬墓の分布は、弥生時代後期において相反する傾向すらみせるのである。つまり、長距離交易の画期である弥生時代後期においては、農業における協業性の低い地域こそ、鉄製武器副葬墓に代表されるような小経営体の顕在化が、いち早く進行したと考えられるのである。そして、交易という生業の特質より、広域の社会結合をもったこれらの特定個人、集団の結合体の生成は、弥生時代開始期以来各地で形成された農業共同体的な規制をこえた新たな秩序を構築しうる可能性を秘めていたのである。このような情勢を受けて、彼らとの交渉により必需材である鉄資源等を入手していたと考えられる先述の大阪湾沿岸地域をはじめとする広域な農業共同体も、その体制の変質を余儀なくさせられたと考えられるのである。その結果の一部として、地域内での完結した武威の表象であったと考えられる石製短剣は、急速な

表1　弥生時代後期における大阪湾沿岸地域と丹後半島地域の生業環境と武器消費形態の比較

	平野規模	協業規模	武器形副葬墓の顕在化	集落出土	共同体祭器の顕在化
大阪湾沿岸地域	大きい	大きい	なし	あり	あり
丹後半島地域	小さい	小さい	あり	—	なし

消滅をむかえるのである。

弥生時代における武器の所有形態について、時期的変化と地域性という点から考察を加えることにより、本稿では以上の結論を得た。この過程で痛感されたのは、所有形態を議論するためには、それぞれの社会における生産様式の復元と変遷を明らかにする必要性があるということである。従来の弥生社会における階層化に関する議論は、農業共同体の統括者である首長を、農業生産だけではなく祭祀権および手工業生産を統轄する管理者として位置付けることにより、弥生時代中期以降に展開する様々な事象を、中期以来の農業共同体的な首長権力の強化あるいは広域化として位置付けてきた(近藤 1983・広瀬 1997・寺沢 2000)。しかしながら、弥生時代後期における鉄製武器所有形態の地域差と、その背後に垣間見られた生業共同体の多様性は、従来の単系的な社会複合化像に対して、大きな懐疑を提示することになった。また、この段階においてはじめて広域での石鏃大型化が生じるという点にも注意が必要である。つまり、実用性と強化された武器の必要性もまた、以上のような新たな生業共同体の出現過程において生じた現象であると理解できるのである。

鉄製武器が表象する武威が特定個人・集団に共有されるということは、その背後に多数の武装せざる人々を生み出すことになる。このような過程において実質的な武器の強化が図られ、かつ弥生時代後期以降の墓制において階層区分原理に鉄製武器が例外なく採用されることを考えあわせることにより、筆者は列島における階級分化を生み出しうる「武力の独占」の開始を、以上のような弥生時代後期の現象にみいだすのである。

【著者別参考文献】

あ

秋山浩三 1999「近畿における弥生化の具体相」『論争吉備シンポジウム記録』1、考古学研究会、189～222頁

東靖子 1996「石鏃の機能分化」『紀要村川行弘先生古稀記念特輯』、のじぎく文化財保護研究財団、133～145頁

粟田薫 1995「打製石剣の製作技術」『弥生文化博物館研究報告』第4集、大阪府立弥生文化博物館、31～54頁

粟田薫 1997「剥片からみた打製石剣の製作技法―喜志遺跡出土資料を検討して―」『みずほ』第22号、大和弥生文化の会、28～37頁

安藤広道 1997「南関東地方石器～鉄器移行期に関する一考察」『横浜市歴史博物館紀要』2、横浜市歴史博物館、1～32頁

石井賢太郎・松本直子 1998「縄文時代から弥生時代にかけての打製石鏃の形態変化」『人類史研究』第10号、人類史研究会、172～180頁

石川日出志 1997「石器」『考古学雑誌』第82巻第2号、日本考古学会、81～93頁

石黒立人 1988「弥生時代の美濃地方とその特質」『マージナル』No.8、愛知県考古学談話会、13～38頁

石田治雄 1981「溝―3・石器」『東奈良(大阪府茨木市)発掘調査概要』II、東奈良遺跡調査会、62～64頁

伊藤淳史 1995「弥生時代における地方間交流―伊勢湾地方弥生土器の型式変化と移動―」『史林』第77号第4号、史学研究会、38～79頁

伊藤律子 1992「石製品」『川合遺跡遺物編2平成3年度静清バイパス(川合地区)埋蔵文化財発掘調査報告(石製品・金属製品本文編)』、(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所、9～61頁

一山典・滝山雄一 1985「徳島市庄遺跡出土の弥生時代木製品」『考古学ジャーナル』No.252、ニュー・サイエンス社、23～25頁

乾哲也 1995「大阪府和泉市池上・曽根遺跡の巨大柱穴とサヌカイト埋納―弥生時代中期の石材祭祀―」『祭祀考古』第3号、祭祀考古学会、4～6頁

芋本隆裕 1987「出土木製品・植物製品」「樹種と選材」『鬼虎川の木質遺物—第7次調査発掘調査報告書』第4冊、(財)東大阪市文化財協会、5～38頁・80～82頁

井守徳男 1983「鉄器」『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』II、兵庫県教育委員会、267～268頁

岩崎誠 1991「神足遺跡」『長岡京市史資料編』一、長岡京市史編さん委員会、176～213頁

岩田修一 1992「サヌカイトの考察」『二上山博物館紀要ふたかみ』1、香芝市二上山博物館、97～112頁

岩永省三 1980「弥生時代青銅器型式分類編年再考—剣矛戈を中心として—」『九州考古学』第55号、九州考古学会、1～22頁

岩永省三 1988「青銅武器形祭器生成考序説」『日本民族・文化の形成1永井昌文教授退官記念論集』、永井昌文教授退官記念論集刊行会、555～572頁

岩永省三 1989「弥生人の装い」『古代史復元』5　弥生人の造形、講談社、149～167

岩永省三 1992「日本における階級社会形成に関する学説史的検討序説（II）」『古文化談叢』第27集、九州古文化研究会、105～123頁

岩永省三 1994a「日本列島産青銅武器類出現の考古学的意義」『古文化談叢』第33集、九州古文化研究会、37～60頁

岩永省三 1994b「戦いのための道具—武器形木製品について—」『季刊考古学』第47号先史時代の木工文化、雄山閣出版、57～61頁

岩永省三 1997a『歴史発掘』7金属器登場、講談社

岩永省三 1997b「金属器」『考古学雑誌』第82巻第2号、日本考古学会、94～102頁

岩永省三 1998「青銅器祭祀とその終焉」『日本の信仰遺跡』、奈良国立文化財研究所学報第57冊、雄山閣出版、75～99頁

上原真人(編)1993『木器集成図録近畿原始篇』、奈良国立文化財研究所

宇垣匡雅 1999「吉備弥生社会の諸問題」『論争吉備』シンポジウム記録1、考古学研究会、81～102頁

鵜島三嘉 1992「石器」『京都府埋蔵遺跡調査報告第16冊千代川遺跡』、（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター、49頁

梅崎恵司 1999「福岡県北九州市の弥生時代石器の素材」『研究紀要』第 13 号、(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室、19 ～ 30 頁

梅原末治 1921「銅鐸に就いて」『藝文』第十二年第四號・第五號

※ 1940『日本考古學論攷』、弘文堂書房、123 ～ 167 頁に再録を参照

梅原末治 1922『鳥取縣史蹟勝地調査報告』第一冊　鳥取縣下に於ける有史以前の遺跡、鳥取県教育委員会

梅原末治 1924「銅剣銅鉾について（六）」『史林』第 9 巻第 2 号、史学研究会、31 ～ 42 頁

扇崎由 1995「岡山市南方(済生会)遺跡」『考古学研究』第 42 巻第 2 号、考古学研究会、11 ～ 15 頁

扇崎由 1996「南方(済生会)遺跡出土の剣形木製品」『動物考古学』第 7 号、動物考古学会、53 ～ 57 頁

大久保徹也 1999「四国島北東部の墓制―その展開と特質―」『季刊考古学』第 67 号墳墓と弥生社会、雄山閣出版、66 ～ 70 頁

大塚久雄 1955『共同体の基礎理論』、岩波書店

大野嶺夫・藤井保夫 1992『日本の古代遺跡和歌山』、保育社

大林太良 1979「原始の美と呪術」『図説日本文化の歴史』 1 先史・原始、小学館、193 ～ 220 頁

大村直 1984「石鏃・銅鏃・鉄鏃」『史館』第 17 号、史館同人、25 ～ 55 頁

大庭重信 1999「方形周溝墓制からみた畿内弥生時代中期の階層構造」『国家形成期の考古学―大阪大学考古学研究室 10 周年論集―』、大阪大学考古学研究室、169 ～ 183 頁

岡崎敬 1982「銅剣、銅矛、銅戈」『末盧国―佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究―』、299 ～ 302 頁、唐津湾周辺遺跡調査委員会

岡内三眞 1982「朝鮮における銅剣の始源と終焉」『考古学論考小林行雄古稀記念論文集』、平凡社、787 ～ 844 頁

岡村秀典 1990「卑弥呼の鏡」『邪馬台国の時代』、木耳社、3 ～ 26 頁

岡村秀典 1992「浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳の出現を探る―松本古墳群シンポジウムの記録―』、出雲考古学研究会、98 ～ 115 頁

岡村渉 1997『有東遺跡第 16 次発掘調査報告書』、静岡市教育委員会

尾崎好則・山口順子・兼安保明 1983「針江中遺跡の調査」『国道 161 号バイパス関連遺跡調査概要(昭和 57 年度)3新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江中遺跡・針江北遺跡発掘調査概要—高島郡新旭町所在—』、滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会、25 ～ 31 頁

小田富士雄 1959「佐賀県田代発見の石剣と土器」『九州考古学』第 7・8 号、九州考古学会、10 頁

小田富士雄・韓炳三(編)『日韓交渉の考古学』弥生時代編、六興出版

小田亮 1996「ポストモダン人類学の代価—ブリコルールの戦術と生活の場の人類学—」『国立民族学博物館研究報告』21 巻 4 号、国立民族博物館、807 ～ 875 頁

折尾学 1981「銅剣」『今山・今宿遺跡—玄海自転車道建設に伴う遺跡の調査福岡市埋蔵文化財調査報告』第 75 集、福岡市教育委員会、5 頁

か

甲斐昭光 1996「居住域の利用について」『神戸市西区玉津田中遺跡』—第 5 分冊(本文編)—(竹添地区・池ノ内地区の調査)—田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—兵庫県文化財調査報告第 135 — 5 冊、兵庫県教育委員会、233 ～ 238 頁

片岡宏二 1999『弥生時代渡来人と土器・青銅器』考古学選書、雄山閣出版

片山一道 2000「弥生時代の殺人事件?」『縄文人と「弥生人」古人骨の事件簿』、昭和堂、92 ～ 109 頁

加藤晋平・鶴丸俊明 1980『図録石器の基礎知識』Ⅰ—先土器時代(上)—、柏書房

金関恕 1978「木製武器」『日本原始美術大系』第 5 巻武器装身具、講談社、176 頁

鎌田勉・友岡信彦 1999「大開遺跡第 7 次調査」『平成 8 年度神戸市埋蔵文化財年報』、神戸市教育委員会、141 ～ 146 頁

神村透 1972「弥生時代の問題点」『北原遺跡—弥生中期北原式土器とその石器群—』、高森町教育委員会、24 ～ 33 頁

亀島重則 1999『田井中遺跡発掘調査概要』Ⅷ、大阪府教育委員会

川越哲志 1993『弥生時代の鉄器文化』、雄山閣出版

川越哲志(編)2000『弥生時代鉄器総覧(東アジア出土鉄器地名表)』(Ⅱ)、広島大学文学部考古学研究室

河野一隆 1997「玉作と鉄器文化―京都府奈具岡遺跡の遺構・遺物の検討から―」『第4回鉄器文化研究会東日本における鉄器文化の受容と展開』、鉄器文化研究会、167～190頁

神原英郎 1969「美作久米南町別所発見の銅剣」『古代吉備』第6集、古代吉備研究会、26～30頁

喜谷美宣 1977「青銅製武器・祭器」『地方史マニュアル』6考古資料の見方<遺物編>、柏書房、153～177頁

北野俊明 1977「52―1区」『昭和51年度四ツ池遺跡調査概要―方形周溝墓の調査―』、堺市埋蔵文化財研究会、4～15頁

桐原健 1966「信濃国出土青銅器の性格について」『信濃』第18巻第4号、信濃史学会、20～32頁

桐原建 1969「信濃の磨製石鏃―その具有する問題点の1、2について―」『信濃』第21巻第10号、信濃史学会、106～113頁

楠本政助 1973『仙台湾における先史狩猟文化』矢本町史第1巻先史抜刷

黒沢浩 1991「弥生時代における祭祀の重層性とその系譜―特に近畿地方を中心として―」『駿大史学』第82号、駿大史学会、105～130頁

黒沢浩 2000「青銅器伝来」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』、頌寿記念会、645～672頁

桑原久男 1995「弥生時代における青銅器の副葬と埋納」『西谷眞治先生古稀記念論集』、西谷眞治先生の古稀をお祝いする会、15～47頁

甲元眞之 1999「日韓における墓制の異同」『季刊考古学』第67号　墳墓と弥生社会、雄山閣出版、44～48頁

後藤守一 1954「木器」『登呂遺跡』、日本考古学協会、120～292頁

後藤直 1984「韓半島の青銅器副葬墓―銅剣とその社会―」『尹武炳博士回甲記念論叢』、尹武炳博士回甲記念論叢刊行委員会、655～685頁

後藤直 2000a「朝鮮青銅器時代」『季刊考古学』第70号　副葬を通してみた社会の変化、雄山閣出版、53～57頁

後藤直 2000b「日・韓の青銅器―副葬と埋納―」『韓国古代文化の変遷と交渉』、633 ～ 664 頁

小林青樹 1999「瀬戸内地域における弥生文化の成立」『論争吉備』シンポジウム記録１、考古学研究会、165 ～ 188 頁

小林青樹 2001「農耕社会形成前の日本海沿岸地域」『古代文化』第 53 巻４号、(財)古代学協会、3 ～ 11 頁

小林行雄・末永雅雄 1943「木製品および植物製品」『大和唐古彌生式遺跡の研究』、京都帝国大学文学部考古学研究室、144 ～ 182 頁

小林行雄 1951『日本考古学概説』、創元社

近藤喬一 1969「朝鮮・日本における初期金属器の系譜と展開―銅矛を中心として―」『史林』第 52 巻第１号、史学研究会、75 ～ 115 頁

近藤喬一 1974「武器から祭器へ」『古代史発掘』５　大陸文化と青銅器弥生時代２、講談社、69 ～ 77 頁

近藤喬一 1986「東アジアと青銅祭器―農耕儀礼の祭器としての武器と鐸―」『銅剣・銅鐸・銅矛と出雲王国の時代』、日本放送出版会、120 ～ 172 頁

近藤喬一 2000「東アジアの銅剣文化と向津具の銅剣」『山口県史』資料編考古１、山口県、709 ～ 794 頁

近藤義郎 1959「共同体と単位集団」『考古学研究』第６巻第１号、考古学研究会、13 ～ 20 頁

近藤義郎 1960「鉄製工具の出現」『世界考古学大系』２、平凡社、34 ～ 51 頁

近藤義郎 1962「弥生文化論」『岩波講座日本歴史』１原始および古代１、岩波書店、139 ～ 188 頁

近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』、岩波書店

さ

斎野裕彦 1998「片刃磨製石斧の実験使用痕分析」『仙台市富沢遺跡保存館研究報告』１、仙台市富沢遺跡保存館、3 ～ 22 頁

才原金弘 1988「出土木製品」『鬼虎川遺跡調査概要』Ⅰ遺物編木製品、(財)東大阪市文化財協会、5 ～ 68 頁

才原金弘 1996『鬼虎川遺跡第 33 次発掘調査報告』、(財)東大阪市文化財協会

境靖紀 1998「武器形鋳型型式論―北部九州の石製鋳型を中心に―」『古文化談叢』第 41 集、九州古文化研究会、31 ～ 54 頁

酒井龍一 1974「石庖丁の生産と消費をめぐる２つのモデル」『考古学研究』第 21 巻第 2 号、考古学研究会、23 ～ 36 頁

酒井龍一 1982「畿内大社会の理論的様相―大阪湾岸における調査から―」『亀井遺跡―寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書』II、(財)大阪文化財センター、239 ～ 251 頁

酒井龍一 1984「弥生時代中期・畿内社会の構造とセツルメントシステム」『文化財学報』第３集、奈良大学文学部文化財学科、37 ～ 51 頁

酒井龍一 1996「考古学的社会変成過程観察モデル」『文化財学報』第 14 集、奈良大学文学部文化財学科、53 ～ 62 頁

坂口昌男 1996「大形堀立柱建物の柱穴出土遺物の意義」『池上曽根遺跡史跡指定 20 周年記念弥生の環濠都市と巨大神殿』、池上曽根遺跡史跡指定 20 周年記念事業実行委員会、27 頁

桜井弘人 1986「石器」『恒川遺跡群―一般国道 153 号座光寺バイパス用地内埋蔵文化財発掘報告遺物編』、飯田市教育委員会、63 ～ 92 頁

佐藤良二 1983「石器」『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』II―本文編―、兵庫県教育委員会、197 ～ 266 頁

佐原真 1960a「銅鐸の鋳造」『世界考古学大系』日本II弥生時代、平凡社、92 ～ 104 頁

佐原真 1960b「銅鐸文化圏」『図説世界文化史大系』日本Ⅰ、角川書店、162 ～ 167 頁

佐原真 1964「石器」「石製武器の発展」『紫雲出　香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究』、詫間町文化財保護委員会、70 ～ 97 頁・131 ～ 145 頁

佐原真 1967「山城における弥生式文化の成立―畿内第Ⅰ様式の細分と雲ノ宮遺跡の占める位置―」『史林』第 50 巻５号、史学研究会、103 ～ 127 頁

佐原真 1970「大和川と淀川」『古代の日本』５、角川書店、24 ～ 43 頁

佐原真 1975a「かつて戦争があった―石鏃の変質―」『古代学研究』78 号、古代学研究会、26 ～ 30 頁

佐原真 1975b「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座日本歴史』１原始および古代１、岩波書店、113 ～ 182 頁

佐原真 1977「石斧論—縦斧から横斧へ—」『考古論集(慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集)』、松崎寿和先生退官記念事業会、45～86頁

佐原真 1982「石斧再論」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』、森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会、161～186頁

佐原真 1985「分布論」『岩波講座日本考古学』1研究の方法、岩波書店、115～160頁

佐原真 1987『体系日本の歴史』1日本人の誕生、小学館

佐原真・金関恕 1975「米と金属器の世紀」『古代史発掘』4稲作の始まり、講談社、23～54頁

塩山則之 1988『寝屋川市文化財資料高宮八丁遺跡(大阪府寝屋川市)石器編』、寝屋川市教育委員会

設楽博巳 1995「木目状縞模様のある磨製石剣」『信濃』第47巻第4号、信濃史学会、1～19頁

島田貞彦 1930「筑前須玖先史時代遺跡の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第11冊　筑前須玖先史時代遺跡の研究、京都帝国大学、1～78頁

清水昭俊 1992「永遠の未開文化と周辺民族—近代西欧人類学史点描—」『国立民族学博物館研究報告』17巻3号、国立民族学博物館、417～488頁

清水真一 1983「長瀬高浜遺跡出土の銅釧とその背景」『古文化談叢』第12集、九州古文化研究会、145～152頁

下條信行 1975「石器の製作と技術」『古代史発掘』4稲作の始まり、講談社、138～148頁

下條信行 1976「石戈論」『史淵』第113輯、九州大学文学部、211～253頁

下條信行 1977「九州における大陸系磨製石器の生成と展開—石器の組合・型式の連関性と文化圏の設定—」『史淵』第114輯、九州大学文学部、179～215頁

下條信行 1982「石矛の提唱—木葉形磨製石製武器について—」『賀川光夫先生還暦記念論集』、賀川光夫先生還暦記念論集編集委員会、83～94頁

下條信行 1984「弥生・古墳時代の九州型石錘について—玄界灘海人の動向—」『九州文化史研究所紀要』第29号、九州大学九州文化史研究施設、71～104頁

下條信行 1985「伐採石斧」『弥生文化の研究』5道具と技術Ⅰ、雄山閣出版、43～47頁

下條信行 1989「島根県西川津遺跡からみた弥生時代の山陰地方と北部九州」『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告』Ⅴ、島根県土木部河川課・島根県教育委員会、325～340頁

下條信行 1991a「北部九州弥生中期の「国」家間構造と立岩遺跡」『古文化談叢児島隆人先生喜寿記念論集』、児島隆人先生喜寿記念事業会、77～106頁

下條信行 1991b「西日本における大陸系磨製石器の出現」「西日本—第Ⅰ期の石剣・石鏃」『日韓交渉の考古学—弥生時代篇—』、六興出版、47～51頁・69～75頁

下條信行 1991c「日本稲作受容期の大陸系磨製石器の展開—宇木汲田貝塚 1984 年度調査出土石器の報告を兼ねて—」『横山浩一先生退官記念論文集』Ⅱ日本における初期弥生文化の成立、横山浩一先生退官記念論文集刊行会、320～349頁

下條信行 1994a「瀬戸内海の有柄式磨製石剣の諸問題」『「社会科」学研究』第 28 号、「社会科」学研究会、1～16頁

下條信行 1994b『弥生時代・大陸系磨製石器の編年網の作製と地域間の比較研究』平成5年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書

下條信行 1995「瀬戸内—リレー式で伝わった稲作文化—」『弥生文化の成立—大変革の主体は「縄紋人」だった』、角川書店、131～140頁

下條信行 1996「扁平片刃石斧について」『愛媛大学人文学会創立 20 周年記念論集』、愛媛大学人文学会、141～163頁

下條信行 1997「柱状片刃石斧について」『古文化談叢伊達先生古稀記念論集』、伊達先生古稀記念論集刊行会、72～87頁

下向井龍彦 1991「日本律令軍制の形成過程」『史学雑誌』第 100 編第6号、38～64頁、史学会

進藤武 1985「美園遺跡における石槍製作工程の分析」『美園　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書—本文編—』、大阪府教育委員会・(財)大阪文化センター、493～503頁

進藤武 1992「近江における弥生石器の消長」『滋賀考古』第7号、滋賀考古学研究会、47～55頁

進藤武 1995「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸」『古代文化』第 47 巻第 10 号、(財)古代学協会、8～18頁

進藤武 1996『銅鐸—埋納と終焉を考える—』、銅鐸博物館（野洲町立歴史民俗資料館）

神野恵 2000「弥生時代の弓矢(上)・(下)―機能的側面からみた鏃の重量化―」『古代文化』第52巻第10・12号、(財)古代学協会、20～31頁・20～30頁

菅栄太郎1987「森小路遺跡出土の打製短剣」『葦火』6号、大阪市文化財協会、7頁

菅栄太郎 1995「石鏃資料の型式および製作技法の編年的検討」『大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ 1988 年度大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書、(財)大阪市文化財協会、367～388頁

菅原康夫 1996「徳島県の石器組成の変遷」『国立歴史民俗博物館資料調査報告書』7農耕開始期の石器組成1近畿(大阪・兵庫)・中国・四国、国立歴史民俗博物館、339～363頁

鈴木隆夫1992「石器」『静岡県史資料編』3考古3、静岡県、308～340頁

鈴木忠司 1976「石器」『青野遺跡A地点発掘調査報告書』、綾部市教育委員会、41～52頁

角南聡一郎 1993「『祭祀土製品』小考―亀井遺跡出土の分銅形土製品・新例」『大阪文化財研究』第5号、(財)大阪文化財センター、9～32頁

瀬川芳則 1985「弥生時代の墓」『帝塚山考古学』No.5、帝塚山考古学研究所、63～78頁

関俊彦 1965「東日本弥生時代石器の基礎的研究<1>―有孔磨製石鏃について―」『立正大学文学部論叢』21、立正大学文学部、16～66頁

瀬戸谷晧 1989「まとめ」『駄坂・舟隠遺跡群』豊岡市文化財調査報告書22豊岡市立郷土資料館報告書22、豊岡市教育委員会、132～138頁

曽我恭子 1988「出土遺物」『西ノ辻・鬼虎川遺跡―西ノ辻遺跡第6次、第7次、第8次調査、鬼虎川遺跡第18次調査概要報告―』、東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会、28～144頁

た

田井中洋介 1998「滋賀県における弥生時代の石鏃の変遷についての素描」『紀要』第 11 号、滋賀県文化財保護協会、38 ～ 48 頁

高倉洋彰 1973「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」『考古学研究』第 20 巻第 2 号、考古学研究会、7 ～ 24、64 頁

高倉洋彰 1995『金印国家群の時代』AOKILIBRARY 日本歴史、青木書店

高瀬一嘉 1995「墳丘上面出土の遺物」『大池 7 号墳―山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』ＸⅠ、兵庫県教育委員会、52 頁

高田恭一郎 1996「縄文時代の遺物および弥生時代前・中期の遺構・遺物」『百間川原尾島遺跡』５―旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査ＸⅠ―、建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会、17 ～ 34 頁

高野学 1990「伊賀遺跡」『羽曳野市内遺跡調査報告書―平成元年度―』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 20、羽曳野市教育委員会、13 ～ 47 頁

高橋建自 1923「銅鉾銅剣考（11）」『考古学雑誌』第 13 巻第 6 号、日本考古学会、20 ～ 39 頁

高橋健自 1925『銅鉾銅剣の研究』、聚精堂書店

高橋徹 1994「桜馬場遺跡および井原鑓溝遺跡の研究―国産青銅器、出土中国鏡の型式学的検討をふまえて―」『古文化談叢』第 32 集、九州古文化研究会、53 ～ 99 頁

高橋信明 1995「円窓付土器考その１」『考古学フォーラム』６、考古学フォーラム、66 ～ 72 頁

田崎博之・小畑弘己 1991「第 25 次調査地点」『比恵遺跡群』(10)福岡市埋蔵文化財調査報告第 255 集、福岡市教育委員会、67 ～ 167 頁

田代弘 1986「石器」『京都府遺跡調査報告』第 6 冊太田遺跡、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、109 ～ 155 頁

田代弘 2000「三山木遺跡第２次調査概要・石器類」『京都府遺跡調査概報』第 92 冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、106 ～ 113 頁

田辺昭三・佐原真 1966「近畿」『日本の考古学　弥生時代』、河出書房、108 ～ 140 頁

武末純一 1982「埋納銅矛論」『古文化談叢』第９集、九州古文化研究会、121 ～ 156 頁

田中勝弘 1989『北陸自動車道発掘調査報告書』ＸＩ―伊香郡余呉町桜内遺跡―、滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会

田中清美 1986「加美遺跡発掘調査の成果」『古代を考える』43、古代を考える会、21 ～ 46 頁

田中琢 1970「「まつり」から「まつりごと」へ」『古代の日本』５、角川書店、44 ～ 59 頁

田中琢 1977「剣、矛、戈―争乱とまつり」『日本美術大系』４鐸剣鏡、講談社、164 ～ 168 頁

田中琢 1991『倭人争乱』日本の歴史２、集英社

田中琢 1995「戦争と考古学」『考古学研究』第 42 巻第３号、考古学研究会、19 ～ 29 頁

田中光浩 1988「石器」『扇谷遺跡発掘調査報告書』京都府峰山町埋蔵文化財調査報告第 12 集、峰山町教育委員会、108 ～ 125 頁

種定淳介 1989「加古川と由良川」『横山浩一先生退官記念論文集』Ⅰ生産と流通の考古学、横山浩一先生退官記念事業会、395 ～ 416 頁

種定淳介 1990a「銅剣形石剣試論」上・下『考古学研究』第 36 巻第４号・第 37 巻第１号、考古学研究会、21 ～ 52 頁・29 ～ 56 頁

種定淳介 1990b「北陸の磨製石剣」『福井考古学会会誌』第８号、福井考古学会、７～ 26 頁

種定淳介 1990c「播磨における弥生時代青銅器の特質」『今里幾次先生古稀記念播磨考古学論集』、今里幾次先生古稀記念論文集刊行会、141 ～ 169 頁

種定淳介 1992「銅剣形石剣Ⅰ式の成立とその意義」『究班埋蔵文化財研究会 15 周年記念論集』、埋蔵文化研究会、84 ～ 103 頁

田畑直彦 1997a「壺形土器」『京都府遺跡調査報告書』第 22 冊雲宮遺跡、(財)京都府埋蔵　文化財調査研究センター、97 ～ 121 頁

田畑直彦 1997b「畿内第Ⅰ様式古・中段階の再検討」『立命館大学考古学論集』Ⅰ、立命館大学考古学論集刊行会、79 ～ 99 頁

塚田良道 1990「弥生時代における二上山サヌカイトの獲得と石器生産」『古代学研究』122 号、古代学研究会、1 ～ 27 頁

都出比呂志 1970「農業共同体と首長権―階級形成の日本的特質―」『講座日本歴史』第１巻古代国家、東京大学出版、29～66頁

都出比呂志 1979「ムラとムラとの交流」『図説日本文化の歴史』１先史・原史、小学館、153～176頁

都出比呂志 1982「畿内第五様式における土器の変革」『考古学論考小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社、215～243頁

都出比呂志 1983「弥生土器における地域色の性格」『信濃』第35巻4号、信濃史学会、41～53頁

都出比呂志 1984「農耕社会の形成」『講座日本歴史』１原始・古代１　東京大学出版会、117～158頁

都出比呂志 1986「墳墓」『岩波講座日本考古学』第４巻　岩波書店　217～267頁

都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店

出原恵三・松田直則 1986「Loc25」「Loc35 A」「Loc44」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告田村遺跡群』第２分冊・第３分冊、高知県教育委員会、159～252頁・19～298頁

出原恵三 1999「南四国の石器―弥生時代の磨製石器を中心として―」『古代吉備』第21集、古代吉備研究会、3～41頁

寺沢薫 1990「青銅器の副葬と王墓の形成―北部九州と近畿にみる階級形成の特質（Ⅰ）」　『古代学研究』121号、古代学研究会、1～35頁

寺沢薫 1991「弥生時代の青銅器とそのマツリ」『考古学その見方と解釈』(上)、筑摩書房、139～184頁

寺沢薫 1992「銅鐸埋納論(上)(下)」『古代文化』第44巻第5・6号、(財)古代学協会、14～29・20～34頁

寺沢薫 2000『王権誕生』日本の歴史０２、講談社

天石夏実 1997「出土した遺物」『有東遺跡第14次調査報告書』、静岡市教育委員会、27～73頁

土居和幸・永田裕久 1997「1995年度に注目された発掘調査の概要―大分県日田吹上遺跡―」『日本考古学年報』48(1995年度版)、日本考古学協会、628～630頁

十亀幸雄 2001「道後平野南部における弥生時代墳墓」『遺跡』第 38 号、遺跡刊行会、77 ～ 93 頁

豊岡卓之 1985「「畿内」第Ⅴ様式暦年代の試み(上)(下)」『古代学研究』108・109 号、古代学研究会、12 ～ 28 頁・20 ～ 35 頁

豊岡卓之 1987「青銅武器の東辺」『考古学の地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ、同志社大学考古学シリーズ刊行会、109 ～ 118 頁

鳥居龍蔵 1908「満州の石器時代遺跡と朝鮮の石器時代遺跡との関係に就いて」『東京人類学会雑誌』262、東京人類学会、123 ～ 130 頁

鳥居龍蔵 1917「畿内の石器時代に就いて」『人類学雑誌』第 32 巻第 9 号、東京人類学会、16 ～ 27 頁

な

永井宏幸・原田幹・石黒立人 1994「愛知県の弥生時代石器をめぐる基礎的研究」『年報』平成５年度、(財)愛知県埋蔵文化財センター、118 ～ 127 頁

中川和哉 1996「銅剣形石剣に関する２、３の問題点―京都府出土資料を中心に―」『京都府埋蔵文化財論集』第３集―創立十五周年記念誌―、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、123 ～ 136 頁

中川和哉 1997「石器組成研究の問題点」『雲宮遺跡』京都府遺跡調査報告書第 22 冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、150 ～ 153 頁

中島直幸 1982「縄文時代晩期後半～弥生時代の遺物」『菜畑佐賀県唐津市における初期稲作遺跡の調査』、唐津市教育委員会、76 ～ 269 頁

中園聡 1991「墳墓にあらわれた意味―とくに弥生時代中期後半の甕棺墓にみる階層性について―」『古文化談叢』第 25 集、九州古文化研究会、51 ～ 92 頁

中谷治宇二郎 1929『日本石器時代提要奥附』、岡書房

中西靖人 1984「前期弥生ムラの二つのタイプ」『縄文から弥生へ』、帝塚山考古学研究所、120 ～ 126 頁

長沼孝 1986「磨製石剣・磨製石戈」『弥生文化の研究』９弥生人の世界、雄山閣出版、45 ～ 54 頁

中橋孝博 1999「北部九州における弥生人の戦い」『人類にとって戦いとは』１戦いの進化と国家の形成、東洋書林、101～120頁

中村修身 1996「本州四国地方出土の石戈―石戈の基礎調査その５―」『地域相研究』第24号、地域相研究会、97～109頁

中村徹也 1978「宮ヶ久保遺跡出土の木製武器形祭器」『考古学雑誌』第63巻第２号、日本考古学会、70～75頁

中村友博 1980a「畿内式磨製尖頭器」『調査会ニュース』17、東大阪市遺跡保護調査会、3～5頁

中村友博 1980b「弥生時代の武器形木製品」『東大阪市遺跡保護調査会年報』1979年度、東大阪市遺跡保護調査会、51～76頁

中村友博 1987「武器形祭器」『弥生文化の研究』８祭と墓と装い、雄山閣出版、25～31頁

中村豊 1998「稲作のはじまり―吉野川下流域を中心に―」『川と人間―吉野川流域史―』、渓水社、79～100頁

中村豊 2000「近畿・東部瀬戸内地域における結晶片岩製石棒の生産と流通」『考古学資料集』12縄文・弥生移行期の石製呪術具１、小林青樹、69～80頁

中原志外顕・石井忠・下條信行 1970「丸尾台遺跡報告(福岡市大字堤字原の前126の１)」『宝台遺跡―福岡市上長尾所在弥生時代集落遺跡―付.丸尾台遺跡調査報告』、日本住宅公団、92～99頁

中山平次郎 1920「塚崎西畑の御廟塚」『考古学雑誌』第20巻第１号、日本考古学会、28～30頁

成田寿一郎 1984『木の匠―木工の技術史―』、鹿島出版会

西口陽一 1986「人・硯・石剣」『考古学研究』第32巻第４号、考古学研究会、96～106頁

西口陽一 1989「近畿・磨製石剣の研究」『大阪文化財論集―財団法人大阪文化財センター設立15周年記念論集―』、(財)大阪文化財センター、77～114頁

西口陽一 2000「緑色(黒色)片岩製柱状片刃石斧」『あまのともしび―原口先生古稀記念集―』、原口正三先生の古稀を祝う集い事務局、37～52頁

西谷彰 1999「弥生時代における土器の製作技術交流」『待兼山論叢』第 33 号、大阪大学大学院文学研究科、1 ～ 23 頁

西村尋文 1982「亀井遺跡における剥片生産技術」『亀井遺跡　寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書』、(財)大阪文化財センター、133 ～ 150 頁

西村尋文 1990「石器」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ下川津遺跡―第１分冊―』、香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団、605 ～ 640 頁

禰宜田佳男 1986「打製短剣・石槍・石戈」『弥生文化の研究』９弥生人の世界、雄山閣出版、61 ～ 66 頁

禰宜田佳男 1990「弥生時代に鉄器はどの程度普及していたか」『争点日本の歴史』第１巻原始編、新人物往来社、291 ～ 304 頁

禰宜田佳男 1992a「近畿地方の石器のおわり―畿内を中心に―」『第 31 回埋蔵文化財研究会　弥生時代の石器―その始まりと終わり―』第六分冊発表要旨・追加資料、埋蔵文化財研究会・関西世話人会、65 ～ 72 頁

禰宜田佳男 1992b「大阪府の弥生時代後期の石器」『究班―埋蔵文化財研究会 15 周年記念論文集』、埋蔵文化財研究会、124 ～ 130 頁

禰宜田佳男 1992c「近畿地方の石斧の鉄器化」『大阪府立弥生文化博物館』第１集、大阪府立弥生文化博物館、65 ～ 74 頁、弥生文化博物館

禰宜田佳男 1995「近畿の大陸系磨製石器」『考古学ジャーナル』No.391、ニューサイエンス社、19 ～ 23 頁

禰宜田佳男 1998「石器から鉄器へ」『古代国家はこうして生まれた』、角川書店、51 ～ 102 頁

野島永 1995「近畿地方の弥生時代の鉄器について」『京都府埋蔵文化財論集』第３集、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、109 ～ 122 頁

野島永 2001「弥生時代における鉄器の交易―鋳造鉄斧と素環頭大刀―」『第 49 回埋蔵文化財研究集会　弥生時代の交易―モノの動きとその担い手―』埋蔵文化財研究会

野島永・魚津知克 2000「下植野南遺跡方形周溝墓出土の磨製石剣」『京都府埋蔵文化財情報』第78号、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、1～6頁

野島永・河野一隆 2001「鉄と玉―弥生時代玉作り技術と交易―」『古代文化』第53巻第4号、(財)古代学協会、37～51頁

信里芳紀 2000a「北四国における弥生文化の成立―讃岐地方を中心として―」『第47回埋蔵文化財研究会弥生文化の成立―各地域における弥生文化成立期の具体像―発表要旨集』、埋蔵文化財研究会、101～124頁

信里芳紀 2000b「讃岐地域の初期遠賀川式土器」『遠賀川と突帯文』、土器持寄会論文集刊行会、431～451頁

は

橋口達也 1986「犠牲者」『弥生文化の研究』9弥生人の世界、雄山閣出版、104～113頁

橋口達也 1987「聚落立地の変遷と土地開発」『東アジアの考古と歴史(中) 岡崎敬先生退官記念論集』、同朋社、704～754頁

橋口達也 1992「弥生時代の戦い―武器の折損・研ぎ直し―」『九州歴史資料館研究論集』17、九州歴史資料館、43～61頁

橋口達也 1995「弥生時代の戦い」『考古学研究』第42巻第1号、考古学研究会、54～77頁

橋口達也 1996「九州の戦いのはじまり」『倭国乱れる』156～157頁

バートン・ブルース 2000『日本の「境界」前近代の国家・民族・文化』、青木書店

蜂屋晴美 1983「終末期石器の性格とその社会」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』、藤澤一夫先生古希記念論集刊行会、37～82頁

原俊一 1999「まとめ」『田久松ヶ浦―福岡県宗像市田久所在遺跡の発掘調査報告―』宗像市文化財調査報告書第47集、宗像市教育委員会、21～42頁

原秀樹 1995「右京第458次(7ANQUD―6地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報平成5年度』(財)長岡京市文化財センター、174～177頁

原田大六 1961「平形銅剣の形成と編年」『考古学雑誌』第47巻第2号、日本考古学会、1～20頁

原田大六 1963「抉入片刃石器の再検討」『古代学研究』34・35、古代学研究会、1～7頁・1～5頁

春成秀爾 1977「「倭国の乱」—弥生時代の瀬戸内—」『岡山の歴史地理教育』第9号、岡山歴史教育者協議会、81～96頁

春成秀爾 1982「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集、国立歴史民俗博物館、1～48頁

春成秀爾 1985「鉤と霊—有鉤短剣の研究—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集、国立歴史民俗博物館、1～62頁

春成秀爾 1991「角のない鹿—弥生時代の農耕儀礼—」『横山浩一先生退官記念論集』II 日本における初期弥生文化の成立、横山浩一先生退官記念事業会、442～481頁

春成秀爾 1996「人も戦い神も戦う」『倭国乱る』、国立歴史民俗博物館、170～173頁

春成秀爾 1999「武器から祭器へ」『人類にとって戦いとは』1戦争の進化と国家の生成、東洋書林、121～160頁

伴野幸一 1995「滋賀県二ノ畦・横枕遺跡と伊勢遺跡」『季刊考古学』第51号倭人伝を掘る、雄山閣出版、78～82頁

伴野幸一 1997「弥生時代の環濠集落と大型建物」『湖南の弥生時代—環濠集落・大型建物・銅鐸—』、栗東歴史民族博物館、10～17頁

樋口清之 1936『大和竹ノ内石器時代遺蹟』、大和国国史会

平井勝 1990「石器時代の世界—鷲羽山と津雲貝塚」『図説日本の歴史』33 岡山県の歴史、河出書房新社、40～50頁

平井勝 1991『考古学ライブラリー』64 弥生時代の石器、ニュー・サイエンス社

平井勝 1992「弥生時代への移行」『吉備の考古学的研究』(上)、山陽新聞社、19～50頁

平井勝 1995「岡山平野における遠賀川系土器の出現—津島遺跡南池地点出土土器の再検討—」『古代吉備』第17集、古代吉備研究会、20～33頁

平尾良光・鈴木浩子・榎本淳子 1995「百間川原尾島遺跡から出土した鉄剣形銅剣についての自然科学的研究」『岡山県埋蔵文化財調査報告 97 百間川原尾島遺跡4旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査』X、岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所、302～306頁

広瀬和雄 1997『縄紋から弥生への新歴史像』、角川書店

深澤芳樹 1986「弥生時代の近畿」『岩波講座日本考古学』第5巻、岩波書店、157～186頁

福永伸哉 1998「銅鐸から銅鏡へ」『古代国家はこうして生まれた』、角川書店、217～275頁

福家惣衛 1962「香川県出土の銅剣」『考古学雑誌』第37巻第4号、日本考古学会、42～48頁

藤居朗 1988『草津川改修関連遺跡発掘調査概要報告書』(II)、草津市教育委員会

藤尾慎一郎 1999「弥生時代の戦いに関する諸問題—鉄・鉄素材の実態と戦い—」『人類にとって戦いとは』2戦いのシステムと対外戦略、東洋書林、12～55頁

藤岡謙二郎・小林行雄 1943「石器類」『大和唐古彌生式遺跡の研究』、京都帝国大学文学部考古学研究室、183～207頁

藤田三郎 1988「出土遺物」『唐古・鍵遺跡第21・23次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財発掘調査概要6、田原本町教育委員会、26～60頁

藤田三郎 1989『昭和62・63年度唐古・鍵遺跡第32・33次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財発掘調査概要11、田原本町教育委員会

藤田三郎・川上洋一 1996『弥生の風景—唐古・鍵遺跡の発掘調査60年—』、橿原考古学研究所附属博物館・田原本町教育委員会

藤森栄一 1943「弥生式文化における摂津加茂の石器群の意義に就いて」『古代文化』第14巻第7号、日本古代文化学会、1～15頁

別府洋二 1996「弥生時代祭祀の断片」『神戸市西区玉津田中遺跡』—第6分冊—(総括編)—田中特定土地区　画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書兵庫県文化財調査報告第135—6冊、兵庫県教育委員会、359～366頁

北條芳隆 1990「古墳成立期における地域間の相互作用—北部九州の評価をめぐって—」『考古学研究』第37巻第2号、考古学研究会、49～69頁

北條芳隆 2000「前方後円墳と倭王権」『古墳時代像を見なおす—成立過程と社会変革—』、青木書店、77～136頁

ま

前島己基 1973「調査報告浜田市鰐石遺跡」『季刊文化財』第 22 号、島根県文化財愛護協会、14 ～ 19 頁

前島己基 1985『日本の古代遺跡』20 島根県、保育社

真鍋昌宏 1988「弥生時代の遺構・遺物」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅴ大浦浜遺跡、香川県教育委員会・本州四国連絡橋公団、88 ～ 101 頁

増田一裕 1978「大福遺跡の石器」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 36 冊『大福遺跡―桜井市大福所在の遺跡の調査報告―』、奈良県立橿原考古学研究所、84 ～ 110 頁

益富壽之助 1987『原色岩石図鑑 全改訂新版』、保育社

町田勝則 1997「希少なる品々―信州弥生文化にみる特殊遺物の変遷―」『人間・遺跡・遺物』3 麻生優先生退官記念論集、発掘者談話会、370 ～ 392 頁

松木武彦 1984「原始・古代における弓の発達―とくに弭の形態を中心に―」『待兼山論叢』第 18 号、大阪大学文学会、1 ～ 22 頁

松木武彦 1989「石製武器の発達と地域性―とくに打製石鏃について―」『考古学研究』第 35 巻第 4 号、考古学研究会、69 ～ 96 頁

松木武彦 1990「新免遺跡第 28 次調査の概要・石器」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1989 年度、豊中市教育委員会、15 ～ 18 頁

松木武彦 1995「弥生時代の戦争と日本列島の発展過程」『考古学研究』第 42 巻第 3 号、考古学研究会、33 ～ 47 頁

松木武彦 1996「日本列島の国家形成」『国家の形成　人類学・考古学からのアプローチ』、三一書房、223 ～ 276 頁

松木武彦 1997「ヤマト政権成立の背景」『平成 9 年度秋季特別展卑弥呼誕生―邪馬台国は畿内にあった？』、大阪府立弥生文化博物館、102 ～ 109 頁

松木武彦 1998「中・四国の弥生戦争と畿内」『弥生戦争とサヌカイト―石材の原産地と消費地―』、香芝市二上山博物館、21 ～ 25 頁

松木武彦 1999「岡山地域における弥生時代鉄鏃の展開」『古代吉備』第 21 集、古代吉備研究会、58 ～ 78 頁

松木武彦 2000「戦死か刑死か副葬か？—棺内の石製武器からみた弥生社会像—」『瀬戸内弥生文化のパイオニア—新方遺跡からの新視点—』、文部省科学研究費(地域連携推進研究)古人骨と動物遺存体に関する総合研究シンポジウム実行委員会、69～76頁

松原正毅 1971「弥生式文化の系譜についての実験考古学的試論—抉入片刃石斧をめぐって—」『季刊人類学』47—7、京都大学人類学研究会、144～191頁

松本直子 2000『認知考古学の理論と実践的研究—縄文から弥生への社会・文化変化のプロセス』、(財)九州大学出版会

三木文雄 1969「大阪湾型銅戈について」東京国立博物館美術誌『MUSEUM』223、東京国立博物館、4～8頁

水野興圓 1928「備後に於ける青銅文化に就いて」『考古学雑誌』第18巻第3号、日本考古学会、1～18頁

溝口孝司 1987「土器における地域性—弥生時代中期の中部瀬戸内・近畿を素材として—」『古文化談叢』第17集、九州古文化研究会、137～158頁

溝口孝司 2000「古墳時代開始期の理解をめぐる問題点—弥生墓制研究史の視点から—」『古墳時代像を見なおす—成立過程と社会変革—』、青木書店、27～48頁

光谷拓実 1996「年輪年代法」『池上曽根遺跡史跡指定20周年記念弥生の環濠都市と巨大神殿』、池上曽根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会、24～27頁

宮井善朗 1989「銅剣」『季刊考古学』第27号青銅器と弥生社会、雄山閣出版、28～31頁

宮内克己 1987「磨製石斧小考」『東アジアの考古と歴史(中)岡崎敬先生退官記念論集』、岡崎敬先生退官記念事業会、146～164頁

宮里修 1997「朝鮮半島南部における細形銅剣の地域性」『遡航早稲田大学文研考古誌』第15号、早稲田大学大学院文学研究科考古学談話会、39～51頁

宮崎泰史・西村尋文・広瀬雅信 1982「検出された遺構と遺物ＫＭ—Ｈ１・２」『亀井遺跡寝屋川南部流域　下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告』II、(財)大阪文化財センター、29～132頁

宮崎康雄 1996「遺構と遺物」『古曽部・芝谷遺跡—高地性集落の調査—』高槻市教育委員会　6～367頁

三好孝一 1997「大阪湾型銅戈考」『古文化論叢—伊達先生古稀記念論集—』、伊達先生古稀記念論集刊行委員会、105～121頁

三好博喜 1991「平成2年度天若遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第42冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、11～22頁

村尾政人 1986「遺跡と調査経過」『京都府遺跡調査報告』第6冊太田遺跡、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、2～11頁

村岡和雄 1998『宮ヶ久保遺跡』山口県阿東町埋蔵文化財報告第1集、阿東町教育委員会

村上恭通 1996「日本における鉄器普及の原初形態」『愛媛大学人文学会創立20周年記念論集』、愛媛大学人文学会、165～183頁

村上恭通 1998「鉄器普及の諸段階」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』平成7年度～平成9年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書、下條信行、63～142頁

村上恭通 2000「鉄器生産・流通と社会変革—古墳時代の開始をめぐる諸前提—」『古墳時代像を見なおす—成立過程と社会変革—』、青木書店、137～200頁

村上恭通 2001「日本海沿岸地域における鉄の消費形態—弥生時代後期を中心として—」『古代文化』第53巻4号、(財)古代学協会、52～72頁

村上勇・川原和人 1979「出雲・原山遺跡の再検討—前期弥生土器を中心として—」『島根県立博物館調査報告』第2冊、島根県立博物館、1～37頁

村田幸子 1992「近畿の弥生時代の成立過程—石剣・石槍における製作技術の多様化を中心に—」『第31回埋蔵文化財研究会　弥生時代の石器—その始まりと終わり—』第六分冊発表要旨・追加資料、埋蔵文化財研究会・関西世話人会、32～36頁

村田幸子 1992「石材の伝播について—河内平野を中心に—」『河内平野遺跡群の動態』Ⅴ近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—南遺跡群旧石器・縄文・弥生時代前期編—本文編—、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター、389～398頁

村田幸子 1996「縄文晩期から弥生前期における近江の石器」『畑中誠治教授退官記念論集』、畑中誠治先生退官記念会、295～316頁

村田幸子 1997「石鏃の大型化とめぐる様相」『(財)大阪府文化財調査研究センター研究調査報告』第1集、大阪府文化財調査研究センター、21～33頁

村田幸子 1998「「打製石剣」—大形打製尖頭器—の成立をめぐる問題」『みずほ』第 25 号、大和弥生文化の会、74 ～ 87 頁

毛利光用子 1980「木製品」『恩智遺跡』Ⅰ(本文)、瓜生堂遺跡調査会、157 ～ 203 頁

森格也 1997「鴨部・川田遺跡出土の石器」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第 7 冊　鴨部・川田遺跡Ⅰ—第 2 分冊—、香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局、197 ～ 210 頁

森浩一 1990『諸王権の造形』図説日本の古代 4、中央公論社

森貞次郎・乙益重隆・渡辺正気 1960「福岡県志賀島の弥生遺跡」『考古学雑誌』第 46 巻第 2 巻、日本考古学会、1 ～ 23 頁

森貞次郎 1960「青銅器の渡来」『世界考古学大系』第 2 巻、平凡社、78 ～ 84 頁

森貞次郎 1966「武器」『日本の考古学』Ⅲ弥生時代、河出書房、289 ～ 299 頁

森岡秀人 1985「弥生時代暦年代論をめぐる近畿第Ⅴ様式の年代幅」『信濃』第 38 号第 4 巻、信濃史学会、11 ～ 32 頁

森岡秀人 1995「銅鐸の終焉をめぐる諸問題—特集に寄せて—」『古代文化』第 47 巻第 10 号(財)古代学協会、1 ～ 7 頁

森岡秀人 1996「弥生時代抗争の東方波及—高地性集落の動向を中心に—」『考古学研究』第 43 巻第 3 号、考古学研究会、38 ～ 52 頁

森下英治 1995「瀬戸内の大陸系磨製石器」『考古学ジャーナル』No.391、ニューサイエンス社、14 ～ 18 頁

森下英治 1998「龍川五条遺跡出土前期弥生土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第 29 冊龍川五条遺跡Ⅱ・飯野東分山崎南遺跡　第 1 分冊、香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財　調査センター・日本道路公団、285 ～ 325 頁

森下英治 2000「讃岐平野の突帯文系土器」『遠賀川と突帯文』、土器持寄会論文集刊行会、401 ～ 429 頁

森下英治・信里芳紀 1998「讃岐地方における弥生土器の基準資料Ⅰ—下川津遺跡出土弥生土器を中心に—」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』Ⅵ、(財)香川県埋蔵文化財調査センター、31 ～ 63 頁

森本晋 1986「石鏃」『弥生文化の研究』9 弥生人の世界、雄山閣出版、54 ～ 60 頁

森本六爾 1933「愛知県下発見の有茎石剣」『考古学』第4巻第7号、東京考古学会、217～218頁

や

柳田康雄 1983「糸島地方の弥生遺物拾遺」『九州考古学』第58号、九州考古学会、28～40頁

家根祥多 1992「定住化と採集活動」『新版古代の日本』第5巻近畿Ⅰ、角川書店、51～72頁

家根祥多 1997「朝鮮無文土器から弥生土器へ」『立命館大学考古学論集』Ⅰ、立命館大学考古学論集刊行会、39～64頁

山尾幸久 1998「歴史学・考古学・人類学—溝口孝司論文に触れての偶感—」『考古学研究』第44巻第4号、考古学研究会、92～95頁

山口譲治 1991「弥生文化成立期の木器」『横山浩一先生退官記念論文集』II日本における初期弥生文化の成立、横山浩一先生退官記念事業会、418～441頁

山口英正 2000「新方遺跡の調査概要」『瀬戸内弥生文化のパイオニア—新方遺跡からの新視点—』、文部省科学研究費(地域連携推進研究)古人骨と動物遺存体に関する総合研究シンポジウム実行委員会

山崎秀二 1986「石製品」『服部遺跡発掘調査報告書』Ⅲ—滋賀県守山市服部町所在—、滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・滋賀県文化財保護協会、190～192頁

山崎秀二 1988『吉身西遺跡発掘調査報告書守山市文化財調査発掘報告書』第32冊、守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター

山下平重 1999『多肥松林遺跡』高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊、香

山中一郎 1992「石の動き、土器の動き」『新版古代の日本』第5巻近畿Ⅰ、角川書店、73～92頁

山内清男 1932「磨製片刃石斧の意義」『人類学雑誌』第47巻第7号、東京人類学会、244～251頁

八幡一郎 1928『南佐久郡の考古学的調査』、岡書院

湯浅利彦 1992「「五角形鏃」小考—西日本における縄文時代晩期を中心とした打製石鏃の素描—」徳島県埋蔵文化財センター研究紀要『真朱』創刊号、(財)徳島県埋蔵文化財センター、39～50頁

湯浅利彦 1993「阿波の縄文人—稲持遺跡を素材として—」『鳴門史学』第7集、鳴門史学会、9～18頁

行田裕美 1985「弥生時代中期土壙墓について」『西吉田遺跡』津島市埋蔵文化財発掘調査報告第17集、津島市教育委員会、94～96頁

吉田晶 1993「古代における住民の武装と国家的軍制」『歴史評論』No.514、歴史科学協議会、69～86頁

吉田晶 1995『卑弥呼の時代』新日本新書、新日本出版社

吉田広 1993「銅剣生産の展開」『史林』第76巻第6号、史学研究会、1～40頁

吉田広 1994「兎田八幡宮蔵銅剣をめぐる諸問題」『古文化談叢』第33集、九州古文化研究会、61～73頁

吉田広 1995「観音寺粟井町藤の谷出土の銅剣」『香川考古』第4号、香川考古刊行会、99～106頁

吉田広 1996「武器形青銅器の流通状況」古代学協会四国支部第10回松山大会『弥生後期の瀬戸内海—土器・青銅器・鉄器からみたその領域と交通—』(財)古代学協会、1～10頁

吉田広 1997「銅矛形石矛について」『みずほ』第22号、大和弥生文化の会、38～47頁

吉田広 1999「武器形青銅器流入の一形態—高松田中遺跡出土青銅器から—」『古代吉備』第21集、古代吉備研究会、42～57頁

吉田広 2001a「青銅器・青銅にみる弥生時代の交易」『弥生時代の交易—モノの動きとその担い手—』第49回埋蔵文化財研究集会、埋蔵文化財研究会、101～126頁

吉田広 2001b『弥生時代の武器形青銅器』考古学資料集21

吉原佳市 1997「長野県木島平村・根塚(ねつか)遺跡」『発掘された日本列島97新発見考古速報展』、朝日新聞社・文化庁、33頁

横山浩一 1978「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』第23号、九州文化史研究所、1～24頁

横山浩一 1985「型式論」『岩波講座日本考古学』1研究の方法、岩波書店、44～78頁

ら

李健茂 1991「韓国式銅剣(細形銅剣文化)」『日韓交渉の考古学—弥生時代篇—』、六興出版、109～114頁

力武卓治 1986「吉武弥生墳墓群の構造と変遷」『早良王墓とその時代墳墓が語る激動の弥生社会』特設展図録、福岡市立歴史資料館、64～70頁

わ

若林邦彦 1992「石器」『高宮八丁遺跡』II—第2次および第3次発掘調査概要報告書—、寝屋川市教育委員会、27～34頁

渡辺昌宏 1997「近畿における鉄器普及の背景」『卑弥呼誕生』平成9年秋期特別展、大阪府立弥生文化博物館、92～95頁

和辻哲郎 1939『日本古代文化』改稿版、岩波書店

藁科哲男・東村武信 1997「鬼塚遺跡出土のサヌカイト製石器、剥片の石材産地分析」『鬼塚遺跡第8次発掘調査報告書』、(財)東大阪市文化財協会、146～159頁

【地域別参考文献】

【愛知県】

(財)愛知県埋蔵文化財センター 1993『朝日遺跡』Ⅳ 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第33集

名古屋市博物館 1993『縄文から弥生へ』企画展図録

【三重県】

三重県教育委員会 1980『三重県埋蔵文化財調査報告』35 — 1 納所遺跡—遺構と遺物—

【滋賀県】

滋賀県教育委員会 1967『大中の湖南遺跡調査概要』滋賀県文化財調査概要第5集

滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1983『国道 161 号バイパス関連遺跡調査概要 新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江中遺跡・針江北遺跡発掘調査概要』

滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1986『服部遺跡発掘調査報告書』Ⅲ—滋賀県守山市服部町所在—

滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1987『志那湖底遺跡発掘調査概要—志那南その２Ｉ区—』

新旭町教育委員会 1998『熊野本遺跡発掘調査現地説明会資料』

長浜市教育委員会 1995『地福寺・塚町遺跡発掘調査報告書』長浜市埋蔵文化財調査資料第11集

【京都府】

岩滝町教育委員会 2000『大風呂南墳墓群』岩滝町文化財調査報告書第15集

大宮町教育委員会 1998『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明甌穴群』京都府大宮町文化財調査報告書第14集

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985『京都府調査概報』第14冊

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986『京都府遺跡調査報告書』第6冊太田遺跡

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988『京都府遺跡調査報告書』第10冊近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989『京都府遺跡調査報告書』第 12 冊志高遺跡
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992『京都府遺跡調査報告書』第 17 冊近畿自動車道敦賀線関係遺跡(８次区間)
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997『京都府遺跡調査概報』 第 76 冊
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000『京都府遺跡調査報告書』第 28 冊長岡京跡左京二条三、四坊・東土川遺跡
長岡京市発掘調査団 1970『森本遺跡発掘調査概報』
長岡京市史編さん委員会 1991『長岡京市史資料編』 1
福知山市教育委員会 1995『興・観音寺遺跡』福知山市文化財報告書第 29 集

【奈良県】
秋篠・山稜遺跡調査会・奈良大学文学部考古学研究室 1998『秋篠・山稜遺跡―奈良大学付属高等学校に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
京都帝国大学文学部考古学研究室 1943『大和唐古彌生式遺跡の研究』
五條文化博物館 1995『常設展五條の歴史と文化』
桜井市教育委員会 1987『桜井市埋蔵文化財発掘調査報告』桜井市芝遺跡大三輪中学校改築に伴う発掘調査報告書
奈良県教育委員会 1970『天理市平等坊・岩室遺跡発掘調査概要』
奈良県立橿原考古学研究所 1979『奈良県遺跡調査概報』1978 年度
奈良県立橿原考古学研究所 1983「香芝町田尻峠第２地点遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』(第一分冊)1982 年度、81 ～ 86 頁
奈良県立橿原考古学研究所 1989『奈良県遺跡調査概報』(第二分冊)1986 年度
奈良県立橿原考古学研究所 1991『奈良県文化財調査報告書』第 61 集東安堵遺跡Ⅱ大和盆地低地部における縄文時代後期・晩期の遺跡発掘調査報告書
奈良県立橿原考古学研究所・田原本町教育委員会 1996『弥生の風景―唐古・鍵遺跡の発掘調査 60 年』

【大阪府】
瓜生堂遺跡調査会 1972『瓜生堂遺跡資料編』
瓜生堂遺跡調査会 1973『瓜生堂遺跡』Ⅱ

瓜生堂遺跡調査会 1980『恩智遺跡』Ⅰ

瓜生堂遺跡調査会 1981『瓜生堂遺跡』Ⅲ

(財)大阪市文化財協会 1982『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ

(財)大阪市文化財協会 1983『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ

(財)大阪市文化財協会 1998『大阪市住吉区山之内遺跡発掘調査報告』

大阪府下埋蔵文化財研究会 1996『大阪府下埋蔵文化財研究会（第 34 回）資料』

大阪府教育委員会 1970『河南町東山弥生集落跡発掘調査概報』

大阪府教育委員会 1980『喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要』Ⅲ—富田林市喜志・羽曳野市東阪田所在—

大阪府教育委員会 1983『喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要』Ⅵ—富田林市喜志・羽曳野市東阪田所在—

大阪府教育委員会 1984『水走遺跡(５次・７次)現地説明会資料—東大阪市新開・今米所在』

大阪府教育委員会 1986a『大里遺跡発掘調査概要』Ⅲ

大阪府教育委員会 1986b『稲葉遺跡発掘調査概要』Ⅰ—府立玉川高等学校建設に伴う調査—

大阪府教育委員会 1987a『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要』Ⅳ—東大阪市東石切町・西石切町所在—

大阪府教育委員会 1987b『河南西部地区農地開発事業に伴う寛弘寺遺跡発掘調査概要』Ⅴ

大阪府教育委員会 1992『萱振遺跡』大阪府文化財調査報告書第 39 輯

大阪府教育委員会 1996『田井中遺跡発掘調査概要』Ⅴ

大阪府教育委員会 1999a『田井中遺跡発掘調査概要』Ⅷ

大阪府教育委員会 1999b『招提中町遺跡現地説明会資料』

大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1980『瓜生堂』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告』

大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1981『巨摩・瓜生堂』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1986a『亀井』(その２)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書—図版編—

大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1986b『城山』（その１）近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1991『河内平野遺跡群の動態』II近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―北遺跡群旧石器・縄文・弥生時代前期編

大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1992『河内平野遺跡群の動態』V近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―南遺跡群旧石器・縄文・弥生時代前期編

(財)大阪府埋蔵文化財協会 1993『仏並遺跡』III主要地方道路枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う発掘調査報告書

(財)大阪文化財センター1979『池上遺跡』第３分冊の１石器編

(財)大阪文化財センター 1980『亀井・城山』寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書

(財)大阪文化財センター 1982『亀井遺跡』寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書

(財)大阪文化財センター 1984『亀井遺跡』II 寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書III

(財)大阪文化財センター1985『美園』

(財)大阪文化財センター 1991『東大阪市池島町・八尾市福万寺所在池島・福万寺遺跡発掘調査概要―89―１～６調査区の概要―』

(財)大阪府文化財調査研究センター 1997『田井中遺跡(１～３次)・志紀遺跡(防１次)陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書』

(財)大阪府文化財調査研究センター 1998『志紀遺跡』(その４)大阪府営志紀住宅建替え事業に伴う発掘調査報告書、(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第25集

観音寺山遺跡調査団1968『観音寺山弥生集落調査概要』

堺市教育委員会1981『堺市文化財調査報告書』第８集

堺市教育委員会1989『堺の文化財　考古資料編』

四条畷市教育委員会 1984『雁屋遺跡発掘調査概要』１―四条畷市雁屋所在―四条畷市埋蔵文化財包蔵地調査概報16

吹田市史編さん室・関西大学考古学研究室1975『垂水遺跡第１次発掘調査概報』

高槻市教育委員会 1993 『高槻市文化財調査概要』 XⅧ 嶋上遺跡群 17

同志社大学歴史資料館 1999『大阪府和泉市観音寺山遺跡発掘調査報告書』同志社大学歴史資料館調査報告書第 2 冊

豊中市教育委員会 1972『勝部遺跡』

豊中市教育委員会 1995『豊中市埋蔵文化財年報』VOL. 3

富田林市教育委員会 1979『中野遺跡発掘調査報告書—富田林市若松町所在—』

富田林市教育委員会 1984『中野遺跡発掘調査概要』Ⅴ 富田林市埋蔵文化財調査報告 10

富田林市教育委員会 1988『喜志遺跡発掘調査概要』II 富田林市埋蔵文化財調査報告 16

寝屋川市教育委員会 1988『高宮八丁遺跡(大阪府寝屋川市)石器編』

能勢町教育委員会 1998『原田遺跡発掘調査報告書弥生時代中・後期の方形周溝墓と古墳時代後期の円墳の調査』能勢町文化財調査報告書第 10 冊

羽曳野市教育委員会 1990『羽曳野市内遺跡調査報告書』—平成元年度—羽曳野市埋蔵文化財調査報告書第 20

東大阪遺跡調査会 1981『東奈良(大阪府茨木市)発掘調査概要』II

東大阪市遺跡保護調査会 1976『図録・縄文時代の東大阪』

東大阪市教育委員会 1971『岩滝山遺跡』埋蔵文化財包蔵地調査概報 5

東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会 1988『西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡—西ノ辻第 6 次、第 7 次、第 8 次調査鬼虎川遺跡第 18 次調査概要報告書』

東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会 1992『西之辻遺跡第 23 次発掘調査報告』

東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会 1996『宮ノ下遺跡第 1 次発掘調査報告書』

(財)東大阪市文化財協会 1987『鬼虎川の木質遺物』—第 7 次発掘調査報告書第 4 冊—

(財)東大阪市文化財協会 1990『鬼虎川遺跡第 1 ～ 3 次発掘調査報告』

(財)東大阪市文化財協会 1997『鬼塚遺跡第 8 次発掘調査報告書』

(財)東大阪市文化財協会 1999『植附遺跡第 5 次発掘調査報告書』

(財)東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会 1997『水走遺跡第 3 次・鬼虎川遺跡第 21 次発掘調査報告』

(財)東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会 1998『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告』

八尾市教育委員会 1987『八尾市内遺跡昭和 61 年度発掘調査報告書』Ⅰ—恩智遺跡の調査—

【兵庫県】

尼崎市教育委員会 1982『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市文化財調査報告第 15 集

川西市教育委員会 1982『川西市加茂遺跡市道 11 号建設にともなう発掘調査報告』

神戸市教育委員会 1986『昭和 58 年度神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会 1991『雲井遺跡第 1 次発掘調査報告書』

神戸市教育委員会 1993『神戸市兵庫区大開遺跡発掘調査報告書』

神戸市教育委員会 1994『出合遺跡第 27 次発掘調査報告書』

神戸市教育委員会 1995『平成 4 年度神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会 1997『「発掘された日本列島'97」地域展示ひょうご復興の街から』

神戸市教育委員会 1999a『北青木遺跡発掘調査報告書―第 3 次調査―』

神戸市教育委員会 1999b『平成 8 年度神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会・(財)神戸市スポーツ教育公社 1993『神戸市兵庫区大開遺跡発掘調査報告書』

(財)古代学協会 1984『神戸市灘区篠原 A 遺跡』

太子町教育委員会 1971『川島・立岡遺跡』

兵庫県教育委員会 1990『七日市遺跡』(Ⅰ)―第 2 分冊―(弥生・古墳時代遺跡の調査)―近畿自動車道舞鶴線関連埋蔵文化財調査報告書(Ⅶ―2)

兵庫県教育委員会 1992『尼崎市上ノ島遺跡』兵庫県文化財調査報告第 105 冊

兵庫県教育委員会 1995『尼崎市東武庫遺跡』尼崎市武庫元町団地建設に伴う 兵庫県文化財調査報告第 150 冊

兵庫県教育委員会 1996『神戸市西区玉津田中遺跡』―第 5 分冊(図版編)―(竹添地区・池ノ内地区の調査)― 田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―兵庫県文化財調査報告第 135―5 冊

兵庫県教育委員会 1997『本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅰ 中原遺跡他 兵庫県文化財調査報告第 159 集

兵庫県教育委員会 1999『三田市北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』Ⅳ―有鼻遺跡(1)―

福崎町史編纂委員会 1990『福崎町史第三巻考古・金石文資料編』

【岡山県】

岡山県教育委員会 1981『南方遺跡』—国立岡山病院地方循環器病センター建設に伴う発掘調査—岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 40

岡山県教育委員会 1995『南溝手遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 100

岡山県教育委員会 1996『南溝手遺跡』2 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 107

岡山県教育委員会 1997a『窪木遺跡』1 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 120

岡山県教育委員会 1997b『薮田古墳群ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 121

岡山県教育委員会ほか 1997『百間川兼基遺跡 3 百間川今谷遺跡 3 百間川沢田 4』

岡山県教育委員会 1998『窪木遺跡』2 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 124

岡山県教育委員会 1999a『田益田中遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 140

岡山県教育委員会 1999b『田益田中遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 141

岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1995『百間川原尾島遺跡』4 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査X 岡山県埋蔵文化財調査報告 97

岡山市教育委員会 1971『南方遺跡発掘調査概報』—山陽新幹線敷設による市道移転工事にともなう緊急発掘—

岡山市教育委員会 1996『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1994(平成６)年度

岡山市教育委員会 1997『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1995(平成７)年度

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1995『津島岡大遺跡』６—第６・７次調査—

加計学園埋蔵文化財調査室 1995『津島東三丁目遺跡第１地点清水谷遺跡』加計学園関連施設建設に伴う発掘調査加計学園埋蔵文化財調査質発掘調査報告書 1

建設省岡山河川事務所・岡山県教育委員会 1982『百間川兼基遺跡１・百間川今谷遺跡１』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 51

建設省岡山河川事務所・岡山県教育委員会 1985『百間川沢田遺跡２・百間川長谷遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 59

建設省岡山河川事務所・岡山県教育委員会 1996『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 106 百間川原尾島遺跡５』

山陽団地埋蔵文化財発掘調査団 1973『四辻土壙墓遺跡・四辻古墳群』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(３)

日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会 1994『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』８ 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 89

日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会 1999『加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 138

日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会 2000『高塚遺跡・三手遺跡』2 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 150

【島根県】

鹿島町立歴史民俗資料館 1999『'99 特別展開拓者の眠るところ—速報！堀部第１遺跡木棺墓群』

島根県教育委員会 1996『出雲神庭荒神谷遺跡』

島根県土木部河川課・島根県教育委員会 1988『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告』Ⅳ(海崎地区２)

【香川県】

香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財発掘調査センター 1990a『一ノ谷遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第７冊

香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財発掘調査センター 1990b『永井遺跡』高松東道路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第９冊

香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財発掘調査センター 1990c『下川津遺跡』瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ

香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局 1992『国道バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査概報』平成３年度

香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財発掘調査センター 1993a『林・坊城遺跡』高松東道路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊

香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター 1993b『県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報尾崎西遺跡』平成４年度

香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財発掘調査センター 1996『龍川五条遺跡』Ⅰ第１分冊 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 23 冊

香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財発掘調査センター 1997『鴨部川田遺跡』高松東道路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第７冊

香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財発掘調査センター 1998a『龍川五条遺跡』II 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第29冊

香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局 1998『国道バイパス埋蔵文化財発掘調査概報』平成9年度

香川県教育委員会・本州四国連絡橋公団 1988『大浦浜遺跡』瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告V

(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1992『空港跡地遺跡発掘調査概報』平成3年度

【徳島県】

(財)徳島県埋蔵文化財センター 1997『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol.8 1996 年度

徳島大学埋蔵文化財調査室 1998『庄・蔵本遺跡』1—徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査—徳島大学埋蔵文化財発掘調査報告書第1巻

【愛媛県】

(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1989『一般国道 196 号今治道路埋蔵文化財発掘調査報告書』II

(財）愛媛県埋蔵文化財調査センター 1995『持田町3丁目遺跡』

【福岡県】

飯塚市立岩遺蹟調査委員会 1977『立岩遺蹟』

小郡市教育委員会 1986『三国の鼻遺跡』IIIみくに野第二土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告—3—

九州歴史資料館 1980『青銅の武器—日本金属文化の黎明—付・日本製銅茸き出土地名表』

下稗田遺跡調査指導会 1985『下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書第17集

津屋崎町教育委員会 1981『今川遺跡』福岡県宗像郡津屋崎町今川所在遺跡の調査津屋崎町文化財調査報告書第4集

福岡県教育委員会 1978『春日市大字上白水字門田・辻田所在門田遺跡辻田地区墓地群の調査』山陽新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第9集

福岡県教育委員会 1984『石崎曲り田遺跡』今宿バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告第9集

福岡県教育委員会 1995『九州横断自動車道関連埋蔵文化財調査報告』— 36 —朝倉郡朝倉町大字大庭所在の大庭・久保遺跡の調査

福岡市教育委員会 1981『今山・今宿遺跡—玄海自転車道建設に伴う遺跡の調査』福岡市埋蔵文化財調査報告第75集

福岡市教育委員会 1991『比恵遺跡群』(10)福岡市埋蔵文化財調査報告第255集

福岡市教育委員会 1996『吉武遺跡群』Ⅷ 飯盛・吉武圃場整備事業関連調査報告書2福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集

穂波町教育委員会 1976『スダレ遺跡』—福岡県嘉穂郡穂波町所在遺跡の発掘調査報告—穂波町文化財調査報告書第1集

宗像市教育委員会 1999『田久松ヶ浦—福岡県宗像市田久所在の発掘調査報告—』宗像市文化財調査報告書第47集

行橋市教育委員会 1987『前田山遺跡』行橋市文化財調査報告書第19集

呼子町教育委員会 1981『大友遺跡』呼子町文化財調査報告書第1集

【佐賀県】

唐津市教育委員会 1982『菜畑』佐賀県唐津市における初期稲作遺跡の調査

唐津湾周辺遺跡調査調査会 1982『末盧国—佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究—』

佐賀県教育委員会 1991『志波屋六本松乙遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(13)

佐賀県教育委員会 1994『吉野ヶ里』

千代田町教育委員会 1983『詫田西分・高志神社遺跡』千代田町教育委員会調査報告書第2集

【長崎県】

長崎県教育委員会 1974『対馬浅茅湾とその周辺の考古学的調査』長崎県文化財調査報告書第17集

【韓国】

国立光州博物館 1997『光州市新昌洞低湿地遺跡Ⅰ』国立光州博物館学術叢書第 33 冊

国立中央博物館 1992『韓国の青銅器文化』

釜山大学校博物館 1995『釜山大学校博物館研究叢書第 17 号蔚山検丹里集落遺跡』

釜山大学校博物館 1997『蔚山下垈遺蹟—古墳Ⅰ』釜山大学校博物館研究叢書第 20 輯

文化財研究所 1994『晋陽大坪里遺蹟発掘調査報告書』

慶尚南道・慶尚大学校博物館 1999『晋州大坪里玉房 2 地区先史遺蹟』慶尚大学校博物館研究叢書第 20 輯

東義大学博物館 2000『金海良洞里古墳文化』東義大学校博物館学術叢書 7

韓国考古美術研究所 1989『考古学誌』第 1 輯

【その他】

国立歴史民俗博物館 1996a『農耕開始期の石器組成』 1 近畿(大阪・兵庫)・中国・四国

国立歴史民俗博物館 1996b『農耕開始期の石器組成』 2 九州

国立歴史民俗博物館 1997a『農耕開始期の石器組成』 3 北海道・東北・関東

国立歴史民俗博物館 1997b『農耕開始期の石器組成』 4 中部・近畿(三重・滋賀・京都・奈良・和歌山)

埋蔵文化財研究会・関西世話人会 1992『 弥生時代の石器—その始まりと終わり—』第 31 回埋蔵文化財研究会

埋蔵文化財研究会 2000『弥生の墓制(１)—墓制からみた弥生文化の成立—』第 48 回埋蔵文化財研究集会

【図版出典】

第1章1節

図4—1岡山県教育委員会1995:p.60 S 75、2岡山県教育委員会1996:p.98 S 558、3香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財発掘調査センター1993:p.117 — 550、4香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財発掘調査センター 1990:p.705 — 1130、5香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財発掘調査センター1990:p.576 — 397、6岡山県教育委員会1996:p.63 S 589、7岡山県教育委員会1997:文献17p.26 S 1

図5—2香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財発掘調査センター 1996:p.150 — 1110、4香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財発掘調査センター1990:p.181 —1、5香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財発掘調査センター 1997:p.302 — 997、6香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財発掘調査センター・建設省四国地方建設局1998:p.25 —3

図6—1香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財発掘調査センター 1996:p.150 — 1113、2香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財発掘調査センター1998:p.70 — 2636、3香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財発掘調査センター 1990:p.40 —1、4香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財発掘調査センター1997:p.278 — 839、5岡山県教育委員会1999:p.98 — 239、6岡山県教育委員会1999:p.98 — 236

図7—1岡山県教育委員会 1999:p.98 — 242、2香川県教育委員会・本州四国連絡橋公団1988:p.140 —5、3香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財発掘調査センター1996:p.128 — 837、4香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財発掘調査センター1996:p.266 — 2180、5香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財発掘調査センター 1996:p.266 — 2320、6岡山県教育委員会1999:p.99 — 304

図9—3古代学協会1984:p.28 —1、5東大阪市文化財協会1997:p.73 — 58、

図 10 —1神戸市教育委員会1993:p.192 —4、2大阪府教育委員会・大阪文化財センター1992:図版79 S 410、5大阪府教育委員会・大阪文化財センター図版81 S 163

図 11 —3神戸市教育委員会1993:p.193 —8、4神戸市教育委員会1993:p.193 —7、6大阪府教育委員会1986:p.28 —6、8尼崎市教育委員会1982:p.440 — 492

図 13 —2大阪府教育委員会・大阪文化財センター1991:図版67 S 115、3大阪府教育委員会・大阪文化財センター1991:図版129 S 265、4寝屋川市教育委員会1988:文献40 図版6 — 83、5大阪府教育委員会・大阪文化財センター1991:図版183 S 325、6兵庫県教

育委員会 1992:文献 23p.38 — 165

※以上は、報告書に筆者の観察に基づき改変の上、再トレースしたもの、それ以外は筆者の作製した原図をもとにトレース

第1章2節

図 14 慶尚南道・慶尚大学校博物館 1999:p.207 図 141 を転載

図 15 後藤 2000:p.55 図 3 を転載

図 16 検丹里—釜山大学校博物館 1995、菜畑—唐津市教育委員会 1982、曲り田—福岡県教育委員会、中寺州尾—愛媛県埋蔵文化財調査センター 1989、下川津—香川県教育委員会ほか 1990c、南溝手—岡山県教育委員会 1995・1996 、大開—神戸市教育委員会 1993、山賀—大阪府教育委員会ほか 1991、より作成。

図 17 埋蔵文化財研究会・関西世話人会 1992、国立歴史民俗博物館 1996a・1996b・1997b およびその他の報告書等をもとに作成

図 18 —1 宗像市教育委員会 1999:p.19 第 9 図 013、2・4(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1995:p.74 図 64・p.75 図 66、3 村上・川原 1979:p.27 第 14 図 S 12、5 呼子町教育委員会 1981:p.133Fig.47

図 19 —1 宗像市教育委員会 1999:p.14 第 4 図、2(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1995:p.62 図 44、3 徳島大学埋蔵文化財調査室 1998:p.26 図 16。をもとに改変・再トレース

図 20 宗像市教育委員会 1999:p.7 ～ 8 第 3 図をもとに作成

図 21 愛媛県埋蔵文化財調査センター 1995:p.108 図 110 をもとに作成

図 22 埋蔵文化財研究会・関西世話人会 1992・2000、国立歴史民俗博物館 1996a・1996b・1997b およびその他の報告書等をもとに作成

第2章1節

図 1 —大阪文化財センター 1979:図版 PL.61 —4・6・10・14 より転載

図 2 —縄文時代晩期—大阪市文化財協会 1982・1983、東大阪市文化財協会 1997

弥生時代前期—大阪府教育委員会ほか 1991・1992、大阪府埋蔵文化財調査研究センター 1998 、大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1986b

弥生時代中期—瓜生堂遺跡調査会 1973、大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1980、大阪文化財センター 1980・1982

図３—１～５東大阪市文化財協会 1997:p.63 第 43 図１～３、11、12

６～ 10 大阪市文化財協会 1983:図版 102・105 —18・20・21・27・63

図４—１～８大阪府教育委員会ほか 1991:図版 21 —S 48、図版 64 —S 85・87 ～ 89、図版 90 S— 167、図版 135 S— 274、図版 131 S— 270 をそれぞれ転載

図５—大阪府教育委員会 1996:p.57 第 44 図を転載

図６—１～８大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1980:p.139 第 106 図S 192・204・209 ～ 211・213・220・222 をそれぞれ転載

図７—１～６京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986:p.122 第 78 図３・18 ～ 20・30・31 をそれぞれ転載

図８京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986 より作成

図９建設省岡山河川事務所・岡山県教育委員会 1982・1985・1996、岡山県教育委員会 1995、岡山県教育委員会 1996・1997、日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会 1999・2000 に掲載の石鏃を用いて作図

図 10 —１～４・７～ 10 岡山県教育委員会 1995:p.114 第 138 図S 110 ～ 114、p.120 第 146 図S 205 ～ 208　５・６・11 建設省岡山河川事務所・岡山県教育委員会 1985:p.159 第 197 図 67・69・70 をそれぞれ転載

図 11 岡山県教育委員会 1997:p.92 第 118 図を転載

図 12 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財発掘調査センター 1990b・1990c・1993・1996・1997・1998 に掲載の石鏃を用いて作図

図 13 —１～６香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財発掘調査センター 1990b:p.494 第 411 図２・４、p.525 第 433 図 156 ～ 158、p.593 第 501 図 462、７～ 12 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財発掘調査センター 1993b:p.113 第 60 図 517 ～ 520、528、527 をそれぞれ転載

図 14 —１～８香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財発掘調査センター 1990c:第１分冊 p.620 第 560 図４～６、p.618 第 558 図１、２、第２分冊 p.165 第 123 図・10・20

図 15　岡山平野における弥生時代後期の打製石鏃(S = 1/2)

集落出土４、５、７～８—建設省岡山河川事務所・岡山県教育委員会 1996:p.39 第 41 図S 57、S 58、S 62、S 67、p.42 第 44 図S 81、10 —岡山県教育委員会 1996:p.134 第 179 図S 692、１、６、11 ～ 13 —日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会 1999:p.280 第 397 図S 231、S 233、p.314 第 444 図S 255、S 256、p.355 第 519 図S 270、

2、3—日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会 2000:p.p.119 第 137 図 S 33、S 34、よりそれぞれ転載。埋葬施設出土 14 —日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会 1994:p.633 第 28 図 S 2、15 ～ 18 —加計学園埋蔵文化財調査室 1995:p.13 第 13 図 3 ～ 5、17、よりそれぞれ転載

図 16 松木 1999:p.60 図 2 を転載

第 2 章 2 節

図 17 —4 原 1995:p.176 図 216 —1、5 鈴木 1976:p.45 図 24 —1 を再トレース。1 ～ 3 は筆者原図をトレース。

図 19 —1 宮崎 1996:p.124 図 114 — 4025、2 佐藤 1983:p.243 図 147 — 228、3 長岡京市調査団 1970:p.20 図 13 —12、4 松木 1990:p.17 図 15 —1 を再トレース。

図 20 —1 曽我 1988:p.52 図 49 — 1040、2 川越 1993:p.237 図 98 — 19、3 井守 1983:p.268 図 160 —1 を再トレース。

図 21 —1 宮崎 1996:p.243 図 114 — 4024、2 北野 1977 図 5、4 山崎 1986 図版 239 — S 101、5 吹田市編さん室ほか 1975:p.21 図 16 —3、7 山崎 1988 図版 104 — 81、8 山崎 1988 図版 104 — 81 を再トレース。3、6 は筆者原図をトレース。

図 23 —1 高田 1996:p.30 図 22 —S 40、2 出原 1986:p.90 図 42 — 450、3 西村 1990:p. 614 図 554 —1、4 西村 1990 図 123 —1、5 前島 1985:p.214 図 33、6 島根県土木部河川課・島根県教育委員会 1988:p.217 図 171 —1 を再トレース。

図 24 —1 ～ 5 桜井 1986 図 126 —3 ・128 —7 ・129 —4 ・146 — 12・13、6 ～ 9 ・12 伊藤 1992 図 102 —1 ・3 ～ 6、天石 1997:p.57 図 44 S— 137、図 8 — 11 岡村 1997:p.29 図 23 — 287 を再トレース。

図 24 角南 1993 をもとに作成。

第 3 章 1 節

図 1 穂波町教育委員会 1976PL.26 を転載

図 2 吉田 2001 b、島根県教育委員会 1996 ほか各報告書を用いて作成

図 3 力武 1986:p.68 図 4 を転載

表 1 下條 1991a 第 1 表を転載

表 2 中園 1991 第 9 表を転載

表 3 中園 1991 第 11 表を転載

図４福島 1998 ほか各報告書を用いて作成

図５―１下稗田遺跡調査指導会 1985:p.417 第 261 図・p.505 第 328 図 2522、２福岡県教育委員会 1995:付図２・p.141 第 98 図３、３行橋市教育委員会 1987:第 83 図・p.110 第 76 図 S３

図６佐賀県教育委員会 1991:p.21 ～ 22Fig.７を転載

図７―１佐賀県教育委員会 1991:p.129Fig.86 ― 147　２～４福岡市教育委員会 1996:p.８Fig.７、p.10Fig.９、p.14Fig.13をそれぞれ転載

図８近藤 2000 をもとに作成

図９―１～３吉田 1995:p.101 第１図、４・５吉田 2001b:p.25 図１― 26、p.27 図３― 33、６吉田 1999:p.49 図４をそれぞれ転載

図 10 ―１筆者実測図をトレース、２奈良県立橿原考古学研究所 1989:p.248 図 13、３吉田 2001b:p.48 図 24 ―８、４兵庫県教育委員会 1999:図版 42 ―M８、５片山 2000:p.103 をそれぞれ転載

第３章２節

図 11 筆者実測図をトレース

図 12 上記各報告書ほかを用いて作成

図 13 上記各報告書ほかを用いて作成

図 14 大阪文化財センター 1982:p.44 第 38 図を再トレース

図 15 ―１瓜生堂遺跡調査会 1980、２大阪文化財センター 1985:p.208 第 189 図D 070、３菅 1987:p.７をそれぞれ再トレース

図 16 各報告書ほかを用いて作成

図 17 ―１長岡京市史編さん委員会 1991:p.200 図 133 ― 11、２大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1991 図版 128 S― 259、３京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988:p.127 第 114 図―１、４大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1981:p.121 第 69 図２、６京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986:p.122 第 88 図―６、７瓜生堂遺跡調査会 1980:p.213Fig.136 ― 33、８大阪府教育委員会 1983 第 15 図 168、９大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1986bPL.154 ― 109、10 川西市教育委員会 1982:p.55 第 34 図 202、11 菅 1987p.７よりそれぞれ再トレース、５・12 は筆者原図をトレース

図 18 ―１瓜生堂遺跡調査会 1972 図版 41 ― 41、２大阪文化財センター 1980:p.252 第 258 図 113、３大阪文化財センター 1984:p.221 第 169 図 32、４粟田 1998:p.31 図１、５橿原考

古学研究所 1983:p.8 図３―２をそれぞれ再トレース

図 20 上記各報告書を用いて作成

図 21 上記各報告書を用いて作成

図 22 上記各報告書を用いて作成

図 23 上記各報告書を用いて作成

表５樋口 1936、東大阪市・東大阪市文化財協会 1996、桜井市教育委員会 1987、富田林市教育委員会 1979、末永雅雄(編)1944、奈良県立橿原考古学研究所 1979 報告の資料に基づく

図 24 七日市―兵庫県教育委員会 1990　西ノ辻―東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会 1988、大阪府教育委員会 1987、東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会 1992　瓜生堂―瓜生堂遺跡調査会 1972、瓜生堂遺跡調査会 1973、瓜生堂遺跡調査会 1981、大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1980 、大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1981　喜志―大阪府教育委員会 1980、大阪府教育委員会 1983、富田林市教育委員会 1988　中野―富田林市教育委員会 1979　富田林市教育委員会 1984　※以上の報告書の記載から石材比率を決定

図 25 ―１・４筆者実測図トレース、２・３京都府亀岡市―京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986p.122 第 88 図―３・４、５東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会 1988:p.135 第 87 図 874 表６　大阪湾沿岸地域における大形尖頭器(石製短剣)と磨製石庖丁の数量比率

表６蜂屋 1983 をもとに作成

表７瀬川 1985・大阪府教育委員会 1999b・堺市教育委員会 1989・豊中市教育委員会 1972・1995・能勢町教育委員会 1998・高槻市教育委員会 1993・野島・魚津 2000

表８大庭 1999 および表７使用の各報告書を用いて作成

図 26 高槻市教育委員会 1993:p.39 図 22―２、図版第 64 をもとに作成

図 27 大庭 1999:p.175 図４をもとに作成

第３章３節

図 28　川越(編)2000 ほかを用いて作成

図 29―１・２村上 2000:p.163―４・１、３・５・８東義大学校博物館 2000:p.143 図 21―６・p.181 図 64―７・p.p.141 図 19―１、４・６・７釜山大学校博物館 1997:p.72 図 48―６・p.91 図 62―３・p.92 図 63―３

図 30 —1 釜山大学校博物館 199:p.67 図 45、2 岩滝町教育委員会 2000:p.10 第 7 図をそれぞれ転載、

図 31 —1 唐津湾周辺遺跡調査調査会 1982:p.733 — 89、2 水野 1928:p.9 第 7 図、3・4・5 小田・韓(編)1991:p.144 第 48 図 1・p.194 第 98 図 2・p.203 第 107 図 10、7 筆者実測図、8 清水 1983:p.148 第 5 図 3 をそれぞれトレース。6 東義大学校博物館 2000:p.123 図 7 —1 を転載

図 32 —1 渡辺 1997:p.93 第 2 図 1 を転載。2 大阪府教育委員会 1992:p.88 第 90 図 217 を再トレース。

図 33 新納 2001:p.23 を転載

図 34 福永 1998:p263 図 17 を転載

第 4 章

図 1 —1 大阪文化財センター 1988:PL60 —7、2 毛利光 1980:p.184Fig.125 — 140、3 春成 1985:p.17 図 4 —5、4 春成 1985:p.17 図 4 —2 をもとに改変のうえ再トレース。

図 2 —1 上原編 1993:PL161 — 16102、2 上原編 1993:PL161 — 16103、3 藤田 1988:p.53 図 50 をもとに改変のうえ再トレース。

図 3 —1 筆者実測図、2 粟田 1995:p.45 図 10 —2 をトレース。

図 4 —1 大阪文化財センター 1988:PL60 —5、2 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター— 1991:図版 128 —S 259、3 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1986:PL154 —S 109、4 東大阪市文化財協会 1990:p.34 図 20 — 10、5・6 筆者実測図、7 川西市教育委員会 1983:p.55 図 34 — 202 をもとに改変のうえ再トレース。

図 5 —1 岡山市教育委員会 1997:p.7 図 6 —2、2 岡山市教育委員会 1996:p.11 図 7 —2、3・4 筆者実測図、5 岡山市教育委員会 1997p.7 図 6 —4 をトレース。

図 6 —1 才原 1996:p.148 図 119 — 51、2 一山・滝山 1985:p.25 図 2 —4、3 兵庫県教育委員会 1996:図版 383 — 6353、4 兵庫県教育委員会 1996:図版 383 — 6354、5 筆者実測図をそれぞれトレース。

図 11 —1・2 上原編 1993:PL161 — 16106・16105、3 扇崎 1996:p.56 図 1、4 才原 1988:p.33 図 16 — 96、5 毛利光 1980:p.185Fig.126 — 97、6・7 芋本 1987:PL99 — 325・324 をそれぞれ再トレース。

図 7 種定 1992:p.85 図 1 を再トレース

※第４章本文中で記載した木器樹種については、すべて以上の参考文献の報告内容による。

【論文初出】

第1章1節

「弥生時代開始期における磨製石斧の変遷―中部瀬戸内地域と大阪湾沿岸地域を中心として―」『古文化談叢』第46集、2001年5月、九州古文化研究会、27～52頁。をもとに一部改変。

第2章2節

「近畿地方の磨製石鏃にみる地域間交流とその背景」『国家形成期の考古学―大阪大学考古学研究10周年記念論集―』、1999年3月、大阪大学文学部考古学研究室、 413～430頁。をもとに一部改変。

第3章2節

「弥生時代の武器形石器」『考古学研究』第45巻第2号、1998年9月、考古学研究会、61～80頁。をもとに大幅加筆、改変。

第4章

「弥生時代の武器形木器―西日本地域を中心として―」『考古学研究』第 48 巻第1号、2001年6月(刊行予定)、考古学研究会。をもとに一部改変。